明治三十三年三月廿五日
第三種郵便物認可

明治三十七年八月五日發行
毎月一回五日發行

女學世界

第四巻第十一號

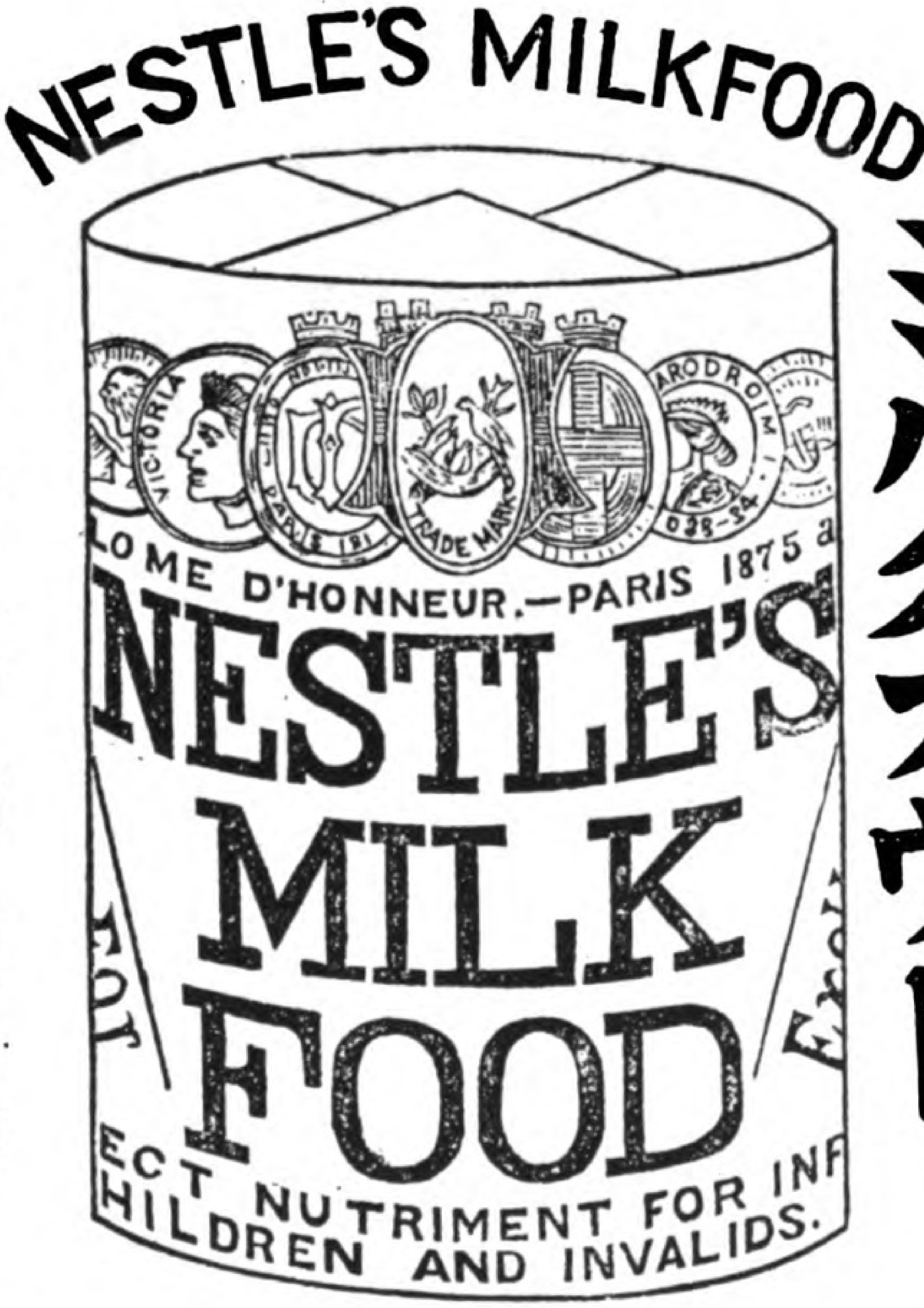



東京日本橋駿河町
三井呉服店
大坂高麗橋三丁目
地方よりの御註文は御手紙にて御申越被下候はゞ小包郵便にて發送仕るべく候御註文御案内書は御一報次第御送り可申上候
一切の商品は店内一面に陳列致し置き候に付き御立寄り御縦覽被下度樣
伏希上候

女學世界 第四卷 第拾壹號 目次

瑞西國ヘンリーネッスル氏製

ミルクフウド



各國帝室御用品
各國醫科大學、大病院、
醫學博士ノ賞讃ヲ忝フス

（全國洋食品店及藥舖にて販賣す）

ミルクフウドは麥精と牛乳との調合になり小兒の骨、筋肉を形成するに欠くべからざる蛋白質、炭化水素を含蓄するが故に營養品として尤も消化し易き完美なる食物なり

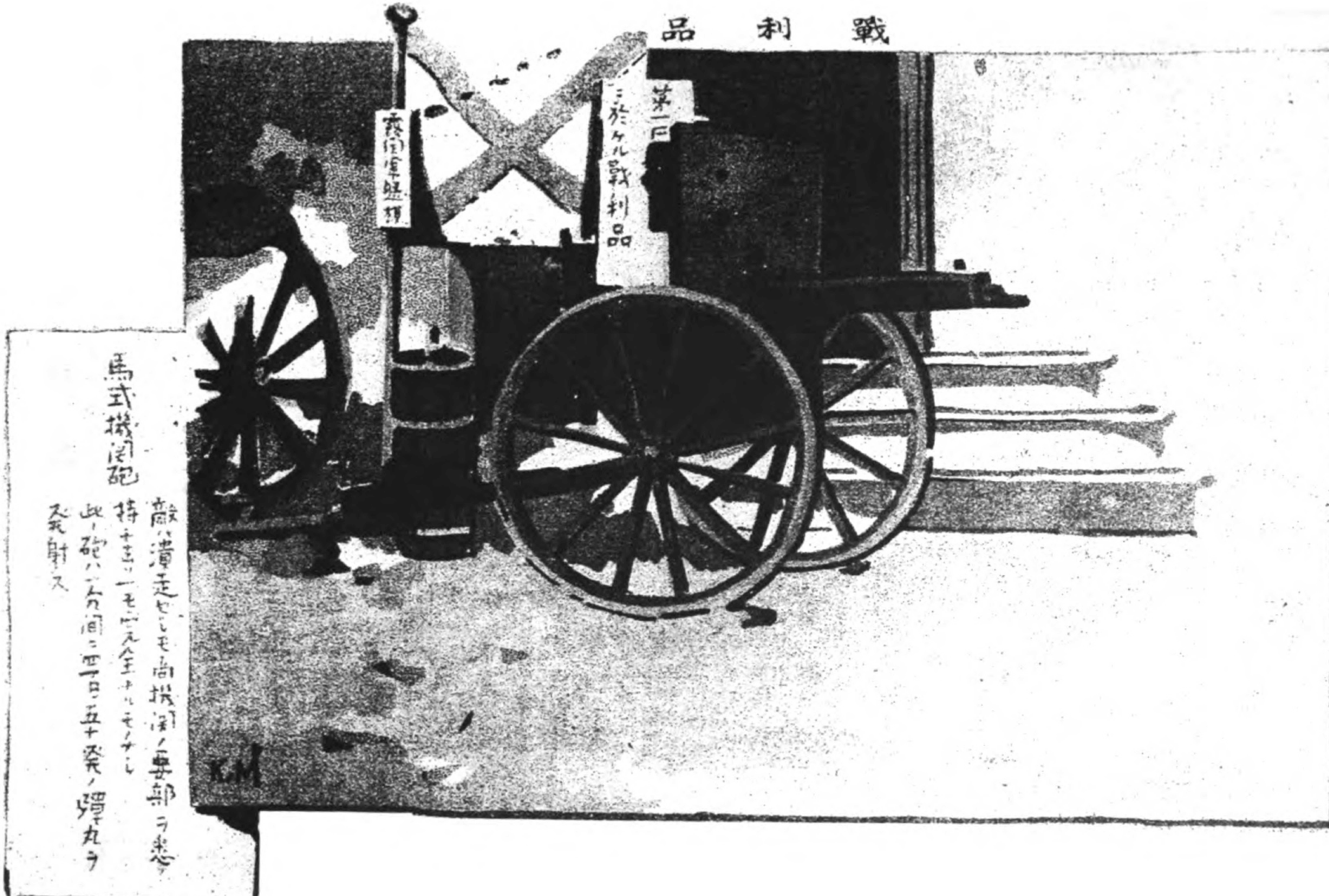
ミルクフウドは小兒の生育、病者、虚弱者、老人の食物として他に比類なき良品なり

ミルクフウドは完全なる母乳の代用として著名なるものなり殊に母乳の欠乏若くは乳離れの場合に於ては尤も小兒の嗜好に適する最良品なり

敵營陷落



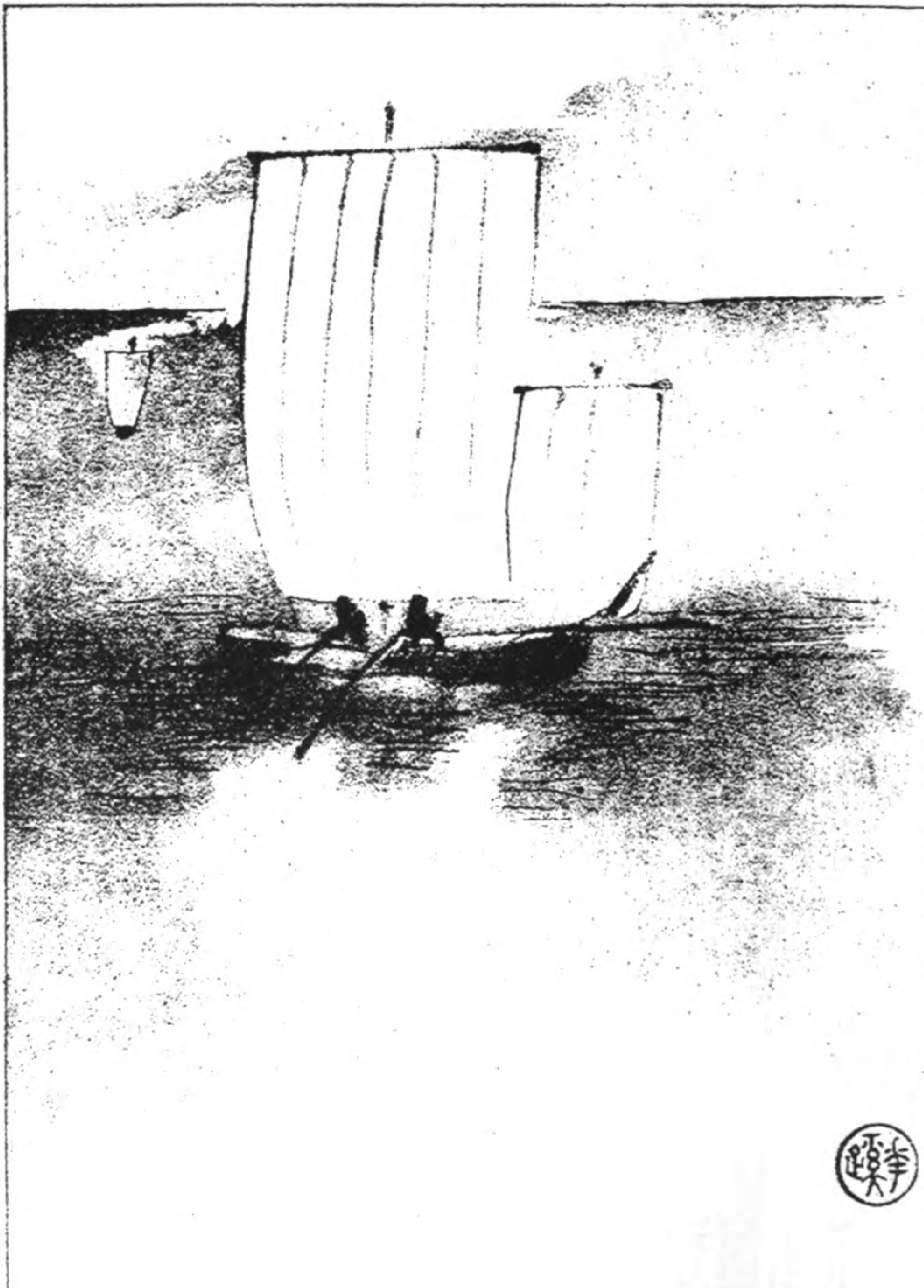
戰利品



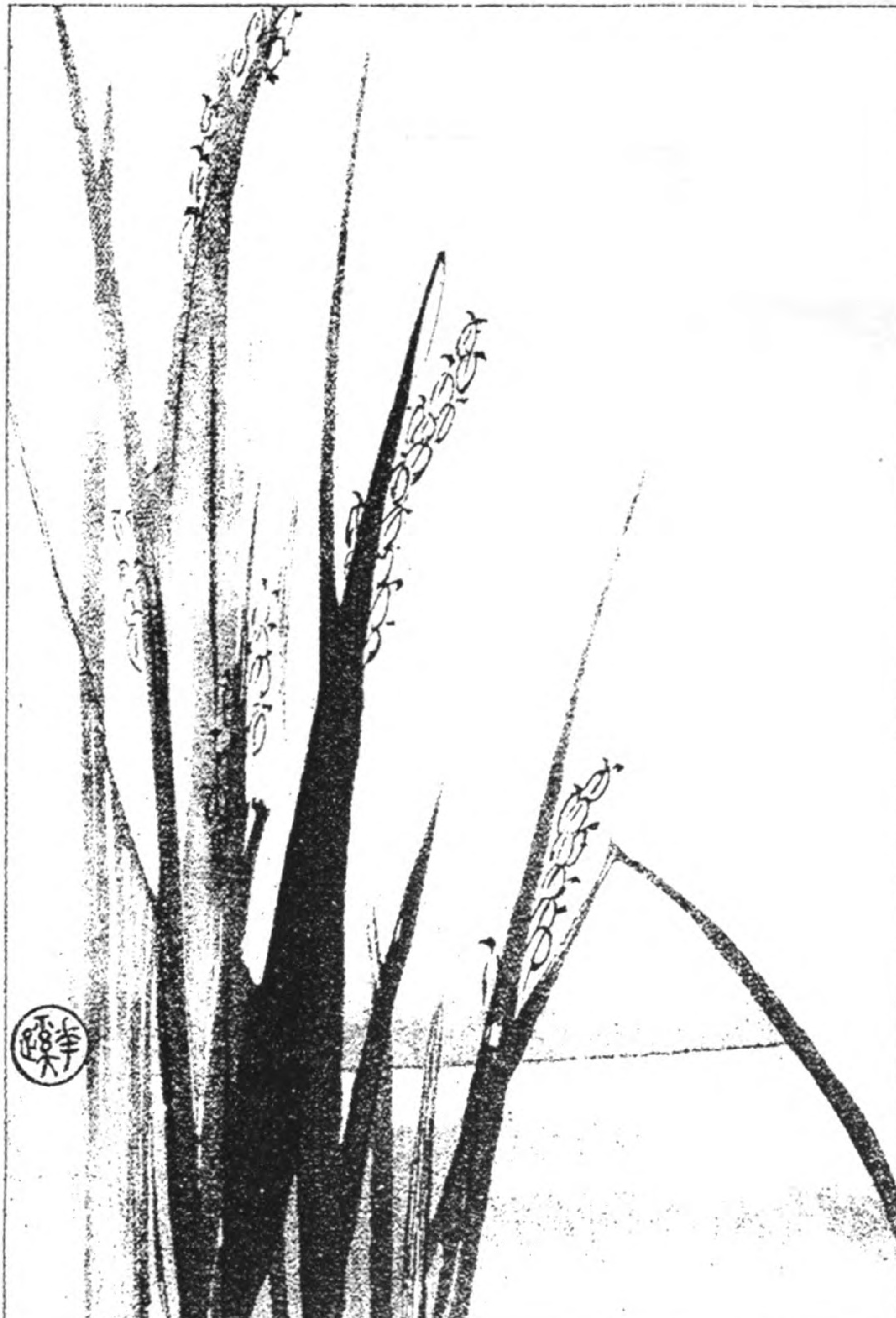
（遊就館にて寫生克己）

遠浦歸帆

跡見花蹊女史筆



稲の花

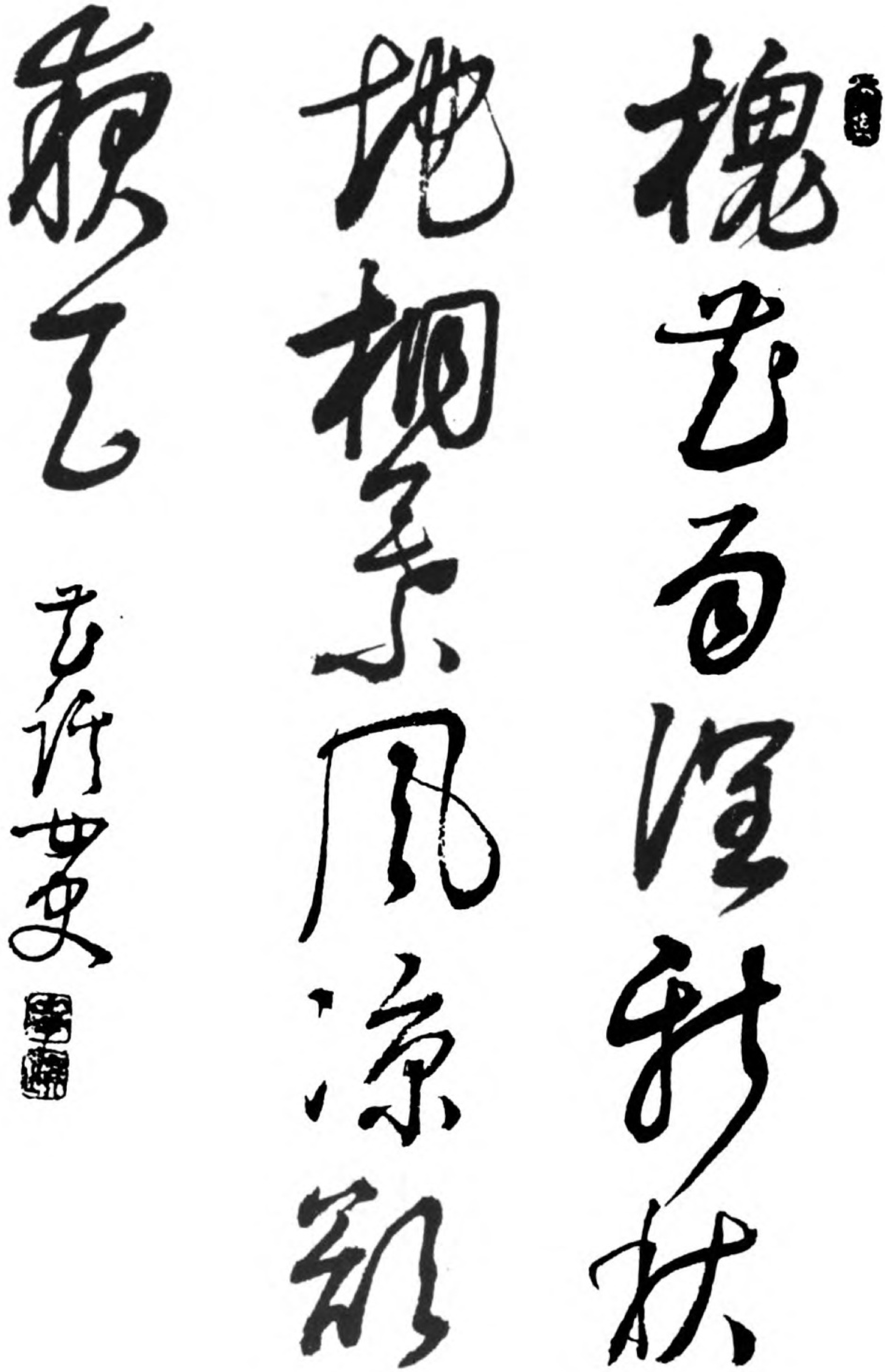


跡見花蹊女史筆

庭の七種かれ　ゆふ霧すゝしき
よるのまかり見えさへものことし筆
おしにつたなきは机の学
あらに晴窓の影もみえよぶかし
たのしさこそ本意なりけれのみ

らぬほど峯に風の音つれて
こゝろすごきに数ならぬ萩の
かゝぼそかなしくは思ひしらるゝ
そよやのこゝろさ衣かくれてとり
なからよほりしくさうへ乗れてのこ

跡見花蹊女史筆



跡見花蹊女史筆

早秋

あきれの
このよたら
かぜは
ひこ
いくのもし
あふねし
なりし
す
こおまめろ
し

愛國婦人會幹事



千家男爵夫人

鍋島侯爵夫人



田中宮相夫人





伊地知幸子夫人



柳谷千代子夫人

東京博文社印刷

野津大將の一族



畫報欄參照)

禮法講習會邮兵有志婦人



前列右より（一）水原判事夫人（二）岩崎こと子（三）野崎季與（四）伊集院いち子（五）佐野夫人（六）大角愛子（七）淺岡大佐夫人ふじ子（八）山路海軍中佐夫人すゑ子（九）森田大尉夫人伸子（十）西海軍中佐夫人さく子

中列右より（一）山本海軍大佐夫人富士子（二）山崎富子（三）篠田光子（四）肝付少將夫人睦子（五）岩佐藤子（六）岩佐侍醫令孃ちか子（七）松村陸軍中將夫人こと子（八）有田大佐夫人よし子（九）土屋夫人　後列右より（一）西村夫人（二）高田玉枝（三）近藤芳子（四）緒方よし子（五）近藤多代子（六）禮法講習會事務係山田大路（七）理事田中誠一郎

兒玉少將と同夫人



（記事參照）

受驗問答叢書新刊

第廿六七編

東京高等工業學校卒業 加野友次郎君外十一君著

新撰工業要項問答

（上卷下卷製本既成）

全二冊 洋裝袖珍上製

正價一冊金貳拾錢 郵稅一冊四錢

手島校長本書に序して曰く　挽近我國に於ける物質的學術の進步に伴ひ動術に關する著譯書の出版せらるゝもの多きは洵に喜ぶべきことなりとす、然れども其多くは深く專門に入り斯門の蘊奥あるものにあらざれば理解し易からず、若し夫れ專門家外に於て科學的常識を修得せんと欲する者の資て以て參考に供すべきものゝ如きは寥々晨星も啻ならざるなり（中略）知人加野君外十一君並に感ずる所あり曩日工業要項問答なる一書を編し將に世に公にせんと欲し、余に添さる余暇を閲するに工業に關する事項を問答體に分類編纂し、先つ上下の二編に大別し、上編を鑛坑、器械工業及電氣工業の三編に分ち、下編を染色法、織物應用化學、釀業、窯業及建築の六編に分ち毎編更に章節に類別し、あらゆる工業を網羅して殆んど洩す所なきものゝ如く編者の用意勤勞多とするに足るものあり云々以て本書の價値をトするに足る

第廿八編

早稲田大學生 西村眞次君著

新撰作文問答

（製本既成）

全一冊 洋裝袖珍上製

正價金貳拾錢 郵稅金四錢

本書は專ら學生諸氏に作文の要訣を與へんとする目的を以て編述したるものにて文法、論理學、修辭學の中より緊要にして、適切なる問題を假構し逐一これに解說を下したり、而して其程度は中學を以て標準となしたれども敎師諸君の參考にも大に益する所あるべし、各章の分類問答の細別、最も用意周到を盡せり

（甲の一）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

(甲の四)

醫學博士 井上通泰先生監修 中川恭次郎君編輯

全部六冊 菊判洋裝

家庭衛生叢書

▲毎編講話大家肖像入……紙數一冊百六十頁

家庭に衛生上の智識の必要であるといふことは今更いふ迄もないが、此衛生上の智識は實に一日でも應用せられぬといふ事はない、住居を撰ぶにしても、衣服を製るにしても、食物を調理するにしても、之に衛生上の智識を應用したなれば、家庭がどの位幸福になるか、殆んど測り知ることが出來ないと思ふ。

其他小供を育てるにも、傳染病の流行時にも、病人の出來た時にも、婦人の姙娠時にも凡て吾々の家庭に衛生上の智識の必要であるといふを證據立てる機會は日常甚だ多いのである。

家庭衛生叢書は各専門の大家が特に衛生上注意すべき事項に就て、講話せられたる所を成るべく平易に寫し出して一般人が衛生上の智識を開發するといふを目的として發行せられたのであつて、讀者は必ず得る所が多いことと思ふ、倘此叢書に講話を承諾せられたる大家は左の諸先生である。

醫學博士 吳秀三先生 醫學博士 中濱東一郎先生
醫學博士 入澤達吉先生 醫學博士 北里柴三郎先生

醫學博士 岡田和一郎先生
醫學博士 長與稱吉先生
醫學博士 木下正中先生
醫學博士 森林太郎先生
醫學博士 金杉英五郎先生
醫學博士 緒方正規先生
醫學博士 土肥慶藏先生

醫學博士 弘田長先生
醫學博士 近藤次繁先生
醫學博士 佐々木政吉先生
醫學博士 桐淵鏡治先生
ドクトル 富士川游先生
醫學士 賀古鶴所先生
醫學士 宮本叔先生

第壹號

—(九月中旬發行)—

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

(甲の五)

文科大學長文學博士坪井九馬三先生校閲
在大學院露史專攻文學士堀竹雄先生編纂

露國の實相

躬行會藏版

全壹册洋裝上製本
紙數菊判三百卅頁
精巧（露國全圖
同政治地圖
同產業地圖）
地圖　着色大判

九月中旬製本出來

要目

地理 歐羅巴露西亞●西伯利亞●トルキスタン●カフガス地方●行政區劃 **社會** 貴族●僧侶●市民●農民●外國人●虛無黨 **經濟** 產業財政 **交通** 道路●河流●海運●鐵道●郵便電信 **行政** 中央政府地方政治 **宗教** 一般教育●專門學校●女子教育 **軍事** 陸軍海軍 **學藝** 文學學及刊行物●科學音樂●美術（以上）

本書は我が名門華冑に依りて組織せられし躬行會に於て今同特に編纂せられたるものなり、戰爭に要する第一義は能く己が力量を知ると同時に併せて敵の實狀眞相を審にし一に應急手段を誤らざるにあり、世上今や暗黑面の露國を示すもの多しと雖も、未だ露國の進歩發達せる眞相を語るもの稀なり、蓋し露國が今日に至るまで能く覇を歐土列強に成せし所以は必らずや豪壯雄大の素ある事恰かも秦王が六國に對せし概無くんばあらず、躬行會諸氏茲に見る所あり、堀文學士に托して攻究數月以て本書を大成せしめ、坪井博士に囑して更に嚴密なる校訂を加へしめらる其價値ある以て知るべきなり、苟も濟世愛國の士は必らず一本を座右に備へ以て大資料とする所あれ。

類書

法學士 須崎芳三郎君著 ●現代露西亞 全一册 特製五拾五錢 郵税拾貳錢 並製四拾錢 郵税拾錢

法學士 須崎芳三郎君著 ●露國侵略史 全一册 特製五拾五錢 郵税拾錢 並製四拾錢 郵税八錢

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

（甲の六）

日露戰爭

博文館發行　**寫眞畫報**　臨時增刊

旅順口陷落

顧みれば拾年の以前に於て、一旦王師の攻略したる旅順口は、魯國の詐謀に出たる三國干渉の爲めに、魯國の掠有せる所となり、五千餘萬の同胞、臥薪嘗膽以て今日に至れり。彼れ驕魯益驕りて悛むるを知らず、遂に宣戰の大詔となり、遼東の征戰となり、再び旅順口陷落の快事を見んとす。本編は其顚末を叙して後世に傳へんが爲め、筆を陸軍の南山占略、海軍の遼海封鎖に起し、最後**陷落に至る迄**の經過を詳叙し精寫し、全く**寫眞畫報と同一体裁**を以て發行し、精新なる寫眞と、雄健なる文字と、相待つて遺憾なく眞相を江湖に報じ、以て絕好の紀念品となさんとす。發行の期は陷落の公報至りてより必らず**一週間以内**にあるべし

請ふ刮目時期の到るを**待**たれんことを

大判（縱八寸五分 横六寸）美本
口繪四十四頁入
附錄 旅順口陷落戰圖
正價金貳拾錢
郵稅金貳錢

口繪

○光澤寫眞版

▲滿洲軍總指揮官
▲聯合艦隊の三殿下
▲第三軍司令官と參謀長
▲各艦隊司令長官
▲各戰隊司令長官
▲海軍帷幕の謀將
▲旅順口攻擊軍各師團長
▲旅順口攻擊軍各旅團長

○旅順口陷落畫譜

旅順口背面攻擊○重圍の旅順口○露女の避難○敵驅逐艦長の粗暴○攻擊陣中の快事○空前の大海戰○我が軍使敵壘に到る○旅順口陷落○敵艦隊の潰敗○敵壘の警戒○壯絕快絕！等十數枚の活畫

○紀念寫眞銅版

攻擊軍各師團謀將○聯合艦長○各驅逐隊司令及艦長○各水雷艇隊司令及艇長○忠勇武列の將士○旅順口內部の光景○老虎尾半島と西港○二龍山○旅順口海岸○攻擊軍野戰病院○大和尙山附近○敵艦の逃込みし芝罘○ジャンク臨檢の實寫○攻擊軍の突進○遼東半島の奇觀等數十葉の奇絕珍絕なる寫眞は旅順口陷落の永久紀念品たるべし

（甲の七）

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

女學通信教授

會員募集（講義錄缺本の處再版出來）

本會は女子必須の諸學科を掲げたる女學の講義錄を發行し小學卒業後高等女學校に入學し難き事情ある女子に僅少の學費にて配布し居ながら學修せしむるを目的とす●本會は學問に篤志なる貴婦人方多數の賛成あり殊に學科受持講師は名家をすぐりて囑託せり講義錄の如何に有益多趣なるかは十年來世の定評ある所なり●講義は實益を旨とし嶄新高尚なる學說を平易懇切に述べ假名をふり傍訓をも加へあれば初學の人々にも了解する事を得べし●讀者の素養に應ぜん爲講義錄に高等簡易兩科あり會費は簡易科金貳拾錢高等科金四拾錢とす●ハガキにて申込あれば直に詳細なる會則を送呈す

東京市麹町區下二番町三七

大日本女學會

電話番町一三三〇

本會發行の繪はがきは砲烟劍光の狀壯烈覩るが如く多忙なる勇士の通信に最も適當にして戰陣には軍事郵便の制あり無印紙の儘發送を許され後世の一大紀念たるべし故に出征將士への進物には唯一無二の珍品なり意匠嶄新印刷鮮美



▲日露戰爭繪はがき目錄▼

本會圖案

第一●海　戰（第一輯）　大高評四版

仝　　　　　　　　　　　　四　版

第二編　陸　戰（第一輯）

（石版極彩色各六枚）金十五錢

水哉君畫　古洞君畫（附軍歌）

第三編　旅順の海戰　三版

第四●在韓の我陸軍　三版

（寫眞彩色各十二枚）金十二錢

新刊豫告

中村不折君畫

旅順陷落紀念　全六枚　金十五錢

（石版極彩色）　嶄新新陷落當日發賣

渡部審也君畫

第五●海　戰（第二輯）　好評三版

和田英作君畫

第六●陸　戰（第二輯）　再　版

（石版極彩色各六枚）金十五錢

▲郵稅四組迄　各　二　錢

祝大捷大割引

三十部以上一割引

五十部以上二割引

會員募集

入會金拾錢會費六ヶ月卅錢を送附せば會員數章を發し六ヶ月間雜誌「はがき文學」を頒布す投書歡迎

會規は要郵券二錢

發行所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　日本葉書會

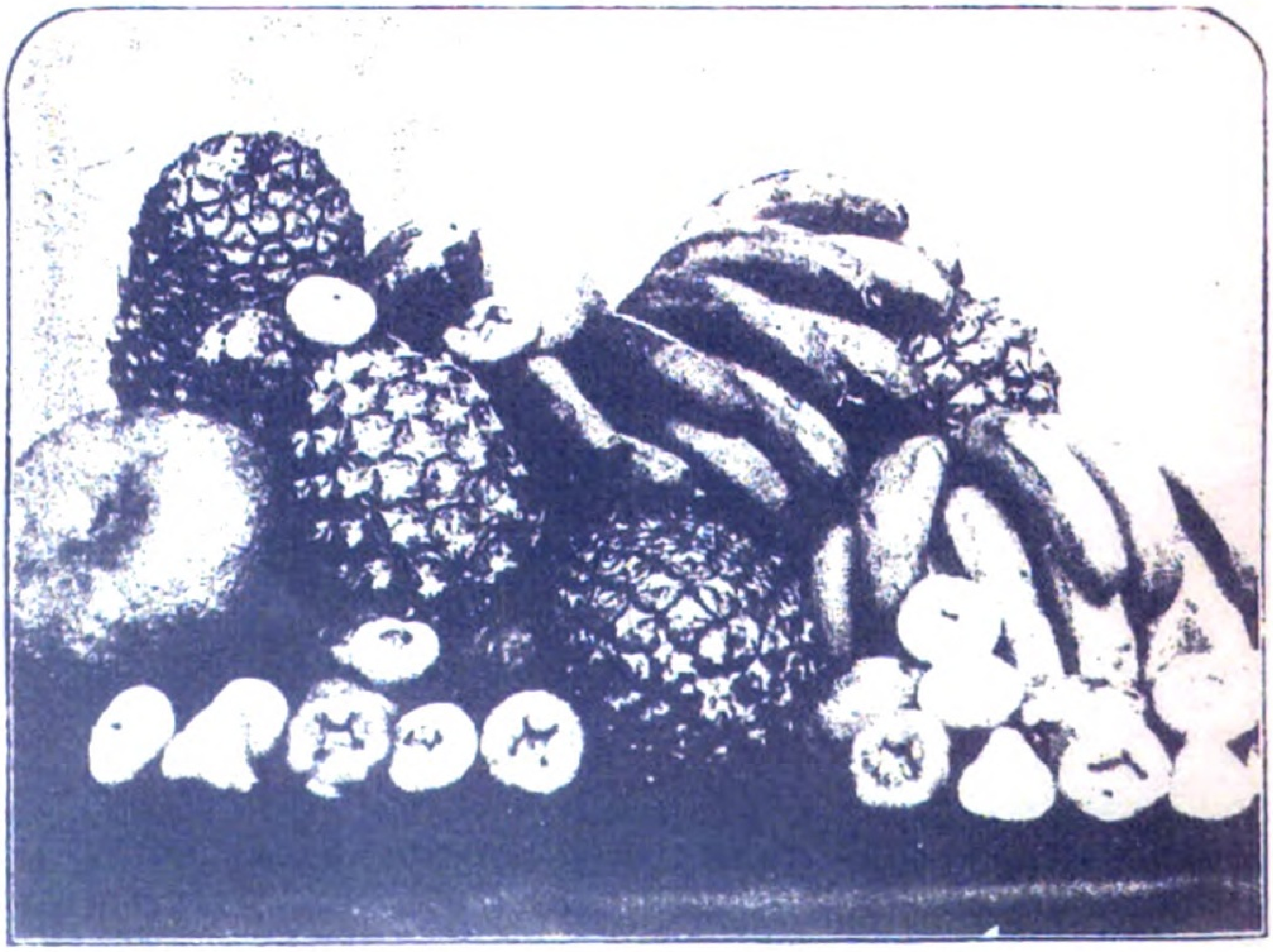
發兌元　東京本町　博文館

（甲の八）

臺灣風俗

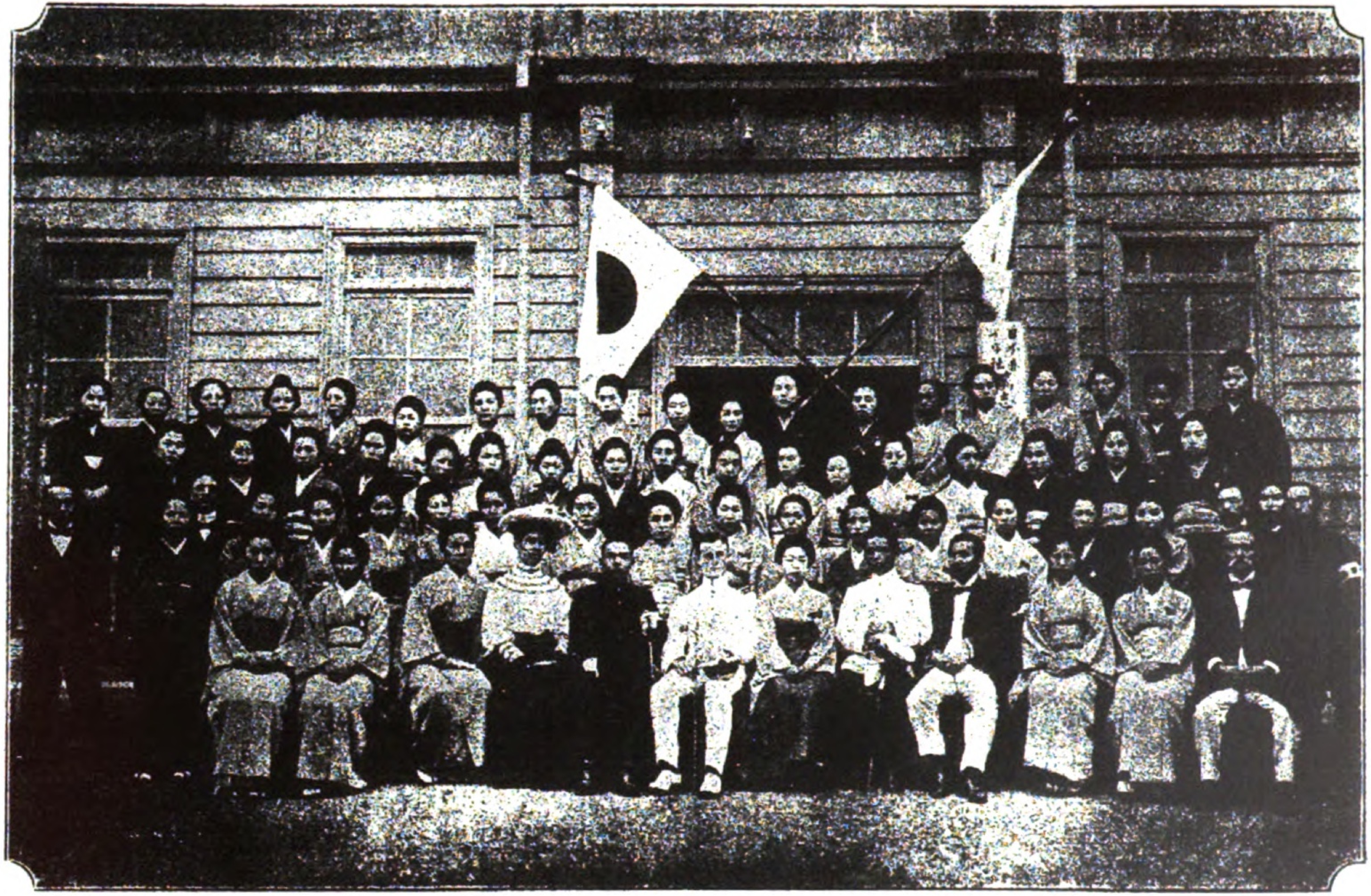


彰化府菓物市場



臺灣ノ名物

仁川の篤志看護婦人會



（記事參照）

五六軍醫合議製劑



定價 五週分壹円、三週分六十五戔、二週分四十五戔、一週分二十五戔、二日半分十戔

本舗 [illegible]

山田安民

全國各藥店にて取次販賣す

女子軍歌

日本女子大學校教授 文學士 鹽井雨江君作歌
日本女子大學校教授 白井規矩郎君作曲

全一册 正價十錢 郵稅二錢

羅讃の露國天誅なかるべらす、我が征露の大軍はこゝに出づ、四千餘萬の臣民誰か勇まざるものあらん、內治を天職とする溫良なる女子も、心の中には亦凜烈なる氣骨を具ふべきなり、此書『家の守り』我等は國の爲め、看護婦、此の日の御旗、想夫戀』の五篇を收む、軍國の淑女令嬢たち、謡幾くは其折り〳〵の聲として、歌ひ慰み給はんことを

（博文館發兌）

日本葉書會

文藝美術月刊雜誌



菊版五十六頁 口繪三頁 定一册六錢 價十二册六十錢 郵稅一册五厘

活氣横溢…氣焔萬丈…趣味津々簡潔明快にして苟も興味あるものは總て網羅して遺さす讀過一番卷を掩ふ能はざるべし滿天下の諸君堂々此式戰場に對陣せよ

一ケ年分以上の雜誌代及入會金十錢前納せば會員となし美的なる會員章を增呈すべし

初號投寄〆切九月十日

會員募集

表 裏



入會金拾錢會費六ケ月分三十錢以上納付せば徽章（桐箱入）進呈會員に对し每月雜誌を進呈す會則送費二錢

東京小石川久堅町百八番地

（乙の二）

海軍機關總監 工學博士 宮原次郎君校閲
工學士 增田知藏君著

（製本既成）

軍艦詳說

全一冊洋裝菊判
總クロース上製
紙數五百卅頁
正價壹圓廿錢
小包送料十五錢

口繪

●帝國一等戰鬪艦三笠號●帝國一等裝甲巡洋艦淺間號●水雷驅逐艦朧號●二等保護巡洋艦笠置號●米國一等戰鬪艦マッサチユーセッツ號●帝國一等裝甲巡洋艦吾妻號の入渠●獨國製造浮船渠●米國クラムプ造船會社附屬浮働起重機●同會社に於ける戰鬪艦マッサチユーセッツ號進水式●軍艦新造初期に於ける諸材料配置の景●水雷驅逐艇主汽機

米の海將マハン氏嘗て謂らく『凡そ一國の盛衰は專ら制海權の得喪如何に由り制海權の得喪は其國の海軍軍備充實の如何に歸す』と英國の如き實に能く此事實を證明して餘あり、夫れ兵强からざれば國富ます、國富まずんば兵强からず、邦家の富强を企圖するの志士須く猛省すべきなり、見よ我帝國の膨張は海軍を利用するに非ざれば寸毫も得る所あらざるべく、海軍に倚るにあらざれば國權の保持擴張を望むべからず、然らば如何にして之を隆盛ならしむべきか、他なし、我國民一般に海軍の何物たるやを知らしめ、進みては海軍の主腦たる軍艦其もの〻諸要素を會得せしめ、以て海軍に對する海國民の思想を開發するにありといふべし、本書の公刊は一に此等現下の要求に應じ國民の海事思想上に更に一段の發展を與へたると共に、斯學に潛念する當事者の參考に資する所あらんとす、是れ本書の目的にして著者の素志なり、

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

刺繡教室



女子職業學校の內部

犧牲（泰西名畫）



巖谷小波君編

八月十五日發行

正價拾貳錢
郵稅四錢

少年日露戰史 第參編

九連城の巻 附 軍國讀本 巻の三

九連城の巻目次

口繪 ●第一軍司令官●第一軍の三師團長●應援艦隊の勇將●第二軍第一戰場

本文

▲鴨緑江の地理
▲海軍の應援
▲架橋の掩護
▲江上の大砲戰
▲九連城の陷落
▲蛤蟆塘の激戰
▲敵兵の同士討
▲諸兵の苦心
▲金州丸の事
▲捕虜の厚遇
▲鳳凰城の占領

附錄 軍國讀本

◎黑木大將
◎牧澤中隊の苦戰
◎九連城は占得たり
◎大膽な斥候士官
◎武士の情
◎裸體の勇士
◎志士の不運
◎戰場物語

續刊

●第四編 南山の巻 九月發行
●第五編 得利寺の巻 十月發行
●第六編 摩天嶺の巻 十一月發行
●第七編 大石橋の巻 十二月發行

▲全十二册 洋裝大判每月一回發行 紙數一册百餘頁

正價 ●一册金拾貳錢●六册六十七錢 ●十二册壹圓廿八錢●郵稅一册四錢宛▼

第壹編 開戰の巻

▲戰爭の原因
▲三國の干涉
▲露國の無法
▲露西亞は何な國
▲文明と野蠻の戰
▲艦隊の出發
▲仁川の勝利
▲旅順の攻擊
▲宣戰の詔勅
▲國民皆兵
▲擧國一致
▲新艦の到着

附錄 軍國讀本 ●葉山の御夢●東洋の子ルソン●三殿下の御勇戰●敵前の尺八●殘る劍●軍歌旅順の海戰●下瀬火藥の事●初瀬の初花

第貳編 決死隊の巻

▲日韓の條約
▲閉塞の計畫
▲決死隊の出發
▲決死隊の行動
▲驅逐艦隊の激戰
▲間接射擊
▲第二回の閉塞
▲閉塞の成効
▲マカロフの戰死
▲行軍の困難
▲騎兵の奮戰
▲露艦の亂暴

附錄 軍國讀本 決死隊の歌●勇士の膝枕●機關兵の決勇●軍神の歌●氷割の勇士●大切な軍艦旗●子供好の中尉●斥候の犠牲

(丙の一)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

博文館發行　**日露戰爭實記**　定期増刊

寫眞版　第六卷　畫報

日露戰爭　寫眞畫報

皇太子妃全**兩殿下** 帝國三鎮守府司令長官 **上村艦隊**の六艦長、武勇聯隊長、**一時**に露兵に虐**殺**されしとの噂ありしも其後九死に一生の場合を切り拔けて**我軍**に歸來せし米國從軍記者 **エマルソン氏**が露軍及我軍に於て撮影し本館に送り來りし珍奇無比なる**遼陽**の**露陣** 奉天に於ける哥薩克兵聯隊、陣中の哥薩克騎兵、哥薩克の進軍、露國士官の酒宴、日本軍海城附近進行、蓋平に於ける日本兵の伏射、滿洲人日本軍隊列車を迎ふる眞景 **上海**遁竄中の敵艦、旅順口鐵道、二龍山全景、大和尚山麓我軍の活動、遼陽と海城、營口の寺院、海城の官署、破壞後の鐵道、十三里臺激戰、戰地病院、支那人の避難 **露國歩兵**の演習、占領後の南山砲臺、摩天嶺捕虜、常陸丸戰死者葬儀等

正價(毎月八日發行) 一冊金二拾錢、六冊一圓十錢、十二冊二圓十五錢、郵税一冊二錢五厘ッヽ

九月八日發行
大判(縱八寸五分 横五寸 美本)
口繪四拾頁(石版色刷二枚 光澤版八頁 寫眞版三十二頁)
本文記事豐富挿入數十

●遼東の捕虜……寺崎廣業
●リウリック撃沈……佐久間文吾
●露兵の亂暴……木村光太郎
●沈勇なる斥候……山田正行
●ケルレルの戰死……山中古洞
●泥中進軍の困難……中澤弘光
●白扇を揮て敵前に進む……渡邊金秋
●ノーヰックの最後……福原霞外
●烈壯の極……渡邊審也

——{記　事}——

征露戰史 は第一軍楡樹林子様子嶺の占據より中軍の析木城攻陷に及び、第二軍海城牛莊占領並びに海賊的艦隊の最後に至る、筆力勇健記事明快を極む

戰事記文
▲旅順口物語……
▲軍使派遣と垂亡の旅順口……犀東
▲連戰連笑……小波
▲裏面の戰爭……春浜
▲馬賊巨魁と語る……漣波
▲彈丸破裂談……佳水

戰爭實記 共通前金 (一ヶ月)四十七錢 (三ヶ月)一圓三十五錢 (六ヶ月)二圓六十五錢 (一ヶ年)五圓二十錢 郵税(一ヶ月)六錢五厘宛

(丙の二)



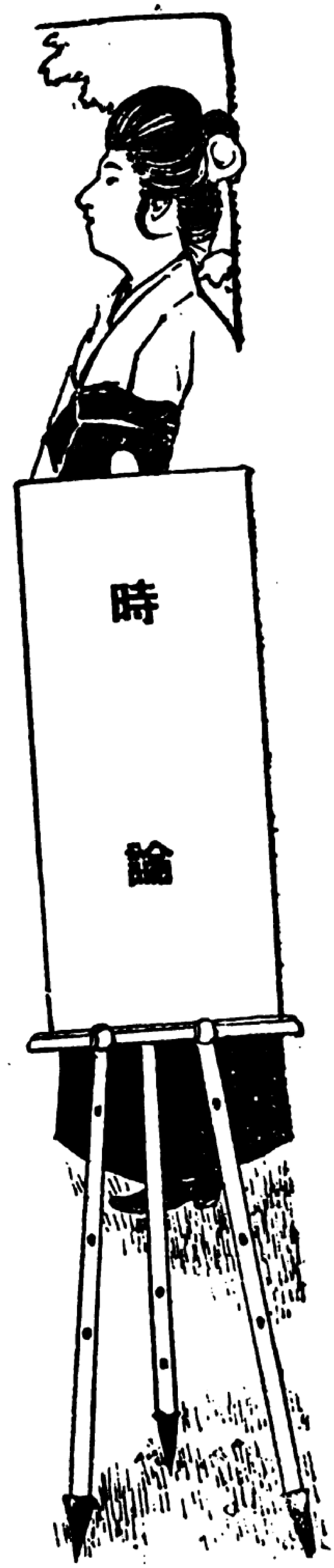


女學世界

第四巻第十一號

軍國の兩陛下

酷暑の候に際して九重の雲深きに在します兩陛下の御近狀を洩れ承るに、御坐所は遙か東京灣の波に跳び上られたる涼風に玉簾の音なしつゝ紅塵萬丈の市中よりは十度位は低しとあり。されど時局多端の折柄とて深く軍國の大政に大御心を注がせ給ひて臣下の奏問に接し給ふ事繁ければ、自然涼風玉體に宜しき日常の御坐所よりは暑さ強き御學問所に入らせ給ふ事の多しとなん。陛下は玉體健かにましまし御肥滿に渡らせ給ふ故此一兩年は御酒さへ葡萄酒の外には召上らぬ程なれば。昨今の暑さには恐れ多くも日に三四回は御更衣を遊ばされ折には氷菓子など取らせ給へど多くは暑中には熱き物を召し給ふとぞ。扨又皇后陛下には過日某侍臣拜謁の折酷暑の候御避暑の行啓も仰出されざるは誠に恐れ多き次第なる旨を言上に及びけるに、陛下には炎熱に加ふるに大敵と戰へる我が兵士、又諸事不便勝なる病院に在る傷病兵、猶又是れが治療看護に手をつくしつゝる人々の上を思へば炎暑も厭ふに足らず、女官等の如きも繃帶卷を此上なき消夏法と心得居るなり、避暑せずともゆめ不滿足には思さずと仰せありしとなん、兩陛下の深き御仁慈を仰ぎ奉りて己みしぬ。



暑中雜感

道德と禮節

棚橋絢子

私は皆様と違ひ休暇が休暇にならず偶内に居ますと半年間打遣りにした仕事が一時に蝟集雜出して猫の七化け役者の早替りと申す有様にて奥様ともなり、下女ともなり、御物仕ともなり、洗濯婆ともなり、玄關の取次勝手の見廻り、御負けに外向の御小使暑中の御使者迄一身に引受ますと故避暑は愚か、炎天に汗水たらたら、眞黑に成て朝起るど夜る寐る迄、立たり居たり、出たり入たり、往復の手紙に從事する外、書物を手にする暇なければ新思想の浮ぶ筈なく、御話はさつぱり種切れ、去り乍ら孔夫子も博奕と云ふものあり、已むに勝れりと申置れました通り、つまらぬ事でも言て見れば褒らるゝ代りに、笑はれますから、是ではと思ふ御發心が仕方なしに起ります、そこが則ち已むに勝る理由であらうと自分免許で取り極めました表題が道德の禮節のと云

ふ相も替らぬ、焼直しの古い御話、時節柄腐敗物は眞平と仰あるも知れませんが、御腹には入らずとも御耳だけは拜借致します、偖胃頭は是迄にして本題の說明に取掛りますと、苋増左の通り。

私の平生不審に思ひますは人智の發達するに從ひ道德の區域も多少弘まり行く筈なるに實際は其反對に出て智識の進む程道德の退くのであります其を何故と考ふるに智識を道德の外に運動するものと見做し其干涉束縛を離れて精神自由を得るものと心得違ひ倫理修身抔言ふとは人間必用の衣食住に迂遠視する誤りに外ならぬと思はれます、如何にも一と通り尤の樣に聞えますれど、能考へて御覽じませ、人と禽獸と異なる點は何所にありませうか、倫理道德のありなしを爭ふの外は有ますまい、衣食住の必用は巾迄もなけれど、人計りでなく禽獸にも毛羽を以て衣裳にかへ、生餌を以て火食にかへ、巢窟を以て家宅にかへ、何も不自由は有ませんが、倫理の點に至つては夫婦有て夫婦の道を知らず、親子あつて親子の道を知らず兄弟あつて兄弟の道を知らず弱の肉は强の食、優の勝劣の敗に飛揚驅驟する外、何の智識も有ません、偶鳩の三枝、烏の反哺、蜂蟻の君臣、雁行の秩序、老馬の道を敎へ、駱駝の水を知り、犬の戶を守り、鷄の時を報ずるが如き、一片に明かなる所あれども、造化より生付られた儘にして是を擴め進むと云ふとはなく、禽獸は何迄たつても禽獸なり、是も智識と道德と離れ物でない證據であります、若し人智が道德を離れて孤立するものならんには、禽獸に綺羅錦繡を纏はせて珍膳美食に飽かしめ、大厦高堂の上に雌雄相雙び、牝牡相群れしむると同じとにて、人の人たる價格はありますまい、道德の必用なる點は大方是で御分りに成りましようが、道德の形象に至つては化學の分析も屆かず、顯微鏡の力にも及ばず、人の心內に立入て點撿する譯にも參りませんから、品行上に顯れた所を寸尺と

して善惡を判斷するより外方法は有ませんが、其品行の著きものは忠と孝故、古人も臣としては忠に死し子としては孝に死すと迄其極度を示しました、さりながら是は國家多端の時とか、父母の命に代るとか、大不幸の場合ならでは見はれませんから、平生の定規とは成ません、平生人の見聞に觸れて忠義とも孝行とも思はれますは、君父に事へて禮節を謹み、恭敬を致すより慥なる作用は有ません、其れ故私は道德を容づくる近道は禮義を正しくするに若くはないと存ます、禮は天理の節文、人事の儀則と云ふ解釋も有まして、形象も方體もなき天理に品節と云ふ制限を立て、文爲と云ふあやをつけ人生日用の事々物々に儀式法則を施したるものなれば、尤も見安く分り安き敎にして經書にも克己復禮とか、博文約禮とか、詩書執禮とか、殷沿夏禮周沿殷禮とか、立於禮とか、問禮とか禮を重んずるの語、枚擧に暇あらず、宋朝に至りては禮義廉恥は國の四維と迄申た人も有ます、四維は家の四隅の柱の如く此柱がゆるぎますと家の基礎が保たれません、道德の復古は此のゆるぎを直して國の基礎を堅むるの專務であらうと存ます、復古といへば昔へ跡戻りして文明進步の妨害をなす樣に心得る人も有ましようが其は取樣の惡いので道德に固より新古の差別はなけれど、古へに行はれて今に廢れたるを恢復するは世道に任ずるもの丶責で有ます、改新といへば當世の耳に入易うは有ましようが、道德計りは作り直して新にする譯には參りません、矢張古き物を保存して磨きを付るより外はないと存ます、古き物が用に立ぬとすればいと畏けれど天朝を何と致しましよう日本國で否日本計りでなし世界萬國の中でも古き物の極度は天朝にて其至尊たるとは申迄もなく、人民の之を戴くは萬古一日の如くであります、先是で君臣の極古い證例は濟ました、次に極古い者は夫婦の倫で有ます凡そ宇宙間に人類の有て以來今に至つて變りません

其次は親子の倫其次は兄弟の倫、其次は朋友の倫、何れも極古い者で何れも極尊い者で有ます、西洋は日新を尙ぶ國で新發明が多く有ますが、新發明と申た所が古い物を資本にして作用を新にすると申迄なり、假令は瀛船滊車の發明も蒸氣力と云ふ物が有て後に起り、電信線も輕氣球も電氣力空氣力と云ふ物が有て後に其働をなすが如し、して見れば矢張論語の温古知新と云ふ四文字が周遍にして殘すヿなき樣であります、私の復古論も禮節を專務とすと云ふ所に幾分か知新の意味も籠つた積りて有ますが、其は兎も角も專務中の最も專務なるは男女の禮節を謹むので有ます、近頃男女の交際と云ふヿが開けそめて宴會夜會舞踏など云ふ晴の席に男女混入雜處して少しも區別が立ぬより、有らぬ浮評を來すヿも往々聞及びましたが、此風が推移りて女學校耶蘇の會堂抔云ふ立派な標榜の敎場にも忌み憚るヿなく立振舞其終り新聞紙上に醜聲を流して玉石共に傷くに至りしは昭代士女の大耻にして千古の遺憾では有ませんか、是と申も畢竟は握手、接吻、抔云ふ亂りがはしき風俗が傳染して男女の閒が切近するより起りたる結果とこそ思はれます、中には握手接吻も外國の禮にして左迄怪しからぬヿと云ひ破る人も有ましようが是は直情徑行と申て禮とはいはれません、其故古人も夷狄の俗と鄙しみましたかゝる慝禮は淫樂と共に斥けて心術に交へぬ樣致したいものであります、時勢の成行にて交際も宴會もせねばならぬ譯ならば道路男子は左よりし、女子は右よりすると云ふが如く其區別を嚴にして如何にも文明らしき禮制を立られたいものであります、女學校、會堂は勿論、敎育の場所なれば格別、其經界を正し光明皇后の内道場と一般の景況に陷らざる樣敎職に任ずる者の注意有たきヿであります、婚姻は人の大禮と有を以ても男女の禮節を謹むが禮の先なるヿは明白で有ます、車に男女の相乘と云ふも近頃のヿながら年少の人は結婚未

婚の差別も紛らはしく、且つ夫婦別ありの倫理にも抵觸する樣なれば、五十以下の人は勉めて避くる樣にするが、男女の區域を立る手始めかと思はれます、是迄が本題の趣意なれども、腐敗物異乎と御捨なさるゝ分は其迄のこと、一寸目に入て見樣と思召御方もありますなら、猶追々御相談を願ひます、本題には縁遠き樣なれども猶一條り愚存を申試みたいは、近頃流行の女子獨立論であります、私の考にては身體の上から見ても事体の上から見ても女子の獨立は天の許さぬのみならず必用はないと存ます、其はなぜと云ふに男子は一を得て奇數女子は二を得て偶數、偶數の奇數に後るゝは自然の天理、男子は國事に營し、女子は家事に宰たり、男子は耕耘して田野を闢き、女子は縫針と烹炊に從事す、男子は外に出て兵役を勤め、女子は内に在て慈育を司る、業務の細大を分つは自然の人道、擔任と内助と相待て初て其用をなす、若し各自獨立したらんには女子たる本分を失ひ、男子の業務隨て成るとなし、相待の益豈大ならずや、近く譬へをとつて言はゞ墻壁の控へ柱の如く、半は土中に在て其堅固を保ち往來の船舶の如く半は水中に入て其運轉自在なり、女子の務も斯の如く目に見えぬ所に力ありと知るべし、目に見えぬ力ら持は椽の下の金箔と思ふ人も有べけれど、其必用は茲にあり、若し控柱を土中より出し船舶を陸地に揚げたらんには何の用をかなさん、是のみならず春は陽氣の始にして萬物皆發生し、冬は陰氣の終にして萬物皆閉藏するは造化自然の順序なり、然るに陰氣か獨立して冬の閉藏を止めたらんには、春の發生は何によりて施されましよう、此理を以ても女子は男子の半を得て目の見えぬ所に必用あるは明白であります、彌獨立は御廢にして今迄通りの内助に落付かねばなりますまい、但し獨立の必用は節操の二字にあり、空閨獨處と、稠人廣坐とに論なく生れてから死ぬ迄此獨立は大切に持續せねばなりませんが

不幸にして寡婦となり、夫に代りて一家の事務を整理せねばならぬ場合に至り、俄に獨立の出來得べき者ならねば、不都合を感ずるは必定、其爲には平生獨立の力らなくては間に合ぬと思ふ人もあらうなれど、内助の出來る程の婦人が一旦獨り者になればとてあわをくふことは毛頭なき筈のこと、其上操といふ文字の中に此獨立も含有してあれば、其邊の御掛念は先づいらぬものと考へます、他は前論の通りにして差支は有まじく是も復古の一部分と存じますより、序ながら御相談に及びました。

（了）

祖先崇拜の國風

文學士　村上辰午郎

竊に私が御婦人方に御願ひいたしたいのは皆樣方の家々の御先祖の事柄を子供に話してお聞かせなさるやうな習慣をつけて頂きたいものです。

一体自分の家の家系を重んずるといふ事は如何にも大切な事です、世間で往々我儘勝手な動作をする橫道物、又は不品行で始末に行けないやうな人物が出て來るのは、率ね其の家を重んずるの感念が乏しいやうであります、若しその人々が先代の人々の德を慕ふて、其の教訓を忘れなかッたならば決してそんな不品行や自暴自棄の人間にならなかッたでせう、して見れば家の系圖や、先代の人の德は後世子孫の訓戒となッて修身齊家の上に非常な功益があると言はなければなりません。

外國の例を引くまでもなく我が日本で古來有名であッた所の祖先を有して居る人々は大概シッカリとした精神

を持つて、其の品行も誠に正しいのであります、世に成り上り者など申しまして、富貴の地位に居ながら不品行で野卑で人の風上に置けないやうな人物を評してありますが、之に反して平素縦へ賤しい家業をしながらも自分の家の先祖は何の某であつて、何時の世にどんな事をしたといふやうな由緒のある家の子孫で隨分立派な人物があります、これは平日祖先の德を慕ふてその名を汚すまいといふ考が心中を離ないからでありませう。世の中一般の有様を見まするに、先代の人の年回とか命日でもあると僧侶を請じて讀經をさせる、客を招いて御馳走をする、これは元より先祖に對する禮で大に努めなければなりません。が、先祖に對する禮は唯此の表面上の儀式だけで了るものではありません、歐州諸國で中流以上の社會になりますと、何か特別な日には自己の行爲を顧みて大いに反省するの習慣がありますが、我が日本の人々の中にはまだそんな習慣はありません。但し昔しの道德家と云はれた中江藤樹先生などは、時々自分の行爲を顧みて自反せられたといふ事がありますが、當世は大分と世の中が忙しくなり、又或る意味に於ては世の中が澆季になりました故か人々銘々が自分の行爲に就て反省するといふやうな事がないのであります。藤樹先生の敎訓にも、

自反愼獨は萬病を通治するの聖藥なり、換骨頤神の良能あり、湯散丸の治せざるところ、鍼石灸治の及ばざるところ、此の藥にあらざれば及ばず、此の藥にあらざれば療す能はず、然りと雖ども知りて而して服食する者は尠し噫、

又英國の諺に

If they say you are good, ask yourself if it be true. 人は汝を善なりといふとも、その眞なるやを汝自身に問へ、

とあるのも矢張自反の必要を說いたものでありませう。

斯様な次第で兎に角自反は、人生に取つて甚だ必要である、先代の人々の命日など最も自反するに都合のよい

い日であらうと思ひます、その人の教訓、行爲などを、さながら心中に寫し出す程に、心からその人のことを思ひ、そして、自己を反省するからして、初めて、祭祀の本意に叶ふといはねばなりませんけれども、普通一般の家では、先代の人は如何なる方であつたか、そこらはサッパリ分らないのもあります、が、これは、まことに遺憾である、併しこれから後は、我が祖父祖母及び父母等の嘉言善行は、つとめてこれを子孫に傳へ、その子孫は、また、後の代の人に、言ひ傳ふるやうな仕組にしたい、一體、人は先入主といふ傾がありまして、幼少なる頃に敎へ込まれたことは、容易に忘れない、狐の嫁入り、桃太郎の話は、中々忘れないやうなもので祖父祖母、又父母等の行爲、教訓、意見などは、成るべく、幼な心にも了解し得るやうにして、桃太郎やカチカチ山の話など丶共に、よく聞かせておいて、その子孫が、成長しても、その聞き込んだことが、いつも心から離れないやうにしたならば、我が家の先代の人々のことが、常に心にあるといふことからして、自分勝手な了見を起すこともなく、從て、身を墮落させるやうなこともなからうとおもはれる。

そしてこれらのことを幼兒に話し聞かせるのは、男子よりも、婦人方が適當でありませう、否、婦人方の、務ろ、つとめるべき道であらうと思ひます。

次に申したいのは、墳墓に對する心得であります、先代の人々を尊敬するには墳墓を大切にせねばならぬことは、勿論であるが、各所の墓地に入りて見ますと、墓石は倒れ、その周邊は草茫々としたのが、如何にも澤山であります、不幸にして其家が滅亡したなら詮方もないが、現在そこに、子孫がありながら、墓が亂雜になつて居るのは先代の人々に對して、甚しい不德といはねばなりませぬ、怠らず墓詣をして、その墓の樹木にならぬやうに注意を加ふるのが、これ即ち、先代の人々を尊敬する所以で、時々幼兒を連れて、墓詣をするといふことか、先代の人を忘れしめない所以の一であります。

（了）

皇軍の興りしにつきて

小川直子

人の世にあるや、其國に生れては其國を愛し、其君をあふぎ尊び奉るはおのづからなる眞心にしあれば、深山のさとの柴人も、千島の果なる海士の子も、只一筋に御國の御稜威のきら〳〵しう榮えますへき事を願ふめり、されば四方海波靜なる世に在りてすら朝なゆふなにおこたらず、身のほど〳〵に順ひて御國のため盡す心は、つかの間も離るべからざる事なるを、まして此頃露國との戰爭はじまりぬ、かねて勅語に一旦緩急あらば義勇公に奉じてと宣へるは、かゝる時の事ならずやは、あはれかけまくもかしこけれど天皇は憂ひさせ給へる大御心の中を推斗奉るに大方の事にはあらざるなめり、かゝれば其民たる我どもから益荒武男はいふもさらなれど、數ならぬ女子たりとも雄々しき心を振り起し、御國のため君の御ため、此時にこそ忠を先とし義を重んじ、力の限り盡さでは叶ふまじきわざならずや、されば世の女子たちよ、あはれ願はくば心を合せ氣をひとつにして、何にまれ、聊なりとも皇軍をたすくる方に心を盡さまほしき事にこそ、今此心なくては禽獸にだに劣るべし、此頃聞けば箱崎八幡の御やしろの内に住める鳩どもが軍人を見送らむとの心にや、先づうしほをあみつゝ尾羽を清め、夫より聲高らかにさへづりかはして、軍人の乘り給へる汽車の跡さきに群たちて、遠き所までゆくとかや、鳥もすら猶國を思ふ心深き事斯のごとし、此鳩に送らるゝ軍人だち、今こそは皇國のために身をも命をも捨つへき折なれと、先づ海軍の益荒男たち、いみじう勇みたち御軍艦に乘りこぼれ、八重の汐路に白浪を蹴たてゝ進まれしは、いかに雄々しくいかに賴母敷見えつらん、陸軍の君だちもいかで一時もはやくと待たれけむを今出立ち給ふ勇ましさは葦毛の駒よ黑駒よと太く逞きにむちを揚げつゝ轡を並べて、立ちいで給ふさま、いはゆる大和魂一身に充ち渡れりとおぼえたり、これを見送る人々は此武夫たちのうからや

からの多ければ、若やかなる妻もあらん幼き兒子の笑めるも見ゆめり、中には老たる母などもなどかなからん
されど此老人も子をおもふ闇を忘れて我子よ國家のために忠を盡し義勇を鼓ひて名をも擧げ國の御稜威を輝し
後の世迄の譽をも殘せよかしと、雄々しく潔く言ふもあらん、先つ日もおのれが常に親しみあへる清岡子爵の
母刀自覺子の君のかたり給へるに、我も子といふ者を數多もたりければこそ三人の軍人をも出したれ、今また
四男の五明がいでたつとて別に臨みて常よりも顏色いとも花やかに笑を含みて勇みにいさみし後影、見る〳〵
伊勢の大神よ神靈あらはし賜び給へと心の中に祈りつといひも果て給はぬに、おのれは涙のはら〳〵とこぼれ
出でつゝ打ちしをれぬ、常々人に向ひては我子にまれ夫にまれ軍人にて門出し給はゞ、ゆめ〳〵女々しき振舞
なし給ひそ、瓜生保また那須五郎か母などの雄々しかりしありさまともを思ひ給へかしと、言葉を盡してかた
らひたる身の今かく袂のうるほひぬるもかつはあやしうなむ、かゝる別を思ふにも只いたづらに過すべき時な
らめや、されば此程より赤十字社にては、かしこくも閑院の宮の御息所の君が思召たちなりとて、やむごとな
き方の北の方、または並々の婦人たちのはやくより看護法に心寄せらるゝ君たちを勵まし給ひて、負傷者救護
のわざともに御心を寄せられ、日毎〳〵に打集ひ、繃帶よ何よとあらゆる業をなさしめ給ふとぞ承りぬ、さる
からに我同じあがたの友とちが打集ふ雀友會の女子たちにかたらひ謀りて、恤兵の事に力を盡さむと言ひ出た
るに、人皆心あはせて我も〳〵と競ひ給ふこそいと嬉しけれ、よりて大方の君たちにも勸むるぞかし、されど
皆家の富めるにあらず、いかゞせましと思はるゝ人たちもなどかなからん、さはいへど心をこめて思ひめぐら
さば、おのかじゝ志の遂げえぬ事あらじや、譬へば耳目を喜ばしめむとして、遊びの物見にゆくを止め、着
るもの食物の奢を省き、あるは人の手をかりてせさせ來つる裁縫にまれ、洗ひはりにまれ、みづから手を下し
て爲さば假令家にあまれる財あらずとも、身のほど〳〵に恤兵のわざはなし得られざるにあらじをや、いか
でいかでつとめ給へ思ひ起し給へ。（了）

軍人家庭

中村鈴子

樺山大將夫人

夫人登茂子は薩摩藩士山本玄十郎氏の三女なり弘化三年二月を以て生れ十八歳にして今の海軍大將伯爵樺山資紀氏に嫁し十九歳にして長男愛輔氏を擧ぐ人と爲り堅實快活にして常に進歩改善を圖ると雖も皮相的文明を喜ぶに非ず大和魂を基礎として深思熟慮を透し彼の精粋を咀嚼するを以て毫も浮華の態なし而して最も後進子弟を教養するを好み樺山家の恩によりて新教育を受けたる紳士少からざるは夫人の力與りて多きに居ると云ふ。

梅雨期の下半は晴れ續きましたが、七月十日は前日より天候少しく變つて居まして、朝から鈍硝子を張つたやうな空氣の頭上より壓し來るを感じ、折々小雨の風に亂るゝのを見ました。車が關口臺町の新道を上り掛つた時に風と雨は稍々強くなつて、土手の青葉は杉木立から灑る雨に堪兼ねた風情いたはしく見へ、肥車を曳き上る農夫三々五々相接する様は田園趣味に饒へ濡笠の茶褐色は周圍の鼠色と配合宜しう動いて居りました。藁屋根の駄菓子店にも祝捷の日章旗を認め、豐川町の南側に煉瓦の門柱鐵柵と共に厳めしきは問はずして十年前黄海大海戰に偉功を奏された樺山海軍大將の御邸と知つたので御坐います。御門を入れば高野槙の兩側に列べ植ゑらるゝこと數間、櫻の大木を中心に鬱蒼たる植込の側なる御中の口へ伺ひましたが、白地浴衣を着たる書生さんが記者を案内し スポー式絨緞を敷き詰めた御廊下を通つた時、西京丸の油繪（郵船會社寄贈）と御主人の半身肖像とを拜見して廣壯な應接室へ入りました。此室は和洋折衷の裝飾で、左側に紫檀一坪ほどの水屋あり、優雅な切組の腰障子を後ろにしたる棚上に大きな布袋の置物と希臘壯者の裸體銅像とを備へ、高い欄間に 兩陛下の御眞影（額縁は菊の紋散し）を紫の打紐もて恭しく掲げられてあり、大理石製ストーブの前には鉢植の蘭を置れ、室隅二三脚の雅致ある卓子の上の薩摩燒の大花瓶に朱唇を一ぱいに開いた花柘榴を挿み、安樂椅子、長椅子各々適當の位置に

配置され、秩序整然として良家風の一斑を發表されてあります。前面は廣々した芝生、空に聳ゆる松杉の間から早稻田田圃が一目に見下すべく、颯然と吹き來る東南風に沛然たる猛雨を加へた樣壯絶言はん方なく感じつゝある處へ、金泥に花鳥の貼り交せてある長額を揭げた出入口の神代杉板戸を靜かに推し開いて出で來られし夫人は、鼠地に細かい紺横縞の銘仙の單衣に白絹の襟を僅かに現はし、栗皮繻子と銀鼠繻珍の晝夜帶を小さく結ばれ、濃い御髮を束髮に纏めて眼元の凛とした眉毛の長い威嚴のある御顏、丈の高い肉附の良い立派な御恰幅、犯し難い御資性は一見して判りますが御話調は平易で愛嬌深く長時間の應對に少しも客を外さず、時に警語を雜えて談話に活趣を添えらるゝなど實に人心を收攬するの機智に富める御方と存じ上げました。偖その御話は――

▲赤十字へ御出掛

年寄の事で何の役にも立ちませぬが、此通り鐵で作つたやうに壯健な身體ですから、出來るだけの勤めは致したい積りで、赤十字へも報國會へも出掛けます、斯樣な邊鄙な田舍からは何方へ出るのも不便で人車でも澁谷まで一時間半もかゝり、彼方へ參ると皆樣が最早すらりと列んで居らしつて御氣の毒樣で堪りません、『貴女は一番遠方だから』つて皆樣が仰しやつて下さいますが、私は如何も氣が濟みませんでネ。それで此頃は目白から汽車で參ります。宅を五時半に出まして汽車に乘り澁谷停車塲へ降りると車夫が一人も居らぬ時があります。最初慣れぬ内はそれから何の方へ歩いて行つて宜いか迷ひましてネ、看護服の風呂敷包を抱え御辨當を提げてマゴ〳〵した時の體裁を後で考へると自分ながら可笑しくてなりませんよ。電車で參る時は錦町まで歩いて電車に乘るか、水道町邊から電車までの間を飛び乘りして參るのです。昔から飛乘りした事がなかつたので、今度も最初は勝手が判り兼ねましたが、辻待の車夫に高値を吹き掛けられた時「私共は毎日怠らず出勤して國家の爲に盡して居るのだから汝達も損をしないだけに相當の代を定めて呉れ」と申し

て遣りましたが、それから心付いたと見えて法外の高直を申さぬ様になりました。ハイ何方様も御心持で御出でになりますよ。それに大抵の御家からは御飼馬を御用に御立て遊ばしたので、鍋島様も人車でばかり御通ひになります、年を取ると物忘れを致しまして、唯今も此中日曜の無い事で在宅致しましたから、今日は午後から報國會へ行かうと申しましたので、親族から参つて居る娘に、叔母さん今日は日曜ぢやア御座いませんかと大笑されました、何ですか取込んで日も何も忘れて了つたのです。先達ての水曜日には皇后陛下から御使を赤十字社へ差遣され、會員へ忝い御言葉を傳へさせられ、御菓子を賜はりましたので、一同は御菓子を戴くのが嬉しいのと、御思召の勿體なさに感涙に咽びました。

▲報國婦人會の勤儉

これも皆様の御熱心で大層捗取りまして、結構で御座います。私も宅では孫の着物など始終仕立て〻居りますが、あれは慣れぬ仕事なので、三日ばかりは手先が痛みました。皆様も最初は仕立方に注意の個所があつて御互に尋ね合ふたりなぞ致したので暇取れましたから、一生懸命に致しても漸く一日に一枚位でしたが追々慣れて大層捗取るやうになりました。此會の仕事は素より御報恩の萬分一と存じて始めたのですけれど被服廠では今年の豫算に被服仕立賃がチャンと入つて居て其金の遣り處がないから、矢張り會の方へ御下げになるが會では一先づ其金を頂き、諸雜費を引去つて悉皆恤兵部へ納める規定になつて居ります。何も資本は要らぬやうでも、鋏だとか火熨斗だとか、又は鈕の孔をあける鑿だの裁板だの何だのと隨分か〻りました成るたけ費用は節儉にしたいつて皆様と心配して、先達つてまでは日覆も揃えずに置いた位です。それから仕上のミシン縫に雇ふ職工二人に拂ふ給料がチョットか〻りますが、此程横濱に居る英人の仕立屋夫婦（宮様方の御召物仕立屋）が是非日本の爲めに盡力させて呉れつてミシン縫だけ手傳ふとに爲り、此方から運賃を拂ふて横濱へ送り仕上だけを手傳ふて貰ひます。皆

さん日々の御往復は主に汽車ですから日比谷停留場などでは、車掌が大抵知つて居まして、爾うして善く親切に取扱つて呉れます。

▲御主人の此頃

樺山が戰爭に出ぬのは始めてですから、ソリヤ厳ましう御坐いますと、起臥でも戰地の通りに致しますし、如何程暑い日でも軍服をチャンと着けて居り、保養の爲めの外出は少しも致さず、家内の者共にも却々厳しう申し付けて居るのです。

▲御主人の攝生

早朝より庭で三時間ほど大弓を引くことは一日も缺しません、三十五六間もある的を射まして、此矢を一々拾ひに參りますと、丁度二里ぐらひの運動が出來ます それから軍服に着更えて食事を致すのですが、昔から朝と晩は米を食べません、それと申すのは、西南戰爭の際左の乳房から肩へ通して銃丸を受けて以來、米食は胃につかえ肺を壓し具合が惡い故で御坐います。爾うして十五六年前に一度腦を煩つて橋本國手に酒と煙草を禁められてから全然これを止めて了ひました。私の宅では主人を始め三食の外は何一つ食べぬ習慣ですから、自然身體が壯健なのだらうと存じます。



秋の色（一）

▲讀書が何より

老人の終日の樂みは讀書で、又新刊の書は直に讀むのが好きなのです。伜が又非常な書物好で、澤山に書物を集め、父子嗜好が一致して誠に睦じいので御座います。それで孫迄の試驗の褒美にも何時も書物を遣はせる事になつて居り、孫も亦何より書物を貰ふのを悦んで居ります。

▲令息の幼時教育

私は十九歳の時一人の男兒（愛輔氏）を持つた限りですが、產後八個月目に樺山が出京致した爲め私の手一つで育てましたのですが、私は素より昔の事で教育を受けぬ人間ですけれども、唯だ此一人子の教育に就ては獨り熟々考へ、世の有樣を見ると行くは必ず洋行させねばなるまいと存じて、七歳から英學の塾へ通はせました。其頃鹿兒島あたりでは、未だ之を學ぶ者が少なかつたので、伜は別物の樣にされ、通ふ途中を年長の子供が大手を擴げて通せん坊することがありましたから、私は其子供に向つて『東京から斯樣な解らぬ書物を寄越して伜に讀ませろと言ふので據ろ無く通はせます、何卒此道を通して遣つて下さいと、頼むやうに優しく申したので其後は妨げをしなくなりました。斯うして十歳まで英學の塾へ通はせましたが、出京の頃は大抵な用事は辨じられる樣になりました。鹿兒島では男兒に必ず書齋を與へる風習なので、私宅でも倉を伜の勉強室と致し、農家の子息で縣の學校へ通學する人を泊らせて家庭教師の代りに頼みました。スルト近所の子弟も一緒に學びたいと頼んで參り、全然倉が學校のやうな有樣でした。尚ほ他日出京して西洋人の前へ出た時、卓子の前へ平伏するやうでは殘念だと存じて、卓子と椅子は早くから拵えて、勉強も食事もこれで致させましたが、其頃郷里では未だ誰も其樣な眞似をする者はなかつたから、近所へ内證で椅子卓子を製つた位です、併し後では皆が見て贊成致しましたよ。

▲令息の友愛

餘り幼少から仕付けた爲めに讀書好きに爲り過ぎて、トウ／＼本蟲になつて了ひました。唯だ私は一度も

小言を云はずに育て上げた故か眞直な人間になりまして、朋友を深く愛するのが今でも非常で御坐います。十四歳で洋行致す際にも親友十人ばかりの監督を私に呉れ〴〵も頼んで參つた位で、歸朝後も毎日曜には親友を集めて娛樂を共に致し、此家を建てる時にもこれ丈は私の第一の望みだからと申して邸の周圍に砂利を敷き眞正の運動場を拵へ、年に二回位は新舊大勢の友人を盡く招いで園遊會を催ほし食事を共にするのを何よりの樂みと致して居ります、友人との交際は四十歳の今日でも、丁度子供のやうに無邪氣で御坐いますよ。

▲夫人の學問好き

若い時分から出來もしない癖に好きで〳〵、鹿兒島へ女學校の立つた折、敎授になつて呉れと頼まれましたが、私は女大學で養はれた人間で、迚も文明的の敎授はと斷り、生徒として通ひ始めました處、屋敷者の婦人が通學するのは、一般に忌む國風ですから、宅に居た樺山の叔母が嚴しく申して僅か十日ばかりで止めることになりました。出京致してからも、此念が盛んで、是非洋學を少し修めなければ、伜が歸朝してから餘り趣味思想が違つて、不愉快の念を起すだらうと心配致しましたが、其頃軍人の身分で家庭敎師を聘ぶのも御大層で世間躰も惡いと遠慮致して、小川町の佛英和女學校へ毎日三時間づゝ四年通ひました。イヱ別に何も出來ぬのですが、唯何よりも斯道が熱心なので……、それから段々考へると、最早よい年をして是れから如何程勉強したとて、大した事も出來まい、自分一人僅かの研究をするより、寧そ多勢の學問を助けて見たいと思ひ立ち、丁度戰爭後焦土になつて親兄弟を失つた鹿兒島士族の子弟を十五人ばかり宅へ呼び迎へ、十年間大切に勉強させました。

▲書生の優遇

書生を育てるのは樺山も大好きですから、萬事を擲つて大切に世話致しました。爾うして十年間一度も小言を申したとはありませんでしたが、揃つて品行方正で中學校又は士官學校へ通學致し、日清戰爭に參つた者

もあり、唯今少中尉で出征して居る者もあり、各々立身致しました。宅へ多勢泊きます頃、私は三度の食事を書生と一つ食卓で致し、生物と生水は堅く禁じ、毎朝御飯炊きと一緒に大釜へ一ぱい湯を沸して麥酒の空罎へ詰め、朝飯の時食卓上へズラリと列べて渡しました。知らぬ御方はこれを見て樺山では書生に朝から麥酒を飲ませるつて大笑ひでした。爾うして三度々々温かい御飯を食べさせ、衛生上には十分注意致した故か、十年間一度も醫者の厄介にならずに濟んだのですそれから又伜が西洋へ行くとき、あとを頼んで置いた十人の親友を日曜毎に呼んで宅の書生と共に樣々の面白い遊をさせ、世間の惡い遊びに交らせぬやうに監督致しましたが、誠に性質の善い人ばかりで今は各々立派な學士に成られました。それで私の實子は一人ですが、世話した方達が親同樣に慕つて呉れて、今でも叔父さん叔母さんと申して代る代る尋ねて呉れますから多勢の息子を持つた樣な心持です。又其人達の細君を迎へるのに私共が干渉致す次第ぢやありませんが、悉く媒酌人と云ふ名義で席に坐りました、女の子は十三歳から貰つて育てましたのが、二十一歳になります。これは獨立女學校を卒業して唯今宅に居りますが心だての優しいもので、誠に樂みで御坐います。

▲家僕家婢の取締

私の宅では家僕に年取つた者を使ふのが嫌ひで、極若いのを二人、これに樺山の身の廻りの用向一切を任せて置きます。若い人は心が眞直で用事も却て巧者に取扱ひまする、其他は二十五年も居る馬丁と料理番が一人、下婢が三人で御飯炊は昔から一番役に立つ者を置いて、給料も澤山遣はし、臺所の責任は一切これに任せて干渉致しません。總て僕婢共は各自に責任を分擔させてありますから、毎日指圖せずとも整然と各々の務を盡します。座敷の掃除なぞも、受持で毎月規則正しく致しますのですが、斯ういふ風に責任を分けて置くと、品物を毀した時なぞ、一番よく判りますネ。細々した會計は、二人の若者から女中に渡し、月末に又若者が帳簿を調べて、伜に差し出します。宅の總會

計は伜が悉皆擔當致し、自分の修めた經濟學の法則に依つて帳簿を調べますから、紀律は何時も整然として以前から少しも胡魔化される樣な事は御坐いません。

秋の色（二）



▲勳章と衣服

以前は樺山も出入りの忙しい人でしたから、平生私は勳章箱の中へ一々書付を入れて、如何いふ時には何の勳章と誰にでも判るやうに致して置き、服は外出の時毛布の上へズラリと列べさせ、主人が入用のを取り出すやうに致し、これは若者が一切始末を受持ち、來客其他毎日の用向も私が大躰の監督さへすれば、各々責任を以て働きますから、一言の小言も申さずに濟みまして、自分は身躰に餘裕があるので御坐います。

▲書生旅行

明治何年頃か樺山が洋行致し、私にも來いと申越しましたので、西鄕（從道侯）さんも頻りに御勸め下さいました。私は元から此希望を有つて居りましたが、單だ行つて見物して來るばかりでは何の役にも立たぬ、參る位なら何か習つて國に益のある働きを致したいが、最早年も取つて幾らの研究も出來まいし、且つ伜も洋行中ではあり、親子三人參るのは軍人の身分として相應しからぬ次第だなぞと、二十日は

かりも種々考へて終に止めましたが、今になつて後悔して居りますよ、私が洋行を思ひ立つて居た頃、若し外國へ行つて日本婦人は足弱だと言はれては殘念と存じ、方々書生旅を致しました、奈良、月が瀬、吉野など大和巡りを致したのです。隨分面白う御坐いましたよ。

▲交際

何に致せ私は新らしい教育を受けぬ人間ですから、伜の洋行中も種々と考へました、今に伜が歸つて參つて定めし私の思想の舊いのに呆れ、話し相手にしないのに失望して、自然嫌ふ念が起るだらうから、少しでも外國婦人と交際して思想の進歩を圖りたいと存じ、其頃海軍技師ベルタン氏（佛國人）の夫人と往來を始めましたが、思想に就ても實際に就ても感服するとばかりで御坐いまして、餘程顧みて改良することがありました。私は時として突然正午少し前から其夫人を訪問して晝飯を饗され、不意の來客の饗應は何樣な風に取計らうかと云ふ事を研究しました。又夫人も其通りの考へで來られ、何卒今日は御手製の御馳走を願ひますと、斯う言はるゝ事がありました。

▲禮服の用意

私の家では誰も彼れ是れ衣服の好みなど少しも無いのですが、禮服だけは人樣より先きに急いでチヤンと取揃へなければ氣が濟まぬのが樺山の性質ですから、警視總監になつた時、直に私が御所へ上る時の袴、打着なぞ揃へましたが僅かの内に洋服に變り俄かに之を整へました。其時樺山が「形だけは洋服を着たが心も洋服になつたか」と諷しましたので、小川町の學校へ通つたりなぞ致したのです。

▲令息の結婚式

樺山は家事一切私に任せて、構ひませんから、伜の結婚の儀式も私の取計らひに任せて干渉せぬとの事で、唯だ上と下とを見るな身分相應に考へて致せと申し置き、結婚前に伜と二人で旅行して了ひました。私は以前から日本從來の種々な儀式を書物から拔萃して置くのが好きでしたから、其樣な物を取り出してアチコチ

斟酌致し、自分の考へだけの支度を整へて置きました所が、歸宅致して申分ないと言はれたので、胸がズーツと空きました。

▲琴、活花、茶の湯

私のやうな無風流な者でも音樂は大好きで慈善音樂會へも善く参りますし、國風の琴や三味線を出來もせぬ癖に養女と合せたり致すのが樂みなのです。活花は池の坊、茶の湯は裏千家の方で……ナニ深くは致しませんが、唯だ斯様な事が總て好きなので御坐います。

夫人の御話は百方面に渉り、活氣充滿、興趣横溢、一々後進を裨益するに足るので、蕭々たる疾風、驟雨に和し庭前の杉檜を撼して、凄じき響の硝子戸に當るのも耳に入らぬ位でした。食堂には三四の茶棚に陶製銀製の雅致ある茶器數多配列され、高い欄間に長さ二間位の匾額(大龍)を掲げられ、夫人の御話に黒田清輝氏の、寄贈された古畫であります軈て風雨の稍靜まつた折に、夫人は廣庭の運動場、大弓場、及び書生養成の時に用ゐられた躰操器械などを見せられ、終りに記者の請を容れられて、御夫婦の御部屋、湯殿、御主人の衣服室、御臺所まで御案内下さいましたが、客膳



秋の色(三)

り排通ひ道は隧道のやうに出來、竈の周圍は板の間を廢し煉瓦製として火災を防ぎ、臺所へは諸商人の入らぬやう、又内より出ることを防ぐやう、二間餘の大窓に幅廣き板の臺を設け、銀行會社の受付のやうな仕組にせられてあるのは、御注意の周到なのに感服致しました。

兒玉少將夫人

夫人はつれ子は舊仙臺藩士渡利房(通稱は木村貞吉郎)氏の長女にして文久二年十二月の出生なり十五歳にして今の陸軍少將兒玉德太郎氏に嫁し五男三女を擧ぐ人と爲り快活圓滑にして常に家庭をして和氣洋々たらしむ僕婢を使ふに恩を以てし出入商人に對して驕らず佛を信ずると篤しと云ふ

第一軍の鴨綠江架橋工事は、味方も敵も舌を捲て感歎して居る所でありますが、北工兵部長は陸軍少將兒玉德太郎氏と承つて居ります。同少將の御住居は、紅塵萬丈の街衢を離れた牛込辨天町の高臺で、舟板の黑門、朽木の柱を鬱蒼とした喬木の間に立てられた極閑雅な御邸であります。記者は御門を入つて、松、檜、樅樹、柘榴などを兩側に列植された赤土道を辿つて、鈍色硝子張格子戸の御中ノ口に伺ひ、剝製牡鹿の首を掲げた御玄關を通つて、洋風應接室へ通されました。室の中央に圓卓子と長椅子、及び椅子六七脚を据き、西側の壁にジョンストン氏世界地圖を掛け、南の小壁には湖上の帆舟に兄弟の遊ぶ英國の油繪を掲げてあり、東側には暖室爐、姿見、樹上に集まれる雛鷄の置物など工合よく配列され、北の窓に差し出でた紫陽花は未だ乾かぬ朝露に日光を受けて濃艶愛すべく、長く廣い綠の芝生の中央に枝を廣げた大槲樹の間から早稻田田甫、目白臺などを望み、見渡す限り靑疊の起伏せる趣は壯快言はん方なく、朝からの暑さも忘れたやうな心地が致しました。此時廊下傳ひに出で來られた夫人は、銀鼠色銘仙の輕き單衣に黑繻子と絹更紗の晝夜帶を結ばれ、中肉中背で色白く、ハッキリした雙眸に無限の吸引力を示され、遠山の眉、芙蓉の唇は、確かに御年より六つ七つ御若う見受けられました。夫人は愛想よく椅子を勸められて……。

▲御病後

唯今迄は床を離して居りました所で、取敢へず斯様な躰裁で御目に懸りまして失禮で御坐います、私は四月の末から病氣に罹りまして、一時は倅共や下女まで大心配を致した位でしたが、此頃は大抵快復致し、先日も始めて畑へ出ました處、菜の花が胡瓜や茄子と變つて居るので珍らしい感じが致しました。一躰私は下らぬ事まで氣にかゝる性質で、それが病氣の種だと毎度橋本國手から御注意を受けます。石本の奥様なども彼の通り泰優で御堅健で居らつしやるし、それに御主人の御留守が少ないので尚更御幸福で御坐いまする。

▲留守は多忙

此間も『貴女は御留守中ゆゑ比較的御閑暇でせう』と仰しやつてゞ御坐いましたが、大違ひで留守の爲に比較的忙しいので御坐います。二月二十日に主人が出立致すと、翌日からの大風で垣根は倒れます、私は方々へ御禮に出掛けやうと致す處へ植木屋や大工が參る、ソコで新調も致さねばならず、それも新調すれば宜しいが、成るべく有り合せの材木でと存じて、一日邸の隅々を捜させて間に合せると云ふやうな事で、内外の用事が一度に集つて參る心地が致しました。留守宅を深切様に御尋ね下さる方々は、晝は御忙しいので、多く夜分御出で下さいまして、九時頃御歸りになると、それから帳面を付けたり、日誌を認めたり、新聞の一つも見たりなど致すと、如何しても臥せるのは十二時になります、併し下女は十時に寝ませます。私は身躰が弱い方ゆゑ、平生は七時に起きまして、主人に朝寝を笑はれて居ましたが、留守になると、五時には乾度目が覺めます、幾分か心遣が多いせいだと存じますよ。

▲少將の御手紙

鴨緑江の戰勝の折にも、『世間では作戰計畫に就て、種々功績のあるやうに評判されて赤面の至りだ、全く工兵の一通ならぬ骨折と諸將士の力で勝利を得たのだから、家内の者迄も左様心得て、決して驕る心を持つてはならぬ』と、堅く戒めて申し越しました。ハイ此頃は〇〇〇まで前進致して居るさうで、『當地は溪澗の流

れが調つて飲物が極宜しいから、病兵も出來ず幸福であるけれども、大孤山上陸軍の方々は如何程難儀されてゐるかと心を痛めて居ると書いて御坐いました。宅は食物を香らぬ方ですが、品數の多いのが好きで、平生は御肴を三種に野菜を二種位列べて居るのです。併し戰地へ參つて以來、旦那樣は益々壯健で平生よりは食量が一椀づゝ增したから、御安心なさいましと從者が申越しました。彼地へ參る食品の內では、鰹節が何より結構なので、他の鹽魚は色が變つて味が惡いさうで御座ますする。先達ても、欲しい〳〵シラス干が欲しいつて申越しましたので、一貫目ほど送りましたが、一人で食べるのは嫌ひな人ですから、皆樣に分けて、二三日間に全然無くなつたさうで御坐います。戰地の事を思へば家內中粗食を致さねばならぬのですが、子供が不健康ですから、餘儀なく滋養食を取らねばならず。隨分心苦しいので御坐います。ですから食事の度に御父樣や皆樣の事を思ふて勿躰ないと云ふ考で頂くが宜いと子供達に申し聞かせます。

▲出陣の御見送り

出立の際には新橋まで御見送りになるか如何か、○○樣へ電話で伺つては如何だと宅で申しましたが、私は此玄關から御出立を御見送りする事は何としても出來ぬと決心致して居ますから、餘所樣は如何でも私だけは停車場へ參り、萬歲でも唱へたいから、御問合せは致さずに停車場まで御見送り致しますと申して出向きました。皆樣の御勇しい御出陣を拜見致しては、心も引き立ちまして、一日も早く御凱旋あるやう祈らぬ日は御坐いません。

▲令息の目的

長男は小さい內に亡くなり、長女は昨年十八歲でとられました。それで唯今は四人の男兒と二人の女子とが御坐いますが、次男は勉強が過ぎた爲か腦を惡く致しましたから、商人にならせやうと思つて商家へ遣つて居ります。元來凝り性で試驗前になると、夜分一時二時頃まで勉強致しますから、嚴しく申しました處、自分の部屋と定めてある玄關脇の四疊半の硝子窓へ何時

の間にか護符を貼つて夜を通して居りました。最初は私も心付きませんでしたが、夜半に何だか人の起きて居る氣配がするので、椽の戸を開けて見ても向側の部屋は眞暗ですから安心して寢ましたが、毎夜如何も可笑しいと存じて、或時不意に部屋を開けて見ますと、中で一生懸命に勉強して居つたので其時大層謝りましたが、氣の毒にも存じまして手……嗚呼腦さへ堅固なら本人も親も斯様な心配を致さぬものをと熟々歎息致し、寧そ農學が宜からうと言ふので、暫く之を致させましたが、御承知の通り實習は僅かの時間で矢張り學問の方が主ですから止めさせました。近頃は自分でも、學問は身躰に適はぬと斷念めて方向を改め、一昨年から商業に志し唐物店へ實地研究に參つた次第です。商業に目的を變へた當分は私も何ですか軍人の子として恥かしいやうな心地が致し、私の母などは駕籠で外出した屋敷風の拔けぬ武家氣質ですから大層厭がりましたけれど、善く〳〵考へて見れば、身躰に適つた道で、働くのは矢張り御國の爲めになるのですから、歸らめて居ります。次男も幼年から學問好きで、早稲田中學の先生にも愛された位でしたが、讀書すると後頭部が痛むので、當人も寧そ學問は止めて貿易事業を致したいと申し、鐵商になつて一奮發致す筈なのです。

▲少將の性格

以前は唯今と違ひ、進級には檢閲が御坐いました。宅が大尉から少佐に進まうと云ふ檢閲前の事でしたが、深更まで調べ物を致し、晝間も子供がうるさいなど、嚴ましく申しましたが、其頃は生活も未だ裕でなく、四室程の狹い家に腕白盛りの男兒が多勢で、イクラ靜かにと申しても制し切れず、困り果てまして、丁度招魂社が近う御坐いましたから、私は毎日〳〵雨が降つても御辨當を持つて子供を引き連れ招魂社の社殿へ行つて居りました、其様な具合で主人が子供の世話を燒くとは稀でしたから、子供も亦懷きませんでしたが、近頃は全然變つて大層子供を可愛がり、善く世話を致しますので、子供も父を慕ふやうに爲り、戲談を申しては父を笑はせたり致します。八歳の孃は至つて剽輕

者で、或時「御父樣頭が大分禿げました、胡麻を召し上がつたら治りませう」と書いて父に見せましたが、父もこれが汝の作文かと言つて大笑ひ致したのです。主人は碁が好きで、對手のない時は、忙しい私とでも圍みます。歌留多なども大好で、お正月には小供と一緒に百人一首の大合戰を致し、子供の手から血を出したりなど致します、何でも遊び事を致すのに宛然子供のやうに熱心になります。又方々から種子や苗を取寄せて、苺や桃などを育て、役所から歸つて參ると、後園へ出ては其世話を致して樂んで居るのですよ。

▲夫人の嗜好

私は女の癖に芝居が嫌ひで、相撲が大好で御坐います。招魂社の相撲など見たくつて堪りませんで參りましたが、婦人の方は一人も御出がないので、キマリが惡いとがありました。ハイ唯だモー取組んだ勇しい樣が面白くてならないのです。私共の庭は御覧の通り石を一個も置かぬ芝生ですから、何樣な遊びを致しても危氣がありませぬので、時々子供同志の角力を取らせ、主人や私が代る〲行司になるのですが、隨分面白う御坐いますよ。肥つた下女などまで仲間に引張り出して、家内中大笑ひ致します。私の家は下女下男も主人と一緒に遊んで、何時も笑つてばかり暮しますから、近所で兒玉さんの御笑ひ邸と綽號を付られる位です。ハイ擊劍も始終子供が此處で稽古致しますし、幼少のも幼稚園へは遣はさず。一日庭で蟬取などさせて遊はせて置きます。如何も幼稚園は自然競爭心を起して、身躰に障ると存じますから……。

▲競馬

北海道に居つた頃は、隨分競馬に夢中に爲りました。私宅の飼馬に「谷の雪」と云ふのがあつて、何時の競馬にも二等より下つたとは御坐いませんでした。自分の馬の出る時は、見物して居ても氣が揉めます事、或時の競馬に「谷の雪」が騎手の乘らぬ内に獨りで二里の馬場を廻つて來たので、疲れてるから迚も駄目だと思ひましたが、僅か五六尺の差で二等を取りました。競馬は實に烈しい面白いもので、騎手の意氣込は大層な

事です、何うして馬丁が又一通りの競爭ぢやア御坐いませんネ、競馬前には夜もロク〳〵寐ずに馬を大切に養ひ、生卵を飮ませたり、五四位の上茶を飼葉に雜せて食べさせたり致しますが、此上茶は大層馬の勢を増す物ださうです。今申した「谷の雪」は葦毛でしたので年を取ると眞白になりますから、從軍の時など敵軍の目に觸れ易く、軍馬に用ゐられぬので、宅で種々工夫して毛を染めて見ましたが、十日も經つと白毛が下から出て來て矢張り可けませんから、他の二頭を東京へ連れて參り、「谷の雪」は彼地へ殘して置きました。



秋の色（四）

▲妙齢時代の馬好き

斯樣な御話を致すとお轉婆のやうですが、國に居た十一二歳の頃は、母親に隱れて馬場へ參り、借馬に乘り習ひました、此方へ嫁してからも、主人が不在で馬の張る折なぞ馬場を一廻りぐらゐ乘つたとも御坐いました。私はあの横乘は出來ないので御坐いますよ、イエ近頃は少しも乘りませぬが、時々飼葉位つけて遣ります。馬を取扱かふ時に少しでも恐いと思つて居ると、直ぐ馬鹿に致しますネ、日外私が手綱を持つて居ながら、「昔は馬が大好きで乘つたが、今は幾分は恐い心持もある」と思つて居りました處、俄

かに馬が飛び上つたので、私は手綱を排つたまゝ一間ばかり跳ね飛ばされました。本當に人の氣を善く知つてる者です。

▲夫人の氣轉

飯田町に住つて居た頃、主人が宿直の夜でした、一疋の馬が馬小屋でドシ〳〵暴れ出しましたので、急病でも起つたのかと存じ、種々氣を揉みましたが、提灯を點して能く〳〵見ると、如何も飼桶の繩が足に纏まつて倒れて居るやうでした。私は側へ寄つて解くには暴れて居るから危いと思ひ、捨て置けば小屋を壞すだらうと思ひ、途方に暮れて居ましたが、漸く思ひ付いて斯う致しました。それは竹竿の先へ出刄庖丁を結び付け、飼桶の繩を切つて遣つたのです。スルト今まで悶いて居つた馬が、忽ち靜まつて了ひました。

▲信佛

主人は神佛を信ずるのは大嫌ひで御坐いますが、私も目白の雲照律師の戒を受けまして、時々書話會へも出掛けます。子供を失ひましても、佛法の爲に心を慰められますし、下婢を使ふにも、幾分か違うと見えまして、『奥さんの御小言はホンの一時で後が淸々として居る』と下婢が申すのです。それで私も『誰も子の可愛いのは同じことだ、汝達も境遇で此家へ奉公して居るもの丶、親達の心を思へば一人も粗末には出來ない、私は我子も同じやうに思つて居る、併し私達の食べる物を殘らず汝達に食べさせると云ふ次第には行かないよ』と申しまして、終に大笑ひになりました。

▲新聞雜誌

新聞は何樣な忙しい時でも、皆見なけりや氣が濟まぬ方で、雜誌も子供達の見て居る戰時畫報、其他種々な物を見ますが、小說は餘り讀まぬ方で御坐います。

▲夫人の特志　澁谷豫備病院に勤務中なる英國特志看護婦リチャードソン夫人は米國特志看護婦の團体と異り一切の費用は總て自辨なるのみならず既に赤十字社救護費中へ百圓宛を二回、特志看護婦人會へ五十圓を寄附し公務の餘暇には傷病者の慰問をなし居たるが昨日も亦金百圓を赤十字社に寄贈したり何故に夫人は斯くも金額を小さくきざみて寄附するやと云ふに一時に多額を寄附すれば新聞雜誌記事の材料となり種々なる方面より來訪者ありてそれが爲め餘計な暇を費し公務を怠りては傷病者に對してすまぬゆゑ可成目立ぬやう寄贈なす者なりと。

婦女雜觀

巖谷小波

▲婦人の力

柔よく剛を制すとは、昔から云ふ事で。六尺有髯男子の力も、時には婦人に敵はぬ事がある、が、その所謂る力なるものが、男子の側と婦人の側と、元より其性質を異にして居るのだ。

思ふに男子の力は、物に譬れば風である、之に對して婦人の力は、その風に吹かれる木である。風は木を吹き倒さうとする、木は風を彈ね反へさうとする。男子の力は動的である。婦人の力は靜的である。動的の力はよく人の目に觸れるが、靜的の力は一向目に立たない、所がその動的なるものは、疲れる事もまゝ早く靜的の力は遂に衰へる事が無い。此故に男子の力は、動もすれば一時的であるが、婦人の力は概して永續する、彼のイソップの物語にある、兎と龜の競爭は、やがて兩者の比較にも似て居るではないか。

例へば軍國の今日、男子はその力を外に致して、海に陸に、已に偉大の功績を現はせば、婦人は病兵看護に、遺族慰問に、將た軍人援護に、専ら力を内に致して、此亦少からぬ働きをして居る。此れ共に其の當を得て居る事は、今更云ふ迄もない話であるが、所謂臥薪嘗膽、勤儉尚武の實を擧げ、よく軍國の家庭を、その双肩に負つて立つて、千難を排し、萬苦に耐へるの力は、之を婦人に求めるより他は無いのである。而もわが日本婦人は、之に要するの力を、已に養ひ得て十分なる事、余は玆に敢て信じ度いと思ふ。

▲強い國民の母

凡そ世界初まつて以來、我が日本人ほど強い國民がまた何所の國にあらうかとは、今や決して輕忽な嘆賞とは云へぬ事と成つた。

抑も日本國民は、何うしてかく強いのであらうか、

體格から云つて見れば、幕の内と三段目ほども違ひ、智識の上から云つて見ても、決して下級生とは認められぬ今度の敵手に向つてすらも、尚且つ斯の如き勝利を得る事、不思議と云へば不思議で、成る程天祐とじか思はれない様だ。

然り、更によく考へて見ると、是は別に不思議は無いので、天祐だの神助だのと謂たる無形物を擔ぎ出すのは、寧ろ自ら侮つた話である。さらば何うしてかう勝つか？他でもない、わが日本國民には、一種獨特の氣概があるからだ。

由來わが日本國民は、上に萬世一系の君主を戴いて居る。神儒耶佛、何れの教にも割合に不熱心な國民も天子・天皇陛下　上御一人に對しては、殆んど萬口一致の萬歳を唱へて、之に神佛以上の尊敬を奉り、その命を賜ふ所は、水火の中をも辭せすして進むと云ふ、絶大の渇仰心を有して居る。是れなまなかの宗教心の徒に未來を頼み、極樂を夢む類に比して、更に勇氣に富む所以である。

於是乎、その強い國民を產んだ、わが日本婦人たる者も、大いにその鼻を高くして可なる譯だ。が、凡そ國民たる者は、只強い計りでは濟まない。強い國民は智のある國民、また道を知る國民ならねば成らぬ。されば其の母たる者も、只その子の強いを以て、直ちに誇る事は出來まい。即ち之に智を與へ、之に道を教へねば成らぬ。而して此等を子に備へさせるには、己れまで之を備へねば成らぬ事に成る。して見るとわが日本婦人も、その任やまた重い哉では無いか。

▲遠慮は損慮

さらでだに消極主義の婦人を捕へて、内輪、〻、ひかへ目の習慣を養ひ、之をその美德とした時代は、思ふにもう過ぎ去つたと思ふ。

謙遜・會釋、遠慮、成る程此等は美德である。が、過ぎたるは猶及ばざるが如しで、畢竟程度の問題、而もその程度なる物が、時代に依つて多少變はる事も、決して忘れては成らぬのである。昔は三度の辭儀も、

ちと窮屈であつたものが、今ではもう丁寧な方に成つた。これはほんの例に過ぎないが、其他の事でも昔と今とは、大いに處世法を變へねば成らぬ事がある。然るに今の人を律するのに、猶昔の法を以てするものは決して當を得たものとは云へまい。

婦人の差し出過ぎるのは、元より感服せぬ事であるが、さりとて遠慮過ぎるのも、あまり褒めた話で無いばかりか、却つて大いに損であり、甚しきに至つては意外の禍を釀さぬとも限らぬ。

彼の姑と嫁との不和、繼母と繼子の不折合は、随分世間に有りさうの話だが、此の原因の多くは、双方意地張の衝突よりも、却つて互ひの遠慮にある様だ。之が他人の寄合だけに、つひ物事に遠慮が出る。遠慮が出ると水臭く成る。水臭く成ると不平が起る。するとその不平が、正面から訴へられないで、動もすれば裏面、側面、即ち當の相手より、赤の他人に洩らされる。それがまた當人に聞える、すると聞いた當人達は、これを直接に耳にしたより、更に氣まづく成る、癪に障る。於是遂に互ひの不和と成り、不折合と成つてしまふ、これが概しての順序らしい。これを思へば遠慮ほど、眞につまらぬ物は無いので、短氣が損氣である如く、遠慮は實に損慮である。

▲金錢の事

金は使ふ爲めの金で、溜める爲の金ではない。が、之を強ひて溜めるのは、他日之を使ふが爲めで、畢竟使ふにも溜めるにも、金たる者の性質をよく知つて居れば、決して誤は無い筈である。

然るに世間には、着る爲めの衣服をすら、折角仕立てておいて、簞笥の底に疊み込め一度も手を通さないでしまふ人さへあるものを况して金を溜めばなしにして、遂に使ふ事を知らぬ者のあるのも、或は不思議でないかも知れぬ。

目下軍國多事、勤儉貯蓄を奬勵する結果は、萬事を消極主義にして、金は溜める一方、使ふ事は一切せず、物に打たれて蝸牛の様に成る者が、存外少から

ぬ様である。否、それもまづ可しとして、更にまた樂じられる事がある。凡そ急に萎縮した物は、また俄かに膨脹する戰時に極端の勤儉をやつた代りに、他日凱旋の曉に際して、忽ち驕奢の反動を呈する様では、蓋し由々敷大事ではあるまいか。

使ふも、溜めるも、人の爲めで、金の爲めでは無いそれを、金の爲めに金を溜めて、人の爲めに金を使ふのを忘れるとは、沙汰の限りと云ふ可きであらう。

然し、茲に戒むべきは、借金なるものである。尤も借金に三種あつて、信用借、抵當借、及び高利借に別れて居るが、前の二種は、社會經濟の融通上、決して妨無としても、第三の高利借に至つては、殆んど結核性の害毒を有し。一度それに染みたが最後、病は全身に蔓延して、遂には四肢の自由さへ奪はれる。恐いかな〳〵！

▲看護の心得

病人の看護をし、若くは之を見舞ふに當つて、その病源を聞き、これが病者の不心得からでもあると、口を極めてその非を説く人があるが、これはその當人達こそ、大きな心得違と云はねばならぬ。

さなきだに病のある體は、精神も共に弱つて居る。その弱點に乘じて、更にこれに不快の念を起させる樣な、小言や意見を加へるのは、看護や見舞に成る所か却つて病を助長する樣なものだ。

子が食ひ過ぎて腹を痛めると、『それ見た事か、私の云ふ事を聞かないからだ』とか、夫が風邪でも引いて歸へると、『だからあれほど云ひましたのに、薄着をなさるから惡いのです』などゝは、人の母たり、妻たる者の、いひ云ひ度く成る事だが、それを聞かされる子や夫のその耳の痛さ、なか〳〵腹や頭の痛さどころでは無いましてやその一言無いに乘じて、又しても〳〵此小言を繰り返へされるに至つては、殆んどその苦に耐へぬものである。

總じて病氣に成る者も、誰が好きこのんで成る者か

あらう。不心得にもせよ、輕卒にもせよ、それは病に成るに及んで、我まづ心付いて、私かに後悔するものだ。もしまた心付かぬ時は、これを云うて聞かせるのに、自づから法があらうでは無いか。言葉やさしく、腑に落ちる樣に云ふか、それとも病が癒へてから、ちつくりと後來を戒めるか、何れにしても病人その者の心を苦しめぬ樣にするがよい。

腹の痛く成つた子を、叱つた所で痛さが減るでは無く、風邪を引いてしまつた夫に、意見をしたとて風邪が拔けるでも無い、それよりも、食過ぎさせず、薄着させぬ樣に、豫め意を用ゆるに如かずた。

▲女の愛嬌

一寸人の家を訪問しても、居心の好い家と、惡い家とがある。必しも厚遇をうけないで、何となく居心が好く、頻りに御馳走をされても、何だか尻の落付かぬ事がある。それは何に原因するのであらう？

思ふにこれは主人公の德不德による事であるが、それと同時に細君の愛想不愛想も、大いに與つて力がある。

所詮女に愛嬌の無いのは、花に色の無い樣なものでそれも彼の白梅の如く、他に香氣でもあれば兎も角、左無くばあまり難有いもので無い。

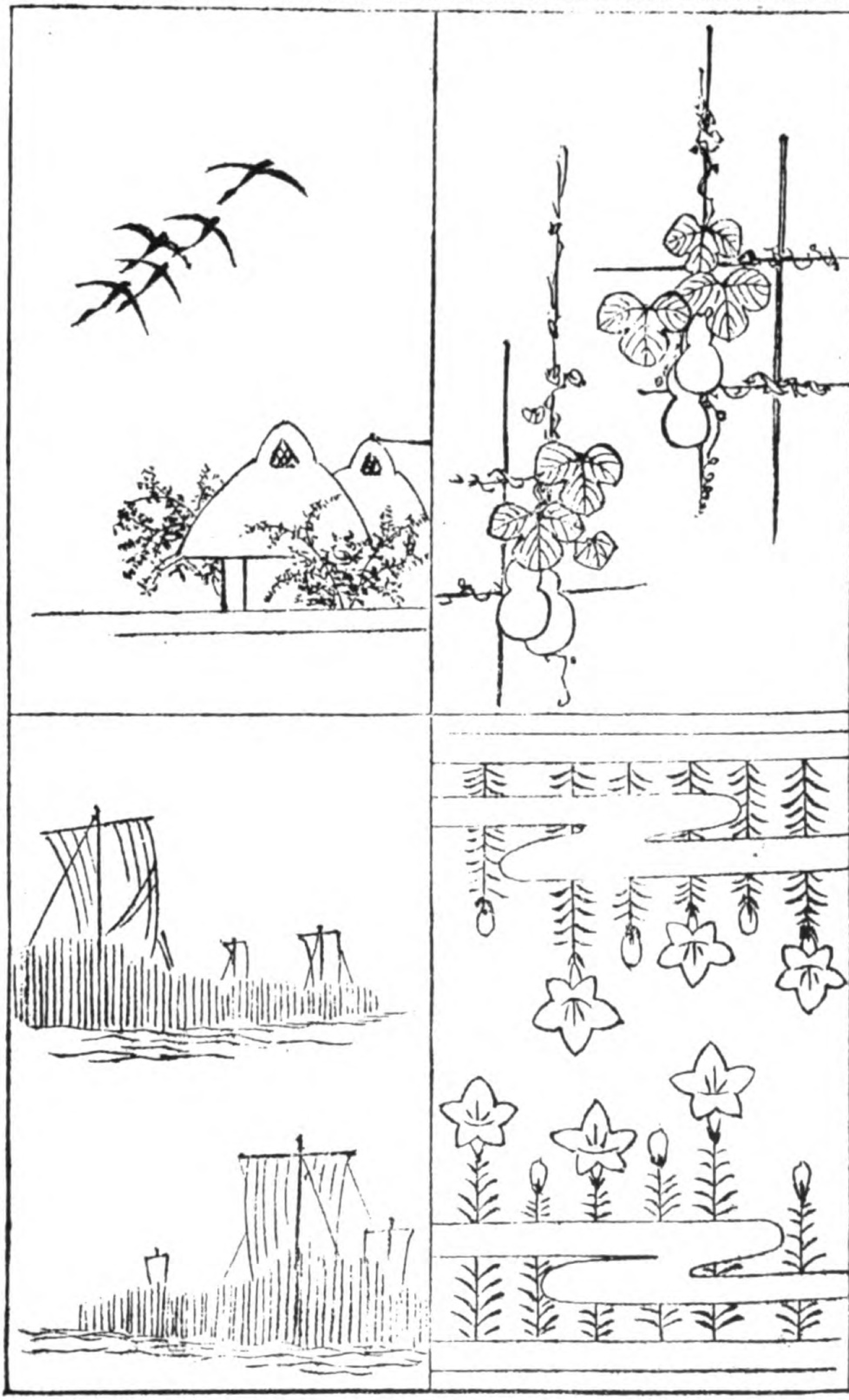
さりとて愛嬌過ぎるのは、躑躅の花の赤過ぎるより却つて日に倦ましく、更に紫陽花の變り易きが如く、所謂る機嫌買ひなる者と來ては、殆んど仕末に了へないのである。

●●●●●●●●將官の初任官名

我陸軍大中將中に士官學校出身者少なくして少將以下に多きは時勢の然らしむる所なるも今數年にして大中將共士官學校出の將官を以て充たさるべきより左に各將軍の初任官名を擧ぐれば左の如し

山縣	大將	明治五年三月中將
野津	大將	同　四年七月少佐
桂	大將	同　七年一月大尉
奧	大將	同　五年四月大尉
長谷川	大將	同四年十二月大尉
兒玉	大將	同四年四月准少尉
小川	中將	同　五年七月少尉
大島	中將(義昌)	同四年十一月大尉
大迫	中將	同　四年七月中尉
立見	中將	同　十年六月少佐
井上	中將	同　四年五月大尉
大山	大將	同四年七月大佐
佐久間	大將	同五年四月大尉
黒木	大將	同四年七月大尉
岡澤	大將	同四年六月准中尉
西	大將	同四年七月中尉
山口	大將	同四年八月少尉
川村	中將	同五年七月少尉
大島	中將(久直)	同四年三月中尉
貞愛親王		同八年一月中尉
寺內	中將	同四年八月少尉
大久保	中將	同四年十月少尉

秋の色（季節もよう）



家庭月令

九月——小——長月

（一日）二百十日……農家の厄日。（五日）二十六夜……諸人高丘に登りて月出を待つ「秋涼し二十六夜の月の色」で。（九日）重陽……菊の節句と称し、栗飯を炊ぐ。（十五日）東京神田明神祭。（二十三日）秋季皇霊祭。（二十四日）十五夜……すゝき、団子枝豆なんどを捧げて観月の宴を張る。

（気節）「白露」「秋分」、金風颯々、気温漸く降下して秋冷を催し南風は徐々に北風を交へ、強烈なる暴風雨の襲来あり、此の月下旬北海道に初霜現はれ、富士山上に初雪を見るを常とす。

（農事）大根、小蕪、天王寺蕪、油菜、水菜、芥菜、牛蒡、花椰菜の播種、作物手入の施肥、胡麻、綿花、陸稲、早稲、玉蜀黍、甘藷の収穫、蚕卵孵化の好季節なり。

（園芸）秋意漸く深く楓の色のサビたるを賞する頃となる、日本蘭、楓、椿、梅、躑躅、柘榴、木犀、芍薬等の植替、桃、梨子、牡丹などの接木、水仙、福寿草、撫子花等の根分をするに適す。

（食品）蓮根のクルミ和へ、栗のうまに、銀杏のヒウキ寄せ、鮎の甘露煮、ボラ、カマス、桃、梨子、棗、葡萄。

（行楽）此月見るものは月、萩、秋の七草、聴くものは松虫、こほろぎ、水村の牧笛、海浜にては鯊釣、鱸釣、ボラ釣、投網、其他は何とはなき漫ろ歩き亦た妙なり。

（名所）月によきは江州石山、京都鴨川、嵐山、東京隅田川、愛宕山。萩によきは亀井戸、麻布仙花園。七草は向島百花園、虫の音は道灌山、日暮里、関口。

（日曜日）四日、十一日、十八日、廿五日、（祭日）二十三日。



新世帯の經營（下）

寺田勇吉

▲公正の氣風

一家に於ける公正の氣風は、一家の和親協同を維持する要素なり、夫婦の間、親子の間、主人と婢僕との間、又此等相互の間に於て、所謂陰日向なるものなからしめよ、婢僕は主人の前に於てのみ立ち働く様を示し、主人の監視を脱すれば忽ち安逸を貪り妻は夫に謀らずして子女の爲に美服を調へ、夫は外出中妻に披露し難き行爲を敢てし、子女は自己の過失を陰蔽して譴責を免れんと謀るが如き有様にては、一家の和合繁榮は到底望むべからず、而して一家をして此の如き陰日向の行爲なからしむるは夫婦の間に秘密なきより始めざるべからず、吾輩は外出先及び歸宅時刻は必ず妻に告げ、若し外出先にて變更したるときは、更に其の旨を電話にて通知するを例とせり、又外出先にて宿泊すること勿れ、遠方への旅行にあらざるよりは、縱令深更に至るとも歸宅するは豈に妻子に對する夫たるものゝ義務にあらずや。

▲一家の秩序

秩序は一家の整理上最も重要なる條件にして、秩序の保たるゝと否とは一家の整理不整理の分岐點なりと知るべし、弟の兄に從ひ、妹の姉に服するは長幼の秩序にして、兄弟姉妹が兩親に孝なるは親子の秩序なり、書籍を番號に從て書架に陳列し、衣服を一定の簞笥より出納し、鋏、尺度、火熨斗、針、糸卷等をして各裁縫道具相當の位置に在らしむるは器物の秩序なり、凡そ事と物とに論なく、各其の秩序を紊さず、常に井然たらしむるは齊家の要務にして、之を何事も遺放し

に、規則の存することなく各自我儘勝手にして紀律に服從することを知らざるに比すれば、孰れか能く世帶を整理し得べきやは必ずしも多言を要せざるべし、新世帶經營の根本は實に秩序の建設、及び其の維持に在りと知るべし。

▲洋服の取扱

日々着用する洋服は一定の場所に懸け置き、着用の際刷毛にて塵埃を拂ふべし、和服同樣に折目正しく疊み置くは宜しからず、夏冬の更衣に際しては特に相當の掃除を加へ、塵埃を去り、汚垢を除きたる後藏置するを善とす、總て衣服類は手入を爲すと之を怠るとに依て保存上に尠からざる影響を及ぼすものなり。



▲通學がへり（二）

▲獨立心と依賴心

幼兒は豫想外に獨立心に富み自治心を有するものなれば、成るべく、此の氣質を利用し、幼時より自己に屬する用務は他人に依賴せず自己の手を以て處分するの習慣を養成すること肝要なり玩弄品の出納、衣服の着替、朝夕の夜具類の出納、靴の掃除、學校行の準備等、體力と智力とに應じて成るべく自身に之を爲さしめ父母は唯其の及ばざる所を補助するに止むるを善とす、若し幼兒の年齡を加ふるにも拘はらず依然として兩親の之に干渉するとき

は遂に本來の獨立自治の氣象を消長せしめ、何事を爲すにも他人に依賴するの心を生ずるに至らん、彼の車夫をして靴の紐を結ばしめ、又靴を脱せしむるを以て誇と爲す者の如きは、畢竟依賴心の增長したる怠惰漢のみ、獨力我事を處分せんと欲する者の羨望すべきにはあらざるなり。

▲一家の取締

夜は老幼及び婢僕等を先に就眠せしめ、主人夫妻は家内一般の取締に注意したる後、就眠すべし、殊に門戸の閉鎖若くは火元の用心等に關する取締は、婢僕のみに任せ置くべからず、彼等の取締りたる跡を主人夫婦の內にて必ず一應見廻はり手落なきや否やを注意すること肝要なり、世間往々戸締を忘れ、火元を粗にし盜難火災等に罹るもの尠からず、婢僕の怠慢に由ると雖も、畢竟夫妻の注意の足らざるの致す所なり、戒めざるべけんや。

▲厨の整理

厨は飲食の調理場なれば常に清潔を保たしめざるべからず、器物は一定の場所に藏せられざるべからず、米穀野菜肉類を始め燃料及び給水等に至るまで不經濟の所爲あるべからず、厨は專ら妻の管理する所なれば、其の整理せらるゝと否とは以て家婦が一家整理の能力如何を卜するに足るものあり、注意せざるべけんや。

▲厠の清潔

厠は每日必ず掃除すべし、殊に幼兒の多き家にては過て汚すことなしとも限らざれば、一層掃除に注意せざるべからず、不潔の場所をして清潔ならしむるは則ち一家清潔の行屆けるを示すものにして、厠の清潔不潔は以て一家の清潔如何を卜するに足れり。

▲衞生の要旨

衣食住と密接の關係あるは衞生上の注意なり、凡そ衞生上の要旨は疾病の起りたる後始めて治療を加ふるにあらずして疾病の起らざるに先ち能く之を豫防するに在り、新世帶に於ては殊に兒童の健康に注意し、其の疾病を豫防せざるべからず、兒童若し風邪に犯され、下痢を催し、腫物を生じ、眼病耳病齒痛等に罹ること

あらん乎、決して素人療治を爲すべからず又賣藥に依賴すべからず、必ず相當の醫師に診察を求むべし、診察料の高きに驚くこと勿れ、診察料の低きときは却て多額の藥價を拂はざるべからざることあり、加之往往疾病の診斷を誤らし、治療の時期を失し遂に生命に關する危險をも生ずることなきを保せざればなり。

▲清潔の勵行

室内の掃除衣服の洗濯を始として身体の清潔を重じ、皮膚は毎朝冷水を以て摩擦し、襯衣は少くとも毎週一回土曜日に於て取換ふるを可とす、寢衣寢具類は晴天毎に日光に晒すべし、必ず煩勞を厭ふ勿れ、日光は一種の消毒藥にして病毒撲滅の力を有す、能く清潔を守るときは身体の健全を助くるのみならず傳染性病毒を豫防するの効亦決して淺少ならざるなり。



▲避暑がへり（二）

▲飲食の注意

一日三回の飲食は時刻を定めて之を爲すべし、日々の都合に依り或は早く或は遲くすること勿れ、我國にては兒童と大人とに論なく兎角間食を爲す習慣あれども間食は腸胃を害すること甚しきものなれば嚴に之を禁せざるべからず、又我國に於ては夫のみ美味を食し、

卓は粗食に甘ずるの風あり、是れ家婦が儉素を守るより生ずる習慣にして、或は美德なりと稱するものあれども、吾輩は餘り奬勵すべき良風と信ずること能はず。吾輩の所見に依れば夫婦は其の精神上及び肉體上に於て、同一の食糧を取るにあらざれば双方の間に完全なる調和を得難きものなれば、夫婦の飲食は必ず同等ならざるべからずと信ずるなり、而して三食中晩食を以て主と爲し、美味佳肴を陳列するには及ばざれども、成るべく滋養品を選擇すべし、滋養品なればとて必ずしも高價を要するものにあらず、豆腐は其の價、比較的廉なれども其の滋養分を人身に供給するは殆ど鷄卵に讓らざるが如し、又夫若し外出先にて臨時晩食を爲す必要の起りたる場合に於ては、豫め其の旨を電話等にて自宅へ通報するを善とす、無用の準備を爲さゝらしめんが爲なり、又我國にては常に茶を煎じ置き、閑暇あれば則ち茶を飲むの弊あれども、是は衛生上にも宜しからず、又間食を誘起する媒ともなるものなれば、成るべく斯る習慣に染まざるを善とす、又食後は必ず清水を以て口腔を滌ぐべし、吾輩は明治十二年甲斐國に人別調の際、山梨縣へ出張し客舍に滯在中始て此の有益を悟り、爾來之を實行すること二十五年、齒牙の保存上其の利益の尠からざるを實驗せり。

▲運動の効能

運動は身體の健康を保つに缺くべからざる最も有効なるものなり、運動とて必ずしも徒手若くは器械の體操を爲すに及ばず、近距離へ往復するにも人力車に乘るが如き惰弱の習慣を改むるより始むべし、吾輩は平素動物の虐待すら防止するの必要ありと信ずるが故に車夫を疾走せしめ、滿身流汗淋漓たらしむるが如きは實に見るに忍びざるを以て、人力車には萬已を得ざるの外は成るべく乘らざるの主義を取れり、近來は交通機關漸次整備を告げ到る所汽車若くは電車の便あれども、遠距離へ行くの外官廳若くは會社工場等への通勤には、成るべく之に乘るを避け自己の足を勞するを可とす、日々一里程を往復するは身體の健全を保つに必要なればなり、又日曜日の午後は成るべく家族一同

にて或は郊外へ散歩し、或は遊戯を公園に試むべし、一週間に疲勞したる神身を慰安し元氣を恢復するの効尠からざるなり。

▲幼稚園の選擇

幼兒既に滿三歳に達すれば、幼稚園に入らしむるは中等以上の社會に於ける近來の流行なれども、其の得失は宜しく熟考せざるべからず、幼兒の學齡に達する迄は家庭に於て保育するに若くはなし、然れども若し家庭に於て保育する能はざる事情あり、幼稚園へ入らしむるの必要あらば、十分に其の幼稚園を選擇すべし、蓋し我國の幼稚園は近來稍々發達したりと雖も、其の保育方法未だ宜しきを得ず、往々幼稚園の本旨を誤り小學校敎育の初歩を授くるものあり、之が爲に幼兒の身體の發育を害し、身體を虚弱ならしむるの弊あればなり。

▲寄宿舍の得失

小學若くは中學時代の生徒を學校の寄宿舍に寄宿せしむるの得失如何も、篤と熟考するを要す、寄宿舍は如何程注意の行屆きたる處にても、隔靴搔痒の遺憾なきにあらず、然れば成るべくは寄宿舍へ寄宿せしむるを避けて、兩親の膝下より通學せしむるを善とす、若し道路其の他已を得ざる事情の爲め寄宿せしむるときは少くとも毎週一回は歸宅せしめ、其の精神上及び身體上の模樣を監視せんことを要す、善良なる寄宿舍には相當の監督者ありて、寄宿生の精神上及び身體上の監視を爲すを怠らざるべしと雖も、監督者は一兩名なるに監督せらるゝ寄宿生は少きも三四十名多きは數百名に達するものあり、從て生徒中精神上若くは身體上の缺點、殊に疾病に罹る者ありとも、之を發見する迄には多少の時日を經過するを要す、即ち病勢其の歩を進め、一見病症の明に認めらるゝに至らざれば監督者の眼に映せざるなり、之を父母が朝夕慈眼を以て其の膝下に於ける少きは一二名、多きも八九名に過ぎざる兒童を監視するに比すれば、行屆かざるも固より深く咎むべきにあらざれば、已を得ざる事情の存せざる限成る可くは、寄宿舍に入らしめざる方得策ならんと信

するなり。

▲學校の參觀

兒童の教育は元來家庭に於て施すべきものにして、學校は僅に家庭教育を補ふに過ぎざるなり、然るに世人多くは幼稚園若くは學校を以て、教育上萬能力を有するものと信じ、兒童は幼稚園に託し、更に進て學校へ入らしむれば夫にて十分に教育せらるゝものと思ふは大なる誤解なり、故に兩親は時々子女の幼稚園又は學校を訪問して、其の如何に教育せらるゝやを觀察すべし、若し教育の方法にして兩親の意に滿たざることあらんか、遠慮なく校長、教員若くは保姆に相談すべし、又校長教員若くは保姆より子女の教育上に關する注意を受くることあらん乎、之を等閑に付することあるべからず、子女の教育は學校と家庭と相共に協心戮力して始て其の效を奏するものなればなり。

▲品性の陶冶

子女の品性陶冶の一事に至ては、學校教育よりも寧ろ家庭教育の如何に賴るものと覺悟せざるべからず、男兒の勇武の氣象は桃太郎鬼ヶ島征伐の童話に根ざし、女子の貞操は母親の傍に坐して裁縫を爲しつゝ、世間話を聞く間に養成せらるゝこと、學校の講堂に於て倫理上の教訓を聞くよりも一層深く骨髓に徹し、一層大なる效能を有するものなり、然れば兩親は家庭の教師にして朝夕兒童の目に觸るゝ室内の物品は其の教科書たり、其の耳に達する兩親の談話は皆其の腦裏に銘刻する教訓なりと知るべし、新世帶の經營者たるもの自己の繼嗣を教育するに於て豈に深く意を用ゐざるべけんや。

▲交際の注意(其二)

新に世帶を設くれば社會の一員として獨立したるものなれば、親戚に對する交際あり、朋友に對する交際あり、近隣に對する交際あり、居村に對する交際あり、親戚の交際には結婚、出生を賀し疾病を見舞ひ死亡を弔し、寒暑を訪問する等、骨肉血緣の間柄なれば、其の交際の親密なるべきは言を待たざれども、其の懇親に乘じて依賴すべからざる事を依賴し、相談すべから

ざる事を相談するが如きことあるべからず。我家は我自ら之を管理す、決して他人に依賴せず、又他人の干渉を受けずとの覺悟肝要なり。又朋友間の交際に於て、往々酒食の饗應を專一とし、之が爲に每月少からざる支出を爲せども交際なれば致方なしとて斷念するものあり、或は之を避けんが爲に住居を郊外に轉ずる者あり、共に交際の本意に叶ひたりと謂ふべからず、朋友の往來は麁茶一腕閑談數刻以て互に相樂み相益するに在り何ぞ酒食の饗應を競はんや、彼の酒食の朋友の如きは害あるも益なきものなれば、寧ろ



▲避暑がへり（三）

此方より遠ざかるこそ得策なれ近隣合壁の交際は狎れず疎らざるの間に境界を設け、互に敬意を失はず、緩急相助くるを旨とすべし、懇親を累ぬるの極日々の飲食起居より甲乙人物の品評に至るまで喋々するが如きは、永く隣交を全ふする所以にあらず、居村に對する交際には氏神の祭禮費、神社佛閣學校の新築修繕費、其の他慈善事業費等種種の名譽的寄付を要請せらるゝこと尠からず、此等は事業の性質と自巳の位置と財嚢の輕重とを斟酌して相當の處置を爲すべし。

▲交際の注意（其二）

人間社會は人と人との交際に依

て成立し自他相補助するに依て益々進歩發達するものなれば一個人としては貴賤貧富を問はず何人にも同等の交際を爲すこそ善けれ、其の交際は成るべく誠實を主とし、假初めにも虚禮に渉るが如き振舞あるべからず、歳末年首若くは中元に於ける物品の贈答の如きも、各自の誠意を表する丈に止れば弊害も起らざれども、近來の如く徒に外觀を飾り、高價を競ひ、甚だしきは甲よりの贈品を以て更に之を乙に贈呈するが如きは大に贈答の趣旨に反するを以て、謹て之を避けざるべからず、年賀の如きも往々車夫をして名刺を配賦せしむるが如きものあり、非禮の甚しき言語に絶へたりと謂ふべし、吾輩は從來成るべく虚禮を避くるの方針を取り只我誠意を達するを本旨とせり。

▲交際の注意(其三)

他人と交際して長短相補ひ緩急相助くるは處世の要務なれども、如何に懇親なればとて金錢の貸借は爲すべからず、借金の爲すべからざるは言ふ迄もなけれども、貸金を爲すも亦善良の結果を得難きものなり、吾輩は貸金の依賴を受くるときは、之を謝絶し、事情の憫諒すべきものは必要と認むる金額の十分の一を施與するを例とせり、是れ交友間に金錢の關係を生ずるときは親友を變じて仇讐たらしむること世間其の例に乏しからざればなり、諺に曰く借るときの地藏顔返すときの閻魔顔と、金錢貸借の消息を描寫して餘りありと謂ふべし、思はざるべけんや。

▲結論

以上は吾輩の實歷に基き、齊家の方法經濟教育衞生社交等に至るまで、新世帶の經營に關する各種の事項を思出づるに從ひ雜然記述したるに過ぎず、所說固より平凡にして新奇の言論人を喜ばすに足るものなしと雖も、若し能く之を實行するものあらば其の世帶經營上に多少の効益を與ふるは吾輩の保證する所なり、抑も一家を經營するの困難なるは猶ほ一國を經營するの困難なるが如し、一國の經營は國務大臣の職責にして一家の經營は夫婦の任務なり、而して婦は内に居て家計を整理し、女子を教育し、内外の取締を專一とするも

のなれば、猶ほ大藏大臣にして文部大臣、內務大臣を兼ぬるが如し、夫は外に在りて職業に從事し、生活の資料を得るものなれば、猶ほ農商務大臣にして、外務大臣陸海軍大臣を兼ぬるが如し、國政の料理其の宜しきを得るは、國務大臣一致團結の力にして、家政の料理其の宜しきを得るは夫婦の協心戮力の効なり。新世帶經營の任に當る者豈に協心戮力、其の効を收むるの覺悟なかるべけん哉。

（終）

廿世紀の女子

池田秋旻

△男女尊卑の因緣

近來我邦の女子教育は著しい發達で、單に女學校と女學生との增加したばかりでなく、其內容に於ても慥かに進步したとは明らかなる事實であるが、然しながら尙ほ多くの不充分なる點は免れない、教育當事者は勿論のこと、教育される處の學生も亦た餘程注意せなければなりますまい。

熟々我婦人界の狀態を顧みるに、男子に對する女子の位地は之を維新前後に比較したならば如何であるか知らないが最近に於ては目に立つ程の進步は無い、成る程、女子にも讀書家や議論家は大に增加し、又其仕事の範圍も段々擴張されて、會社工場、諸官衙に至るまで女子の採用は日に月に增加して居る、此有樣で進んだならば其地位も幾分か高くなるに相違なからうけれども、大体の上から之を見た時には矢張り男尊女卑の憐れむべき境遇を脫することが出來ない、其證據には曾て貧苦を共にした所謂糟糠の妻でありながら、漸く暮し向きも安樂になつたと思へば直ちに妾を蓄へて正妻を邪魔物にするやうな不心得な夫にすら不平ながらに事へて往かなければなりません、又兩親の命令だと云へば不義の巷に身を賣らなければならぬこともあります是等は先づ極端の例とした處で、普通の家庭に居て、普通の男子と同棲しつゝある女子で、男子の尊敬

を受けて居る人が幾人あるか、斯く云へばそれは舊來の男尊女卑の弊習が今尚ほ殘つて居るからだといふかも知らないが、元來男尊女卑と云ふことの起つたのも深い原因のあることで、何事にも男子が優れて女子が劣つに居た處から生じたものに相違ない、然して其久しい間の習慣が今まで傳つて之を打破ることが出來ないと云ふのは、僅かにそれだけの實力が女子に無いからであらう、多くの女子中には賢婦もあり、才女もあり、有爲男子をして後へに瞠若たらしむる程の女丈夫も稀にはあつたけれども、日本の女子は男子に向つて頭は上らないのである。

左れば日本の女子は其性格として未來永劫男子に向つて頭が上らないかと云ふに、決して然樣でない、人は封建時代の風俗習慣を何事も取るに足らざることのやうに云ふけれども、當時に於ける男子が武士道に其身を錬り、節操堅固にして毫も卑吝の爲めに心を動かさなかつた處の美風と共に、徳川三百年間に於ける女子の中には隨分後世に傳ふべき賢婦人が多いのみならず、遠く古に溯つて頼朝の妻政子の如き、北條時頼の母松下禪尼の如き、一技一藝の名人としてゞなく一個の人物として充分尊崇すべき人は澤山ある、其他名の傳はると傳はらざるとに論なく、武士の家庭に立派な妻君のあつたことは歴史の證明する處である、貞女烈婦を指して卑屈な人と云はゞ云へ、彼等の胸中には慥かに把持すべき一個の主義があつて、一方には服從の義務を持つて居る代りに、其實權は中々有力なるものであつた、今日の道德說からは非難すべき點も少なくないけれども、それは敎育の然らしむる處で、其性格は何處までも立派なものである此點に就ては女子敎育發達の時代と誇つて居る明治の女子こそ却つて大に讓る處があるでは無いか。

△一家一人の生產者

世の開明と共に生存の競爭は愈々烈しくなるに相違ないが我邦の今日ほど生活に苦しむ時代も餘り多くはなからう、之には種々の原因があるけれども、要するに

生産者が少なくて消費者が多いからである、一例を擧ぐれば夫婦に子供三人の家庭があるとして金を儲けるものは夫一人で、其餘の四人は消費者である、若しも之に一人の老母でも加はつたならば、其責任は猶更ら重くなる、如何に男子に手腕があつても一人の働きで五人の生活を維持して往くとの困難なるは固より當然のとである、男勞女逸は勢ひ男尊女卑の狀態を演出し同時に一國一家をして貧弱に陷らしむる基ゐを爲すのであるとすれば女子たるものは大に顧る處が無くてはならない。



△通學がへり（四）

△外國移住

勞働の範圍は至つて廣く女子の取るべき職分も甚だ少くなくない、然し我邦今日の形勢から云へば外國に移住するのが生活上何よりも良い方法である、我邦の如き狹い土地に五千万近くの人口を入れて然も年々何十万と云ふ増加をして居ては迚も堪つたものではない、少し極言すれば移住は我國民生活上の一大方針と云つて宜いのである殊に日露の關係が現時の有様になつたからは結局朝鮮

は我經營の下に歸し、同半島の全部は我殖民地となるに於ては爰に移住する程の利益は先づ他に無いであらう、けれども移民の性質として家を擧げて其地に移らねばならない、此場合に直ちに夫の發案に同意して其決心を固むるだけ腹の坐つた妻君が幾人あるか、地方の村落に住む人は祖先傳來の地を去るのは否だと云ひ都會の人は迚も朝鮮の內地などでは辛抱が出來ないと云つて慥かに見込は附きながら何時までも奮發して飛出すヿの出來ないのは多くは妻君の故障に基くのではなからうか。

△家政の不如意

嫁姑の關係を別にして我邦中等社會の家庭に不和の起る原因は主として家政の不如意に基くのである、年若い女子が美しい衣服調度を買いたがるのは尤も千萬なヿで、之を拒む家の主人こそ如何にも無情なやうであるが、生存の必要以上、苟めにも修飾に屬する品物は財政に餘裕を生じた時に始めて買ふべきもので、苦しい中から其様な物を着て歩いた處で何にもなるのではない、他人の手前が恥しいと云ふ口實はあれども外見よりは內實、晦日に心配の無い方が餘程暮し向に巧みな人と云はなければならない、殊に清潔に仕上げたる綿衣は無理に着飾つた柔かい物よりか、遙かに奧床しい處があつて見る人の眼からは其方が餘程高尙に見えるのである、之は一例として衣服のヿだけを擧げたのであるが、其他家政整理の上に於ける女子の働き振り如何は慥かに和不和の原因となるに相違ない。

△家政の責任

以上の事實からして余は日本の女子に對し大なる希望を持つて居る、それは外ではない、一言に云へば立派に內助の功を現はして貰いたいと云ふに過ぎないが、其個條は中々少なくない、古人も一利を起すは一害を除くに若かずと云つた通り經濟向きのヿは金を儲けるヿが素より必要であるが、折角儲けた金を徒らに費しては働き甲斐の無い話である、金錢使用の巧拙如何は

經濟上頗る重大なる關係を持つて居るから、之は大に研究して貰はねばならぬ、然して其責任は主として主婦に在るのである、家計の簿記を精密にして收支の計算を明かにすることは其第一着歩であらう、次は子女の教育に關することで之も主として妻君の責任である、其他飲食、衣服、病氣の看護等何れも女子の手を待つべきものであれば、それだけのことは男子の差圖と注意とを待つ迄もなく立派に遣つて除けて欲しいのである、左すれば男子は力を外に專にすることが出來て事業成効の上に少なからざる便宜を得、即ち女子の爲めにも亦た大なる幸福を得ることになるのである。



▲遊學がへり　（五）

△教育の素養

左りながら右の如き責任を實際に果して、自分も其幸福を共に受けんとするには是非とも相應な教育が無くてはならない、世には未だ曾て學校の門を潜らずして立派に家政を整理する人もあるけれども、それは先づ例外で教育の無い人は出來ないのが、普通である、一旦教育で固めた頭でないと眞逆の時に臨んで詰らぬことに欺かれ、或は知

らず〳〵學理に反對のことをして損害を招くことが多い各種の禁厭、素人藥の調合、有毒性、不消化物等の衣食を進めて家族に迷惑を蒙らしめるの例は珍らしくないことである、殊に學校生活をした女子は唯た自分の家庭より外に世間の様子を知らないものに比すれば、見聞が自から廣く又能く人の言行を判斷するの力を養ふことが出來るのであるから、教育は勿論せなければならないが、教育の方針と學校の選擇とには充分氣を附けなければならない。

△居家處世の學問

女學校にも隨分種類がある、各府縣の高等女學校は小學と同様で唯た普通學の力を附けるのに過ぎない、此學校を一通り卒業することは常識を養ふ上に於て大に利益がある、願くは何人も卒業して貰ひたい、併し之を卒業したからと云つて全くの女子教育を終つたと云ふ譯に往かないのは恰も中學を卒業したばかりで男子の教育を終つたと云へないのと同様である故に高等女學校を卒業しても更に又特種の科目に就て研究する處がなくてはならない、然らざれば折角の高等女學校卒業も居家處世の上に就て實際の結果を現はすことは甚だ困難であらうと考へる、左れば高等女學校を卒業して更に他の學校に入るだけの餘力のある人は、それでよし、左なくば小學卒業後は直ちに特種の科目に就て研究する方が却つて得策であるとは云へ余は高尚なる專門の學術技藝を修業せよと勸むるのではない、要は直接に家政に必要なる學科の研究をした方が早手廻はしで且つ實際有益であらうと思ふである。

△家庭の趣味

家政の實習を主とする女學校も我邦に絶無とは云はないが、滿足されるだけのものは至つて少ない、之に就ては獨逸が割合に發達して居るらしい、千八百九十一年普國ザクセン州ウムストルツト溪テプラと云ふ處に創立された家政學校の如きは則ち余が求むる處の女子教育に近いものであつて同校の主義は女子の處世に緊

要なる藝術と學理とを短時間の間に教授するの外、道德倫理衛生等を實地に行はしむるにあり、然も其教授法は頗る巧みなもので生徒をして自から家庭の眞趣味を解せしむるやうに出來て居る、嗚呼家庭の趣味、是は今日の日本婦人には殆んど理解されて居ないかと思はれるが、凡そ何事に限らず眞の妙趣は辛苦經營の間に於て發見し得られるので、唯だ浮々と其日遁れに世を送つて居ては、到底其恩澤を蒙むることは出來ない、勤勞を樂しみ面倒を厭はず朝夕孜々として家政の整理に隨ふの外、何事をも求めない人こそ眞に責任を知る處の家庭の王であつて、斯る女王を有する家庭は必らず榮え又其女王の權力は慥かに何人からも認められるに相違ない、家庭を以て身を入るゝに足らずとし、家政を以て執るに足らざる小事と思ふのは未だ家庭と云ふとの趣味を解せないからである、其趣味を解し得さしむるには之に適當なる教育が無くてはならない、漠然と普通の學を修めたからと云つて其目的を達することは出來ないのである。

△獨立自營

米國などでは女子に高尚なる專門の學術を授けて男子と少しも其間に區別はない、畢竟米國の女子は我邦のやうに良妻賢母となることよりは寧ろ市民とし國民として知らざるべからざる權利義務の觀念から生存競爭の表面に乘り出て差支ないだけの學問技術が必要である處よりして勢ひ此の如き教育制度を執るに至つたものであらう、今後我邦と雖も或は斯る制度を取るべき時期が來るかも知れないが、此制度は自から獨身生活に伴ふのであつて、獨身生活は人間天賦の性情に戾り人生幸福の一大根元を遮斷するものとすれば求めて其眞似をするには及ばないのみならず、現今の我邦に於ては女子の目的を良妻賢母たることに定めて扨て實際に於て內助の功を奏することが出來たならば有らゆる幸福は其門に集まり、樂しき家庭を形造つて百年の歲月を過すことは蓋し智者の取るべき方針では無からうか。

兒童教育

こゝろの僻み（下）

東京感化院長　高瀬眞卿

其六　實の母よりも嬉しかりし人

この少年は十七歳なり性質は温柔なり學問は未だ中學科に入らざれども常識ありて無分別なる擧動は稀なり、父は五十三才にして繼母は三十四才なり、繼母は嫁して十四年を經たれど子なし姉の子二人を養ふてこの少年の弟妹となせり。

母は私が三歳の時に歿りました、これは二三年跡に親類の者に聞ましたので私は全く母の實子であると二三年前までは思つて居りました、私は親類が知らせて與れないと實の母のある事を知らずに居りましたかも存じません實は知らずに居つた方がよかつたかと思ふのです私は實の母でないと思ひましてからどうやら母のする事が繼母らしいと思ふ事が度々御座りますが知らぬ前は少しも然うは思はぬので母も私を非常に可愛がりは致しませんがまた私の事について別に冷淡にすると感じた事は一度もありませんが二三年この方はソレが少し變つた樣に私には見へます、父はどうしても嚴重で子供の心では嚴重過ぎると思ふ事もありますが母を他人であると思ひましたのちは母を慕ふと云考も薄くなりまして何となくつまらぬ身である父は彼の言通り少しの事でも嚴酷に呵り廻すに母は他人なり頼りにする譯にもゆかず時々親切に言つてはくれますがソレも眞實の心から出るのかどうか知れずアヽつまらないと思ひまして家を飛出しました、親類へ參つて話しますと道理だ、お袋が他人であるから工合が惡い筈だ兎角繼子と云ものは不幸な者だ抔と云ふので母と私とはコレと云ふ何も不和になる種はありませんがどうも隔てが出來るやうになりました、母の人となりも決して惡くはないのでソレは私が能く存じて居ます、父はまた母の姉の子を可愛がりまして彼等がどんな惡戯をしても別に呵りもいたしません母はよく呵りますが親父は一向構ひません私の方は父が無性に呵りましても母は私を呵らぬのであります、斯云譯で家に居ても面白いと思ふ事がないものですから遊びに出たくもなりま

すし出れば錢も入ります、心にもない出來損ないな事をいたして今更後悔しますが全く私がわるいので御座いました。

眞相云この少年の繼母の人となりは善良にして指摘して非難すべき點を見出さず、子供の口ずさむより母へ對するの擧動一變し母も固より眞情を以てせしにあらざれば少年の擧動の冷淡なるに對していつしか從來の如き愛情を以て對する事なく遂に此に至りしものなり記者曰くこの子に對する親類の人の不注意嘆ずべし。

其七　毎日泣いて暮した人

この少年は十六才にして家出をなし其後の事に窃盗をなし詐欺の廉にて捕縛せられ市ヶ谷監獄にある六ヶ月出獄の際に引取人なきを以て院の生徒となしたるなり、彼は三才にして母に別れ繼母の手に育てられしが十才の時父にも別れたり其のちは繼母のもとにある殆ど六年なり彼が語る處を記さむ。

私は早く母に別れまして母はどう云ふ人であつたか一向存知ませんが父はよく覺えて居ります私が早く母に別れましたものですから繼母に常に言ました○太郎は實の母に死別れて可愛さうであるどうか大切に育てゝくれと言まして父も可愛がつてくれまして小學校へゆく時は仕事の忙がしい中で送つてくれましたり迎ひにも來てくれました、それゆへ繼母も父の存生中は別に邪見にもしません、時々はお尻を抓られる事はありましたが泣くと父が怒りますから父の居る時は抓りません私の十歳の時に父が病氣になつて死ぬときに私と母と伯父をよびまして己が死んだのちは○太郎を人並の者に育てゝくれこれ許りが心懸りであるお前は年が若いから入夫をしてもよいが○太郎だけは簡略にしてくれるなと言ました父が死んだのち伯父もコレラ病で死にますと母は入夫を持まして其からと云ものは私を邪見にして困らせましたから私は毎日泣て許り居ました學校へ行たいと思つてもやりません田の草を取つて來いの柴を刈れのとそんな事に許り毎日〳〵追使ひまして夜にも私をば板敷へ寐せますから疊の上へ寐たいと申ます寐小便を垂れるといけないと言つていつも板の間へ寐せます、餘りつらい事許りですから家を逃出しまして東京へ來て四五日ぶら付て居ます中に腹が減つて仕樣がありませんから惡いとは思ひましたが下駄を盗みましてこれを賣つて芋をたべました其から二三度盗

む中に縛られたのでゐります、私の母は一向口を利ぬ人で時々私を睨め付ます。

眞婦云言ふまでもなく不幸の少年也、繼母の事を直接に知るに由なしと雖もこの少年虚飾の陳述をなすものにあられば其の言ふ處を事實として判斷する事を得べし。

其八　父親を無情と思ひし人

北國某縣の少年其性質は温柔やゝもすれば「ヤケ」を起すの癖を有す二歳の時に母は離別せられて程なく後妻來る父は四十六後妻は三十三なりこの少年より五才おとれる弟は後妻の出なり。

母は弟を可愛がつて私の事は一向頓着しません、私の家へ來る某が私の事をよく世話を燒てくれますがその人が言ふには何事も辛抱が大切だ私等をはじめ誰々は皆なお前の爲を思つて後楯になりますから何事も辛抱なさいと度々深切に言つてくれます、然るに親父はなんでも母の言ふこと許り聞て私と母と爭論をすれば手前は親に反對するか不埒の奴だと直ぐ怒り出します、私は弟と中が惡いです父も母も弟を愛しますから私は腹が立て時々ぶん擲つてやりますと大きな聲で泣いて言つけますさうしたすと父が眞赤になつて怒りまして棒で私をなぐります私は親父にまで斯う憎まれては迚もダメだと思ひまして其のちは學校へもゆかず家でも勉强しません一年許りぬらくらして居ましたから遊び友達もだん〳〵出來て惡い事もする樣になつたのであります、弟だつて學問に勉强するのではありませんこれも遊ぶのが好きで今日も學校へゆかぬ翌日もゆかぬと言つてなまけますが母はアレは病身だから余り精出しては身に障ると言まして遊ばせます不公平な事と私は思ふのです、斯う言ましても母は別に惡い人ではない樣に見えますが私は何んとなく慕しく思はれません、感化院へ來る時は母は可愛さうだから止にしたら宜ろうと言たさうです。

眞婦云後妻の子を愛して前妻の子を冷遇するものは後妻を持たる父に多くある處なり、この少年また不幸にして如此の父を持たるものと言ふべし。

其九　弟が生れてから疎遠になりし人

この少年は十三才なり怜悧にして學力も他にすぐれたり繼母との關係より實父にも親まず只管に里父を尊崇して里父の命ずる處には何事にても之を奉じ實父繼母の言ふ處は如何なる事もうけ引事なし。

お母さんは私が八歳の時に來ました、來たところは私を大切にして能く可愛がつて呉れたけれど弟が生れてから弟許り可愛がつて私を邪魔にする樣になつた叱つたり打つたりした事はない、私は學校が好きだから欠席した事はないそれにお父さんは商人になるには學問許りしたツていけない奉公をしなければ一人前の商人にはなれないと言つて奉公に出す事になつたものだからお祖父が怒つて未だ十一か十二の子供を奉公に出すと言ふ事はない、あれは長男だから中學までも勉強させるがいゝと言つたのです、お父さんはソレを聞ないで奉公に出すと云ふシお祖父さんは出してはならぬ二男が可愛いから長男を他へ出すのだろうなんテ大層お父さんと議論をしたので、其れでもお父さんは聞入ないで私を奉公に出したから直ぐ逃て歸つたお祖父さんは歸て來ても何とも言ないお父さんは怒つて私を打つたり何かしたもんだからお母さんは止てこの子を奉公に出すと妾が邪魔にして出すやうに世間から思はれるから家へ置て下さいと言てお父さんに詫をしてくれました、其から家に居ましたがいつもお父さんが弟許り可愛がるから「ヤケ」になつて學校へゆくのも嫌になつて仕舞つた其から遊んで許り居て學校でも喧嘩許りして居たもんだから退校と命せられました。

翼廬云。この後妻の人となりに就て取調べたるに性質も温厚にして愛情のある婦人にもあらず少年の言ふが如く吾子の生れざる以前は繼子を愛せし事殆ど實子に異ならざりしと、吾子生れたるのちも憎みたりといふにはあらねど其の取扱上多少の隔てありしやこれ一般の繼母として免れざる情状なり、繼母その人のあしきにはあらずして繼母と云其の者の境界には必有の現象なり。

其十　あれは下婢です

私の母はあれは下婢です、私が十四の年にお母さんが死んで其のち家に居たお○と云下婢が直ぐ親父の妻になつたんだ、私はあんなものを母とは思ひません、お○は今日からお前のお母さんだからよく言ふ事を聞て孝行をせよなんて親父が言ましたが誰があんな者の言ふことを聞ものかあの女は惡く威張るんで私を呼捨にするのが氣まりが惡ひもんだから名を呼ばないで○るん〳〵と言ふのだ私が少しも言うことを聞ないから親

父に讒言をして私を叱らせます、私が家のお金を三十錢拐出して芝居へいつたら今度許りではありませんお金が度々紛失ましたなんて讒言した、お父さんは私のいふことは少しも聞ないで何事でもお○の言なり次第だから仕様がないです、あんな女が家に居るなら私は死ぬまで家へ歸らない。

家庭小訓

眞輔が下婢をして一足飛に家の主婦とし、十三四才の子をして母として仕へしめんとす大體に於て既に過れるものなり、況してこの後妻は眼に一丁の文字なく家庭の何物たるを辨へず、この少年は活潑にして怜悧なり年の割合には知力の發達早し、いかでこの家庭圓滿なるを得ん、その不和に陥るもの謂なきにあらざるなり。

▲禮義と品格

明治維新の以前に於ける家庭即ち日本人武士といふ階級を國民の典型と致した時代の日本の家庭はどんな有様であつたかを申上やう、この時代は御存じの通り上は王公貴人より下は穢多、非人といふ様な種族に至るまで國民の間に貴賤貧富の差等が甚しかつたのでありますから一概にいふことはできませぬが、此處にはまづ中等士族の家で普通に行はれた家庭教育の状態を一寸記載して見ませう此の頃の此等の家で行はれた家庭教育の要素はまづ何であつたかと申すと第一禮儀を重ずることが非常でした即ち生れてまだ間もない稚子を、東西も辨へぬ頃から其乳母なり又母親なりが父親の前に伴て行て朝ならば御早うゴザイマス、夜ならば御休ミナサイマセ、と言はせ又外に行く際には行て參りますと言ひ外より歸つたならば唯今歸りましたと言ふ様に其時相應な挨拶を乳母、母親なりが代つていひながら稚子に頭を下げさするのであります固より稚子は何も解せずに居ますけれど、かくする間には何時しか知らず識らずの間に禮儀の慣習を養うて、成長の後には自然に禮儀正しいものとなるのであります。此の點は實に維新前の方が唯今のやうな無頓着な風俗に比べて遙かに優れて居るやうです、所で今時の學齡に達する兒童が他人の前に立たまゝで辭儀すると

とも知らずに居るといふのは餘程不文明な事であらうと思ひます威儀容法は人世の飾であつて是非缺く可らざるものであるから、是は宜しく舊時代の風習ながら維新前の家風を學んでよい事と思ます。禮儀に次いで學ぶべきは尚武の氣象すなはち剛毅忍耐の氣風の養成であります。むかし武士の家風として小兒が少しくらゐの傷を受けても泣くことはできぬ、泣けば直ぐに父母は勿論の事乳母にも兄姉にも叱られる、たしなめらるるのであります、其習慣が積り〳〵つて家風が一般に武張つた強い氣象を造、武士の子



夏の朝

であるといふ標語は、稚子も忍耐の動機となり又父母や保姆も奬勵の動機につかひました、是は男の子ばかりでなく女の子でも武士の娘である、武士の娘ぢやないかと一方では之を勵ましたり又一方では之を辱かしめたりするので、決して現今のやうに唯チヤホヤと可愛がつたり甘やかしたりするではありませんでした、それ故この氣風が元となつて亦廉恥の氣風をも養ふ基となり、卑怯なことをしてはならぬ、負けても奇麗に負けやう、といふ様な品位ある情操を造つたので、隨

つて此の樣な家庭の風が實に日本魂の起る源となつたのであります、武士道の起本は又實に此の家庭敎育にあるので、彼の日清戰役の結果も、北淸事變の成功も、今回の日露戰爭の勝利も基く所はつまり此の家庭敎育の餘風であると言はねばなりません。されぱどうかして此の家庭敎育の風は保存したいもので今日は武士といふ、種族も階級もありませんが武士の子武士の娘といふやうな標語は銘々の心の底に存して置てもよからうと思ひます日々に尙武の氣風が消磨して、人々利慾一邊に走るの今日、今後猶一層列國相對峙して、爪牙を磨く當世に處せしむるには、稚い時から尙武の氣風を振起して、國家安泰の基礎を築かねばなりませぬされぱこの事に留意さるゝの人は、宜しく維新前の此の家庭敎育の風を能く熟慮玩味されたいものであります。

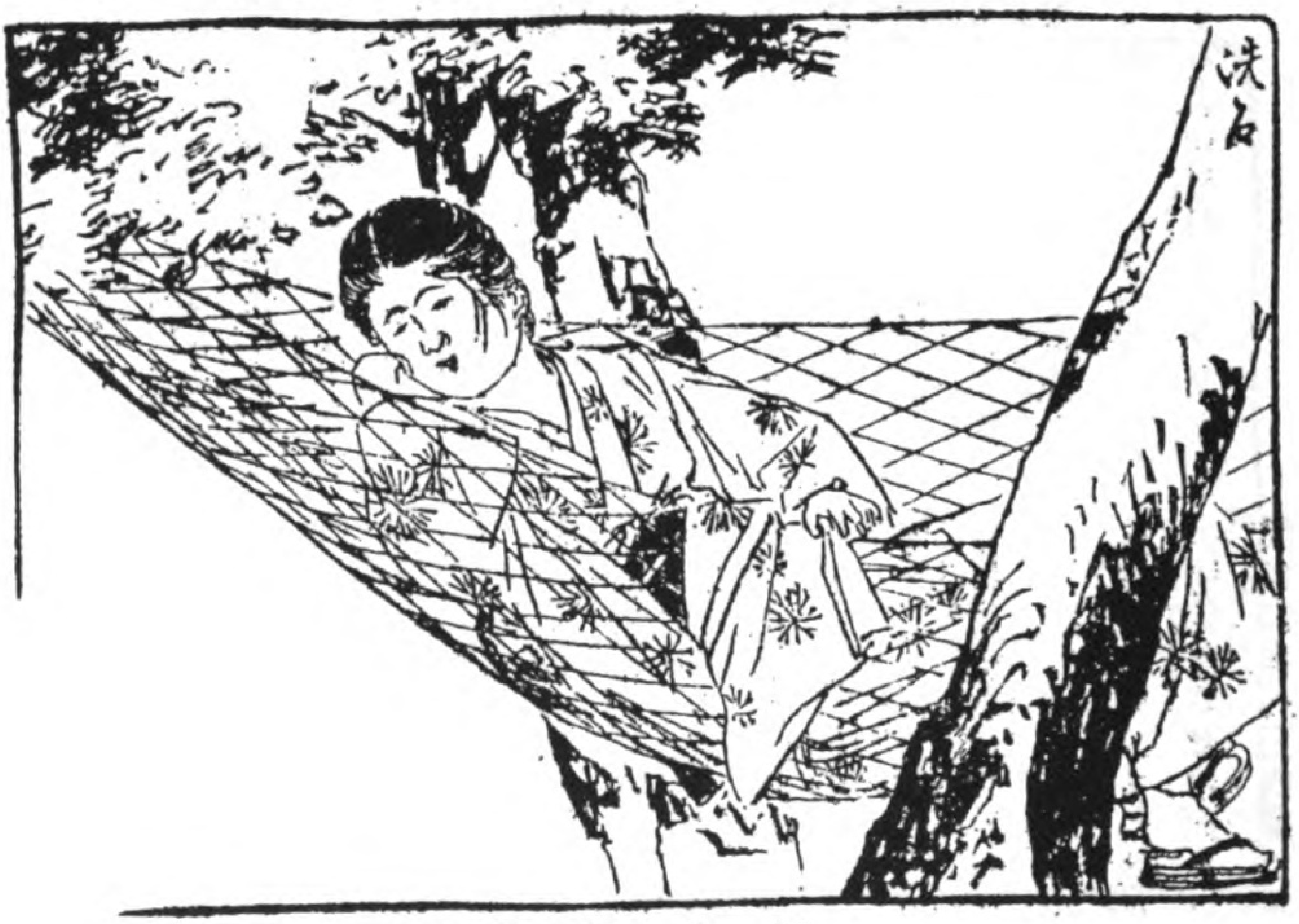
尙武の氣風に次いで學ぶべきは品格でありますが俗にいふ品のよい風を學び、且つこれを尊んだものであります、武士は喰はねど高楊枝とやら、又瘦せ我慢を張つても人に猥りに屈從しないといふ風、彼の食物の贅、卑しい事、猥がはしいことなどは決していはさぬのみならず之を言へば必ず嚴しく叱られる尤も此の品のよい風にも多少の弊は免かれず世俗に遠かり、世態を知らず、物の時價を知るさへ恥辱とするに至つたのであるが、併し起居飮食の事なり、詞づかひなりは正しくて、品のよいのは實に結構であります徒らに上品ぶるは宜しくないが、なるたけ品格の善いのは望ましいことであるから其の弊を去つて其の長處を存したいものであります。

以上三種の特點を外にして忠敬、孝行といふやうなことは今ほど國民一般に其の思想は普及して居らなかつたが、併し武士の中流の族には却て今よりは深く且つ確かであつたと思はれます、加ふるに又体育も今の樣に身体發達の均整を得る方法ではなかつたが、弓馬槍劍一通りの武術を修業さすることは、父も母も注意したもので、故に身体の鍛錬は今よりも充分であつて、寒中の烈風にも、三伏の炎暑にも、打勝つて、少しも撓

む所のないのは、今より或は優れて居たかも知れませぬ。以上の缺點は維新前家庭教育の善い所で、今日の模範となる事は多いのであります。

▲家庭と新聞

晩餐の後家族團欒してくさ〳〵の談話をするのは一般家庭の風習で行りますが是れに依つて快樂を増し、一日の勞を慰め、又兼ねて社會の事情をも知ることであるが、其の話頭に上る題目は主として新聞紙に記載の事項で、新聞紙によつて廣く社會に接觸し、社會の事情を知り、智識を増し、見聞をも廣くし、快樂を



夏の日中

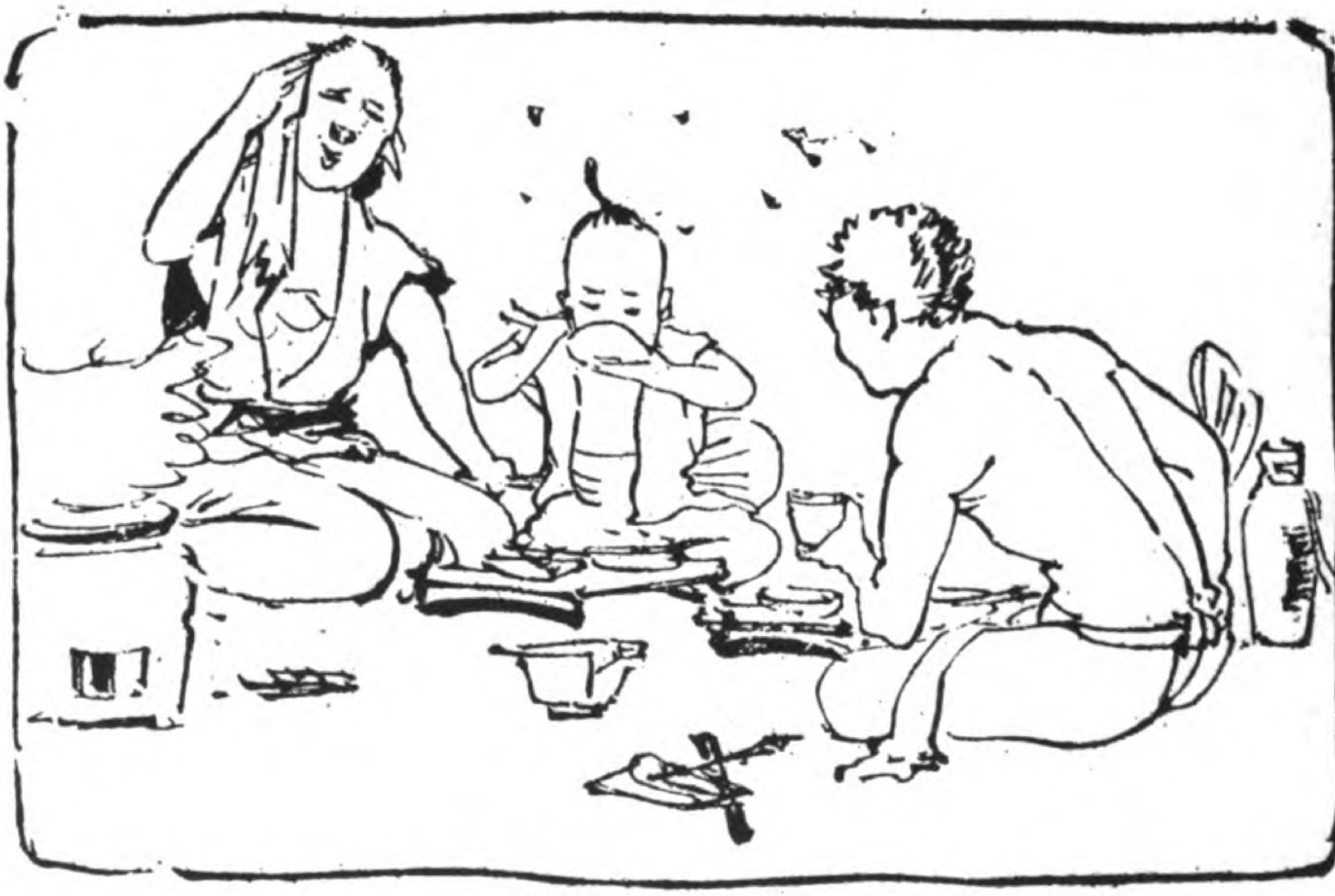
も増し、實益をも收得するのである。併し乍ら又利益の多いだけその害も頗る大きいので今の新聞紙は流行の廣いものほど社會のいかゝはしい事項を面白おかしく記述して居る分子が多いこれは勿論當時の社會の嗜好が低いのであるから止むを得ぬとはへい、所謂三面の記事や、廣告欄などには親子對座し、兄弟相面して談しすることも出來ぬ樣な記事が往々にしてあります、是れ等は意志の鞏固な大人には何等の害もありますまいが、まだ世上の智識も淺く、情操も卑しい無垢

の少年少女輩には隨分よからぬ事を教ふる材料となつて居るかと思ひます、是等の事を白紙の様なうつくしい清い兒童の心に映せしむるは害あるのみで益は少しも發見し得ません、故に外國でも社會の暗黒の方面の事を記載する警察新聞の如きは紳士の家庭には決して容れません、又容れてもひそかに隱して見るので決して兒童の眼には觸れさせぬのである、又人の弱點に投じて低い人間の嗜好を求むる様なものは決して家にはおかぬのである、我が國でも健全な家庭では子供が見るからと言つて或る種の新聞を家に入れる事を禁じてゐるのである、新聞は取らぬわけにゆかず、家にあるものを子供に見せぬといふわけにもゆかぬ、されば家庭教育に妨げのないものを、選擇せねばならぬ、而して其の選んだ新聞紙の上にても、家庭に妨げのある様な記事は之を抹殺するが、上策である、そして選擇した上に善い記事は母親が説いて聞かすといふやうにすれば、新聞は家庭教育に裨益するよい材料となりませう。

▲間食の害

世上を見渡すと良家の子女とも見ゆる中に往々戸外に遊びながら物を食うて居るのを見掛ますが是實に卑しいものです、一体物を食うのは身体の營養の爲めである事は勿論ですが身体を營養せしめんとならば、先づ充分に消化させねばならぬ、胃や腸で物を消化するには一定の分量があつて又多少の時間を要するのである又胃や腸に充分の消化作用をさするのには活動後多少の休息を與へねばならぬ、丁度我々が晝間活動の後夜間に於いて睡眠をする様なものですが、然に間食をさせて絶えず胃の腑へ物を送れば胃腸は休息の時間を得ずして必ず損傷を起して病にかゝるのは當然です、胃腸に病氣があれば身体に倦厭を生じ、運動も不活潑となり、隨て精神の活動までも鈍くなるのです、夫故に食物を與ふるには必ず一定の時間を守り、其他には一切飲食させぬがよいです、彼の乳飲兒の如きは二時間毎に與へ三四歳に至らば朝食と午食との間に一回、

午食と夕食との間に一回間食をさする位はよし、それより小學校に通ふ様になつたならば午前の間食を廢せねばならぬ殊に夜間は一切食物をさせぬ習慣を造るがよろしいです、若し夜分満腹して床に入れば胃弱の兒は忽ち胃を害し翌日の神氣を不快ならしむるのです、タトエ健全のものでも熟眠ができずして晝間の疲勞を回復することができなくなります、かゝる事は習慣となるまでは親も子も與にオックウですが習慣となッて仕舞へば親の方でも手がかゝらず子の方でも中途に物を食ふといふ念慮も起らずなッて常に



夏の夕

愉快に活動ができて却て都合がよいのであります、唯一ツ爰に困難なのは世間一般の風習が間食を止めない内は自分の家ばかり是を勵行する事は一寸難義でありますが、苟くも家庭を改良しやうと思へばこの困難に打勝つ覺悟がなくてはならぬ、又當時の習慣で餘所へ行けば必ず茶を出し、菓子を出し、殊に小供にはお愛相に之を強いる、是れは一般に廢止ねばなりませぬ、先方が強いても親たるものは平常の習慣を言うて斷るがよいです、斯様な事に遠慮して却つて我が子の良習を破つてはなりませぬ大人も茶はよいで

すが食物は出さず、又食はぬがよい、人間は成長して他日軍人になるか、商人になるか、いづれになっても生活の戰爭は繁劇となり、時間を定めずに飯を食ふ塲合もあり三度の食事を二度しか食はぬことがあっても平氣でなくてはならぬ塲合があるそれには今から其の習慣をつけて置くのが必要であるがさりとて間食をさすることは決して他日の良習慣ではない、畢竟體力の強いものが何事にも堪ふるので常に間食などして病弱な體では到底堪ふることができませぬ果して父兄が其の望みであるならば猶更平日間食を戒めて強健な身体たらしめねばなりませぬ。

▲厚着の弊

兒童の病氣には胃腸の病氣と感冒とが多い、胃腸の支障は多く間食より來り、感冒は多く温袍に過ぐるより來る、彼の世間の獨り子、末つ子又は老人のある家庭の子を見るに大事を取り又は老人が我が身の上より推し量つて、兒童に厚着をさせるが如き、是れが爲めに皮膚が弱くなり、少しの寒氣にも冒され易くなるのである、老人とは違つて兒童は活力が盛んである故、夫れ程寒氣などを苦にせぬものです然るに大事にし過ぎて厚着さする故却つて悪結果を生ずるのである兒童には足袋も成るだけ穿かせぬがよい、襟巻などは勿論着けさせぬがよい、毛糸の厚いシャツなども用ひぬがよい、木綿の筒袖を着せてドシ〳〵外氣に觸れさせ寒けれぱ却つ活潑に運動して活力を鼓舞し寒氣に打ち勝たしめ、薄着で平氣な習慣を附けねばなりませぬ、併し一旦感冒にかゝつた時には直ぐに充分の手當をするがよいです。

▲交友の選擇

廣く世間の小供を見渡すと男の兒を女の兒の中で遊ばせますと何時か人形遊びやまゝゴト遊びを好む様になり其起居動作も又女を擬似る様になります。之れに反して女の兒を男の兒の中へ交へておけば擧動も自然活潑となり、遊びも男の兒のすることを擬似て驅け競べ

や竹馬乘りをする樣になります是れは必然の勢でいくら親が止めやうとしても止め切れるものではありません兒童の品性を造る上に於いて朋友の及ぼす影響は實に至大なものであることは是れに依つて其大凡を察することができませう、むかし孟子の母は兒童教育の爲めに三度び居處を轉じましたさすれば我が子の交友について注意するは母たる人の當然の責任であります影響の力の厚薄を比較するなら居處よりも、交友の方がよほど重大でありませう朋友の選擇を其の兒に一任して頓着せぬのは等閑に過ぐるといはねばなりませぬ稍年嵩さの友達や、同年輩でも勢力のある友達、又は尤も親しくする友達などは最も注意して觀察せねばならぬ、此の種の朋友の良否は兒童の將來に重大なる關係があるのですから若しも惡るいと認めたならば、斷然絶交して交通をせぬがよい、高等小學在學の時代及び中學在學の時代には殊に交友に注意せねばならぬ事で此の年齢の頃交友の善惡によつて非常なる影響を受くるものであります。彼の岩崎家では兒童が十歳になると、書生部屋に書生と机を列らべ書生と與に起臥さする、而して高等小學の時代には中學へ通ふ書生、中學へ通ふ時代には高等學校へ通ふ書生と同居させてあるとか是れで自然誘導啓發を受くる仕組となります、一代の富豪岩崎家が其の兒童の爲めに友を擇ばれた方法注意はさもあるべきですが、併し何れの家でも斯くするといふ譯には行かないながらも、家庭の責任者は常に其心持で居らねばなりませぬ。即ち父母たるものは常に交友を注意して選擇し、常に監督を怠らぬ樣にせねばならぬ、此くすれば大なる過誤はなからうとおもひます交る友を見て其の人の人品を知ると古人も言はれました如く其の人を知らうと思つたなら其友を見るがよいとあるのも又實に動かぬ格言でありませう。

人間の至情

南阿の英傑クルーゲルは時可ならずして亡命の客となり、遂に瑞西の片田舍に憤死す、而も生前、其亡妻を忘るゝ能はず、呻吟の中屢ば亡妻の墓側に葬られんことを望んで已まず、英政府即ち其心情の切なるを諒とし、死後遺骸をプレトリアに送り、以て彼れが生前の希望を遂ぐるを許せりと云ふ

拔山蓋世の英雄も、論じ來れば遂に情の人たるを失はず、旅館の寒燈獨り眠らで病夫其亡妻を夢みて轉々反側すクルーゲルも亦可憐の見なりけり

一口醫者

糸左近

此度は今まで質問の非常に多かつた病ばかりを撰んで掲げました。けれどもこれは私の專門外でありますから下手な部は勿論澤山ありませう。何うぞ其のお積りで御讀み下さいまし。

▲子宮內膜炎　一名子宮加答兒ともいふ

〔原因〕急性と慢性とあるが、急性の方は大抵十七八歳位より以後に發る病で、月經前後の感冒や、過度の交接や、出產後下手な醫者の療治の仕損ひや、或は出產後で無くても其の下手な醫者が器械の使用を誤るなどから本病を重くすることがある。讀者よ讀者、未熟な醫者程却て稽古がてらに器械を使ひたがるものである、故に本病に限らず器械を使用して貰はねばならぬときは專門の名醫を撰ぶが肝要でありますぞ、醫學校卒業後先輩の助手などせずに、直ちに開業した醫者先生中には灌腸器や皮下注射器の使用でさへ奇妙變的に行つてゐる人が往々ありますからね――などゝ自分が下手であるくせに……。慢性症を漢方家は白帶下とか寸白とか言つてゐますが、これは急性症から轉じたり或は貧血又は肺病が遠因となることもある。其の他卑い濕つた土地或は熱帶の國にも多い。又分娩後乳汁を飲ませぬ者、流產、月經時の感冒、及び淋毒の陰門より侵入する等が主なる源因である。

〔病狀〕急性症は惡寒に引續いて發熱し、內股及び腰が牽く樣に痛い、さうなれば子宮も亦痛む、それより陰部が紅く腫れて、子宮より薄い水樣の物流れ出で、流れ出るに從つて、段々黃色の粘い稠い糊の樣なものを漏すものである。慢性症は多量の粘い液体を漏し被裙に着いて乾いた後は白い斑點を殘すものである、さうして月經が多くなり、或は月經時で無いのに出血し、さうなると妊娠すること極めて少く遂に身體瘦せ衰へ食欲次第に減り、僅かの運動にも動悸高ぶり、へー〳〵と肩で呼吸するやうになる、それでバッタリ死ぬかといふにさうでは無い、療治せずにゐても數年或は數十年苦しんでゐる、さうして斯の患者は精神常に鬱々し

畫を厭ひ人を嫌ひ、終に僻み根性になり、甚しき夫や大切な兒等までも疎み嫌るやうになるものである。

〔療法〕急性症には脂肪の少い淡泊とした食物を與へ陰部に蛭をつけて血を吸はしめ、微溫湯を「スポイト」といふ器械で陰門内に注いで洗ひ、腹部には溫かい罨劑を當て丶身體を動かさぬ様に仰になつて臥てゐるが何より宜い。慢性症は固より原因に依つても異なるけれど、一般に坐湯に浴することは大必要である、さうして百倍の石炭酸水或は三十倍位の明礬水を以て洗ひ〔矢張右の綿紗で〕左の藥を用ゐるが可い。

硼酸　二、〇　倔利設林　五〇、〇

右綿に浸して挿入すべし。

急性慢性共に便通の無い時は、

リチネ油　一五、〇

を苦い位な濃い茶の上に浮べてグッと一度に服むべし茶の上に浮べぬと、油であるからムカ／＼惡心を催すことがある、又此の油藥は胃を害するものであるから度々服んではならぬ。

▲子宮實質炎

〔原因〕これも急性と慢性とあつて何れも子宮内膜炎と殆んど同じことである。

〔病状〕〔療法〕も急性實質炎は急性内膜炎に同じく、慢性實質炎は慢性内膜炎に大抵同一であると心得て可い、けれども醫者の方に於ては整然と區別があるのであるから、斯の様な病に罹つたら、專門の名醫に診察を乞はねばならぬ、毎度言ふことながら「一日醫者」に載る事柄は應急の手當にまで覺えておかれて可い。

〔子宮病者の夫の注意〕慢性子宮病の初期は外見殆んと無病の如く見え、恰も我儘をする爲に病氣を裝うてゐるやうである、されど本人の身に取ては仲々苦痛を感じ、それで前述の如く僻根性になるものであるから、これが夫たる者は倘更愛を以てこれに接し、怠惰者我儘者など丶罵り叱るなどあつてはならぬ、又此の際斷然交接を禁じ、山水明媚な溫泉場にでも伴れて行き、身心の愉快を取らしむること甚だ肝要である。

▲陰門瘙痒

〔原因〕淋疾、不潔、手淫、房事過度、寄生蟲、及び子宮病などである。

〔病狀〕粘膜（皮の）が赤くなり、幾分か腫れて幾分か痛い、さうして最も苦みを感ずるは、痛いよりも寧ろ痒い點である、即ち痒くて堪らぬから止むを得ず搔けば往々熱をもち遂に膿樣の液汁を漏し、時としては爛れ或は食欲缺乏して身體倦み疲るゝことがある。

〔療法〕身體を安靜にし、殊に仰に臥てゐることが必要である、さうして左の藥を以て屢々洗ひ、便通の無い時は、子宮内膜炎の處で述べた下劑を服み可成搔かぬやうにせねばならぬ。

撤里矢爾酸　一、〇　温湯　半合

右溶けて冷ゆるを待ち、清淨な絹片又は綿に浸し屢々洗ふべし。又其の他、

單寧酸軟膏

を塗擦することも必要である。

▲妊娠嘔吐　俗に是をツハリといふ

〔原因〕子宮の位置異常、胃病、頑固の便秘などである。

〔病狀〕妊娠第一ヶ月より第四五ヶ月位まで屢々食前食後に嘔吐し、其の輕きものは左程の困難も無いが其の重きものは胃液を吐き、甚しい衰弱を來し、危險を招くことがある。

〔療法〕輕き者には氷片を食はしめ、沸騰散或は重曹水（重曹一、〇 水一〇〇、〇）位で治るけれども、稍重き者には芥子泥を胃部（ミヅオチ）に塗り、腹部には冷布を被ひ左の藥を服むが可い。

半夏六、〇を温湯二〇〇、〇（半合）にて十五分時間煎じ、これに生姜舍利別一五、〇を加へ、更に煎じ詰めた丈の水を加へ、一日三回に分けて服むべし。

この法は漢法醫が用ゐたのを西洋家が利用したのであるが仲々効がある若し田舍などで生姜舍利別が容易に得られぬ場合には半夏六、〇と生姜三、〇とを同時に煎じこれに白砂糖を適宜に入れて服むべし若しも此の生姜と砂糖とを入れねば却て嘔氣を催すものである

右の藥を每日連服しても、何の功も無い時は、至極重いのであるから、醫者の診察を乞はねばならぬ。

▲難　産

〔原因〕全身の衰弱、年齢の少き者、及び子宮骨盤などの機關に故障のある者等である「故障とは如何」の問に對しては、醫者で無い人には答へ難し。

〔病狀〕誰も知る如く産氣を催してから容易に産れずそこでア丶苦しいウーン、ア丶苦しいウーン、モ一ついきめウーンを繰返すのである、この位で生まるれば難産では無いか、重きは一晝夜はそろか數日に渉ることがある。

〔療法〕極重いのや或は片足片手を出してゐながら、神々生れぬなどいふ如き、恐ろしいのに至つては、固より熟練なる専門醫に依頼するより仕方は無い、餅は餅屋で熟練な産科醫は之を産ますこと神の如く「これは到底母子共助くることは出來ぬとか、或は難なく産ますとか」と直ちに判斷をつけて其の功を奏し「先生お蔭樣で助かりました」と、人をして嘆美の聲を發せしむるものである。併し難産中でも比較的輕いのに至つては醫者の手を藉らずして産まれしむる一法がある此の法は醫者でも必しも知つて居らぬ秘傳である、秘傳などゝ言へば如何にも法螺吹の樣なれど、私の父が藥と誤つて之を服ませ、大いに功を奏し其の後屢々經驗せられたのを私も亦經驗し、他書にも之を披露し數多の人を救うたのである、斯う申すと仲々六かしい藥かと思はれようが、事實はこれに反對で、非常に手輕な法である、然らば如何、曰く

　上等の日本酒　二〇、〇（一勺程）

をグッと一飲にするのである。平生酒を嗜む人でも苦しんでゐる時であるから、僅か一勺の量なれど微醉位にはなる、平生酒を嗜まぬ人なれば大いに醉うて嘔吐を爲す、其の微醉になりた人は興奮力を增し、嘔吐をなす方は其の嘔吐をする反射作用を子宮に及ぼし何れも善い成績を得るのである、そこでオギヤ〳〵めでたし〳〵、その他劇藥ならば善い藥もあれど之を言ふは

一日醫者の趣意では無い。

▲乳汁分泌缺乏症　ちゝの出ぬ病

〔原因〕身體の發育不完全、全身の衰弱、榮養物の不足精神の感動（例へば大いに驚くとか、非常に悲むとか或は激しく怒るとかの如し）其の他食事の變換、身體の過勞も亦大原因となるものである。

〔病狀〕言ふまでも無く病名の通りである。

〔療法〕原因に依つて異るとは言ふもの丶一般に消化のし易き滋養の食物及び牛乳肉羹汁の如き飲料を與へ適宜の運動をなし、哺乳器を以て乳房を刺戟し或は芥子泥を貼け、或は小兒をして屢々吸はしめねばならぬ

●内服藥としては、

炭酸苦土　一、五　茴香末　一、〇　白糖　適宜

右能く混せて三包に分ち、一日三回、食前一包宛服むべし。

●今一つ肝要な事は、精神を爽快にするといふ工夫である、或は山水を眺めたり、或は花木を愛したりして、心を平和に保たねばならぬ。今一二の例を擧れば或る婦人が夫の妾宅ばかりに日を送り、己が家を家とも思はぬを憤慨してゐる矢先に其夫歸り來り「この醜婦めツ何せさう面を膨らがしてゐやがる畜生」と怒鳴りながら自分の畜生を棚にあげてポカ〳〵鐵拳を食はせたので、如何に優しき婦人も己れの纖細き身を打忘れ烈火の如くに怒つて夫の腕に噛み着いた、ところが之より乳汁の分泌パツタリ止んで了つた、これは私の嘗て見た話である。又昔英國の某婦人が我が最愛の良人と憎々しき兵士と爭論の揚句、兵士は滅茶苦茶に夫を亂打しければ、此時まで哺乳させてゐた赤兒を下に置き有合ふ棒を以て、獅子奮迅の勢で、目に物見せんといふ大立廻り、流石の兵士もあはれ露助の如くに這々の體、婦人は其の逃げるのを睨みながら泣き叫ぶ兒に乳房哺ませければ、今が今まで活々としてゐた撫子は早無常の風に散つて了つたといふ事は、心身關係の道理として數多の心理學者が好適例にしてゐるのである。貴女方よ愛讀者よ身體の衛生ばかりで無く、心の衛生

も亦大必要でありますぞ。事の序でに「産婦の攝生法」を述べて今回の結尾とし次號には又産婦の眩暈或は産褥熱の療法或は分娩月日豫算法などの有益なる事柄を御約束申しておきませう。

▲産婦の攝生法

〔安靜〕これは産婦に最も必要なることである。即ち分娩してから二週間は蓐の上に臥てゐるが宜い、さうして最初の二十四時間は仰になつてゐて、それより後は横になつても妨げ無い、其の敷物などは能く乾いた温かいのと取換へ決して汚れたるを用ゐてはならぬ。猶又安靜は身體ばかりで無く精神上の安靜も亦嚴守せねばならぬ、産婦の夫が大罪人であることを發見しても、刑事係は産婦をして、知らしめぬやうに捕縛するものである、國家の大法でさへ此の通りなれば、區々たる家事上の事など産婦の耳に入れぬやう計らねばならぬ。

〔産蓐室〕これは可成清潔で、空氣の流通の宜い所で無くてはならぬ、大小便其他の汚物は直ちに取り除いておかねばならぬ。

〔陰部〕これは從來左程の注意し無かつたものなれど苟も衛生を重んずる者は毎日二三回微温湯に百倍の石炭酸水を加へて清淨な綿に浸し洗はねばならぬ、さうして洗ひたる後は撒里矢爾綿を以て陰部を蔽ひ、男の犢鼻褌的に繃帶をしておくが必要である其の綿は一度〳〵に燒き棄るが可い。

〔食物〕これ最も注意すべきもので、最初四五日は輕淡とした、しかも消化の宜い流動性の物を取り、それより漸次脂肪の少い魚類或は野菜類などに進み、第三週を經ねば決して以前の生活法に復してはならぬ。飲料には最初四五日間は牛乳と水と當分位の稀いものを用ゐ、それより稀い茶或は珈琲を少量に飲んでも可い。平生酒を嗜む人ならば極めて弱い麥酒を少し試みても害は無い。すべて飲食物は冷た過たり熱過たりしては一方ならぬ害がある。

〔糞便〕小便の通じ無き時は醫者に請うてカテーテル

い挿入を懈ってはならぬ、大便の通じ三日も無ければ灌腸をするか或は「リチネ油」十五瓦を水に浮べて服むべし、出産後一週間は便器を用ゐて糞便をするが宜い、決して厠に通うてはならぬ。

「授乳」乳汁を授くるは母たるもの丶義務とは謂ひながら、分娩後大凡十二時間を經て産婦の心身少しく快くなつてから與ふるが可い、さうして哺乳せしむる度毎に乳嘴を冷水或は微温湯を以て洗ひ淸むることを怠つてはならぬ。

右の外平生の通りに運動或は勉學などしようといふには少くも三ヶ月を經ねばならぬ、又交接は可成半年間斷つが可い。又不幸にして産兒死したるなどで、授乳せぬ場合に、乳房滿ちて痛みを感ずるときは、綿を以て乳房を蔽ひ、之を高く上の方に結び擧げて、左の下劑を服み、下利を促すが可い。

硫酸苦土　十五瓦　白糖　適宜　を溫湯　百瓦（半合）に溶し、稀鹽酸　十滴を加へ冷えてから一日三回に分けて服むべし。

産婦若し傳染病、痛風、梅毒、癲癇、精神病、全身の衰弱或は肺病的になつてゐる時は斷然授乳を止めて乳母或は牛乳を以て代用せねばならぬされど其の母健全で、乳汁の欠乏せぬのに授乳せざるは所謂天の賜物を棄つるので下等動物にも劣る畜生と謂はねばならぬ。

（米氏の住所は本郷區森川町一番地[illegible]八十二）

冷水浴の季節

夏は消化器病多く冬は呼吸器病の多きは毎年一般の例ですが、感冒は呼吸器病の原因となる故風邪をひかぬと云ふ要心が大切で其方法としては冷水浴の勵行が尤も功があるものなれど、寒中突然冷水浴の出來得る物でなく、夏季より漸次に習慣を付けざればナカナカ實行の出來ぬものです。

○冷水浴と云ふは冷水を全身に浴びるのですが冷水摩擦の事も世人一般に冷水浴と云ふ樣です、此にお話致しますのは冷水摩擦の方です、全身に水を浴ると云ふ事は初めての者には考へものですから之れは強てお勸

め申しません、今や氣候も追々と冷氣に赴く故海水浴場や溫泉場へ遊びに往つた人も歸つて來るでせう、此際此れ等の人に向つて特に御勸告したいのは冷水摩擦です、之れ迄海水なり溫泉なりにて皮膚を健康にし營養、神經其他の諸機能が盛んであつたのに歸つてからは其儘安閑として皮膚の攝生を怠つたら、折角健康になつた皮膚が又不健康な感冒やすい皮膚となつて仕舞ひます元來日本人の海水に浴するのは、少し海水が冷たいと氣味を惡く思つて浴びませせのが、西洋では溫度の低い海水を浴びる故初秋の候になつても、海水浴場は中々盛んで日本のように殊に寂寞を感じません、尤も斯る場合に長時間浴びて居るのは宜しくありませんがされぱとて日本人の如く熱い時ばかり浴びて冷たき海水を浴びぬのは不贊成です、詰り夏より引續いて秋の涼々した海水を浴びるのも皮膚の健康上尤も必要の事です。

○併し海水浴場や溫泉場から歸つた者に計り冷水摩擦を御勸めするのではない、冬になつて感冒やすい方には勿論、身體の健全な方も一般に勵行あるやう御すゝめいたすのです、殊に秋は冷水摩擦を實行するに尤も適當な季節で今日の季節から實行しないと冬に入つてからはナカ〳〵行れません、又行り出したならば每朝必ず缺かさずに勉めて實行するがよい、皮膚の氣分の惡い時押して無理に行るのは却つて身體に障るから之れは止める樣にして氣分が恢復したら又怠らず行るやうにすると冷水摩擦の特效は自然に現はれ外の病に冒されるやうな事も尠なく外害に對する皮膚の抵抗力が大に增して精神爽快を覺えます。

○日本人は西洋人と違つて熱い溫度の湯へ入浴るのは平氣で堪えますが冷水には極く弱い、尤も熱い湯は、リヨーマチスには特效があるが其他健康上には至つて宜しくありませぬ然るに熱い湯へ入浴つたものが風邪を冒かぬ爲めだと云つて浴室で直ぐ冷水を浴びる、理屈から言へば今迄熱い湯へ入浴つた皮膚が俄に冷水の爲め溫度を奪はれるから寒暖の度に激しき變化を起し至つて宜しくないようです、斯んな方法をするよりは

冷水摩擦を行つて風邪に侵されぬ様にする方が遙か優つて居る。

○冷水摩擦は唯無暗に行つた處で其方法が惡いと却つて健康を害ひます、日本の家屋として中流以下の家には浴室の作るもの至つて稀なる故、冬の寒い時など冷水摩擦を行る場合には浴室のない家では第一場所に差支へる、けれど場所の無い位で實行を怠るやうな薄弱な精神では迚も行り遂げる事は出來ません、先づ浴室の無い家では臺所でも、板間でも成可く閉切つて冷たい空氣の吹きとほさぬやうにして行るが宜い、慣れたらば椽へ出て行つても風の吹き通す所でも宜い、初めて實行する者が夏からかけて冬の寒さには此邊の注意が尤も大切であります、又時間は何時が宜いかと云ふと朝床を放れて盥漱の際同時に冷水摩擦を行るのが一番宜しい、夏秋は別問題として冬は一日毎朝一回が程度です。

○夫れから冷水摩擦を行る人の多くは手拭を冷水に浸し堅く絞つて全身を拭くが之れでは功が尠ない、手拭は日本の使ひなれた手拭が尤も宜しいので其手拭を冷水に浸しヨク緩く絞つて皮膚を摩擦するのです、爾うして御冷水を付け／＼皮膚の紅くなる迄摩擦しなくてはいけません、跡でゾーッとするやうでは未だ／＼摩擦が足りないのです、實行し畢つたら直ぐに着物を着るが宜ろしい、寒い時は最初上半身を摩擦して夫れが畢つたら肌を入れて下半身に及ぶようにすれば寒さに堪えられぬ事はない、併し慣れた人は素裸になり力を籠めて前の方法に從ひ全身を摩擦するのがよい。

○冷水摩擦を畢つたら靜養して居るより牛乳でも飲んで三十分間位運動する事を勸告します、運動にも色々ありますが過激な運動は宜しくない、公園に近い所なら公園を散歩するのが最良法なれど、公園地のない處は成可く人家の少ない樹木のある處を選ぶべく、其れも自由に出來なければ市中を散歩するが宜しい、運動すると云つても散歩する位を程度にしたいのです、又冷水摩擦を行るには朝寢は禁物です詰り朝は早く起き、て冷水摩擦を行り、牛乳を飲んで三十分間も散歩して

歸つて來たら二三十分間も少し憩いて夫れから朝飯を食すれば飯も旨く喰られるし精神も非常に爽快になり此上もなき養生になります。

○生來身体の虛弱な者は醫師の診斷を待つて後に決行するが宜ろしい。貧血性の者などが体質の冷水摩擦に抵抗する力のないのに押して行るのは却つて身体の害となります、男子に限らず婦人方にも小學校時代の子供には此冷水摩擦をお勸め申します、予供などには母親なり下婢なりが手早く行るように側で手傳つてでも實行したいものです。

衣服書畫保存の一法

黴に就ての注意　（丹波博士の談）

書畫幷に衣服等に生ずる黴菌に關し丹波藥學博士の説を御紹介申さん。

從來本邦に於ける古文書畫並に衣服等の保存に就ては科學發達の今日に當りては敢て完全の方法と稱するを得ざれども梅雨の後若くは土用の交に曝晒、蟲干し其後十月末又は十一月初に再び風入するを以て唯一の豫防法とし因襲年所を經る久しきも別に著しき被害を蒙るを聞かざりし此等の物品に生ずる黴菌は專ら「けかび」モルコール種類多く稀には麹菌アスヘコルキルスの類もあれども悉く皆其菌絲體は白色にして生長するに從ひ綠色の胞子嚢を生じて多少着色す然れどもこの類の「かび」は日光に曝露すれば枯死するが故に夏秋の風入れの際には悉く枯死す故に此黴菌を生じたる物品と雖も風入れの後絹布の切れにて能く拭へば痕跡を止むることなし然るに頃日余が所藏の絹地の畫幅に一種の黴菌を生じたる故普通の方法にて風入せしに初めは「けかび」の如く白色なれども日光に曝露するも少しも感じなく枯死せず却て益生育して暗褐の頂嚢を生じ日々繁殖し終に拇指大の斑痕を書畫の數個所に生じたり此黴菌はキルスニーゲル「くろかび」の類にして本邦に於ては昨年來初めて發見したれども歐洲には普通

にある「かび」なり恐らくは近來輸入したるならんとの說あり此「かび」は日光に曝らすも枯死せざれば何の功もなし此「かび」を生じたる物品は唯風入のみにて保存すれば「かび」は益〻繁殖するのみならず他に傳染す余は此の事を知らず〳〵不幸にも數幅を此の黴に傳染せしめたるを以て應急手段として「フォルマリン」消毒の必要を認め直に淺草松葉町の東京瓦斯消毒所に之れが撲滅方法を託し辛うじて病根を滅したり書畫は無論衣服等の此の類の「かび」を生じたる場合にはフホルマリン瓦斯消毒の外に良法なし昇汞、石炭酸等殺菌力の強き消毒藥あれども此等物品に應用する事ならず地質若色に變化をなさずして消毒するには「フォルマリン」瓦斯消毒の一方あるのみ猶此「かび」の傳播の經過發育の景況等委細に報告する時機あるべしと思へども目下蟲幅風入れの時期なれば江湖珍藏家の注意を求む。

（問）藥物を用ゐずして不眠症を治すは如何にすべきや、又睡眠時間の程度を問ふ。

（答）一日の課業に注意し可成終りには簡易の課目を課するか中は娯樂的にして自然に腦を休ましむるがよし、又就眠前の飲食を禁じ、一時間位散歩するがよし睡眠時間は通例八時間が程度なり

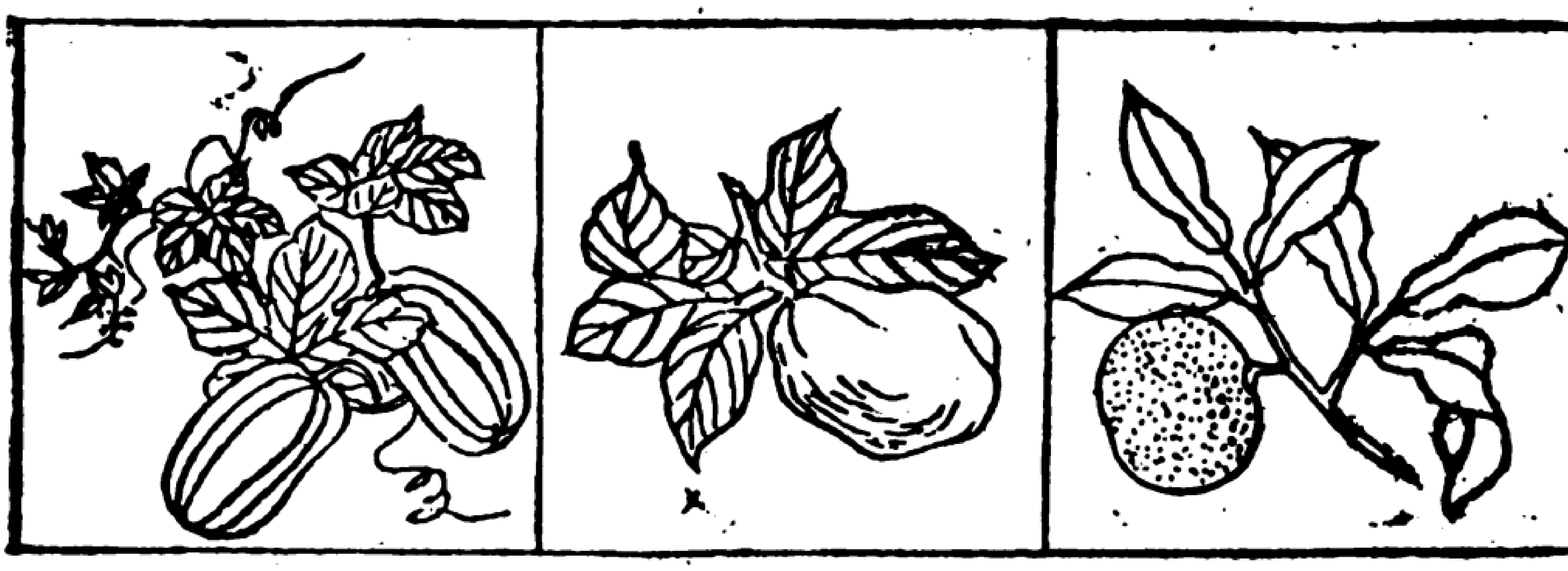
梨と林檎の貯藏法

▲罐詰

充分成熟した形狀の正しい梨菓を取り、其の薄皮を剝き半分に截り、尖銳なる小刀を以て、果心を刳り取り薄片を去る、そして一々菓肉が變色しないやうに直ちに清水の中に投じ置き、梨實一斤に付四半斤の割合に白砂糖を用意し、先ず梨實を鍋の中に入れて熱湯を其の上に注ぎ懸け文火の上で徐々と熱するのである、其處で菓肉が稿程を以て刺貫すことを得る位軟らかになつたらば、他の鍋の中に清水三合と右の割合の砂糖を投じ、文火の上で攪拌しながら滓渣を除き糖液を製へるのである、梨實が充分に軟かになり糖液も出來たならば、網杓子のやうなもので梨實を掬ひ上げ、徐かに之れを糖液の中に入れ、凡そ五分間許り煮沸した後ち清潔にした罐に詰、蓋をしてハンダにて封づる。林檎の罐詰法も又是れと同じ。

▲調製貯藏

これに用ゐる梨實は、形狀が大きく又た善く成熟したもので且つ成る可く漿液の多い種類を撰ぶことが必要である、先づ梨實の皮を剝き半截し、果心を除き、清潔なる盆の上に列べ、梨と同量の砂糖を其の上から撒布し、其の上に梨實を置てはまた砂糖を掛け、斯くの如くして全く果實を列べ盡したならば、其の上を清潔なる白木綿の布片のやうなものを以て覆ひ一夜其の儘に放置して置き、而して翌朝になつたならば、これを鍋の中に移し熱火の上に置て徐に煮沸せしめ、然る後火力を弱めて、漿汁が充分軟かに糊狀となり且つ混濁のないやうになつた時に、其の少量を別に移し置て、殘れるものを容器に入れ、冷所に放置して冷却せしめる、其の容量が減ずると共に、容器の上部に幾分かの空所を生ずるから、其の部



分には前に移して置いた少量の漿汁を加へてこれを充たし、然る後ち固く封緘して貯藏する林檎の貯藏法も又同上の方法による

▲ジエリー

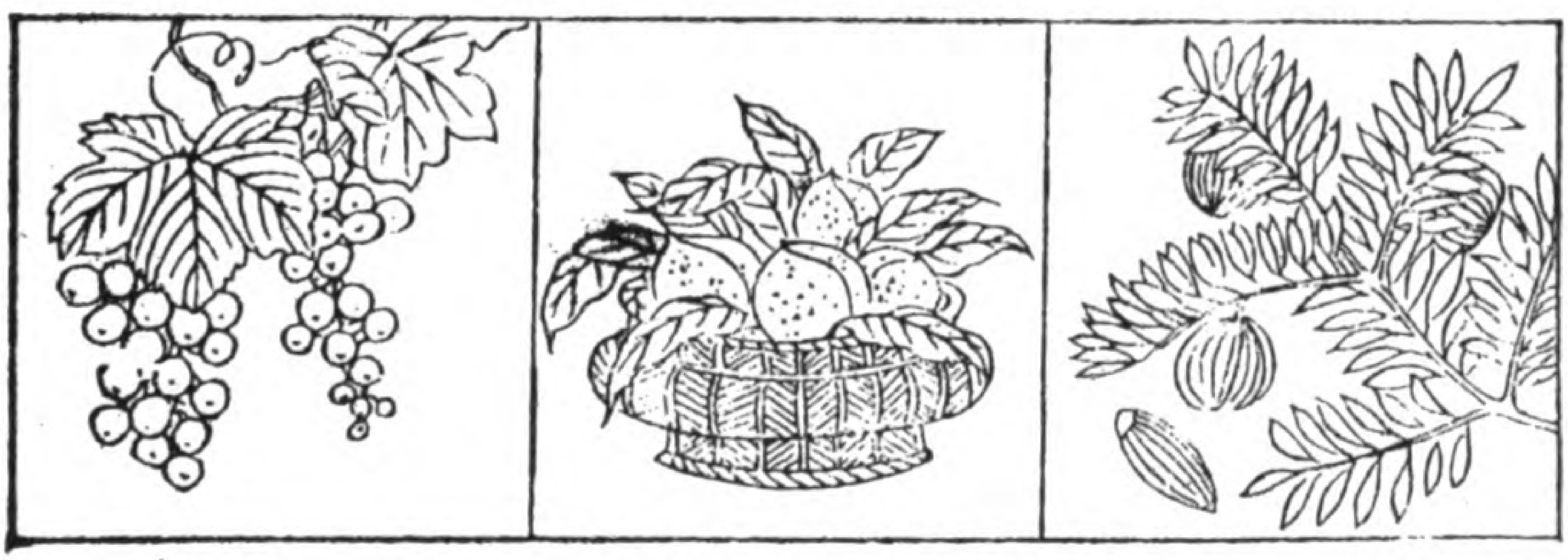
梨のジエリーを製らへる方法は、梨實の外皮を鄭寧に布片で拭ひ、それを輪截にして鍋の中に入れ、果實を覆ふ位に清水を注ぎ鍋に蓋を施して果肉が充分軟らかになるまで煮沸せしめた後ち、フランネルの片で製らへた嚢の中に移し、輕く壓迫して漿汁を搾り出し、其の漿汁三合に對して、製精の砂糖一斤及び檸檬一個（檸檬の實のなきときは檸檬汁二三十滴）を加へて能く攪拌し充分漿汁と混合したるとき、これを鍋の中に移して強熱の上に置き、徐かに攪拌しつつ表面に浮び來る泡滓を除き漿汁が粘狀を呈して其の表面に薄皮が生ずる位になつた時に、熱湯の中にて温むたる容器の中にこ

れを移すのである、其の封緘の方法は膜質の強靭なる紙にて固く封じ、其の膜紙に少量の水分を與へて收縮せしめたる後ち、冷暗なる場所に貯藏するのである。

林檎のセレーも粗ぼ同様なり。

▲乾果

すべて菓物を乾燥せしむるは空氣の蒸發作用によりて短時間に動物質又は植物質より成れる物體より其の含める所の水分を除き去ることである、此の方法に依りて乾燥したる物質は、其の風味及び滋養分を失ふことがなく、且つ決して腐敗することがない、化學上から謂へば、果實の中に含有して居る澱粉質も亦た糖分も全く同一のものであつて、即ち菓實が成熟するに隨つて、其の中に含まるに澱粉質物が漸々と糖分に變化して菓實に甘味を與へるのである、（タトエば澁柿を乾



燥せしめて甘柿となすが如し）干菓を製らへること即ち菓實乾燥を行ふは、未熟にして澁酸の味強き果實をして、食用に供せしめ且つ長期間の保存に堪えしむる爲めに人工を以て果實中に含まる丶澱粉質を葡萄糖と稱する糖類に變化せしめる、即ち菓實所含の成分の糖化作用を促進するのであるこれと共に水分が蒸發する故に内容は濃厚となり隨つて味が増す理由である、頃來乾燥菓實が漸々世人の嗜好を受けるやうになつたので、我邦に於ても菓實乾燥器を用ゐるものが多くなつた。

乾燥菓實の中で殊に苹菓又は梨のやうなものは、切截すると截斷面が直ちに酸化して變化するから、晒白を行ふの必要がある、殊に干果を市場に出して賣品にする場合には、晒白を行へば外觀が美麗になり、菓實固有の香氣を保存する力を増し、隨つて其

の干菓の品位を高める、扨て之を晒白するには、乾燥したる後ち直ちに硫黄煙の中を通過したる水中に浸漬するのであるが、硫黄の品質によりて、浸水時間を異にせねばならぬのであるから、これは其の場合に臨んで經驗を得るやうにせねばならない、併し餘り長く浸漬して置けば乾燥菓實が硫黄の臭氣を帶ぶるのみならず、また有害であるから注意せねばならない。林檎の乾菓法又同じ日本梨は關東地方が著名なる產地であつて、神奈川、千葉等が最も多くこれを產出し、東京の靑物市場に出るもの丶優品は、武藏國河崎村大師河原及び下總國八幡村のものである、此の他畿內地方及び北陸地方も亦た良品を產出する。

簡易 佛蘭西料理

魚肉は佛蘭西語でポアッソンといふ、凡て魚の拵へ方は形のまゝ出すものと切身と兩方あつて、鰭、脊の鰭などは凡て切り取つて仕舞ふが西洋の習慣なれど日本にては附けるが例なり、その料理は重もに蒸すのと燒くのと油で揚げると、茹るのとで其外はないけれど、それを一々述べ立てると隨分うるさき故、見合せて、格段なるもの丈け記さん。

(一)フイッシユ、ノルモンド　材料は魚の肉の燒き蒸したるものとオランデース、ソース、チース、胡椒の四種。その方法は魚の骨を去り深き燒皿へソースを少し入れ、其の上へ魚肉を入れて又汁を充分に掛け、又其上へチースを粉にして振り掛け、ストーブの竈の中へ瓦を一枚敷きて其の上へ右の皿を入れ少しく色の着く迄强き火にて燒くなり魚の肉は前以て燒いてあるからソースは少し色の着く位迄燒く時はそれで中まで充分に火が通るなり、魚は身の白い魚に限る。

(二)マヨチス、オブ、ロブスター材料は伊勢蝦とマヨチスソース一合にてよし蝦を鹽湯で煮、皮を去り、縱に二つに切り、右のソースを掛けるなり、又は皮のまゝ二つ切りにして汁を掛けても宜し。

(三)マヨチス、オブ、サルモン　材料は鱒の切り身、

方法はそれを蒸して充分に火の通つた時にそれを冷ましこれにマヨネースのソースを掛け用ふ。

(四)グリル、フイッシユ　材料は魚の頭附きでも又は切り身でもよし、オリブの油、鹽、胡椒。その方法は魚を充分水洗ひして水を切り、尤も切り身の時は先きに切なり、これをブリキ製の四角な焼皿へ入れ魚肉へオリブ油を少しさし、それから鹽と胡椒とを振り掛けストーブの中へ入れて焼くなり、焼く時には時々ストーブから出して肉から出た汁を再三肉の上に掛ける焼き上げた魚は成る可く冷めざるやうにして、これに各種の掛け汁を掛けるなり、或は切り身ならば小皿へ盛る、丸の儘ならば大なる皿へ盛りて掛汁は別に鉢に入れて出すなり。

(五)ボイルドフイッシユ　材料は魚肉極少量の酢（酢は日本の酢でなくして西洋の酢）方法は鍋に充分湯を沸かして極少量の酢を滴らし、それへ魚肉を入れて極強い火にかけ急に茹でるなり、切り身ならば前の通り小皿へ盛りて汁を掛け、丸の儘ならば別に大皿に盛りて汁は別に鉢へなり。

(六)フライ、フイッシユ　材料は魚の切り身或は小魚を用ひ、麺包の粉、饂飩粉、卵、揚油（極上等にすれば上等のオリブ油を用ふるも宜し）胡椒、鹽、その方法はまづ鹽と胡椒を魚肉に振り掛け、饂飩粉を附けて再び卵で濕めし、次に麺麭の粉を附け、熱したる揚油にて揚げる、或は麺包粉を附けるを略する事あり、魚は切り身を用ふるよりも小魚を用ふる方よろし、例へば鮎のやうなもの或は鮃、鰈、鞋底魚などよし。

(七)フライド、オイスター　材料は蠣、饂飩粉、卵の白味。方法は卵の白味を泡立て饂飩粉を溶き蠣を一寸湯煮し、水を切りて右の溶きたる粉の中へ入れ、掬ひて煮へたる揚油の中へ入れるなり。

凡て魚肉を調理する時は極強き火にて急ぎて料理をするなり、魚の料理の名は以上二三の方法へ種々の掛汁を掛けるなり、併し調理法は多少少しづゝ品に依りて異はることあれども大體は大同小異なり、重に魚肉へは白色の掛汁を多く用ひ油揚したる魚へは其魚の上へ

決して掛汁を掛けず、多くは掛汁を用ゐずして塩味にて食するなり、魚の肉へは必ず茹でたる馬鈴薯を附けるものなり。

掛汁の製法（附グレービ）

（一）グレービ及びソースはストック及びグレービを或は香を附け、又は色を附けて味を附け、或は淡くし或は濃くするなり、而して魚、鳥、獣肉を充分美味ならしむるのが掛汁の目的なればそれを作ることは餘程注意せざるべからず、グレービは元來肉より取るものなれども割合に高くつく、故に、其の代用として肉を焼く時に出る焼汁を貯へて置いて脂肪分を成る可く掬ひ去るなり、若し濃くて味が濃厚なる時はストックにて淡くするなり、決して水は入れざるなり如何なるソース及びグレービにても出來るだけ注意して熱くして用ふるをよしとす、若しソースを濃くせんと欲せば饂飩粉或は葛を入れて濃くするなり。

（二）アップル、ソース　材料は中位の林檎六つ、砂糖少々、バタ少々、水或はストック。その方法は林檎の皮を取りて其心を去り、水に浸け置き、鍋へ水の林檎の實を入れて軟かくなる迄煮るなり、軟かくなりし時に裏漉にて漉し再びそれを鍋に入れて熱し、バタを其處へ入れるなり又塩と砂糖を遠火に掛けて成る可くそれを濃くし、野鳥又は豚の肉へ供へ用ゆ。

（三）フレンチ、ホワイト、ソース　材料はバタとメリケン粉各二匁、牛乳一合、卵の黄味二つ、ストック一合、小さい玉葱一つ、パセリ、ベーリーブ等なり、その方法はパセリ、ベーリーブをストック牛乳と共に鍋に入れて静かに火を入れ、別の鍋へそれを漉して入れ又バタと粉を其の中へ入れ、斯くして糊を拵へるやうに煮るなり、下す前に卵の黄實を入れる、されば白きソースの元と成ることとストックの如し、其の汁を肉へ用ふる時は牛乳或はストックにて随意に淡くするなり

（問）食膳に向ひながら書物をよみ、或は精神を労しつゝ食事すれば如何なる害ありや、
（答）胃と脳とを同時に使ふは害あり、食事の時は専ら食膳に対はざるべからず、尤も食卓をなして愉快なる音楽、興味ある会話等をなし興を添ふるは甚だ衛生によし、故に食前食後は少くも三十分以上は脳の使用を止めざるべからず

月見の料理

今五日は陰暦廿六夜待に相當すれば月見の献立を左に記さん。

●皿　烏賊の鹽燒、皮附林檎
●猪口　烏賊と獨活の黒合
●吸物　烏賊と藻ズク、ソギ柚子清汁
●菓子　満月羹

仕方は先づ烏賊の足と甲羅腸を除き能く水洗して皮を剥ぎ鹽を盃に一杯と水二杯を混じ前の烏賊を浸して串を打ち烈火にて燒くなり燒上れば適宜の大さに庖丁すべし林檎は水にて洗ひ二ッ割とし心を去り程好く切り皮に肉を二分程付けて剥き冠せて前盛として烏賊に添へて出す△黒合は烏賊を一口に食される程に薄く庖丁し味淋を醤油等分の汁にてザッと煮る獨活は皮を除き適宜に切り水洗して味淋二杯醤油一杯の汁にて煮る又黒胡麻は洗つて焙碌にて煎り能く擂り胡麻の濃き程に味噌を加へ砂糖と煮汁を交ぜ裏漉してザット煉りたる味噌に烏賊と獨活を菜箸にて掻交せ器に盛る也△吸物の烏賊は薄くソギ鹽を撒り少時置きて沸騰湯を注ぎ椀に盛るモズクは乾物店にあり之を水に浸し鹽氣の去る迄數度水を取換然る後布巾にて絞り煮汁と醤油にて煮て烏賊共に碗に入れる柚子はソギて水洗し口に入れる清汁は普通の拵方なれば述べる迄なし△満月羹は寒天一本に水二合砂糖百五十匁の割にて先づ寒天を水に浸し細かにチギリ二合の水と共に鍋に入れて沸騰せし時に砂糖を投入し二三分間煮詰絹篩にて漉し茶呑茶碗を並べ置きて之に注ぎ一時間位經て茶碗より拔出せば満月の形となる△烏賊はアオリ烏賊、眞烏賊、鯣烏賊、鎗烏賊、姫烏賊等の種類ありて何れと限らねど眞烏賊アオリ烏賊等は風味好し凡て活よきを撰むが肝要なり。

秋の庖廚

△薩摩芋の狸汁　芋の皮を剥き、水にてアク出しをなし、之を卸して、摘み取り、油に揚げ、牛蒡をさゝ

がし、暫らく水に浸し、アクを抜き、味噌汁となす、但し之には山椒の香味を入べし。

△初茸汁　初茸を細かに切り、白水に浸し置き扨後能く洗いて擂鉢にて擂り、鰹節煮汁にてトロロ位に擂り延べ、篩斗にて漉し、汁に交せるなりあしらひは摘み菜、柚子など宜しからん。

△蝦と白瓜の岡盛　蝦を湯で丶、肉を抜き出し細く裂き、鹽酢に入れ、直ぐ酢を切りて岡盛にする、又白瓜を一寸程に切り、心の處までカツラに



剝落し、之を堅く巻きて小口より薄く切り、直ちに薄き鹽水の中に放ち入れ、取上て水氣を去り、酢にて洗ひ、更に酢を切り、岡盛にして出すべし

△せゐごの洗ひ　せゐごを三枚に卸して、皮を去り薄く切りて、金臭き水にて洗ふ時は能くはせるなり、はせたる後良水中に入れ箸にて攪拌しながら洗ふべし、但し魚は新鮮ならざればはせず、此の附合には若芽、わさび。

△霜ふり鰹　鰹を卸し沸湯に入れ、上面の白み

たる時、上げて水に冷し、厚目に小口切にし、時の青物に卸し、山葵を添へて生醬油にて出す、何魚にても作れど赤き身の魚最も好し。

△すいきと白瓜の白胡麻和へ　ずいきは上下より皮を剝き、一寸の長サに切り、竪に刻み水に浸し灰を拔き、沸湯にてゆで、笊を上げ、白瓜の皮を剝き二割にし、種を去り薄く刻み、淡鹽を振掛置く、胡麻は洗ひてよく煎り、熱き内に擂り、之に砂糖と醬油を入れ、ずいきと白瓜を一所にかき交せるなり。

△蓮根の胡桃和へ　蓮根の皮を剝き亂切にし、湯でて籠に揚げ水氣を去り、胡桃の皮を取り、擂鉢にて擂り、燒鹽と白砂糖を加へて和へる、蓮根は牛肉に等しき滋養分ありと云ふ。

△鮎の甘露煮　最初鮎を素燒にして一日二日乾きたるを鍋に入れ、大豆を一摑撒りかけ、水を十二分に入れて文火にて二時間煮詰め、其上に花鰹を撒りかけ、醬油味淋酒醬油を入れ、又た徐々煮詰るなり、かくすれば鮎は形を崩さずして骨ぐるみ食せらる、豆は何豆にても宜し。

△薩摩芋の梨もどき　生の芋の皮を能く剝き、水に浸し灰を拔き、長サ一寸五分、厚サ一分角位の線切になし、酢に鹽を加へたる中に三十分許浸し置き、而して其の酢の汁にて煮るなり、煮上りたる時鉢に盛り、白砂糖を多くふりかけ、よく交せて食す、加減よく煮えれば恰かも梨の味に等しく、口取物の附合にして上品なり。

△衣芋の醬油煮　土芋を洗ひ、衣のまゝ最初より醬油にて煮、之を食ふ時、衣を剝ぎながら食す、普通の鹽湯でよりは大に風味あり。

△栗のうま煮　栗の皮を澁ともに厚くむき、弱火にて湯で、三十分位にて水を取りかへ、よく湯で、水をこぼして、砂糖と水と等分に一杯宛入れ、醬油を入れて煮るべし。

△鰕松茸と煎玉子　小鰕の皮をむき、松茸も程よく切りて共に湯煮して煮汁をとり、鰕と松茸を筋斗に引上げ、薄味を付け皿に盛り、鷄卵を溶し、鹽と白砂糖

にて味つけ、煎玉子となし、鰕と松茸と盛分にすべし

△煎松茸　生の儘適宜に切り、空鍋を焼きて雑と煎つけ、汁を去つて醤油少許と柚子の搾汁を一緒に注入れ、能く攪拌して器へ盛り、胡椒の粉を振掛て出す、但し木杓子にて攪廻すべし。

△焼松茸　松茸の土付を去り、濡紙にて二重程包み之を釜火の中へ埋め置けば少時にして蒸焼るなり、扨て之を裂きて酢醤油を付て食す。

△鮎の魚田　先づ素焼してのち味噌を塗り、一寸炙り、又た其味噌を付けて焼き、其上へ細かき賽の目の生姜をふりかけて出す、但し味噌に砂糖を入れて擂るなり。



△精進揚　藤豆の筋をとり、二つ位づゝ寄せて揚げたるもの、又は紫蘇の實の穗の莖を殘し一本づゝ揚げたるもの、又は生姜の根を四つ割にし、莖を一寸程付け揚げたるもの、共に秋季の食品に適す

△〆め鯖　小鯖を三枚におろして小骨を拔き強目に鹽を振りて押に掛け、一時間ほど經ちたる後水にて洗ひ、十分間ほど酢に浸したる後爪にて皮を剝ぎ取りて適宜に切るべし、又葱をザツト茹て細く裂きて酢に浸し、夫より一寸五分位の丈に切りて前の鯖と盛合せ、酢と砂糖を加減に割りたる摺味噌を其上へ掛るなり。

▲衛生顧問▼

(問)(一)髮を洗ふには何を用ゐてよきか(二)顏を洗ふには井水川水冷水溫湯何れが善きか(三)ニキビの者は脂肪食物の取捨如何。(佐賀のとれ子)

(答)(一)加里石鹼を附けて洗ふべし(二)水の性質に依る、冷水善し(三)脂肪食を餘り取らぬが善し。

(問)貴舘發行の女學世界一日讀者を喜んで讀んでゐますが未だ女の白帶に就いて一度も御記載無き樣ですが出して下さいませんか。(山口の福運女)

(答)本誌に子宮內膜炎と名づけて出てゐます。

(問)私は顏面に「にきび」出て困ります治療法を敎へて下さい。(伊藤多喜子外三人)

(答)前々號にも說きましたが貴嬢つたのを一つ答へませう俗「にきび」は醫者の方では面皰と申しまして之を治すには爪或は指を以て脂肪を壓し出し其の跡、夜は硼酸軟膏を塗擦し晝は屢々醋を塗布すべし。

(問)(一)顏に澤山豆つぼの如き者出きますが其の治療法(二)書物さへ見れば頭がやめてきます、やめる所から段々毛が縮れます其の治療法を敎へて下さい。(遠州の愛讀者)

(答)(一)「豆つぼ」とは大方豆粒の方言でありませうがたゞこれだけでは分りませぬ今少し詳しく言ひなさい(二)やめるとは痛むことか其の意分らず方言で無い樣に言はれたし、若し痛むといふ事ならば充血症でせう便通のある樣にして精神安靜法が肝要である。

(問)私はお腹が冷えて夏と雖も少し寒氣を感じますと引付る樣に痛んで困ります其の治療法を敎へて下さい又何の樣なのは不姙症でせうか。(何玄)

(答)四季に拘はずフランネルの腹掛を常に纏うてゐて御覽なさい貴女に限らず何人と雖もそれが必要である何となれば胸腹は睡眠中でも呼吸消化の作用を休まぬ大切な所であるからである。腹が痛むとて强ち不姙症とは言はれませぬ。

(問)胃擴張兼消化不良症で困難してゐますが其の治

療法及サンデン電氣帶の功力の有無を敎へて下さい。(宮内春子)

(答)これは一昨年の「一日醫者」に出てゐますが今つまんで申せば淡泊な消化の善き滋養物を取り左の藥を內服して御覽なさい。

人工加爾々斯泉鹽　五、〇

右早朝空腹時に三勺の水に溶かしてグット一度に飲み後水にて含嗽すべしそれから、

含糖百弗聖　三、〇　マルチン　〇、三

右能くませて三包に分ち一日三回食後壹包宛、何れも二週間連服して御覽なさい。併しそれだけでは治らぬけれど多少の効は必ずあります。

電氣帶は試みた方が善いでせう。

(問)拾九歲になる女子子宮下りて膣口を滿し居候不治の病氣に候や若し他に療法あらば御敎示を乞ふ。(愛知の貞女)

(答)それは子宮脫出でせう放任しておけば膣外に出るやうになる、治らぬことはありませぬが婦人科專門醫の手術を受くるより仕方は無い。

(問)一日醫者中「濃毛法」は何卷にありますか。(京都の[illegible]生)

(答)第四卷第九號に出てゐます。

(問)(一)頭髮の癖を何うしたら宜いでせうか。(二)顏面のきめの粗いのを治する法は如何。(年枝子)

(答)(一)每度この問を受けますが殆んど無でせう併し答者も研究中なれば若し正確なる治療法を得たら必ず發表しませう。(二)診なければ分りませぬが多分脂肪の少いのでせうされば滋養強壯の食餌を取つて身體の強健を計られよ。

(問)二歲なる男子の氣管支加太兒及び下痢し易きを治する療法を問ふ。(安藝の花子)

(答)濕布繃帶蒸氣吸入は大必要で內服藥としては御地の醫者と御相談の上左の法を試みられよ。

安知必林　〇、六　　實荅越幾斯　〇、〇二

單舍　四、〇　　稀鹽酸　五滴

水　三〇、〇　　右一日六回分服(二週間連服差支なし)

(問)膀胱加太兒に何か良藥はありますまいか。(遠州少女)

(答)これも劇藥なれば御地の醫者と御相談の上試みられよ。左に、

鹽剝　三、〇　水　一〇〇、〇　右一日三回分服

ザロール　一、五　白糖適宜　分量一日三回一包宛

(問)二十歳の女白色の粘液絶えず出で候が結婚致しても差支無きか又其の療法を聞度候。(心配女)

(答)治してから結婚せらるゝが善い療法は本誌の子宮内膜炎を見られよ。

(問)發汗過多を治する方法を問ふ。(福近)

(答)澱粉或は明礬を撒布して成るべく皮膚を乾かすが肝要である、今一つ面白い法を敎へてあげませうそれは、栗皮を熱湯で澤山煎じておいてそれを風呂桶に入れて入浴することを毎日續けるのである腋臭及び陰部の臭きにも功がある何となれば栗皮は鞣酸といふ藥を含んでゐるからである。

(問)子宮手術を施した者は姙娠せぬとありますが果してさうでせうか。

(答)斯樣な問は初めて聞きますが左樣な事はありませぬ手術にも依りますけれど姙娠せぬ者でも手術を施して初めて姙娠した者さへあります。

(問)今年の一月初めて月經ありしが其の後は更に無くて、而も白き粘液出づ治療法如何。(十五才の少女)

(答)矢張子宮内膜炎でせう本誌を見られよ。

(問)髮毛の黑くなる法を問ふ。(四葉)

(答)此の法は恐らく無いでせう。(研究中)

(問)年十九歳にてし未だ月經無し折々腰痛あり如何にせば善いでせうか。(愛讀女)

(答)身體發育或は精神發育の遲きためか或は子宮に故障あるか或は何か他に病あるのでせうされば其の原因に依りて療治せねばなりませぬ例へば肺病ならば肺病の療治胃病ならば胃病の療法を施すが肝要である又身體の發育遲いのならば强壯法を施すが善し。

(問)咳の療法を問ふ。(長門の愛讀者)

(答)疣を糸で其の周圍を結んでおきそれから竹を網針程に削つて其の先へ鹽酸を一寸つけて之を疣に附るが善い。(可成醫者に頼まれよ)

(問)糸先生の住所は何處でせうか嘗て廣告してあつたけれど忘れましたら。(實問生)

(答)東京市本郷區森川町一番地であります。

(問)毎夜八時半になると眠くて堪へられませぬ病名及び治療法を問ふ。(十八才女)

(答)單にこれだけでは分りませぬ種々の病が原因になりますし又勞働或は精神の過勞或は暴食暴飮或は朝起の早過などにも依りますからね。

(問)健康に變りありませぬが便通が二日乃至三日に一度しかありませぬ何うか之を毎日あるやうにして下さい。(首失古)

(答)精神を費さぬやうにして當分の中即ち毎日あるやうになるまで米と麥と等分の飯を試みられよ必ず治ります。

(問)腋臭で困りまして色々の方法を試みたが功無し何か方法ありますまいか。(明春醫科研究を除いて同度女)

(答)前述の法即ち(蛮近生)の答を試みられよ。

(問)小生便秘に胃弱であるから濯腸を度々致し候が一時的で功無し舍利鹽を用ゐれば下りますがとれ胃に害なきや。(若代の中島生)

(答)便秘の原因に依て療治せねばならぬ舍利鹽は胃に害あり度々用ゐてはならぬ御地の醫者と御相談の上左の藥を用ゐられよ。(但し劇藥なり)

重曹　三、〇　硝蒼　一、五　ホミカ越幾斯　〇、〇八

乳糖　適宜　右三包に分一日三回食後に壹包宛

(問)夜小便の治療法を問ふ。(はく子)

(答)本誌第四卷第八號の一月醫者を見られよ。

(問)年中頰が異亦で寒中になりますと「ぶつ」ましがどうか全治法を問ふ。(一乙生)

(答)「ぶつ」ましがとは其の意分らず方言で無い書方にして下さい。

(問)產後七十五日未だ下りもの止ます、(一)溫泉療法(二)婦人科專門病院(三)流轉道中の可否御敎授を乞

ふ。（讀者てふ）

（答）（一）本誌の一日醫者を見られよ（二）大學病院に優る者は殆んど無し（三）汽車旅行余り宜しからず。

（問）筋肉僂麻窒斯の療法伺度候又電氣治療は其の功能如何且つ電氣器械の價を問ふ。（麹町の花子）

（答）御地の醫者と相談の上左の藥を試みられよ。

沃剝　一、〇　撒曹　四、〇　苦丁　一、五
單舍　八、〇　水一〇〇、〇　右一日三回分服

電氣治療法甚だ可なり器械の價は醫療器械屋に問はれたし（色々ありますからねー）

（問）口中臭くて困ります其の治法を問ふ。（早々女）

（答）原因にも依るが第一口中を清潔にし御地の醫者と相談の上左の含嗽藥を試みられよ。

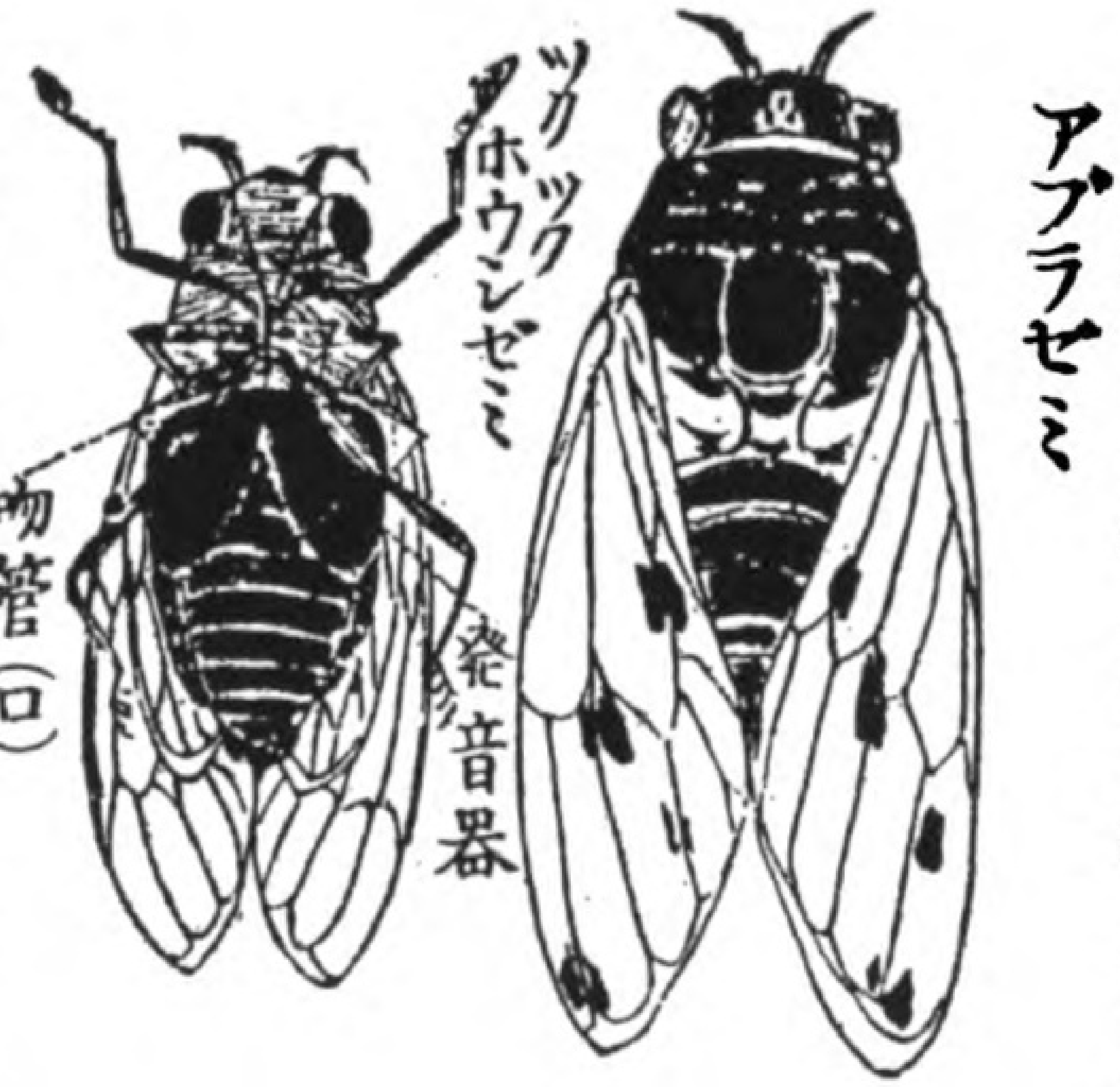
３％鹽剝水　右一日數回含嗽

▲質問心得

（一）楷書にて書かれたし。（二）方言を書かぬ樣にして下さい。
（三）漠然たる事を問はぬやうにして下さい、例へば「胃病で困ります其の療法」とか「痩せますが如何」とかの如し胃病の中にも色々あるし痩せる原因は千種萬樣殆んど大抵の病氣は悉く痩せますからね。
（四）面白半分の問は答へず例へば「月經時には神佛の前に出ても罰は當りますまいか」などの如し。
（五）楷書に墨を除つて鉛筆で書いたのは不明瞭で分らぬから答へず。
（六）其の問が次號の一日醫者に出すのは答へず。
（七）餘り複雜で三四頁を費さねばならぬ樣な問は他日又載せようから直に答へぬことあるべし。
（八）世道を害する問は斷然答へず例へば「不姙法は如何」などの如し。
（九）急病の治療法を早々返事せよと言はるゝには答へず何となれば到底間に合ふ答は無い、故に平生に心得ておくべき答であるからである
但し心得の爲に教へよと言はるゝはこの限りに非ず。
（十）郵便切手封入の問でも其の答を十日間は延引することあり
（十一）療法を問はるゝ方は可成左の順序に依つて認められたし、
年齢、職業、遺傳、既往症、現在の症狀
其他醫師の參考となるべき事。

蟬の研究

陽は斜平に射下す樹木の蔭がくれに蟬々の音を立てゝ頻に大聲を放つ樹上の喇叭—蟬に就て研究を試むるは頗る趣味ある事なり、蟬は昆虫の内の有吻類に屬し、彼の蚜虫や南京虫の兄弟分なり、蟬の種類にはアブラ蟬、ツク〳〵ホーシ蟬、ニイニイ蟬、カナ〳〵蟬、ミン〳〵蟬、クマ蟬、ハル蟬、チッチ蟬、エゾ蟬等あり、さて蟬の鳴くは口で鳴くにはあらず腹にて鳴くなり、蟬の腹の上部には丸き形ちしたる鱗の如きものあり、而して此の鱗の下に穴あり、その兩側に鼓膜あり是れ即ち蟬の發音器なり、故に蟬の鳴かんとするや、鼓膜の筋肉を動かして小さな聲を發す、やがて此の聲鱗の下の穴に響いて聞くが如き騒しき大聲となる、例へば大鼓の皮を叩くと其音洞穴に響いて種々の響をなすと同一理なり。



世俗に空蟬と云ひて始終沈默を守る者は雌蟬にして、其の尻の尖端に産卵管あり、蟬の口は雌雄共に鳥の嘴の様に長く尖り、之をもて樹の汁や露を飲むの用に供す。

蟬は一見した所にては人類社會の爲めに何等の利益も無く、又た何等の害惡もなきものゝやうに思はるれど、實際は仲々然らずして、見かけによらぬ惡るさをするものなり、即ち親蟬が夏季樹の皮の中へ卵を產み置けば、其が秋の暮に孵化して、地中に入り、根切虫といふものになり樹の根を食ひ枯らし、かくて其の年を此の地中に冬籠りし、翌年の夏蛹に化けて地上に這ひ出で、ソロリ〳〵樹の上へ登り、身に纏ひ付けたる具足様の甲羅を脫して蟬になり、ソコデ一夏を鳴き明かし鳴き暮らして空蟬のはかなきためしを世に示すなりけり。



家庭と新聞

戰爭百話

水の欠乏

滿洲從軍の一兵士より陣中生活の狀態を寄せたる短信の中に

今の戰地は土地が廣漠ですから人家が少ない、それで戰略上常に大兵を集結するのですから勢ひ人家は不足であります我中隊の兵卒の如き上陸以來今日迄四旬一度も軒下だにも寢たことはありません幕營の下日沒して風冷に銀の如き月光を浴るもよいですが時には烈風吹き來つて幕片はとばされ、吊つたもので頭をたたかれる時には隙洩る水にぬらされて時ならず夢を破られたことも幾度かありました私共は蝸牛のやうに衣食住悉く一身に集めて居ます然し時には民家から桶鍋を借り食物を調へ又燈火をかりて一片の雁信を我故郷の戀しきに寄するのであります。

滿洲には水がありません唯ないと云ふても恐くは内地の同胞には想像も出來まいと思ふほどです馬に水飲ますのに罐詰の明罐で岩洩る水や溜水を汲む程です其水も良いのならまだしも飯がキガラチヤ飯の樣な色になりますそれ故無論洗濯入浴とか云ふことはよくよくな時でなければ出來ません。兵卒中には出征後五旬の間まだ一回も入浴しないものもあります汗をかく塵埃はたかる水浴すら出來す敵彈よりは膚の觀音さまの方が餘程つらいのです私共水穗國に人となりて幼い時から水の節用など知りませんから今日となつては實に困却閉口の至です。

野營の勞れ

遼平澤陣中の少尉川村五郎氏より家郷に送れる信書の一節に曰く

糧食も昨今稍富裕に相成り一人前五合の精米を給され足らぬ所は粟餅、にら、にんにく、きうり位にて補ひ居候、漏れ聞く所によれば現在の線を進出する上は長驅遼陽方面に向ふ由就ては後方勤務を十分堅固にし

て後顧の患なき樣致置候との事。

當地の氣候日中炎威熾くが如き暑さなれど名物の風は斷えず吹き荒らし候故比較的凌ぎ好く候、併し沙塵は斷えず風と共に起り往來なども時々咫尺を辨せざる程に相成り眼鏡なければ忽ち目をつぶし候、夜は之に反し風凪ぎ十二時頃迄は誠に心地よく候。

地形は例の高平原一望千里の有樣にて之に玉蜀黍、麥粟、黍、大豆など一面に植附られ畑は不完全なるも其植附は實に整然たるものに候、昨今は作物皆暑氣と共に成長し粟、麥は二寸位、玉蜀黍、大豆は五寸位に候。

山は朝鮮と同樣到る處裸體一樹も無之何れが川やら何れが道路やら見分け難く軍隊は道路や川や山や谷の分ちなく只羅針によりて行進致候、



曉の斥候

其足跡は立派な道路と相成候、川に堤防なく橋なく山に樹木なく村には僅かに一二箇所の井戸あるのみにて飲料水の困難御推察下され候、されば軍隊の宿營地は大槪川の附近を選み兵卒をして砂地を掘らしめ急造の井戸を拵へ居候水は如斯有樣故大隊毎に炊事する譯には參らず殊に燃料なきより各自の炊事に委する外なく皆々例の飯盒にて自炊致居候。

上陸後今日迄皆露天携帯天幕の中に黍殻を敷き着のみ着の儘にて實に氣樂な生活に候携帯毛布を使用せしは上陸の日僅かに一日限り直に外套と共に倉庫に收め爾來寢るに夜具なく雨に外套なく食事亦完全ならざるも病氣の起らざるは感心致候。

幸ひに當地方は雨少き爲今日迄はよかりしも昨今に至り雨氣相催し既に四日も降り續き是れにはホト〳〵閉口致居候、當地方の雨は少き代り降り出せば長く一雨毎にづぶぬれ、睾丸迄ぬれ候之が四日も續くことゝて兵の多くは一睡も致さす候。

雨にふくれしほしいを食ひ角罎片手に鼻歌をうたひ居り候我等の勇氣實に衝天の勢ひに候。

是等の勇士が一朝戰場に出でし時の働き振りは新聞記者の從軍なき爲世に知られず埋沒せられ候は眞に惜しき次第との考へより戰場に於る働き振りを逐一新聞社に報道せよとの上官の命令有之候。

滯陣のつれ〳〵

從軍の某地に滯在せる一記者より通信の一節に曰く

昨今の温度九十四五度、朝夕は頓に冷を加へて、單衣のみにては忍び難く、袴下を穿ちシャツを下にせざればならぬやうな有様、温度の激變最も注意すべきものに候、目下が所謂滿洲の雨期中にあるべきや。

我等は今山中の一農家に宿り居り候、ウン〳〵唸り居る産婦を隣室にして、一行九人日に蠅軍に圍繞されつゝあり候、如才なき此家の主人が畠には、胡瓜、葱、紫蘇、赤大根、莢豌豆、藤豆、韮、馬鈴薯なんどこちたく、野菜には不自由もなく、酒保には三四種の罐詰も有之候得共、醬油もエキスにては我慢なり難く、往々にして砂糖を皆無に致し候など、何事も陣中の儀に候、先日のごときも鷄あり野菜ありしも、砂糖を切して途方に暮れ候折柄、早速の智惠を利して、一行中の蓄へたる蓬萊豆を出、これを砂糖の代用として醬油に混申候、然るは饂飩粉澤山砂糖少なに固めたる粗製の蓬萊豆、鍋中に躍りて、折角の鷄肉滅茶々々の味にいたし候。

鶯はいふまでもなし、時鳥は曉ならずとも、晝も

夕べ露に零おり、女郎花、桔梗、萩なんぞ、野はもう秋草の眞盛に御座候、叢中に蛇も居ず野は永久に安らけれど、室内は油虫といへるもの群を成し、夜に入りては壁上幾十となく往來致すのみならず安眠中の面上へ梁からパタリ〳〵と落來るに至つては、夢圓なるを得べからぬ儀に候、云々と滯陣の無聊思ひやられ候。

滿州の蠅

滯陣中の某記者の通信の端に滿州名物の蠅に苦しめられたる狀態を記せり曰く

拜啓こゝは名物の南京虫といはむよりも名物の蠅といふこそ適切に候、市街と田舎とを問はず、滿州到る處この蠅に襲はれざるなし、屋外は屋内よりも比較的多からざるのみに候。

朝は未明より眠を醒まして夢猶ほ圓かなる人間の顔面に密集し來り、足を出し居れば足に、手を出し居れば手に、被り物をすれば被り物の上に、呻りを擧げて集團し遂にいびり起さずんば止まざる勢に候、日一日追へども去らず、拂へども盡きず、如何なる人間の根氣を以てするも、之れには甲を脱ぎて降參せざるを得ず候。

食事を目がけて突撃し來るの勢は、更らに一層猛烈に候、辨當行李を手にし箸にて口にする間も少しく油斷すれば、飯の上は忽ち眞黒に相成候、而して其の圖う圖うしきや箸先にて挾み出さるゝ迄も容易に退却せざる程面惡き奴に候。

食物を保護すべく被せたる被ひ片れは忽ちにして蠅糞の爲めに變色を來し候、帽子といはず原稿紙といはず、洋服といはず、革袋といはず、彼等が亂暴狼藉の跡を印せざるものなく、其跳梁跋扈實に憤慨措く能はざらしめ候。

某將軍匙を投げて『百萬の露兵恐るゝに足らざるも、蠅には敵はない』と申され候、只彼等に對するの途は親しむに在り、慣るに在りとは、日を經るに從ひ余等の發明したる所に候、彼等に給するに飯若くば副食物の一部を割きて室の一隅に置き大部隊の茲に密集するを俟ちて他の一隅に其虚を窺ふて食卓を開き、かくし

て食事時のみは幾分か彼等の鬱憂を紓うするを得る程の次第に候云々是等は實に故郷に在る同胞の想像に及ばぬ處なるべし。

又過日劉家のありし奉天邊に着陣せる一從軍者が其の友人に寄せたる短信の中に

當地の溫度は晝間は焦熱地獄へ難きも夜分は激變して寒冷を感じ外套を要するほどに候、食物は中々良きものを給與され候先づ鱧鮓、鑵詰の鮭、同牛肉、干瓢、大根切干の類を副食物とし給與せられ、飯は白米六合宛がひにて孰れも滿足いたし居候、野菜は朝鮮にては皆無の有樣なりしが滿洲に渡りて葱を食し候當地に於ける諸物價は驚くべき高價に有之候例へば手拭一筋十五錢、紙卷煙草十本入十五錢、金米糖一摑み十錢、梅干一個一錢、砂糖十匁十錢、他も之れに準じて高價驚くべく候。

露國の士官

滿州營口に在留せる一商人は五月六日の東京朝日新聞に「我軍隊の將校に一言す」と題する一篇を寄せて露國將校の放縱と兵士の冷遇および無教育を鳴らし日本軍に對し大に遜色ありとて遠慮なく將校の注意を促したる記事なりとて東京朝日に見へたる要領に

頃日滿洲に旅行し日夕沿道の各停車場に到る每に一見目に觸るゝものは多數の兵員を滿載したる列車に候、此邊一面將校兵士の影ならざるはなく、日々唯同一の風色を繰返すに過ぎず而して最も吾輩の心目を引きたるものは他にあらず、將校は祭日の來りしが如く悠々として濶歩し、又は三々五々立談に餘念なく、又中には列車内に數人一團をなし骨牌を弄び、以て我能事足れりとなすものゝ如し之に反し兵卒は車內に閉籠められ連日連夜小さき棚上に起臥し、無聊遣る所を知らず時に窓硝子越しに外邊を打眺め或は石の如く堅くなりて物思はしげに壁を見守り或は首を垂れて憂鬱に苦しむものあり、又其容貌により年齡を察するに老壯不定にして中には多くの新募兵打交り、文字の明は勿論軍隊の教育皆無のものも混合して其雜多なることは皆ふるに者なく、是れでも世界有名の陸軍國たる我露軍の一部なるかと頗る怪訝に堪へざるものあり、又列車の

進行中は將校共打集りて取止めもなき四方山の雜談を喋々し、男壯活潑の物語は絶えて聞くことなく、多くは婦人に關する淫猥の事のみを得意氣に放談し、中には往々長官の處置命令に就き憚る所なく縱横の批評を盡すものありシカモ此輸兵列車が歐露より滿洲に至るまで約四十日の長日間一ヶ回も將校がその車室より出で丶他の列車に居る部下の兵卒と舊知を溫むることなく、殊に途中の停車は場所により他の汽車待合せのため一時間乃至二時間の暇あるも兵卒は依然車内に蟄居せしめ置き一歩も散歩の自由を與へず云々とあり是れ露國軍規の不取締なる一端を知るべきの材料なるべし



戰友相救ふ

露軍の兵糧

露國の滿洲に於ける糧食供給の方法は獨逸の方法に摸倣し麥粉搗磨所、穀類及ビスケットの儲藏庫を設けて、日々之より供給し、又供出すれば直ちに之を補充し、新陳代謝に由りて常に食料品を新鮮ならしめ、加ふるに穀物、罐詰肉類及び野菜をも蓄藏し白鐵にて鍛接し護謨の紐にて封じたる金屬器には一日の定糧を盛れり、此定糧入れの金屬器は其良否を檢する

爲め熱湯に投じ、泡の出づる時は使用に堪へざるものとして排除し、壓搾野菜物は常衡量六封度の圓塊に調製し朝餐の飲料として大麥製の珈琲を用ひ、而して此大麥製飲料調製には軍隊用の茶器にて足れりと云ふ、珈琲の二百五オンスは百人前に供して餘りあり且つ滋養分に富むと云へり。

捕虜の生活

丸龜の捕虜を慰問して歸りし人の話を聞くに、彼等の無邪氣なる狀態こそ憐れむべし

丸龜の捕虜收容所は海濱にあり風景絶佳にして空氣清潔なるが上に庭內廣濶にして運動に適するを以て捕虜は皆喜び居れりと捕虜の中には猶太人あり波蘭人あり又歸化人も少からざるが其結果として彼等の間に衝突を起す事屢々にして、露本國人は猶太人および波蘭人を痛く輕蔑し猶太人、波蘭人等は露國人を憎む事甚だしく同時に只管日本の勝たん事を望み平和克復後は日本に歸化せん事を望み居れりと又捕虜の食物にはパンと牛肉とを供給し隔日に挽割麥を交せたる米飯を與へ居るが彼等は一般に米飯を嫌ひ砂糖を交せて食せり、又彼等の衣服は暑中の事とてズボン下とシャツ若しくはシャツにヅボンのみを着し居るも裸体となる事なく又衣類は彼等のために設けたる洗濯所にて自ら洗濯しつゝありと而して收容後二週間に及べるも皆健康にして氣候の變化のために何等の影響を受けざるものゝ如く且至極樂天的にして呑氣に構へ居れりと可憐なるは彼等が宗教に熱心なるの一事なり頃日收容所の一室に小さき禮拜堂を設け互に醵金して十字を染め拔きたる幕を周圍に張り一日三度づゝ姿勢正しく祈禱禮拜をなすを例とせる由而して婦人の訪問者ある毎に彼等は非常に歡喜する由なるが松山收容所は市中にありしため塀の隙間より婦人の覗くもの少からず彼等は之を樂しみとし居たるも丸龜收容所は市中を離れたる海濱なるを以て婦人の姿を見る事比較的少く彼等は多少失望の模樣なりと。

珍書解說

通俗源氏物語 夏季學校(三)

水原翠香

夕貌（歌を以て巻名とす源氏十六歳の夏より同年十月今の十一月まで）

大貳乳人病重しとて、其子惟光朝臣の御暇賜はりぬ、君も重く思召す人なれば、訪問行らむとて、其頃六條邊の御微行によき序なれば、五條なる家に光臨賜ふ、御車入る可き門鎖たれば、惟光を召させて俟賜ふ程、賤雜なる民家の狀を視渡賜ふに、此家の隣に、檜垣新築して、上は半蔀上渡し、簾冷清なるに、女の透影數多みえて覗也、何等者の集ひ居るらむ、車も省扮て先も追はせねば、誰とかは知らむと打解けて、差覗賜へば、門は蔀様なるを押上たる、見入程なく果敢氣なる住居也、切掛疑物に、青綠蔦の快爽に這懸れるが、白花獨り笑眉開たり、（遠方人に物申と）獨言給ふを、隨身何某心得て、彼は夕貝と申して、名は疑人て、如斯賤き所にのみ咲花にて候と申す、源「口惜の花の契や、一英折て參れと命ずれば、彼押上たる門より入て折るに、晒落たる遣戸口より、黄生の單袴着たる了鬟出で、打招き、白扇の最薫きを出して、是に乘て奉り賜へとて拿せたり、恰好惟光朝臣門開て出來れば、即此花を奉らす（隨身は卑ければ直には傳て惟光に取次を願也）惟「鍵を紛失て、探索に手間取て、陋巷に立せ奉りてと、恐縮申乍奉迎す、兄の阿闍梨、妹の少將、婿の參河守等、悉來集ひ在り、斯光臨賜はるを、忝き面目と、悦び畏る、病人も他に起されて。

尼「惜からぬ身も今一度、拜顔賜はりてと、躊躇侍りしを、今こそは佛の來迎も心潔く、俟つけ侍らむとて、衰弱に泣く。

源「日頃怠難と聞て、心には掛乍、思ふにも任せで、今日に成つる、幼かりし程に、可爲愛人々、皆早く死別ける餘波に、傳乳人多かる中にも、其許をこそ母とも思ひしを、猶存命て、予が位高くなるを見よかしと、

酸然く泣ふ、乳人等は、還なるすら優と思ふを、況無比類御光形の、其面目忝さに、涙潸然、子共輩も皆悄然として、實凡ならぬ母の御宿因哉と態ふ、修法又始めよ杯宣はせて。

源「喧さらぬ別はなくも欲と號た、出賜ふとて（世中にさらぬ別はなくもがな千代もと祈る人の子の爲）惟光に脂燭召て、彼扇を御覽す、持馴たる移香染て。

心當に夫歟とぞみる白露の（オシアテナガラ貴人ト見奉ル御目ニ留リシ花故ニ）
光そへたる花のゆふかほ（伏見ノ露ガ光ソヒテ有カメシタガレノ御貌ヲ拜シ奉ル）

書も貴的に、甚意外に有趣と覺して惟光に。源「此西隣は何人の住ぞ、知れりやと宣へば、例の煩と思へど、惟「此四五日爰に侍れど、病者の看護に拘りて隣の事等は承はり候はずと、仂く申せば、源「此扇汎ぬべき故有り、此邊の事知る者に問ひ來れと、命すれば、入て又出來り。惟「宅守なる男に問侍るに、（楊名介）が家にて、主人は田舎に行き、女許なるが、同胞に宮仕人在て常に來通ふとぞ、夫以上は下人なれば、得知り侍らずと申たり。

源「さらば其官女のなめり、爲得貝に物馴ても云へる哉、冷眼かる（アナドル意）べき下等にやと覺せど、予を差て云懸れる心の憎からす捨難きぞ、好色心也ける、御懷紙に書体を換てかき賜ふ。

寄て（アユミ）こそ夫かとも見め黃昏に（定ムヘケレウスクラカリニ）
仄々（ホンヤリト）みつる花の夕かほ（カツクシイ）（含意「一度逢テハナシガ聞タイモノダ」）

花折つる隨身して遣はす、女方には御答のなきに、生仂く思ふ折しも、此御返を得て、何奈申さむ等、購て云合へれど、隨身失敬也と思ひて歸りぬ、先驅の松明（此頃は提灯なく炬松明を燃し也）仄にて、尤微行て出賜ふ、六條には、樹木前栽等並の所に似ず、心憎く住做し賜へり、例の打解ぬ御光様も他に殊なるに、在し垣根を比較して、世は様々也と覺す、翌朝の御歸にも、又此邸の前渡り賜ふ、屢にも過賜ひし處なれと、彼扇より往來に御目止

りて、竹艇　誰住にかと、謀渡けり。日頃經て惟光參れり、母の病存外見直したる由申序に、近寄りて、惟光命令后、隣家の事情探索侍るに、五月比より主君の如き人來て在、何人とは家人にすら不爲知、中垣の窺親し侍るに、若き女　童招　様の裳引掛て在れば、奉仕君在とみゆ、主なき處にては　昨日夕陽注射たりし時、端居して文書く人の貌尤佳が、煩襟にて、侍女と忍びて何事か語り泣く様也し、此程果敢序作出て、消息遣し試たれば、熟たる手跡にて、口速く返事し侍りき、襄しうは非ぬ若侍女侍るめりと申に、漫に御膝進みて。猶云寄れ、探り究めでは有べからずと宣ふ、皇子にて重き御身なれど、御齢若く、特に美貌に御在れば、衆女の爭ひ愛騒げば、好色賜ふも理也や、彼雨夜の品評より下が下の中にも埋れたる上臈もや發見せむと、一層隔なく御心の附く也けり。

彼空蟬の佹迯強面を、世人に違へりと覺すに、柔に靡かましかば、心苦き誤にても止ぬ可きを、最猜く、負にけりと思ひ居らむが、口惜さ限りなきに、裏もなく候らむ一方は、哀ならぬにしも非ねど、彼人の他事に聞作、内心嗤はむが恥かしくて、音信もし賜はぬうちに、伊豫介登りぬ、先發き參郎す、船路の汐風に黒み憔て、一入武骨に逞雄なる武官也、國政の事ども上申す、序に湯桁はいくつと問ま欲きや、此忠實なる老成人に對して、實鳴呼にも影護くも、是ぞ大方ならぬ非望也けりと、馬頭が諫言思出て、予には強面きも、其夫の爲には貞烈なる者をと、強て省離し賜ふに、今度は女を人に嫁して、妻を將て下るべしと聞賜ひて、更に心忙慌、小君に談し給へど、先にすら事成らざりしを、況て主人の在宿中には、奚かと申も理なれば、爲方なし、女も追に忘果られむは憂とにや、色めかぬ折節の音信には、奇拔注目すべき歌なども奉りて、妬きものの忘難き人と覺す。

六條には始難解かりし程は、百法手を竭して、終に靡け賜ひしに、反對凡々なるは、奈何にかと人々私語、正身は殊に物を深く思ひ沁賜ふ本性なれば、齡も似氣なく、人の思はむ事羞く、何しに靡きけむと今更に悔

しく、且怨しき寐覺々々、憤悶沈思賜へり、聞かれは強に擬

り顯れ得べし又他に移る是好色人の常態光君に限らず現今の男子も
又然也女たる者自ら戒めて、浮薄男子の甘言に乗せらるゝ事勿れ

惟光が任務の垣間見、尤克視察して來り報告す。

惟「其人とは更に思寄なけれど、甚く世に隱忍ぶとみえ侍る、徒然なる作に表長屋に渡り來て、若女輩常に覗き侍り、主と覺しきも折々覗く樣也、一日先逐散して渡る車の侍りしを、覗居たる童の忽に「右近の君疾來賜へ、中將殿社今渡り賜ふなれと、高聲にいふ、噫据と制し作、急來る内橋擬物を道にて通ふなるが、乙此を何にか引掛て、蹶き倒れて橋より墜むとしつ、「此葛城の神社、險う爲置たれと、慎且笑ふ間に渡過ぬ、何に依而知ると問へば、童云ふ、君は直衣姿にて、御隨身、何某與某、小舍人童誰々と、其名を申つるは、皆頭中將の御内人にて候ひき。

源「其車を慥に見屆けまし物を、と宣ふは彼行方失ひつる人ならめと察せらるゝに、彌、知らま欲き御氣色と認めて、一層聲低く。

惟「淺淡氣なる若き女に、私の懸想に托て、家の案内も克視候ひぬ、彼我同士と思はせて物いふを、詐恍して誑られ居れば、微妙隱蔽たりと思ひて、童の折々口誤爲を云紛して、主人なき容を粧ひ侍る等、語りて笑ふ。

源「尼公の訪問に行かむ序に予にも偸見爲よと宣ふ、苟なる住居の樣より推察れば、是や彼人々の、侮り定めし、下品ならめ、其中に若、佳物有らば等想像也けり、惟光些事をも御意に逆はじと爲るに。自己も限なき好色者なれば、巧妙謀り課せて、終に通はせ奉りぬ、此間の事絮々しけれは省きつ。

女の素性斗難ければ、男も御名を包みて、悟られじと、態と隣へも立寄賜はず、姿を假裝して通ひ賜ふに惟光我馬を奉りて、御供に走歩行、懸想人に、此尩弱足脚を見附られん時、辛くも有べき哉と歎笑ふ、見られじと紛れて、門にも入らず、御歸りも途中よりぞ從ひける、御使にも、人に親認られぬ者を撰て遣さる、女方には、怪く心得ねは、御使にも曉の御車にも、

人を尾行させけれど、惟光其度毎に注意して、巧に惑はしたれば、昔物語の變化疑て覺ゆれど、妖怪ならぬ事は自然に驗く、高貴人とは疑なきも、誰ならむ、猶此好色人の業に違あらじと、太夫を（惟光の官名）詰閙へど、夢にも乾顏して、撓まず、阿戲歩行ば、爲方なくて、變則の戀慕をぞ爲ける。

君元來好色人なれど、若齡の割には沈着にて、從來人目に立程の擧動はなかりしを、此頃は怪訝く、朝の程、晝間の隔も、心殺にて、何事も手に附かず、自も物狂はしや、然迄思ふべき事かはと、自諭め反省しても、猶恢難きに附ても、彼中將が語し如く撓めて忽然と遁躱やせん、爰に假の隱家とみゆるを、何時何方に移行へしとも知られず、何式、乗二條院に迎へむに不如、誰となくて世間歹くとも、斯迄心に沁人は今迄なかりし、所謂宿因なるをなど、思計る。

源「爰は餘り騷かし、近くに心易き所有り、率行て長閑に語らむ。

女「怪訝定例外御擧動なれば、恐ろしと、若ひたるも實と含笑て。

源「何方か狐ならむ、唯魅されて見賜へと、懷氣に宣へば、女甚靡き只管從ふ心の可愛さは、偶と躱る樣の異心有べくもみえず、彼中將は枯々に爲し故にこそと思はるゝ、八月十五夜の月、隙多かる板屋に洩て、見慣賜はぬ侘住の珍きに、曉近くなれるにや、近き家々皆目醒して、哀寒しや今年は生計の頼少くて、田舍通も思はしからで、心細しや北殿聞ゆる等言替す、各自營業に起出て、呷めき騷くも、唯爰に聽ゆ、凹々と踏轟がす碓の音枕頭に響く、噫嚚と覺せど、何の音とも知り賜はず、白妙衣打や砧の音も交りて、空飛ふ雁聲、取集めて憐也、端近ければ共に見出し賜ふに、程なき庭の露は、處も分かず粲々たり、虫聲猥籍壁間の蟋蟀も、間遠にのみ聽賜へる御耳に、差當たる樣なるも、却而異く珍しと覺さるゝも、御志の淺からぬに、萬の罪赦さるゝ也けり、女白き袷に、薄紫の（薄色は薄紫也）軟なるを重て、花麗ならぬ姿、軟弱（チヒサキコト）にて、其處と取立て優たる處は非ねと、嫋娜（女ラシク）に唯可憐（カアイラシイ）なる人也、意匠を少し

添たきぞ、欠點なる。

源「去來、此近き所に宜所有り、爰は騷しくて苦しと（サアユカウ）宣へば。

女「爭俄にと應揚にいふ樣、解情人とも覺えねば、人の思はくも得憚り賜はず、右近を召て、隨身起して車惹入させよと命す、家族輩も、此日頃疎ならぬ御志は認たれは、漠然ながら賴を掛て止めず、準備整ふを待賜ふ程、隣家に御嶽精進にや、翁聲に、南无當來の導師と稱て稽首。（大和金峯山に千日精進して參詣する）立居も堪難氣に聞ゆ、

（御嶽精進と云也）源「彼聽賜へ、此世とのみは思はさりけりと、哀がり賜ひて。

歌「優婆塞が行ふ道をしるべにて
　　來世も深き契違ふな

（長生殿の古例は忌はしければ、比契に替て彌勒の世迄と契り給ふは、餘りに言痛しや。

女「前世の契知らるゝ身の憂さに（アヽ我レノヤウナイツチンノロルヤ身ナレハアナあか）
　　行末兼るたのみ難さよ（ミロクノ世マデトイフテ下サレテモアテニナラヌハカナサヨ）（今ニ死スル前兆ニヤ此人ノ歌皆ハカナシ）

十六月に浮出む事と、女は思ひ休らふ、兎角する程に明ゆけは、仂くならぬ先にと急がして、輕らかに抱乘せ給へば、右近一人陪乘其邊近き何某院（河原院也註に委し）に着て、預（守也）召出る程、荒たる門の石長生茂りて、瞻仰らるゝ譬方なく小暗し、霧深く露けき、簾さへ捲たれば、袖も甚く濡にけり。

源「古もかくやは人の惑ひけむ（ムカシノ人モ斯ニウキミチヤツシテ）
　　我まだ知らぬ黎明の道（我ハカヤウナ事ハ今ガハジメテゞアル）

君は習ひ賜へりやと揶揄はれて、（故ニ女羞ル也）女羞らひ作つ（頭中將ノ事チ含テ宜フ）

女「山の端の心も知らで行月は（君ノ御コヽロモシカトシラヌカニサソヒダサレテ來ハキタガ）
　　浮の空にて影や消なむ（ステラレテ死テシマフカモシレヌ所謂虫ノ知ラスナラン）

心細く物恐ろし氣なるは、素集ひたる住居に慣ての故ならむと覺す、御車入させて西の對に御座粧ふ程、高

欄に立て俟賜ふ、右近艶なる心持して、既往の事共、人知れず思ひ出づ、預の甚く警命し遙く氣色に、此御光景悟果ぬ、假初ながら滑けに補飾たり、此預の子、本殿の下家司にて（下役也）大殿にも仕奉る者也ければ、親しく參寄て、御供に誰も侍はざりけり、然有可人々召申べくやなどいふ。

源「否、殊更に人來間じき隠處求めたる也、他に勿洩しぞと、口鉗賜ふ、御粥など急ぎ調じて參らせたれど、御賄ひ陪膳打合はず、珍かなる御旅寝に、息長川と契賜ふより他事なし（鳰鳥の息長川の絶ぬ共君に語らふ言盡めやも）日更て起賜ひて格子自ら上て看出し賜へば太甚く荒て遙々と見渡されたる、樹木疎ましき迄優倫、近き軒端も野良と茂りて、踏石は隠れ、池は水草に埋れて見處なし、別納の方（離家チ云）に、預は住なれど、此方は離て人氣なし。

源「氣疎くも成にける哉、怪物や栖らむ、縦然予は此家の主也、鬼何をか爲む、（女の心易めの言なれと最怪の出る前表也）包賜ひし御顔も露になりぬ。

源「夕露に紐解花は玉鉾の（タカホノ花ナハシメミシヨリホントナツテ）
道の便の縁こそありけれ（トウ／＼貌ヲ名ヲアラハシヌ全ク夕貌ノ御テアル）

露の光やいかにと宣へば、後眼に見おこせて。（露ノ光トイフハトキト今ト）

女「光ありと見し夕貌の上露は（ヤツタシイトヘミメレト夕方ノクラマキレニチラトミ）
黄昏時の空眼なりけり（倉意）（メ井只今サシムカヒニミレハアノ時ドコロテハアリマセン眞ニヤクタシイ　レンソヨカラホレマシタ）

源「隠し隔賜ふが辛さに、我も顯さじと思ひつるぞ、負にけり、君も今は名告給へと宣へど、海士の子なればとて、業たる體、尤垂愛たり（アマヘル）（白波のよする渚に世を送る蜑の子なれば宿も定めず。海士のかゝる藻に棲む虫の我からとねこそなかめ世をは恨じ）

源「諸之も我故ならむと、怨且語らひ賜ふ、（恨ミツ慰メツ　俗ニ云フ痴話口説ナリ）惟光尋參りて、御菓物進呈たれど、右近が云はむ事遣に煩しくて、近くも侍ひよらず、斯迄跋歩行賜ふも笑しく、然有ぬべき容貌と思ふに、我物にも爲さば成ぬべかりし女を、讓りたる乃公の胸度哉と、獨誇居たり、閑靜なる夕空を眺て、奥の方暗う物怖畏く、女は我を忘て、御傍に寄添ひて離れず、若びたるも心苦し

ければ、格子速く卸し、大殿油明く挑さす。内裏にて奈何求させ賜ふらむ、爰とは誰も心附かじ、予乍も奇怪の心や、六條にも如何思亂賜ふらむ、怨らるゝも理也と惨惻、（此心浮ひたろに依生靈より來たる也）何心もなき差向ひを可憐と覺すにも、餘に心深きもみる人苦し等、心中に比較し賜ふ、宵過る程、少し寐入賜へるに、御枕頭に高倚なる（六條ノ「）女居て、巳が最愛と思泌奉るを捨て、如斯下品女を疑稱し、將て行賜ふよとて、此添臥の女を爬除むとす睡吐と邁むと爲るに、身體痲痺も不立、とは口惜と、豬勇一番起反り給へば、愕然と夢醒たれど、火は消て猶鬼に魘るゝ心地すれば、太刀を探り採、拔て枕頭を拂ひ賜へど、何等の手答も爲す、右近々々と呼起し賜ふに、彼女も怖と思ひ乍寐たれば、忽醒て答しつゝ探り寄る。

源「廻廊なる宿直人呼起して、燭點て參れといへ

右「奚か罷られむ、暗うて。

源「噫若々しと打笑ひて、掌を叩給へば、反響の答懐愴く、人は遠ければ聞つけず、時に此女君、尤甚く戰ひ顫きて、汗も濕漏に失神狀容體と成ぬ　右「平日より尤怖畏の御本性也、奈何爲させ賜へるか。

源「晝も恐氣にのみ爲しを、奈何にか、暗黑にては詮方なし、將予人を起さむ、手叩は反響騰照、暫時爰にと右近を引寄置て、探り〱西の妻戸を開て見賜へば渡殿の火も消たり、風の音のみして、尠き人も皆熟眠召されて起たるは、預が子の壯年也。

源「疾く燭點して參れ、隨身も鳴弦して不絶警れ、如斯處にて放心て寐るものか、惟光は奈何爲つる。

答「夕方迄侍ひつれど、御用もなし、曉の御迎に參るべしと申て退出侍りぬ、斯申者は瀧口（禁裏の武官）なれば、弓弦打鳴して、火危々々と云乍、預が雜司の方へ去、内裏を連想に（名謁）は早濟ぬらむ、（瀧口の宿爲申）、今こそ等推量乍、歸入り探り賜へば、女君は其儘臥て、右近は傍に俯伏たり、是は奈何と覺せと。

源「噫物狂しの畏怖や、荒たる處は狐狸等の人脅さむとて、戰慄く思はす也、予在れば、然樣の怪には脅されじと、惹起し賜へば。

〽生憎擧塞し、胸苦しく成侍れば、俯伏て侍ひき、御前社、奈何にか。

〽然よ、奈何斯はと搖動し賜へと、寂歎として息もせず、全く人事不省也、こは鬼に魅ぬるなめりと、爲方なき心地し賜ふに燭採て參れり、右近も動くべき容ならねば、近き几帳を引寄せて、爰へと宣へど、常に御前近く進まねば、憚りて長押にも登らず。

〽禮も所に從てこそ、疾持來よと宣ふに、恐る〱差寄て、燈臺に點すに、只看枕頭夢中の女、化顯て忽然消失ぬ、昔物語にこそ、然る怪談も有れ、珍かに戰慄て、先此女は如何成ぬると心騷くに、自身上は忘られて、呼且搬試るに、只冷却て息は疾に絕果たる也、不爲名狀、奈何と商議べき人もなし、然社强壯賜へと、若少貴公子の始て死人を目擊て、爭御心惑亂爲ざらむ、只渾と抱きて。

〽吾君蘇生爲賜へと、聲の限り呼賜へど、冷入て、漸氣色悽[illegible]く成ゆく、右近は畏怖も苦痛も悉醒て、只泣に泣哭惑ふ、夜聲仰大也と制し賜へと、自己も呆然

て、奈何爲と心忙離、又彼男を召て。

〽即刻惟光の宿所へ走りて、急參れといへ、怪く惱む人在れは兄の阿闍梨若猶在らば、將て參る可密にいへよ、彼尼聞付ては面倒也、など命令賜ひて、阿闍梨來て祈らば、再生もやせむと、少し賴も有れど、夫佚程の極感纏綣、夜半も過ぬらむ、風荒く吹出て、松響凄愴、奇怪なる沙鳴は、梟にや有らむ、人氣遠く大概にも疎ましきを、何爲、斯有宿を採けむと、悔しきも爲方なし、右近は物も覺ず、君に渾と抱據奉りて、顫死ぬべし、是亦如何と、心も空に捉へ在す、我獨賢人にて、懊惱無量、燈は瞬て又も消なむとし、建たる屏風の上、此處彼處の隈々、獸の跫にや、犇々と鳴て、背後より何か、窺寄る心地す、惟光疾く來よと覺せど、常に所在不定人なれば、此處彼處尋巡ならむ、此夜の久さ、一時も千夜の心地し乍、辛うして鷄聲遙に聞ゆ、命懸て奈何契に、如斯慘酷に遭ふらむ、多恐不可有好色心の寘罰にて、六條御息所な[illegible]し[illegible]に[illegible]しなど既往將來の例と成ぬべきなめり、隱共顯れて、叙聞に遠を始、人

人の云はむ詞、世上の口號と成て、終には嗚呼の名を採べき歟と思舶す、辛うじて惟光參れり、夜中曉と云はず、御供に從へる人の、今宵に限り侍はで、召にさへ怠りつる、惜き物から狭召入れて、扨宣ひ出む事の敢なさに、偶と物も言はれ賜はず、今迄は我獨賢人にて、耐忍賜ひしか、此人に咜と息つかれて、忽溢出る涙滂沱なして止らず、右近も太夫を見て、始よりの事さへ、追想してよゝと泣く、漸しばし躊躇賜ひて、

源「爰に尤奇怪の事有、淺猿等云はむも愚也や、如斯事は法師こそと思ひて、阿闍梨を將てと云ひ遣つるは。

惟「昨日山へ罷登り候ひぬ、扨先珍事にも侍る哉、兼て御不例にや在つる　源「否さる容は無かりしをとて、涙を潸然と落し賜ふ、看奉る人も悲しくて、惟光も陪泣しつ、世上に馴たる人こそ、事に臨て倍憑けれ、三例同一者少者（源氏十六右近十九惟光廿二三也）爲方なけれど。

惟「先哭を出させ賜へ、此院預に知らせては惡かりなむ、瀧口一人社あれ、自然秘密洩しつべき、眷族も多く侍へば。

源「爰より人靜なる處、他に有べしや。

惟「計るに山寺こそ、平日も死人を扱へば、自然目立たざるべし、幸哉、惟光が父の乳人にて侍し者、（三輪組て老女の事）東山邊に住侍る、處に移し奉らむとて、明昏の紛れに御車寄せて、死人を薄物に押包て、惟光掻乘せ奉り、右近を陪乘させつ、其容少やかに、疎氣もなく可憐也、猶にしも包まねば、髮の溢出たるを、みる眼も眩て、悲しく、成果る樣を見屆むと思したり氣なるを。

惟「君は速く御馬にて、二條院へ御歸館あれ、人騷しくならぬ先にと、我馳らせ來つるを奉りて、自己は括高くゝて、歩行にて車に添ひ行く、奇しく異樣なる送りなれど、御氣色の甚痛を見奉りては、身を捨ぞゆく。君は餘りの悲歎に、失神の體にて、口奴に扶れてぞ着き賜ふ館の人々何方よりの御歸ぞ、惱氣に見えさせ賜ふ等申せど、默して御帳内に入賜ひても、奈何乘添ひて行さりけむ、若蘇生せば、見捨て行別けりと、薄情にや思はむ等覺し續けて、御胸塞迫ると共に、發熱頭

痛し、全く病人と成賜ひぬ、日高くなれど、起も上り賜はず、御粥進申せど見も遣及ばず、内裏より御使有て、昨日も終日葬出奉らねば、叡慮爲からずと申す、大殿の君達も、交々參り賜へど、惱しとて、對面し賜はず、頭君斗立乍此方にと宣ひて、簾中より、

尋「乳人の重く煩ひて、今一度みま欲と申せば、幼より睦びし者の言なれば、訪問し侍し折しも、其家の下人の急病にて、俄に死侍しかば、觸穢の際、憚りて得參らぬ、且此曉より、頭痛く惱しければ、尤無禮乍申侍るを、恕し賜へや。

民「然らば其由奏し奉らむ、夜前も御遊に、恐く求め奉らせ賜へと、皆空手歸參りしかば、天機穩ならざりきとて、行掛て又立戻り。

民「奈何行秘ぞや、隙遽頗曖昧也と笑作云ふ、胸臆はし賜へと。

尋「如斯細には非で、唯不覺穢に觸たる由、奏し賜へと强面宜ふ、藏人辨を召寄て、行秘の事奏せさせ、大殿へも其由其消息爲賜ふ、日暮て惟光參れり、穢とて

參る人々、皆立乍罷出れば、人族からず。

尋「如何、蘇生すべくも非ざりしやと、宣ひ敢ず袖を御顔に當賜ふ。

僧「今は限と見做ぬれば、長く成ては便なし、明日は葬に宜日也と人申せば、相知れる老僧の侍るに、萬端依頼し置て歸り侍りぬ。

尋「添ひたる女は奈何しつる。

僧「夫こそ又生くまじく侍る、亦も遲れ奉らじと惑ひて、谷に身を投んと爲るを諫止るに人皆困じ侍りき。

尋「予も眞に病を惹出たり、跡追ふべきにや有らむ。

僧「奚然る事やは侍るべき、何事も定業に社と諦め御在せ、人に洩さじと思へば、惟光引受て周旋し侍れば君は唯、速に回復賜へ。

尋「有理、雖然予輕浮心より、一人を徒に失ひたる、托言負ぬべきが憂き也、少將命婦にも聞かすな、尼君には况て。

僧「仰にや及ぶべき、法師等にも總て、異の事は不申坏密談爲るを、仄聽く女房達、什麽生ならむ、穢の由

宣ひて、又斯私語悲歎賜ふはと怪訝がる、惟光事定め果て、退出むとするを、呼返して、

源「無益と思ふべけれど、今一度、彼亡骸をだに見ざるは殘念也、馬にて行かむと宣ふ、そは退々しき御事と、諫申せど、聽賜はねば、

惟「然迄に思件さば、疾く行て、夜更ぬ先に歸らせ賜へとて、此頃の微行に設賜へる、狩裝束にて出賜ふ、御病中にさへ有をと、危ぶめど、悲歎の悶然に、唯今屍を見ずば、又何世にかはと思勵みて、例の太夫と、隨身の兩人のみにて、急がせ賜ふ、十七夜の月差とり鴨河の程、先驅の火も仄也、鳥部野の方を見渡し乍、行着ぬ、四邊物凄きに、板屋の傍に堂有て、行へる尼の住居、哀に燈明の影幽に透て見ゆる、中に女の歔欷聲して、法師輩二三人、語と聲低く念佛す、寺々の初夜は修行果けむ、尤寂寞也、淸水寺の方ぞ、火光多く參詣人の往來茂くみゆ（十七日は淸水觀音の緣日也）此尼が子の大德（法師の稱號）經讀居たり入て見賜へば火に背きて、右近は伏沈めり如何悲しからむと見ゆ、正身は未些も替れる處なし、

前世奈何契にか、一兩月の間に、心を竭して、斯思ひも寄らず、怪き死別する事と思へば、人のみる眼も恥敢ず、潸然と哭賜へば、法師輩も誰とは知らねど、慘惻にて、皆涙浮かべけり、右近に我許へ來よと宣へば、

右「幼より年頃、片時も離れず馴奉りし君に、俄に別れ奉りて、何處にか行かれ侍らむ、生がひもなき身は、同じ煙に社はといふ、

源「理なれど、世中は定なきが習ひなれば、自ら諦めて、今よりは予に依賴せよ、とはいへ予も又、生存難き心持ぞする抔宣ふ。

惟「夜は甚く更侍りぬ、速歸らせ賜へと急がすにぞ、顧がちに出賜ふ。如存生に打臥たりし容、混交賜へりし我御衣の、其儘に被着て有つる等、思ひ續けて道すがら、歎きに御馬も常の如く得乘り賜はず、鴨川堤にて、忽然落馬し賜ひけり、惟光忙慌て、隨身と共に扶起し奉るに、殆息も絶なむ御容體なれば、惟光悔しさ限なく、吾確乎なる心有らば、何爲宜ふとも、如斯道に從ひ奉るべきかは、南無淸水の觀世音、救は

せ給へと祈念し乍、左右より兎角扶けて、辛くも二條院へ着にけり、人々怪う深夜の御微行は、見苦しき事哉、此頃例よりも忩忙き御微行の頻る、中にも昨夜より今朝も、御惱の容なりしにも似ず、今宵將、何處に彷徨給ふにかと歎き合へり、君は打臥賜へる儘に、最甚苦惱賜ひて、二三日の間に、甚しく衰弱給ひしかは、内裏に叡聞歎かせ賜ふ事無限、御祈禱寺々に隙なく躁擾、比類なき容貌の人は、世に長からずと、昔よりいへばとて、天下の騷也けり、苦惱中にも、彼右近を看護婦に召寄せて、局を給り令侍給ふ、惟光彼女が無所依を憫み、萬後見し扶助て妹の如くすれば、程なく傍輩にも交際者にけり、容貌美ならねど、醜ならず遁ひよき若女房なれば、君も好者得たりと覺しけり。

源「奇く短かりける契に惹れて、予も又長かる間敷にや、年頃の主を失ひて心細く思ふらめ、予萬に手まむと思へと、又立添ひなむか口惜くも有哉と、衰弱に宜へは、歸らぬ歎を差置て、最惜と思ひ苦慮奉る、殿中の人々、足を空に走惑ひ、内裏の御使 雨 足よりも茂し、大殿も甚く驚命し給ひて、日々渡り賜ひ、世に宜といふ限り、百法手を竭して爲させ賜ふ驗にや、廿日餘り重く煩ひ賜ひしかど、異なる餘波も殘らで、快復期に見え賜ふ、穢忌も共に滿ぬれば、甚叡慮を惱し奉りつる、御禮奏せむとて、久々にて宿直所へ參り賜へるを、大殿聞つけて、我御車にて迎へ奉りて、御藥御食忌、何や彼やと睦ましく愼ませ奉り賜ふ、君は我にも非で、蘇生したる樣にて、九月の末にぞ全快爲給ひける、最甚う面瘦賜へるしも、倒に優美也、○閑暇なる夕右近を召よせて、

源「今猶怪訝、何爲ぞ其人と知らせじと隱し賜ひけむ眞に蜑の兒也とも、然斗思ひし我に、隔心有しぞ遺憾と、宜へば。

右「爭か、深く秘給ふ事は侍らむ、早晩何ならぬ御名告も有るべきを唯始より、君も怪訝包ませ賜ひし故に此方も負じと覺しけむ。

源「無益心競にも有ける哉、予は隔心には非ねと、人の許さぬ擧動に未慣、内裏を始 憚 所 多くて、苟

の戯言をも、針小棒大に云はるゝが、腌臢さにぞ包みつる、自ながらも奇き迄、強に逢見しも、可有斯故に社有けめ、今は何をか隠すべき、悉細語聞かせよ、七日々々の吊ひにも、誰が爲とか、心中にも念ずべきと宜へば。

右「生涯秘て過賜ひし事を、亡御後に口罵くやはと、今迄不申侍りしかど、眞は御父を三位中將と申しゝ、双親共打續き失賜ひて、最心細く在しを、頭中將の少將にて在し頃、見始賜ひて、三年斗は、志有樣に通ひ賜ひしか、去年の秋、彼右の大殿より、尤可恐事あるよし、慥に告る者侍しかは、非常猥怖の御本性に、甚く驚怖されて方便なく、西の京に御乳人の住侍る處に躲れ賜ひしかど、夫甚見苦敷芽屋の、狭きに住佗て山里に移住賜はむと爲るに、今年塞の方に當れば、夫違ふとて、彼下賤之町に、乳人か女兒の家あるを幸に假住爲賜ひしを、見顯され奉りぬる事と、歎き給へりし、怯怩も他に異なり、苦悩氣色をも、人の見咎めむを耻の樣に思ひ賜ひて、何も有然氣なくのみ以做し賜ふ、御辨侍りしと語出るに、絮了前思合

源「幼兒惑したりと、中將の憂ひしは、然る人やありし。

右「然一昨年の春誕生有し、女兒にて尤可愛くお在。

源「何處にぞ、更に影も見せざりしか。

右「若人のみにて、果々しく扱ふ人なしとて、其西の京に止め侍る。

源「人に知らせで、予に得させよ、果敢かりし紀念と親育せむ、彼中將にも、早曉傳ふべけれど、亡人の托言負なむか煩はしければ、唯予兒として育まむ、其乳人にも、異樣に言做して爲て來よ等、談合賜ふ、右「然爲し賜はらは、尤嬉しき事、田舍に成長賜はむが心苦しきを抔申す、夕暮の靜なる景色、前栽の卯花枯々に虫聲細りて、楓漸色附畫の如く、風致多趣なるを、見渡して存外に有趣交際哉と、彼夕貝の宿、追想するも耻し、竹林に家鳩の鳴を聽賜ひて、彼院にて、此鳥の啼しをだに、淋しく凄氣に爲し容、俤に浮びて。

源「年齡は何歳なりしか、非常に尪弱なりしも、短命

の態ならめ。

右「十九にお在き、右近は先の乳人が打捨て死侍りしを、三位君憫と御覽じて、七歳より姫君と共に、生育賜はりし、大恩を思へば、爭世に侍らむと爲らむ、果敢御心の人を依賴にて、年頃馴侍りしと申。

源「其果敢ぞ女は可愛けれ、賢氣に人言聽かぬ、尤憎し、予餓弱ならぬ心慣ひにか、女は唯柔順に、動ば人に欺かれつべく見えて、道に用意有、みる郎と心に隨順が可憐にて、至らぬ處は任意に、教導しみむは、懷しく覺ゆべきと宣へば。

右「其御好には、尤適合給ひし物を、斯樣にて爰に、並び御在ましかばと、いひさして泣、君も最甚う詠賜ひて。

源「見し人の煙を雲とながむれば
　夕の空も睦まじき哉

耳喧かりし砧聲、追想も戀しくて、正長夜と（白氏文集、八月九月正長夜千聲萬聲無止時）打誦して臥賜へり。

○頭君に逢賜ふ毎に、胸騷ぎて彼撫子の音信告まほしけれど、託言に怯て、打出たまはず。

○彼夕貝の宿にては、何方とも知らねば、尋む由なし右近だに音信ねば、怪訝と拎歎き合へり、儻ならねど惟光をのみ疑ひ詰れど、甘く懸離れて、氣色もなく言做せば、唯夢の心持して若受領の子等の人柄よきが、頭君を憚りて、其他國に將て下りしには非じか、抔ぞ思ひ寄ける、此家主は西之京の乳人が女也、兄弟三人在、右近は他人なれば、隔て御行方を告ぬ也と恨みけり、右近將、囂く言騷がれむが、憂く、亡君の御耻辱と思ひ、君も今更洩すなと包み賜へば、幼主の御上を聽にも行兼て、心ならずも月日を送りつ。

○彼女の四十九日、比叡山の法華堂にて行はせ賜ふ、內密なれど事省かず、經佛の莊飾迄疎ならず、惟光が兄の阿闍梨導師にて、嚴重に行ひけり、願文作らせ賜ひて、御師なる文章博士を召て、見せ賜ふ、寵人の黃泉に赴けるを、阿彌陀佛に依賴し奉る由を、哀に書綴り賜へり、唯此儘、更に申旨侍らずと申。耐忍に餘る

御涙の、溢るゝを見て、何人ならむ、其人と聞えもなくて、斯迄歎かせ奉る、宿世の高さよと云ひけり、布旋に調進爲させ賜へる、袴を取寄給ひて。

「泣々も今日は我結ふ下紐を
　何れの世にか解てみるべき

亡魂の此頃迄は漂ふなるを、何の道（地獄／極樂）にか、定りて赴くらむと想像つゝ、念誦尤哀にぞ爲賜ふ。

○再説彼伊豫介が家には、小君の來る折有れど、一頃の樣に托言もなければ、憂と覺し果にけるよと思ふに御惱とて皆騒げば、流石に可憐くて、遠く下りなむとする心細きに、思忘給へりやと、試かてら、小君して文奉る、（惣て文は必用の文斗を拔たる物とみる可實には前後とも多くの言あるなり）

空「承り惱むを（御病氣）、言にいでゝは得てこそ、増田は眞になむ
（シンメイヘイタセド申サレヌ心中ノクルシサ）
（ア、生カヒナシトマデ存マス）
（ノ池ノイケルカヒナキト云フ哥ヘ）

同「訪はぬをも奈何と問はで程ふるに
　いか斗かは思ひ亂るゝ
（オ[illegible]ナキ　シラスカホノミシテ）
（イハヌハイフニマサルトハホントデスヨオサツシ下サイ）

と聞えたり、珍らしきに是も又忘れ賜はず。

源「生る甲斐なきや、誰がいはまし言にか。
（イキカヒナシトハタレガイフコゾコチラコソサン〴〵）
（フラレテハナカヽサレテ生ルカヒナシ）

同「空蝉の世はうき物と知りにしを
　又言の葉にかゝる命よ
（オマヘニマケテ　アキラメテイル日ノチ）
（ナホハセアリナ「チイフテ人チナブリコロシニスル心ヨ）

果敢なしや」、と御手も顫ひて、亂筆ながら美跡也けり、猶彼空脱を忘思はぬを、憫然も又有趣も思ひけり、如斯惜からず聞え交せど、對面等は思ひも念す、唯折節の音信、云甲斐有者と思はれて止むと思ふ也けり、片方の人は、藏人少將を通はすと、他ながら聞賜ひて彼浮薄をと少將さへ惨惻に覺さる、奈何思ふらむ、女の心をみむとて、小君して、

源文「死返り思ふ心は知り賜へりや
（シニソコナヒスルホト　ソナタユヘト）
（ソレニツチウハ聟トリシテサゾオタノシミ）

源「仄にも軒端の荻をむすばずは
　露のかごとを何にかけまし
（一度デモアフタレハコソ　サモナクバナンノ）
（ムコトリノ「サトヤカク思フモノカ）

高やかなる荻に附て遣はす、忍びてとは宣へど、若粗

ちて少將の見るとも、予也と知らば何とも得いはじと覺す、御心緒ぞ要なかりける、少將のなき折に見すれば、心要とは思へと、斯思ひ出られたるは嬉しくて、御返し口疾き斗を托言にて。

新「仄めかす、風につけても下荻の　（オメヅラシイ御フミ）（下荻ノ如ク）
なかばは霜に、結ぼゝれつゝ　（嬉レイクモアリ又少將ニ見トガメラレルカト心配トツオイツデス）

惡筆を紛かして、點長く引散したる、最下品也、火影の貌思ひ浮べられて、何の志操有氣もなく、驕ぎ誇りたりしよ、打向ひ居たりし人は、貌こそ惡けれ、遙に何事も優りて、心憎し等比較し賜ふ。

伊豫介神無月に今の十一月下るといへば、餞別特別に賜ふ内方へも態と賜ふ、櫛扇等品々有、序に彼小袿返し賜ふとて。

源「逢ふまでのかたみ斗とみし程に
只すら袖のくちにける哉　（逢ノ下ルカラモヘナアヘレヌト思ヘバ袖ノ朽ルホト泣イ）

御使は歸りけれど、小君して小袿の御返しばかりを

「蟬の羽も立かへてける夏衣　（セヌケハ夏デアーシ今ハモトナリ遠方へ下ル身）
かへすをみてもねに泣かれけり　（トカハリマシタ御返シ被下ヲ見ルニ付テモカナシクナリマス）

思へば奇う、人に似ぬ心強さにても振離れぬる哉と、思ひ續け賜ふ、けふぞ冬立日なりけるも驗く、打しぐれて空の色氣も最哀也、つくづくと詠くらし賜ひて。

源「すぎにしも、けふ別るゝも二道に　（夕貝）（空蟬）
行方しらぬ秋のくれかな

人知れぬ物思ひは苦しかりけりと、覺し知ぬらむかし。斯樣の架々敷事、强に秘し賜ひしも惘しくて、皆洩し止めたるを、奈何皇子也とて、物譽がちなると、咎る人在ければ、少し記しつ物いひさがなき、罪去所なくこそ（人の傳は讒誉褒貶共に憚らず有の儘にかくべき物也との意に依）

夕顔卷注

○六條御息所　桐壺帝の御弟、皇太子に立て、間もなく薨し賜へり、故に前坊と稱す、其妃也、六條に住

賜へば、六條御息所といふ、端にて美人なれば、源氏種々手を竭して、終に靡けたれど、餘りに執念深き本性あるに依、少し嫌氣さして、始の如く専ならぬを恨て、源氏の思ひ人に、片端より祟りたる、恐ろ敷怨念也。

○大貮乳人　源氏の御乳人第一の人也、其子維光は、源氏の近臣にて、常に夜中曉といはず御供に離れぬ人也、君も維光には、心中の秘密を隱し賜はず。

○半蔀　日覆雨除に、軒より板を垂て棒にて突上おく物、一間有を蔀といひ其半なるを半蔀とは云ふ也、今俗シタミと云も是なり。

○切掛　板を並べて垣とするを云ふ。

○遠方人に物申　旋頭哥に「打渡す遠方人に物申我其そこに白く咲けるは何の花ぞも」貴人賤民の体を珍敷見賜ひて何花なるやと知り度思召て此歌を號賜へれば隨身疾く心得て夕皃と申上たる也。

○揚名介　昔より是を源氏物語三箇の大事杯と仰山に云へれど然迄六ケ敷事に非ず詰り名斗の介也何介と名を揚られても其介たるの役を勤めぬ者を揚名介といふ也。

○葛城神　役優婆塞金峯山と葛城間に石橋を架せむ爲に土地神を召集て造らしむ葛城一言主神形の醜を羞て晝は出ず夜而役に就く行者怒て咒力を以一言主を封鎖す此故に石橋は造かけたる儘終に不成と云葛城山上に谷に向て突出せる大巖即其石橋半成れる物と云ふされば「岩橋の夜の契も絶ぬべし明る佗しき葛城の神」等の歌あり右近謂て落むとせし故此葛城神が橋を歹く造たる事よといへる也。

○優婆塞　俗の儘にて佛道を修するを云ふ男を優婆塞女を優婆夷と號す涅槃經云善男善女受二三歸依一則名爲二優婆塞優婆夷一

○長生殿の舊例　桐壺卷に精細註せり參照あれ。

○何某院　河原左大臣融公の邸也庭に千賀鹽竈を摸造し廣大なる池あり其後荒たれど改造せは面白き見込有るを以源氏の御領と爲て常は預りを置かれたると見るべし此處に妖靈の出たる事大鏡にも見えたり。

○名謁　亥剋今ノ后十時　は殿上宿直の侍臣を點呼する也一人立て誰か侍ふと問へば各々其名を告る是を名謁と云ふ次に瀧口武士殿居申と呼はる瀧口官廿人在一時毎に交代して弓弦を鳴し午夜行して非常を警誡する也民間火之要心廻は是を習ふ也夜廻りするに拍子木を以す

○三輪組　老て腰曲り蹈れば頭と兩膝頭と相寄りて三輪を爲す三輪とは火架也「年ふれば我黑髮も白川のみつわくむまで老にける哉。」

○増田は眞になむ　大和國名所古歌に「ねぬなはの苦しかるらむ君よりも家ぞ増田のいける甲斐なき」此哥の意をとりて御病は苦かるべきも其御惱よりも家こそ生がひなし増田の哥は眞也と申源氏の返答に其生甲斐なしとは誰のいふ言ぞや散々に人を愚弄したる上句の果に生がひなし等と當付いふ憎らしと思ふ下から又心に懸て訪てくれる言の葉に掛る丶我命哉となり。

▲源氏物語俗譯に就て

源氏物語の日本文學上に於ける空前の大作たるは皆人の知る處る、國文家は是を泰山北斗と仰ぐ、されど千年以前に集へたる我が王朝の文な以て今日の讀書社會に當はまるべき様俗解するは又至難の事業たり、譯者の困難は固よりなれども譯字を逈つて當時の文章を彷彿せしめんとする讀者に在つても又決して容易の業にあらざるを知るべし。

源氏物語を譯するに當つて始め三様の方針を採りたり、甲は原文の假字を漢字に變して解說する方法、乙は原文を現時の俗文にくだきて解說する方法、丙は梗概を約說するは極めて容易なれどもそれにては源氏の眞相面目を傳へ難きを以て始めより採らず、甲と乙に、就て比較するに、前者はよき方法なれども王朝時代の文章を悉く漢字に變して譯するは極めて困難にして離解に陥ること原文にも勝れり又後者を取れば俗耳には入り易きも斯くては王朝の風俗人情の高雅優美なる義態を傳ふる事能はず、依て甲と乙との兩様を折衷して俗文にて變更なき限りは是を俗譯し原文の譯し難き所ろは漢字を變して解釋に努めたり。若し今後文に不明亮の個所あらば、少くも再讀の勞を取り、熟讀して以て其の意味を啓發し玉ふべし譯者に於ても又大に注意して解說に務むべし。

讀者中幕家の力あらば我が拙譯を源氏物語の原文と對照して讀むに努め給ふべし斯くすれば雅俗文にて不安心なる處ろは原文に於て判然するべく、原文に於て不明亮の個所は俗文に於て粗々通ずるを得ん。

史傳

女刺客

シャロット、コルデー孃

菊池雪子

けたゝましう人の騒ぎ立しより、骸は山と積み重り、血は斷頭臺に瀧つ瀬をなして迸り、あさましやな、革命と呼ぶなる殺氣に充たされたる佛蘭西國の人民は、たとへば道ばたの犬が諸吠えに、吠ゆるが如く、理もなく無下に雷同して、惡事は日々に募り行くのみなるぞあさましともあさましき、か弱き女性とたが目にも映せしコルデー孃は、その氣質け高く、感情敏く、いまはしの世と空吹く風に都の便聞き過し難く、やがて反逆黨の首領を暗殺せんとけなげにも企てけり、シャルロットが生れしコルデー家は、有名なる詩人コルネイユの後裔にして、曾孫女に當り、父をジャック、フランソアーと稱し、母をジャクリヌ、シャルロット、マリーと呼べり。

幼少にして母君は歸らぬ旅の人となり、よるべなの身となりにしを、姉君二人と共にカアンの尼寺に寄宿せしめられ、さて父君は繼母を迎へられぬ、若葉をゆるく吹きさゝめく春風の便にも、雁がねのゆかしさにも、我が家のまづぞ思はれて、月日を此處に過し、學の道にいそしみしが、故ありて寺院は閉止せらるゝこと、なりければ、生徒悉く退校を命せられぬるぞ是非もなき。

かくて、カアンに親戚なるド、ブルトヴィール夫人あり性沈着にしてきらめく交際場裡に出づるを好ます、時流を逐はず、恰も浮世はなれたる人のごとく、幽閑に星霜を送りけるが、退學したるシャルロットを家に招きていつきかしづきけり、谷水清く、鳥鳴かず、問ひ

來る人も絶えてなき此の住家に於てすら、シャロットは佛蘭西國の慘狀日に盛んに、革命の熱度高まるを片腹痛く思ひ餘りて、ルッソー及びラペレナールが著したる哲學あるは政治の書を、暇あるに托せて繙き居けるを、家あるじ、シャロットが意志の傾向かくとしもつゆ疑はざりき。

眼元やさしう、紅さしたる、しかも、覆盆子の如き美しき頰して、容貌麗はしき少女の腦裡に遠大なる計畫の念さまよはんとえ知られざりき、外貌輕佻にして惡戯を好み、諷刺を嗜み、苦言を口にするやうなる少女が、勇壯奇拔の性質なりと推測せる人更にあらざりき、水色のうつとりしたる眼光は、少女が精神の潔さを示めし、樂律に叶ひたる聲音は、罪なき童のそれのごと無垢の時を偲ばしめ、故意になせるも、さあらぬも、風姿のいともしとやかなることは、烈しき怨望の村雲が心裡を掩へるを隱蔽せり。

夫人に知らしめずして、シャルロットは日々新聞の上に都便を愛讀し、其が中、時に立法議會の爭論のいかなる結末に成り行くかを注意したりき、さるに、マラーなる者は無政府黨の首領となりて、博愛てふ美名を騙り、しきりに殺伐の氣風を人民に鼓吹せしかば、シャルロット獨り意に思ふやう、罪惡の主謀者たるマラーを斃さば自ら革命止み、佛國治まり、人民は助かりなん、さなり、と我と我が心に諾きたる決心鐵石も啻ならざりき、やがて本國の內亂治まるまでは英國に行き難を避けまほしう途に上れりと、父君に一書を送り、一千七百九十三年七月九日、白百合つぼみ、靑葉したゝるド、プルトヴィル夫人の家を外にして、合同馬車にとうち乘りパッを指して出で立ちぬ、道行く少女が心中いかなりけむ、野の草花も、狂ふ蝴蝶も、その袖をだに引かざりつらむか、あらず、少女は夕待たざる蜻蛉の果敢なき命と、人世を塵より輕く思はれけむを、しかすがに深高う、末なほ遠き妙齡をあだに過すを惜しと思はざりつるか、少女脈管の血は溢きて、義氣山を拔かんとすれば、一筋に惡黨の首領をなきものにして、衆人の命を救はんと心の駒の急がれて、十一日の

壹つ方パリの都に着し、ヴィユー、オグスタン町十七番の旅館に投宿せり土さへさくてふ暑き日の、旅路の憂さに疲れはて、前後も知らずうまゐして、明る日は心身を養ひ、思案を立てんと、プルタルクの著書を讀み、かつマラーに宛て一通の書面を認め面會を乞へり、シャルロットは、人目繁けん集會所にてマラーを殺害せんと企てつるも、病魔に犯され、自宅にて靜に藥餌をつとむる折柄なりとて返事こず、

　東雲しらみて日の影さしそむるに起き出で丶、シャルロットはパレ、ロアイアールに行き、金物屋にて短刀を購ひ、肩掛の端に包みて、そしらぬ體にもてなし、道行く馬車に飛び乘り、コルドリエ町にて下り、マラーが住居を指し、足を空にと急ぎけり、民の友と呼ばはりしマラーが邸宅は、いと廣大なれども、古びたる家屋なりき、今なほ存すれど、エコル、ド、メドシヌの十八番とぞきこゆる、名も知らぬ少女の訪問せりときゝて、マラーは面會を拒みければ、詮なく旅館に立戻り黄昏ちかき頃ほひ、シャルロットはまたしも訪ひぬ、近來マラーが家の規則とて、出入の人悉く帳簿に姓名を記載し、閽守の承諾を得て門内に通行するが例なれば、一少女の來たりて、姓名だに告げず、案内すら求めずして門内に入りたれば、閽守高らかに聲はり上げ、やよまてしばし、と呼び止めんとしけるを、少女早くも姿を隱くして、いつしか家に至りて取次を願へり。

　マラーの妻カトリヌは自ら訪問員掛の任に當り、出入の人にいみじう意を用ゐ、徒黨あるは特に親密の人ならでは夫に接することを謝絶しつ、されど、などて、年若う麗はしき少女が、ま白の衣を着絹の肩掛を纏ひ緑色のリボンとレースとをもていと輕らかに飾られ、蟬の羽衣のやうなるボンネを冠りたる温雅の風情を見ては、カトリヌすらもさすがに疑惑の念を容れざりき、用意周到なるマラーさへ少女が聲の黃金と響くゆかしさに、いかなる事か我に來りて知らしめんとすと、むげに見まほしの好奇心に驅られ、はては妻に命じて少女を家に入らしめける。

　ひたふるに少女とあなづり、己が入浴場に入らせけ

り、恰もマラーは、そが醜き頭を布もて包み、小舟の形したる湯槽の中にありて、さゝげき板を上に置き、上半身を顕はして書状を認めつ、シャルロットまづ彼に偽訴状を差出せるに、マラーはこれを手に取り、いぶかしう開きて讀みしを、シャロットすかさず、肩掛の端より兼て用意の短刀を逸早く取り出で、マラーが胸腹目がけて突刺せば、ぐさと貫く短刀は、柄のあたりまで血まみれぬ、何かは以て堪えらるべき、怒ち大動脈を切斷し、肺臓に達すれば、マラー悲しげの聲はり上げ「カトリヌ、我が友よ、助けよや……」と叫び終りて、え堪ゆべくもあらず、首を前に垂れ、悲命の最後を遂げにけり。

妻はあやしき聲するはいかなる事の起りてけるにかと走り來りしが、かゝる悲慘の場を見るより、狼狽し、身動きもえせず「警官を來たらしめよ」と高う呼べるのみなりき。

路行く警部ローラン、パース門に佇みて、婦人の叫聲あるは容易ならぬ變事出來せしと聞き居けるが、やがてカトリヌの聲に應じて跳りて家に入れば、マラーは血のけだになき鉛色の顔して、紅みなぎる湯槽の中に横はり、沈默なる少女一人側に立てければ、よもマラーを殺害せしものは疑はしきこの少女ならめとは誰しも疑はせざりき、されど警吏が現場に見屆けたるものは、少女のほか人一人もあらねば、恐怖の念にありふ椅子を振り上げて力に任せシャルロットの頭を打てり、醫師も駆りて治療を試みしが、重き傷手を負へるより、命のほどおぼつかなしと確證し、手當も今は甲斐なかりき。

近隣の人、道行く人、マラーの殺害せられしを聞き、憤慨して家に押し入り、その混雑例へんやうもなし、さるに珈琲店の主人ベルゼーなるもの進み寄り、シャルロットの手を取りて此の場を避けしめんとせしが、途上人山築きてかたみに、拳を上げ少女を打ち殺さんと身構へしかば、ベルゼー事の危をさとり、少女をして再びマラーが家に歸らせ、一室に囚へて謀殺の顛末を詰問せり、シャルロットは恐怖怯懦の氣色だに見へず、柔

和をもていと寛大に人々の處分するまゝに從ひつ、冷靜の情を表はし人々の間に答へけるは、我が本國佛蘭西に内亂起りてしより、罪なき血潮の日々に流さるゝを見ること、いと慰はしう、我れ、國家のため、命を犠牲にして、暴徒の首領たるマラーを斃し、諸人を助けまほしう、はては巴理に來りたるにこそ。固より一人にて企てし事なれば、他に共謀の人とては更になし、たゞ我れ一人の了簡よりして都に上らんとは思へりし……。」と辨舌爽かに云ひ放てり。

シャルロットの所持品を取調べけるに僅の金員、革包の鍵、糸卷指拔と止ピンもて綴られたる書付二通とにして、内一通は佛蘭西の國民に宛てたる宣言書、他の一通は己が行爲を豫め記せしものにぞありし、寡言沈默のコルデー孃は、マラーが妻カトリヌが悲歎の情態を目撃して、うたゝ哀れさを催せしが、人々の罵詈憤激の言の葉を耳にすとも、ひたすら虚心平氣なりき、程なく車にうち乘らせられ群衆の騒ぎ立つ中を通りて獄屋に導かれたり。

其の夜一夜は坐獄にて過せしめられしが、シャルロットは、あくまで己が所業に悔いなきを斷言し「我は我が竭すべき義務を果せり、今後我が企業は人の經營せんことを……」と云へり。

やがてコンシエルジュリの獄に移されければ、シャルロット父君に一通の書を認む、其が文に云ふ。

文して申上候過し日父上様に御相談だに仕らずパリに向ひ出發致し候事さぞかし不孝者よと御腹立もおはすらんなれど何卒惡しからず思召下され平に御免の程御願ひ申上げ候、其は他にも候はず兼ての宿望を當地にて果さんと存じ候ひき爾後は罪なき人の血の理なく流さるゝやうの事有之まじく存じ申候あはれ父上様には妾ごとき娘は有たざりしと何卒御あきらめ下され度、さあらずば父上様よ妾に供はりたる天命のほど却て御喜び下され度願ひ上げ候をこがましけれど妾が目的のいともけ高かりしを信じ居り候御先祖様コルネイユの名句に「愧づべきものは罪惡にして斷頭臺にあらず」てふこと有之候まゝ御忘れ

下さるまじく獄上率り候先は一筆御詫かた〳〵御暇乞まで、あなかしこ

シャルロットより

父上様まゐる

翌十七日、シャロットは革命黨より組織せられたる裁判所に召喚せられぬ、其の時のいでたちは、流行の胡蝶頭巾と稱して緣の幅いと廣う、翩々として風に戯れるが間を長き薄栗色の頭髪見えて、肩のあたりになよびかゝり、大きなる肩掛ゆるやかに着流され、ま白の、卵形したる顏ばせに、長き睫毛もて被はれたる、潤みがちなる眼元やさしくも、何となう、嘲弄のさませるも、稚兒のそれの如き聲音に物云ふときは、男も女も、老ひたるも若きもなつくべかりし風情なりし、撓まずけ高き態度して、法廷に出で、あらゆる訊問に答ふるにも心神安う、穏かにして、機智を失はざりしは、外貌の美麗なると意志の堅固なるとに、ひとしほ艶を添へり、此處に少女の肖像を餘念なく寫生せる傍聽人あるを、程遠きに見付ければ、シャルロット寫生の便を計りて、愛嬌づき折々身を彼方にかはしやりぬる。

名譽心強く、詐僞を嫌惡し、シャルロットは假りにも己が心をだに欺かずして、信實もて裁判官の問に答へぬ、こはこれ後世に傳はりていと有名なるものなるぞかし。

「マラーを殺害せよと誰人が汝を煽動せしか？」

「彼の罪惡」

「謀殺は誰が勸によりしか？」

「妾自ら……人の勸によりて行ふことは常に好き結果なし……妾は同胞十万を救はんため、一人を殺害したるにこそ」

「マラーを嫌忌せしめたるものは誰なるか？」

「妾の嫌ひのみにて足れり、などて他人のそれを待たまし。」

「マラーの同類を悉く斃せりと思ふや？」

「彼れ死すれば、餘はそを聞きて恐怖せん。」

斯くて、シャルロットはかはらぬ剛毅をもて、簡潔に

能辯に、敏達にしかも嘲弄を交へて裁判官の問に答へければ、民黨の代表者たる告訴人フウケ、タンヴィール等に力をこめ、思ひ知れと云はぬばかり、少女を打ちつゝ「汝は人殺に熟錬したるものよな」と罵りければシャルロット憤りて「おゝ暴虐の奴よ、汝、妾を刺客と見做すは誤てり。」と高らかに叫びぬ。

裁判官は、うら若き少女の命とらんもいとほしう、いかにもして救はんものと、衆人に、こは狂女にして常識を失へりと宣べたれど、シャルロット此の辱にえ堪ゆまじう、滿面に紅の潮をみなぎらしぬ、閉庭の後辯護士シャ、ウヴォー、ラガルドに面會を乞ひ、深くその勢を謝して獄に歸りしが、やがて斬罪執行人入り來たり、シャルロットを捕縛し、刑場に行かしめんとしければ、不意のことゝて思はず「はや時は來しか!!」と言ひつゝ、房やかなる髮のさゝけき束を切り取り、「いざ、形身に參るはこれより外に何にもなし、妾が心ざしを取り給へや」と、已が肖像を寫生せし畫工に遺りぬ。

殺人犯の常服とて、赤き着物を着せられ、七月十九日、勇ましき少女は死刑場に導かるゝことゝなりにき常は忌まるゝこの衣服の色も、シャルロットがま白き顏ばせ、空色したる眼には、彩色の配合あでやかに、人目を引けり、精神の皎潔淡泊にして、開きもやらぬ花の如き妙なる少女は、沈默を守りて、衆人に圍まれ、呼喚の聲かまびすしきに激する色とては更になく、進退自若としていとたふとき姿なるを、暮れゆく日の光すら、少女が頭上の光環を作りて沈めり。

斷頭臺の下に至りて、一時は蒼うなりけるが、つと意を取り直し、愛嬌を浮べて、雙の頰に紅をさかしぬる。

間もなく、首は骸を離れぬ、あはれ、妙齡の美しき首を、マラーが徒黨は罵りつゝ、足に踏みにぢりて、死後まで侮辱を與へければ、見物の人々いたく憤り、彼等を捕へて獄に下しぬ。

果して、コルデー孃は目的を遂しゝや、一身を犧牲にして公益を求めたるか、佛國の暴徒は、日に〳〵惡

魔非道を働きて、勢力盛んに、權威を逞しうし、マラーが死骸を勲功者の公堂に納めて敬禮を盡したるは、まことに愚も極まれり、さるにても、暗より出でし國民が、朝日の影に人道を顧みてしより、やう〳〵内亂治まり、マラーの死骸は公堂より取り除かれ、惡徒等のそれに合葬せしめられ、シャルロットの功は今に傳はりて、烈女の鑑とせられたり。

女先生

須藤求馬

徳川氏天下を一統するに及びては、弓は嚢にをさまり劍を賣りて牛を買ひ、時に太平を謳歌せり。右文の世となりては、なべて學問武藝の修行盛に行はれゆく其の中に、いとも秀でたる文武堪能の、二人の女丈夫こそあれ、共に門戸を張りて、弟子に教授し、男子をして後に瞠若たらしめたる女先生なり。これを江戸女師範の始めとも爲すべしと、女子教育史上、特筆して傳ふべきことゝ思寄るまゝに、かの二女の傳をものして、世に紹介せんと擬す。

佐々木留爲女

留爲女は、父を佐々木武大夫とて、慶安年中下總古河の城主土居大炊頭利重に仕へその家臣たり。古武士にて意地強く、勇氣專らに、劍術は一刀流の奥義を請け、鎗は柳生流の印可を免され。馬は要馬流の秘術を極め、其の外、捕手、柔術は關口流の手つきを我物とし。一ツとして武藝にかけたる事なし。依て家中は云ふに及ばず、他家の面々、門弟の望み多かりしかども、武藝は身の嗜なり、他人に教へ賣物にせんこと士の本意にあらずと。獨娘の留爲女に、幼少より切瑳琢磨の手練を習はせ、女なりともすはといはゞ、一方の用立、花々しく討死せよと、嗜覺えし武術殘りなく傳授しけり。

留爲女は召出され利重の奥方に勤居たりける。然るに

其の後武大夫度々養子を致すと雖とも、偏屈者故、尻すゆる養子なく、依て相續すへき跡目なく年月を送りける程に、如何なる嗣の者にても、寄る年なみはせんすべなく、武大夫老病にて死去したり。其の後は、養子叶ひがたく家祿斷絶しける。留爲女は此事を殘念に思ひつれどもすべきやうもなくて、父が諸道具金銀一切をよく納め、散逸せしむることなく、其の身は達て土居家より御暇を申請け、淺草聖天町へ引籠り、表口三間、黒格子に玄關付、目當には、鎗、長刀、又具足櫃なんどの武器をかざり置き、入口に曲彔を掛けて表札に。

武道諸藝指南所女師匠佐々木氏

と筆太に記るしける。また其の外出の折からは、色好小袖を二つまへに引ちがへ、黒繻子の羽織に、白糸もて四ッ目結の縫紋を付け、髮は武家風に紛わげにして一切かぶり物を着ず、金拵の大小を帶し、素足に絹緒の草履をはき。すべて男の姿に少も變る事なく。稽古日には、男女の弟子を敎へつゝ、諸事細かに心をつけて、蒔繪の烟草盆もしほらしく實も、威ありて猛からずとも云べき、古今めづらしき女性なり。

當時は男達と云ふ者流行りて、白柄組、角袖組、又は世話組なんど云ふ男達ありて。江戸中に徘徊しける盜者ども、彼の留爲女が宿所へ仕掛け、又往還に待伏せして、腕に覺えある者ども、當て見れども、中々手ひどき目にあひける故、留爲女には叶はず、手指者なく異風女と云ふらし、男達も避て通す程の勇氣武邊の名を博したり。或る時、數奇屋橋の番所石谷將監より、聖天町の家主五人組に、佐々木留爲を召連來るべしと呼使の同心來る。町中狼狽騷ぎ、やがて留爲女を伴ひ番所に抵り、腰掛に腰かけて待ち控え居る程に。訴訟に出ける男女とも、彼異風女との、しりぞめき集るといへども、少しもわるびれたる氣色もなく、男とても威ましき風情なり。

かくて白洲に召出されければ、大小を脫ぎて下女に持たせ、羽織ばかりにて立出る。其の時將監聞て曰く、佐々木氏の女留爲とは其方か、召出せし事別事にあら

じ、其の方女の身として大小を帶すること、尤も用心の爲めなるべし。今天下の制禁にもあらず、武士の魂なれば、浪人又は女と雖どもあるべき事なり。然りながら、用心の爲とならば、往來の節は、女模樣の紅裏の小袖を相止め、編笠或は頭巾等の物をかぶり、男と見せて步行すべきに、さはなく、故意と女を顯はして姿擧動は男也。女は大抵女の姿あるべし、然るに、其方が体は事を好むに似たり、所存如何と不審しく相尋ぬべき爲召寄たりと申さるゝに、留爲女兩手をつき畏り、御尤なる御訊問、私儀は土居大炊頭家來佐々木武太夫と申者の娘にて候ふ。父武太夫病死仕り、家相續の男子なき故、跡目は斷絕いたし候ふ。あるに甲斐なき女の私一人、浪人仕り、何とぞ、父が遺跡を相續仕度獨り存じ、あはれ男子ならば家名をつぶさじものと殘念に存候より。姿も心も男子同前に心得父が敎し家の業をたて修行仕候ふ。若し私心に叶ふ同氣の男も御座候はゞ、父が意地を讓り申さんと女の姿を其まゝに武邊を表はし參らせ候ふ。婦人の事に御座候へども、狼藉御座候ときは、直には遁し申さず候。又こなたより手出しは仕らず候ふ。又大小を差し候とて、むざと人をあやめ申す儀にてもなく、兎角姿情も、夫を迎へ候までは、父が姿と存じ如此候ふ。他家へ嫁し候儀は、本意にあらず、唯々佐々木の家を興し、男に讓り申までは、何時までも女の男にて候と、辨舌よどみなく憚りもなく申ければ、將監にも留爲女が心底を聞屆けられ白洲を去けり。此事殿中に於ても沙汰ありければ、土居大炊頭も捨置きがたく家中第一の武邊者小杉九十九を以て、佐々木家の養子となし、留爲女にめあはせ、子供ども數々出生し、再び父が家名を揭げゝるは、實に類まれなる女太夫なりこの石谷將監と云ふは、丸橋忠彌を召捕られし武勇の町奉行なり。

荷田蒼生子

刀自は德川時代に於ける國學の開祖たる伏見稻荷の祠官荷田春滿の女なり。兄在滿は、國歌八論を著はして

有名なる人。蒼生子刀自幼けなくして、舍兄在滿に從ひて江戸に來り、長じて某氏に嫁す。然るに、未だ幾程もたゝずして、夫うせたまへり。因りて已を得ざる事情ありて、兄の家に歸り、勸むる者多かりしも、再び嫁ぐことを承引ず。刀自資性聰穎くして、身を持すること頗ぶる謹嚴なり。能く父兄の志を嗣ぎて、專はら和歌文章を練修し、遂にその妙域に達せり。後紀州侯に聘せられ、女公子の師範たり。一旦仕を辭せしが、後復た召し聘せられ、年四十九歲、終に暇を願ひて全く職を辭し。江戸に寡居し、淺草某町に一廬を結び、閑靜に棲みわび、同志の友垣を集へ、讀書吟詠に餘念なく、風月を友として暮しける程に。世人稱して「女先生」といふ。女先生の名、益々諸侯の間に高くなりもてゆき、諸侯方の夫人女公子、弟子の禮を執りて師とし事ふる者、日に月に多くなりしかば、啻に夫人女公子に止らず、往々殿方も就きて歌道を問ひたまへる者あり。中に就きても、土佐侯、姫路侯等、皆禮を厚くして招待せり。

女先生儒官の家に長じ、佛法を信せず、其の住居は寺院に隣れるも、かつて一たびも佛陀を拜せじといふ。もと蒲柳の質、常に善く病む、されど容儀を修めざれば人に見えず。故に平生親み狎るゝ人と雖ども、其の病患のあるを知らざる事多し。あはれ、女子の嗜みかくあらまほし。蒼生子識見高かりしかば男子の質を取りて學ぶもの頗る多く天明六年を以てみまかりぬ享年六十五。

清水濱臣曰く。凡そ名家の學、大かた二代とは續かぬものなり。さるを荷田氏三代家聲をおとさず、蒼生女などの如き、女丈夫さへ出で來ぬる、めずらしきことなりといへり。

加藤千蔭曰く、刀自の歌のさま、男山のをゝしきものなるは、常の心おきて、いさゝかにも手弱女のくねくしきならはしなくて。加茂の御手洗底清く、淀の河水よどめる筋もあらぬ心から、自ら言ひいづることもしかなりと。これ等によりても、蒼生子刀自の和歌の才に富めりし事は知らるべし。

其綴れる文も詠める歌も、なべて心をゝしく調高くて、才氣のたゝならぬ節見えてめでたからぬはなし。

四百餘州の主權者

西太后

西村天骨

日露の戰は、何の爲めに開かれたるか、支那の衰へたるに乘じて、露國が其欲深き野心を、滿洲の地に逞うしたるに因ればなり。支那は何の爲めに衰へたるか、尊大自ら搆へ、文明の大氣を呼吸せずして、世界の進運に背きたるに因ればなり。支那の衰へたるは、事一朝一夕にあらねど、其最も近き原因は、北淸事變に於ける、連合軍の壓迫を被むりしに在りき、日淸戰爭に於ける敗衂に在りき、更らに遡れば、英佛連合軍の北京を陷れしに在りき。されど又其原因を索むれば、西大后なる女傑が、陰險巧智なる策略を以て、禹域十八省を、自家運命の奴隷に供し、天子をして一指を國政上に染めざらしめ、百官をして其頤使に甘んせしめたると、確かに其一因なりと謂ふを得べし。

言ふを休めよ、東洋に於ける婦人の地位は、政治上に於て、全く空なりと、東洋の社會は、男子の專權によりて蹂躪せらると。見よ西大后は、其纎手を以て、支那全土の實權を握り、大臣百僚をして、其繡履の下に跪かしむるにあらずや。支那は絶對的に婦人の政權接近を否認したる國なり、されど慧才敏智なる婦人は古來憚る所なく、此禁制を破りて、國政を一令の下に左右し得たり、王覇の興亡、英雄の起倒、革命の旋風必らず其裏面に婦人の力の與からざるもの、一もあるとなし。其特に世に現はれたるは、漢の呂后、唐の則天皇后にして、近代に於ては、則ち西大后を以て然りとなす。而も彼の女の活動舞臺は、前二人に比して、世界列國に關係を有する丈け、多くの波動を社會に與へたるものにして、彼の女が衰弱せる老帝國の末日に生れ、列强競爭の渦中に身を投じたるは、寧ろ其怪腕を揮ふに於て、屈强なる時機と場所とを得たるものなりき。

彼の女今年齢既に七十、また花顏柳腰の舊姿を存せざるも、尚は是れ淸廷の隱然たる司命者たり、其一顰

笑は、東洋國際の一危一安に影響する所、決して少しとせじ、日露衝突の原因を知らんと欲するものは、必らず先づ淸國の衰弱に至れる所以を知らざるべからず、淸國衰弱の原因を知らんと欲するものは、又必らず西太后の事蹟を忘るべからざるなり。

△流寓の少女

西太后は道光十四年を以て、滿州の野に呱々の聲を揚げたり。其父姓は那拉と云ひ、滿洲の官人なり。されど彼の女の生家に關しては、多く傳はる所なきが故に、そを詳らにするに由なきも、當時滿人得意の時代なりければ、彼の女は決して茅屋陋舍の中に生育せしにはあらざりしなり。彼の女生れて未だ數歲ならざるに、父は事に依りて其官職を失ひ、家財を蕩盡して、殆んど口を糊するの途なく、小女を携へて、流れ〳〵て粤東にさまよひ來りしが、彼れは猶ほ機を見て、幾たびか其家道を再興せんと圖りたりき。されど逆運は益々彼等の頭上を見舞ひて、其一飛躍を試みる毎に、却つて一段の悲境に陷り、遂に彼等をして身を處する所なきまでに至らしめぬ。唯掌中の珠とし愛づる少女之を奈何すべき、襁褓の中に在りて、彼の女は其艱苦を解せざるこそ、其憐れのいや增すとなれ。

されば彼の女の父が、其悲境を歎つの淚は、幾たびか花の如き少女の面に注がれぬ。秋風の索寞は、獨り滿洲の平野に滿つるのみならず、彼等が羈寓破窓の下更らに之より蕭條たるものありき。

歲は道光十四年となれり、少女の齡旣に四歲、逆運の絆は、尙ほ未だ脫し去る能はざるのみか、彼等は愈愈悲境に沈みたり、親子の愛を全うせんか、二人をして餓死せしめざるべからず、二人をして餓ゑを免れしめんか、親子の愛は裂かれざるべからず、若し其身をして故官に安んぜしめなば、彼の女は侍婢に擁せられ花に笑ひ、蝶に戯れたらんに、今は千里流寓の身、昔を思ひ、今を詫び、旅衣の淚に霑けきこと、そも幾宵のありけん。是に以て彼の女は、遂に廣東一富豪の家に養はるゝの、已むを得ざるに至りぬ。蓋し南淸の風

習として、女兒を人に與へ、資を得て家用を給するは一般貧者の例なれば、彼の女も亦此風俗の禍を免る能はざるものなりき。悲むべきは名花未だ綻びずして、早くも他園に移植せらる、幸に能く霜風烈日に堪ゆるを得べきか。されど彼の女が、他日の素地を作れるは實に此時代に在りしなり。

彼の女を養ひたる寄寓は、彼の女が天成の麗質に加ふるに、夙とに才氣の穎脱せるを見て、大に之を鍾愛し、讀書算數より、琴棋の末藝に至るまで、盡く一通りの教育を施せしが、彼の女の聰慧なる、此等の修養によりて、忽ち才色無雙を以て、名を一鄉に知らるゝに至りたりき。こゝに彼の女に於て、一の幸福とすべきは、漢人間女子に纏足の俗ありて、故らに足の發育を害して、不具者となし、蓮歩蹁躚として、侍人に擁せらるゝを以て美となし、良家の子女、生孩の頃よりして、皆此弊を受く。されど彼の女は、元と滿人の家に生れ、成育四歳にして、漢人の家に養はれしかば、幸に此厄を免れたりき。且つ彼の女は、身寄寓に養はると雖も、固と一小婢に過ぎざりしを以て、深閨に閑日月を送るなく、日々外に出でゝ、世上の風波に接するを得たりしかば、漢人固陋の教育は、彼の女に於て、多く之を施さるゝの機會なく、心身共に自然の發育を妨げられざりき。彼の女が他日大后となりて、縱横の策を立て、大臣百僚を操縦したるの腕力は、其此時に於て得たる社會觀、與つて之を養ひたるものありしか。

△太子の選妃

既にして道光三十八年となり、彼の女は芳紀正さに十五に達しぬ。天成の麗質は、益々其美を發揮して、芙蓉の顔、新月の眉、婀娜たる其容、艷々たる其風、自ら是れ紅塵迷離の人ならず。されば彼の女の標致に胸を焦がし、才學に思を惱ませしもの、春花秋月幾多其人のありしや、知るべかりしなり。されど蛇は尺寸にして、其氣ありとか、彼の女の氣品の高き、いかで尋常市井の徒に、其身を托するを許さんや。よし千

萬人の男子を惱殺するも、彼の女は、寧ろ冷然として之れを看過せんのみ、而して徐ろに雲上飛騰の機を待たんのみ。

時に上諭あり、太子(咸豐帝)當さに自ら妃を選ぶべし、滿人の處女にして、齡十五歳より十八歳に至るもの、倘し自ら望むものあらば、速かに北京の宮闕に集れと、才色煥發して、竊かに青雲の志を抱き、勃々たる野心を有せる彼の女は、此上諭に接して、欣然自ら措く能はず、身を立て家を興すは、此時を措きてまた得べからずと思ひ、家人に告ぐるに、上諭に應じて、選妃の列に加はらんことを以てせしが、其望みの餘りに非分なるに驚かれて、誰一人之を止めざるものなかりき。されど彼の女の、執拗にして頑堅なる、斷々乎として外人の忠言苦言を排斥し、遂に其請を家人に容せしめたりき。是に於て彼の女は、與へられたる一領の盛服と、若干の旅費とを携へて、駕輛搖々、杳けくも燕京の天に向ひしが、此行誰れも彼の女が今日の地位を得る旅立ちとは思はざりき。

花の如き美人は、雲の如く北京の宮殿に集れり、明眸蛾眉、恰も春園開いて、百花妍を競ふに似たり。況んや此日自家運命の岐るゝ所、呉繡蜀錦の裝、美を盡くし、善を盡くし、孰れ劣らぬ艶麗美質、太子眸を轉じて、一々撿し去り、撿し來りて、彼の女に至るや、しばし凝視して恍然たりしが、大命は遂に彼の女に下れり。彼の女は、廣東一市人の小賤婢より身を起して、今や九重雲深き上﨟とはなりぬ。爾來帝位の繼承、大臣の更迭、國際の處理、演じ來る幾多の喜劇と悲劇の開幕は、正さに此時を以て始まれり。

△春殿の寵妃

彼の女の名、一たび清國皇室譜に上りてより、彼の女の寵は、後宮を傾けたりき。されど彼の女は、益々深く其野心を包藏して、謙遜人に接し、特に皇后に對しては、巧言令色、事を盡くし、辭を盡し、身を盡して、只管其意を迎へたりければ、皇后は却つて彼の女を以て、唯一の同情者と思ひ、彼の女の恩寵を妬ま

ざるのみか、彼の女に信頼すると一方ならざりき。

斯くて彼の女は、齢二十歳に達せし時、一男兒を擧げたりしが、是れ即ち後ちの同治帝なり。是れより帝の寵愛は益々厚く彼の女の根底は愈々堅く、威權一宮を壓するに足るも彼の女は、猶ほ容易に其爪牙を露はすとなく、一宮の歡心を買ひ、人心を收攬するに怠らざりき。其後ち生兒立てられて太子となるに及んで、詔によりて皇后を東后と稱し、彼の女を西后と稱し、陽はに宮中一箇の勢力者となり、春遊夜宴の他、嘗つて其腕力を揮はざりし彼の女は、漸く之より喙を政治上に容るゝに至りぬ。



西太后最近の御撮影

△熱河の蒙塵

咸豐九年清國は天津假條約の交換を肯んせざりしより、端なく英佛聯合軍と砲火を交ふるに至りしが、聯合軍は猛然として北進し、清兵頻りに敗れて、天津は陥り、張家灣は奪はれ、通州の守備力支ふる能はずして、聯合軍の勢、破竹も啻ならず、北京の宮闕を指し來り、圓明園は鐵騎の蹂躙する所となり、納涼園は一

炬に焚かれ、昨まで仙遊の宮殿、今は修羅の巷となり擧朝狼狽して爲す所を知らず、帝を擁して熱河に蒙塵せしが、あはれ萬乘の君も、此悲運に陥りては、一飯の食だも、容易に得る能はず、翡翠揚々の幸は、昨の夢と化し、昇輿の人夫をも、僅かに求め得たる程にて袞龍の袖、風露に冷かに、初秋の月、千草の蟲、孰れか蒙塵のあはれを添えざる。西太后は斯る悲境に在りても、咸帝とは形影相隨ひ、一日も別れしとなかりしが、其翌年に至つて、咸帝は悲風惨憺たる離宮に、終天の恨みを抱いて崩じ去り、太子七歳にして、此多難なる國家の帝位を繼承せり。西太后は之を悲みたりしか、將た喜びたりしか、さるにても彼の女が、淸國の政權を擧けて、之を自家勢力の範圍に歸したるは、實とに此變事ありて、一日を速かにしたるものなりき。

△專權の悱后

太子帝位に登りて、恭親王、東太后、西太后は、先帝の遺詔によりて、攝政となり、萬機を總べ、兩后は特に幼帝保育の任に膺れり。恭親王は、咸豐帝の弟にして、帝の熱河蒙塵に方り、親ら英佛と和親を媾じて其兵を戢めしめ、總理衙門を設けて、首席大臣となり威權中外を壓せしが、西太后は、恭親王の威力、斯くも日に盛んなるを見て、頗る嫌惡の情に堪えず、如何にかして親王を陥れ、彼れの權勢を殺がんものをと心を碎きしが、遂に事を先帝の葬儀に際し、係り官が多く古典に違ひたるとありとて、其大官數名を酷刑に處したり、此等は皆恭親王の幕下に屬するものにして、彼の女は、之もて暗に親王を威嚇せしものなりし。其後同治四年に至り、彼の女は、更らに恭親王の官職を奪ひ、廷外に斥け、久しからずして再び之を復せり。斯くして彼の女は、宗室大臣を飜弄して、彼等の無能力を、十分に中外に認めしめしと同時に、又自家權力の恐るべきをも識らしめ、八面玲瓏の愛嬌者たりし彼の女は、變じて殘忍冷酷なる老婦となり、滿廷をして慄然たらしめぬ。光緒十年に及んで、彼の女は恭親王に代ふるに、醇親王を以てせしが、其風流文雅の人

にして、到底多難なる政局を支配する能はざりしを以て、別に李鴻章を擧げて、其短を補はしめぬ。彼の女の專横、斂ね此の如しと雖も、されど又其臨機應變の才能は、幾たびか國步の艱難を救ひたることなきにあらず、就中曾國藩、李鴻章、左宗棠、張之洞等の俊傑を用ゐて、衰弱せる老帝國をして、小安を得せしめたるは、彼の女の力量、決して尋常巾幗社會の、徒らに陰險巧智を弄ぶものと、同じく觀るべからざるものありき。されば虎の如き猛將勇士も、羊の如く彼の女の脚下に慴服し、髮賊の變、捻匪、回匪の亂も、左までの禍を醸すに至らしめざりしは、彼の女の社稷に對する功罪、また相償ふに足らんか。

△垂簾の政

大淸四百餘州の政、意の如くならざるなく、榮華を極め、權勢を擅まにしたる西太后も、天命はまた奈何ともなす能はず、愛子同治帝の、痘瘡を病みしや、彼の女は國手をして治療の術を盡さしめしも、帝は遂に同治十四年に崩去しければ、彼の女は痛く悲哀に沈み、轉た人世の無常を悲觀せり。若し尋常の婦人をして、此悲境に陷らしめなば、忽ち厭世的となりて、また浮世の事を顧ざるに至らんも、彼の女は飽くまでも野心の權化にして、其悲みはいつしか消え去り、如何にして自家の權勢を、維持せんかの問題に熱中したり、而して皇位繼承問題は、實に彼の女の命脈を決するものにして、彼の女は先づ此問題に向つて、縱橫の策を廻らしたりき。

正當の順序より云へば、惇親王は、咸豐帝の諸弟中最も年長者なるを以て、寶祚を履むべきも、當時親王旣に沒したれば、其子端郡王、自ら帝位繼承すべきものたるは、中外の是認する所にして、一點の紛議を生ずる餘地なきものたり。されど端郡王齡旣に壯に達せしを以て、若し之をして大極に登らしめなば、彼の女は永く其實權を收められ、殘年を寂寞の裏に送らざるを得ず。彼の女の利とする所は、帝王たるもの、無能力者たるに在り、是に於て彼の女は成るべく、諸皇族

中幼冲者を求め、之をして帝位を襲がしめ、己れ垂簾の政を聽かんを欲し、醇親王の子を迎へて之を立て光緒帝と爲せり。帝の母は實に彼の女の妹にして、帝の齡當時尚は五歳に過ぎざりし。此鐵案は、諸皇族の意外とする所にして、又頗る非理なるものなりしも、擧朝彼の女の忌諱に觸るゝを恐れ、誰あつて非議を鳴らすものなかりしが、同治帝の皇后は、これを悶え憤りて死し、諸皇族はたゞ唖然たるのみ。而して内外大小の政は一に彼の女の簾中より出でにき。

（八）華奢冷酷なる老婦

佛人コルトレー、曾つて西太后の風采を記して曰く

「婀娜として優にやさしき其容、楚々として何となく雅びなる其風、長閑にして輕風波を揚げず、一池の春水鏡の如き處、右往左行する白鳥の清く美しき頸に似たり。其卵の如き顔は、多情らしき頤と、裕き額の繋ひたる寫形の生際に圍まれ、其純潔に隆起せる鼻は、稍くやはらかなり。其瞳は黑く輝きて、萬斛の愛を堪えたり、彼の女の總べての印象は、直ちに能く人の欲情を起き易からしむ」と、彼の女は實に此美貌を以て咸豐帝の恩雨惠露に浴し、春夜の短かきを恨みたりしが、今は空閨の寡婦、蛺蝶を恨み、鴛鴦を羨やみて、餘生を終ふるを得たりしか。彼の女の華奢は、既に人の能く知る所にして、圓明園、頤和園の壯美を極めたる、前代外く其比を見ずと云ふ。彼の女は常に嬖人と其間に優遊して、歌舞管絃に、長夜の樂を爲せしが、多情なる彼の女は、猶は之を以て滿足する能はずして秀姿無雙の一少壯青蓮英は、常に彼の女に奥深し接近し、彼の女の寵遇甚だ厚く、遂に之に大監の職を授けたり、世の西太后に隱子ありと稱するは、即ち蓮英の子なりと云ふ。

斯くて光緒二十年に至り、彼の女は齡六十歳に達し帝亦二十三歳となり、年少氣鋭、政治に勵み、諸政を改めんとの志、漸く切となりぬ。是に於て彼の女は萬壽節を擧げ、諸政を帝に還へしたりしも、實は是れ名のみにして、政權は依然として、彼の女の掌握する

所となり、觀心孫毓文は、軍機大臣として軍國の大政を掌り、寵臣李蓮英は、大監として諸政の樞機に預り宮中府中の事、皆此二人の專擅する所なり、帝の意、一として行はるゝ能はざりき。されば幾多の志士は、彼の女の長く國事に干渉するを以て、牝雞の晨するものとなし、其專權を罵りて、却つて重刑に處せられたるものありき。

此時に際して端なく日清戰爭は開かれたり、清軍は連戰連敗して、北京の宮廷は愕然たり。されど彼の女の豪華は、依然として繼續し、國家の休戚、毫も其念頭に置かざるものゝ如し。帝は憂慮措く能はずして、御史安維峻をして、國帑の贅費を省き、之を軍資に充てんことを請ひしに、彼の女は、赫として怒り、維峻を流罪に處せしが、爾來彼の女が、深く帝の己れを制せんとするを惡み、帝を待するの冷酷殘忍なる、殆んど其極に達したりき。當時正義硬直の士、寇連材帝の虐遇せらるゝ狀を敍して曰く、

中國四百兆人中、境遇最も苦きものは、我が皇上に如くはなかるべし。凡そ人孩童の時は、父母ありて之を親愛せざるはなく、其出入を顧み、其飮食を調し、其寒暄を勘む。孤兒に在りてすら、亦必らず之を撫するの親戚あるなり。獨り皇上は、五歲にして登極し、爾來人の之を親愛するものなく、帝の生母はありながら、之に親近する能はず、これ名分に限らるればなり。名分より皇上を顧察すべきは、唯西太后一人あるのみなれど、西后の驕侈淫佚にして絕へて皇上の安否を念となさゞるのみか、皇上每日三膳、其饌數十品ありて、食卓に羅列するもの御座を離る稍々遠きものは、半は已に腐敗せり。御座に近きものと雖も、大概ね熱冷鹹甘口に適するなく陛下一饌を求むれば、膳宰先づ西后に奏し、以て其旨を受く。西后輙ち儉德を以て之を責め、皇上復た竟に求めず。

と、是れ豈に殘忍極まる繼母の所爲として、人をして寒心せしむるものにあらずや。而も彼の女の酷薄は、之に止らざりしなり。連材は更らに敍して曰く、

西后の鼻上を待つ、疾聲厲色ならざるなし、常に鞭撻を加へ、或は罰して長跪せしむ。故に積威既に久しく皇上の西后を見る、猛虎に對するが如く、戰々兢々として、膽爲めに破らる。皇上曾つて頤和園の土工を停め、以て軍資に充てんことを請ひ、西后の怒に觸れてより、殆んど二年、皇上日々西后の前に至り、跪きて安を問ふも、西后終に一言をも交へざりし。と、堂々たる大國の主權者を以て、此冷遇虐待に遇ひ一歩も其自由を伸ぶる能はず、是れ何んぞ牢獄に投せらるものと選ぶ所あらん。

日清和を媾じて後ち、旅順大連は、露國に掠められ膠州灣は、獨逸に占めらるゝに及んで、帝は國家瓦解の期、近きに在らんを慮かり、日夜憂心忡々たりしが遂に康有爲の徒と謀りて、陰かに變法自強の企てあるや、彼の女は、早くも之を探知して、茲に廢帝の計ありしが、當時恭親王の威望衰へたるも、猶ほ滿洲派の重望を繋ぎしを以て、幸に其の衝突を免れたりき。然るに光緒二十三年に及んで、恭親王は、突如して歿せしかば、彼の女は榮祿、袁世凱の徒と、革新派の機先を制して、一擧にして其黨與を盡く重刑に處し、康有爲は亡命して、遠く日本に逃れ、皇帝は大液池中の瀛臺に幽囚せられ、而して清國の政治は、再び彼の女の簾中より出でにき。

△北清事變後の太后

端郡王曾つて帝位繼承の選に漏れてより、不平悶々自ら禁ずる能はず、殊に西太后との間に、反感を釀したりき。偶々山東に拳匪の亂ありければ、端郡王は、是れ西后を脅かすの好機なりと、乃ち乘じて以て起り兵火は忽ち北京の天地をして、暗黑たらしめ、群臣は離散し、團匪は猛烈なる勢ひを以て、列國の公使館を襲ひぬ。是に於て列國連合軍は、獨逸元帥ワルデルゼー將軍指揮の下に、團匪の討伐に從ひ、列國の精鋭は至る處に匪徒を擊ち破りて、北京に迫りしが、彼の女は皇帝を伴ひて、粗服を纏ひ、西直門を出でゝ萬壽山に落ち、更らに大原府に難を避けしが、聯合軍が、進

んで匪徒の巣窟たる保定に、其鋒を向けしかば、彼の女は又西安に避けたりき。此變彼の女は、頗る苦艱を嘗め、一杯の水、一飯の食も、時には得る能はざることありて、其慘憺却つて熱河蒙塵に過ぎたりしかば、彼の女は是に始めて、列國の恐るべきを知りたりしと云ふ。既にして世は平和に復して、北京の故都に歸へるを得たりしが、其天下の珍を集め、四海の美を盡くして經營したる圓明院は、連合軍の掠奪を受け、頤和園は蹂躙せられ、萬壽山は荒涼を極め、また昔日の景色なかりしかば、彼の女も爲めに淒愴の感に堪えざりしと云ふ。彼の女が晩年に及んで、稍心を國事に傾け秕政を改良するに意あるは、實に此大打擊が、彼の女の心裏に深く銘せしに依るか。彼の女にして若し一意專心國家の休戚を以て心とし、其聰慧敏鋭の才を轉じて、これを是に用ゐしめば、牝雞の晨、却つて是れ清國の幸福ならずとせず、唯其耳目を掩ふの近親者ありて、屢々事を破るあるのみ。

△逸事

米國公使デンビー氏、曾つて人に語つて曰く、西太后は世界君主中の一人として、青史に傳ふるに足る人物なり、支那が列國の間に、今日の地位を占めしは、全く彼の女の力に因ればなりと。

諸大臣が、帝に上奏することある毎に、西太后は、常に簾中に在りて、一々之を聽取したり。されど未だ曾つて面謁を諸臣に許せしことなく、其之あるは、六十歲後にてありき。

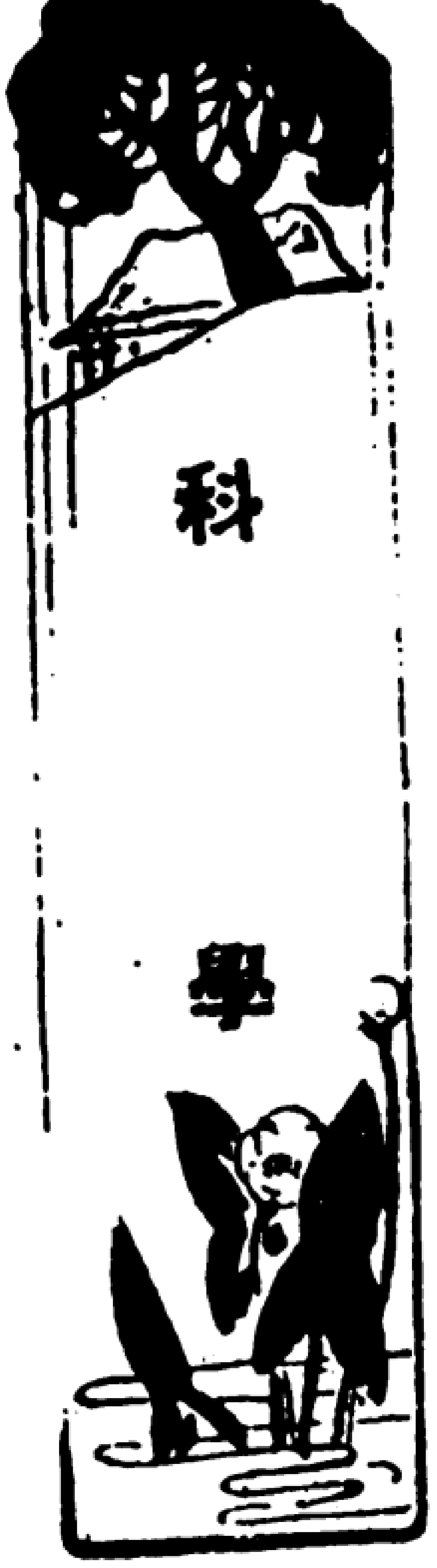
今年彼の女齡七十、萬壽節を期し、秕政改革の上諭を發せり。余近頃北京大學顧問服部文學博士を訪ひたる時、同博士語つて曰く、西太后は北清事變以後、頗る國事を憂ひ、鋭意弊政を革めんとせり。人或は皇帝の親政を唱ふるものあるも、彼の女の政治的技倆は、遙かに皇帝の上に出たる者にして、向後數年間、彼の女の手に依つて諸政を統一せらるゝこと、却つて清國の幸福ならんと。されば彼の女を目して、單に殘忍冷酷、淫邪にして華奢を極むるものとなすは、畢竟其半面的觀察にして、全豹を得たるの言にはあらざらんか。

格　書 (付英對譯)

Be slow to promise, but quick to perform.	約束するには急いぢやいかん、けれど實行は早くせよ。
A cat in gloves catches no mice.	手袋はめた猫は鼠を捕へず。
A penny saved is a penny got.	儉約したる一錢は儲けたる一錢なり。
What by diligence and what by patience we can be a successful man in the world.	吾人は勉強と忍耐とによりて此世に仕合せものと成る事を得るなり。
A young man idle, an old man needy.	若き時に怠惰なれば老年に及んで貧困となる。
From a humble cottage a hero often springs.	英雄は屢々貧家より出づ。
It is no shame for a man to learn that which he knoweth not, whatever be his age.	年齡の如何を問はず己れの知らざる處を學ぶは恥にあらず。
To be of use in the world is the only way to be happy.	世間に有用の人たるは幸福となるべき一手段なり。
All happiness is in the mind.	凡ての幸福は心の内に在り。
Happy he who can take warning from the mishap of others.	他人の不幸を見て己れを戒むるものは幸福なり。
At evening home is the best place for men.	人生に取つて最上の場所は夕方の家庭なり。
In the husband, wisdom, in the wife, gentleness.	夫には智、婦は順良なるべし。
Who lends to a friend loses doubly	友人に金を貸す時は金と友とを失ふ(二つを損す)。
He who has both money and bread may choose with whom his daughter to wed.	金と麵包とを有するものは隨意に我が娘を嫁せしむる事を得。

會話 (日英對譯)

Summer is over.	夏が過ぎました。
The mornings begin to be cool.	朝が涼しくなり始めました。
The mornings and the evenings are no longer warm.	朝夕はもう熱くありませんね。
It is still warm.	まだ熱うございます。
It is rather cool.	少しは涼しくなりました。
I feel yet as if I were in the hottest weather.	私はまだ暑中のやうに覺へます。
The days are getting shorter and shorter.	日が追々短かくなります。
We will need fires before.	もうおきに火が欲しくなるでしよう。
Fire is a good companion.	火がよくなつて來ました。
The days are shortened.	日が大そう短かくなりました。
The evenings are long.	夜は長くなりましたね。
It is good time to study.	勉强には好時節です。
Now, I must commence to work hard.	サア是れから十分仕事をしなければなりません。
It is a delightful moon-light.	好い月ですね。
From what direction does the wind blow?	風はどちらから吹きますか。
It is the season for fruit.	菓物の多い時節になりましたぜ。
Which do you like melon, peach, water-melon.	瓜と桃と西瓜の内で貴女は何が好です。
The weather is changeable.	天氣が變り易いですね。
The season for typhoons is approaching.	暴風のよくある時節になりました。
We come to the harvest-time.	秋穫の頃に近づきました。
The leaves begin to fall.	木の葉が落ち始めました。
The fields are turning yellow.	野が黄色になりました。



生理衛生　顔の話（上）

糸左近

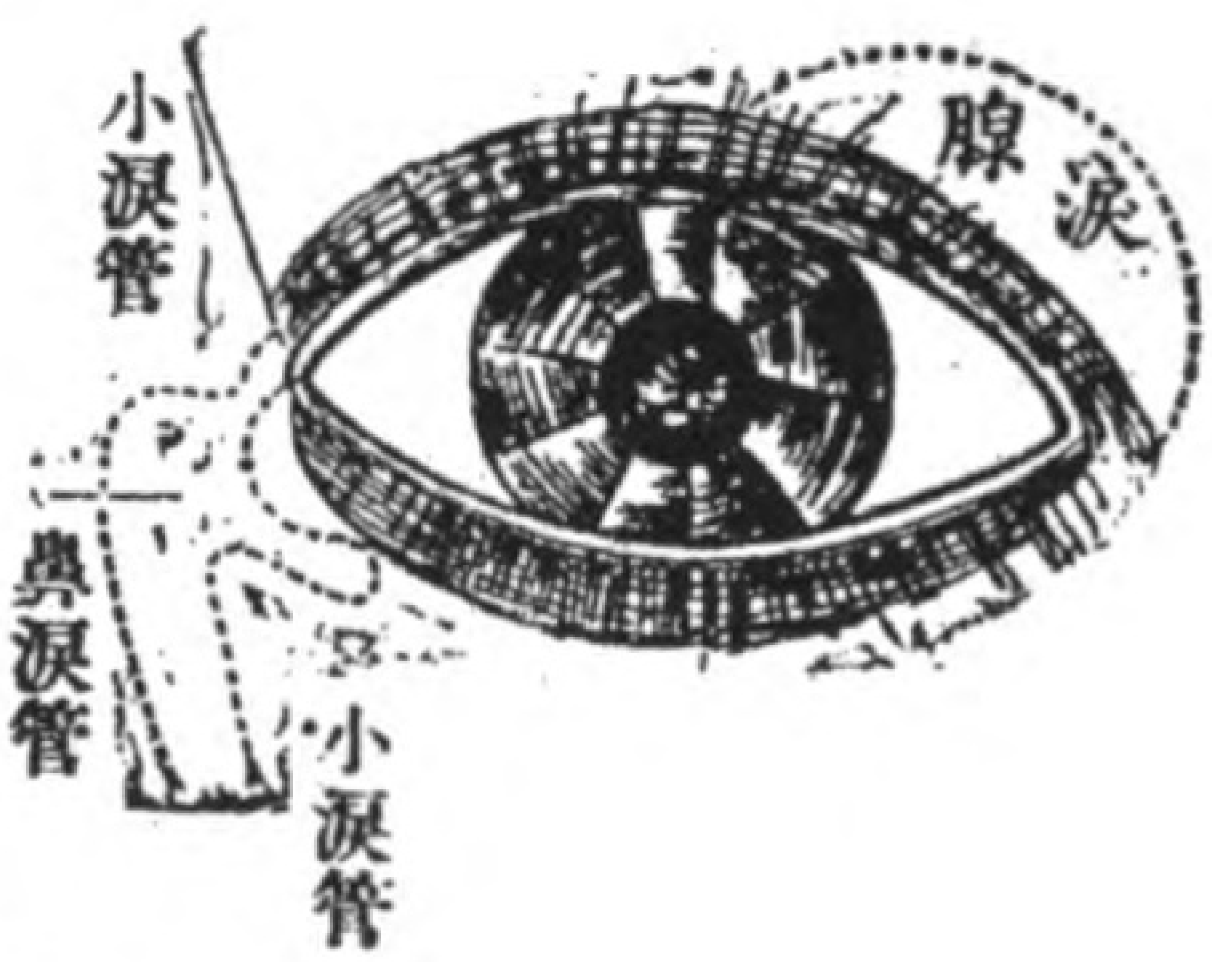
顔といふ中には、眼、眉、鼻、口、耳、或は皮膚、筋肉それから骨格、血管或は神經などと、色々あつて、之を一々穿鑿するには、眼、鼻、口、耳の唯一つだけ述ぶるにも、一册の書物となる位なれば、今回は外面に表ほれてゐる部分を、大略お話しいたし、次號には、其等内部の概要を説かう、

顔の中に「ま」の字のつく名前八つあるが何々といふ問は昔から子供の當物になつてゐるが、中には大人でも、それは「眞額、眉、眼、眦、瞼、眶、睫、前歯」であると即答出來ぬ人もある、子供に對しても愧かしい次第ではありませぬか、されば今顔中に在る主なる物の名稱効用から夫等の衛生などを左に述るとしませう。上から申せば前髪の下を前額（俗に額といふ）と云ひ、其處の筋肉を前頭筋と名づく、この筋肉は額の皮膚を動かす用をなすものである、古への武士は此處を傷つくることを非常な不名譽としたものである、これは察するに其の傷が能く目立つのみならず大切なる腦髓を被ふ場所であるのに之を禦ぐこと出來ぬやうな未熟な武藝であることを證明するやうな譯になるからでもあらう。兎に角この前額の恰好が大いに容貌に關するもので、人相家は前額の廣く平らかなるを以て寛大なる氣象を備ふる人とするは東洋も西洋も一致する説である、成程猿の樣に低ければ何となく愚人の如くに見ゆるし、又反對にお「出額」であれば福助然として甚だ醜い、故に美術家が聖賢の像を畵くにも或は彫るにも凹の無い廣々としたのに爲るのである。

前額の左右の側面を顳顬部（俗にコメカミ）と云ひ、其の筋肉を顳顬筋と云ふ、これは食物を噛み食ふ時に頬の筋肉と共に運動をなすものである彼の老人が少し堅い物を食ふ時、如何に此の筋肉が働くかを見ても分るでせう。孝道に篤き貴女方に老いたる父母ましまさば此の筋肉

を除り拔らしむるやうな食物を奉つてはなりませぬ。

前額の下方の左右に眉毛（俗にマユ）といふ短毛が叢り生へてゐる、これは何の功用を爲すかと尋ぬるに、或る學者は前額より落る汗などの眼に入るを防ぐものであると仰々しく說くけれど、芝居役者が之を剃り落してゐても何の不自由も無い點から推せば左程肝要な物でもあるまい、人相家は眉の細くて弓形なるを優しき心、濃く太きを善惡に拘らず勇猛なる氣象、其の外側の擧れるを癇癖、八字形に下れるを愚鈍其の長く伸びてゐるを長命の相とするが、或はさうかも知れぬ、何となれば、美人と言へば三日月の眉を連想し、豪傑と聞けば繁々とした眉を考へ、怒れば上る、泣けば下る、それから又霜白い長き眉は老人の神々しさを添ゆるからである。



眉毛の下には眼がある、眼は凹んだ窩の中に位置を占め、地球の様に球形である所から生理學上では之を眼球といふ、眼球の上と下とを被うて開いたり閉ぢたりする門戸を上眼瞼下眼瞼といふ、これは眼球を護る大切なものである、若し卒然電光が閃くめか或は棒の間近に來ることあれば必ず此の門戸を閉づるを見ても其の効用が分るでせう、其の又眼瞼を翻へして赤い所を結膜と云ふ、上下の結膜の緣即ち瞼に毛が生へてゐる之を睫毛と云ふ、睫毛は塵を拂ふの用を爲し、且つ眼瞼と共に強い光の眼に入るを防ぐ、淚は眼球の外上方に在る淚腺といふ嚢から出て來て、常に眼瞼內面と眼球前面との乾燥と摩擦とを防ぎ、其の殘りは內眦に開口してゐる二つの小淚管といふ管に入り更に鼻淚管と名づくる管を過ぎて鼻中に洩るゝものである、されど潸然と瀧なす淚袖を搾るなどいふ大泣の時は溢れて頰を傳ふは誰でも能く知つてゐること

ある、併又眼球を外面から見えると、白色の後方に褐色があつて褐色の中央に黑色がある、其の白色に見ゆるは角膜といふ透明な物で、褐色に見ゆるは虹彩といふ膜である、これは能く伸縮して光線の量を調節するものである。其の黑色に見ゆるは所謂瞳孔で、これより光線が入るのである、故に瞳孔を傷むれば直ちに視えぬやうになる、併し實際は黑色では無いが、唯内部の暗い所を外面より見るからである。暗い處から急に明るい處に出れば非常に羞しいし、永い時間外に居た揚句に家に入ると暫くの間暗くて見えぬ、これは何如なる道理かといふに、暗い處に居れば虹彩は縮まつて瞳孔を大きくし光線を多く入るゝやうにしてあるのに忽に明るい處へ出れば虹彩が伸びて瞳孔を小さくする暇が無い、然るに光線は何の容赦も無く一時にドット入り込むから、それで羞しいのである、これと反對に光線の明るい外に居て瞳孔を小さくしてゐた習慣性が急に復せぬから、それで家の中の暗さを感ずるのである、斯ういふ早急な刺戟を與ふることは眼の衛生上甚だ惡いことであるから、斯る場合には眼を閉てゐて、漸次に少し宛開くが宜い。尚眼球内部の構造或は近視眼遠視眼等の事は次號に詳しく述べませう。

眼の相に就いては、古今東西に於いて非常に多くの議論もあるが、今爰に之を說くは其の主意で無いから、普通に誰でも言ふ一二のお話を致しますれば、概して眼は大ならず小ならず黑白瞭然として所謂涼しいのが相學上から言つても、美術上から言つても、乃至は診斷學上から論じても上等な眼である。血管膨脹してゐて俗に言ふ血眼になつてゐるのは憤怒の情を表はすもので、醫者は之を腦充血の一徵候とするのである、又結膜の色の濃い淡いに依つても、腦の充血貧血を確かむる一便法としてゐる、其の他瞳孔の散大してゐるは腦に寄生蟲がゐるかも知れぬといふ疑問になるし、或は瞳孔の縮小は脊髓勞に非やといふ參考になるし、或は又視線の斷えず一定せぬは精神に異常無きかを考へしむるなど、眼が診斷を助くること色々あるものである、令ひ精神病者ならざるも其の視線を常にキヨロ

させてみる樣な人は、必ず注意力の少いしかも輕忽な性質である。此の外眼は色々な性情を表はすもので、卑近な例を擧れば、悲しければ涙ぐむとか、睡ければドロンとするとか、心身の關係も亦靈妙なものである。

次に鼻は顔の中央に凸出してゐるから、其の形狀の善惡は最も容貌に關係する者である、眼耳口眉などの惡いのも、醜いものではあるが、鼻ほど著しくは無い、若し夫れ獅子鼻赤鼻などに至つてははなはな見醜いなんかんと、そんな駄洒落は扱にして、今構造名稱或は作用から漸次進んで面白いお話を致しませう。



鼻は主に軟骨から成り、筋肉を以て之を被ふ、後方は咽頭に通じ、鼻中隔と名づくる物を以て左右に分つ、さうして其の分たれたる孔を鼻孔と云ふ、鼻孔の内面には神經が蔓つてゐる之を嗅神經といふ麝香とか糞便とかの小分子が空氣に混じて鼻孔に入れば嗅神經興奮して之を腦に傳へ茲に香臭の感を生ずるものである、この感は空氣食物等の善惡を撰び又味をも助くるものである、松蕈が旨いといふも第一に其の香馥郁として食欲を興さしむるからでもある、又鼻は香を嗅ぐ用を

なすばかりで無く、空氣を呼吸する所の大切なる道筋ともなり、又音聲を調ふる器にもなる、彼の梅毒などは鼻中隔或は鼻の全部の取れた人が、フギャ〳〵言ふを以ても分るでせう。

春は梅夏は橘秋は菊
●●はな無き冬は淋しかりけり

この冬の日に於ては殊に鼻から空氣を呼吸するやうにせねばならぬ、何となれば凛々たる冷い空氣が鼻孔より曲折して氣管に入るまでには、溫められて行くから、口より吸ふものに比ぶれば其の刺戟が少いからである、今一つ鼻呼吸の功能を言へば鼻孔内には鼻毛があつて、空氣中の塵埃を濾し、鼻汁が又之を流し出すものである、然るに鼻毛を剪つたり、或は鼻をかまずにスー〳〵吸つてゐる者に至つては、實に馬鹿者と謂はねばならぬ、斯ういふ人が誰やらに鼻毛を讀まるゝのであらう。

偖又鼻の外部を申せば、眉間から鼻の先まで通つてゐる一番高い處を、醫者は鼻梁と名づけ、俗には之を鼻筋と言つてゐる、次に左右の膨れてゐる處を鼻翼俗に小鼻と言ひ、次に鼻翼の左右に八字形の溝がある之を鼻唇溝と云ふ、それから又鼻の下の中央にも溝がある之を人中と名づく、そこで支那の人相家は鼻唇溝の深きは賢者の相で、人中の長きは長命の徴、しかも其の長さ一寸あれば一百歲を保たるゝといふ、余は前說は其の理由を言はれぬでも無いけれど、後說は信ぜられぬのである、何となれば精神の充實する時は確く口を閉づ、口を閉づれば鼻唇溝は深くなる、之に反して呆然口を開け涎を垂してゐるやうな時は鼻唇溝自ら消失するを以ても何うやら其の說の當らぬでも無いらしい、けれども人中云々を以て果して信なりとせば武內宿禰は三百六十歲の長命を保つたから、人中の長さ三寸六分、これに應じて顏の長さ殆んど五尺、實に奈良の大佛然たる人であつたと謂はねばならぬからである、尤も宿禰の三百六十も當にならぬことではあるが、余の實驗した人に隨分人中の長い方でそれで僅か三十八歲の短命といふ果無い人も有たのである。次に鼻の高い低い

狹い廣い或は色澤などに於て色々の說もあるか、明治の今日では隆鼻器といふ物があつて低い鼻を高くし、造鼻術が行はれて鼻無き人を慰め、鼻專門の醫者は赤鼻などは此處に分布してゐる血管に充血したのであるから何の造作も無く治してやると鼻動めかしてゐる樣な次第であるから、予も亦大いに硏究して他日又体相學といふ一科を紹介致しませう。

次に口は鼻の下部に位置を占め、人間が生命を保つといふ點から言へば、眼耳鼻などよりも一層大切な場所である。其の口を開閉する上の戶を上唇と云ひ、下の戶を下唇と云ふ、さうして其の上唇と下唇との間が口裂で、口裂の左右の隅を口角と名づく「口角泡を飛ばす」などいふは此處のことである。それから口内の屋蓋が口蓋で兩側の壁が頰、其の床底の動くものを舌と呼ぶ、次に口蓋の前方の硬い部を硬口蓋、後方の軟い部が軟口蓋、軟口蓋の奥の方に垂れてゐるものを懸雍垂と言ふ。齒は口內の齒齦といふ部の上下に嵌まつてゐる、其の數は三拾二本で

	大臼齒	小臼齒	犬齒	門齒	犬齒	小臼齒	大臼齒
上	3	2	1	4	1	2	3
下	3	2	1	4	1	2	3

上の如く竝んでゐる、但し大臼齒は上下左右十二本ある中で最も終りの四本は特に之を智齒と云つて、其の生ることが最も遲く、二十二三歲にして初めて現はるゝものである。近頃奇妙な事が流行つて丈夫な齒と齒との隙間に黃金を詰めてゐる者がある、けれどこれは何の功能も無いと言ふよりは寧ろ害があると謂つても可い、何となれば楊子を入れて掃除し難いからである、然るに金を衒はんが爲にわざ〳〵齒をむき出してイヒヽと笑つて見せる阿房者がある、却つて識者の笑ふ所である。

口に就いては言ふべき事非常に多くあるが、其の內部の唾腺や舌の乳頭及び齒の構造等に就て說明してからで無くては、能分らぬからこれも次號に申しませう。

次に耳は顳顬部の後方に在る空洞で其の外部は耳殼といふ、耳殼の襞の甚だ奇態な襞からなつてゐる之を耳殼といふ、耳殼の襞の効用に就いて色々の議論があり、獨逸のシュナイデルといふ人は襞の凹んだ處へ蠟を塡めて物音を聽いて見た

れば聽力稍減少したから矢張有益なものだと論じ、ハルレル氏は然らずと主張し、又或者は聾どころか耳殼を缺けても差支無しと云ふ、私も曾て或る漁家の忠僕が强盜の爲に左右の耳殼を切り取られたる人に逢つて、其の聽力を試驗したに、以前に毫しも變らぬとのこと、されば是れが効用は有るにしても甚だ僅かなものであらう。内部は喇叭の如くに漸々其の管が細くなり、大凡一寸程で鼓膜といふ膜に達す、これ迄の間を耳道或は外聽道と云ふ。外聽道の奥が中耳、中耳の奥が内耳これ等の構造に至つては實に巧みな物で嗚呼天なる造天と賛歎せずに居れぬ、これも次號に讓りませう。

次に「ひげ」である、これは勿論貴女方には無いが併し頤といふ題目に對しては聊か言つておかねばなるまい、通常唯單に「ひげ」を言つてゐるけれど、其の實は鼻下に在るのが「髭」で頤にあるのが鬚である、支那は昔より鬚を生す風俗で、西洋は主に髭を伸す習慣であるやうである、現今我國の紳士は大抵髭を撚つてゐるは大方西洋の眞似であらう、彼の漢詩の中に拈二詩髭一といふ句のあるは、詩を考へながら「上ひげ」を拈つてゐる体である間違へてはなりませぬ。偖又髭鬚は如何なる功能のあるものかといふに、或人は齒を保護する物で「ひげ」あれば冷氣の齒を刺戟する度を減す云々と述べ又或人は男子の美容物に過ぎぬと爭ひ、又或者は天が一見女子と區別せん爲に生ぜしむるので男子にして之れ無き者は一つの不具者であると論ず、尚は「ひげ」に就いて二三の議論もあるが、貴女方に餘り必要の無いことなれば、余は「任他拈二詩髭一」と今回はこの位にしておきませう。

通俗科學　石炭の話

淺野松擧

▲人間生活と石炭の効力

今日の物質世界に一番有力な働を以て居るものは何で

あるかといふに、火力、即ち蒸汽力であります。すべての工業、すべての商業の原動力は蒸汽の力でありまして、若し今日の世界にこの蒸汽の力を欠いだならば我々人間は一日も生活する事は出來ません。されば蒸汽は今日の人間生活の原動力といつてもよいのであります。さてその蒸汽は何から出來るかといふとこれは申までもなく石炭であります。御覽なさい、各種の製作工場に石炭がなかつたならば一日も仕事をする事は出來ません。又各種の貨物も石炭の力で運搬しなければ諸方へ分配する事は出來ません。石炭の効力は今日人間社會の生活を左右する勢となりました。彼の英國が世界第一の富强國といふのも國に石炭が澤山あつて工業が盛に起り、汽船を澤山に動かす事が出來るからです猶この上に今日では戰爭といふ大きな仕事を始めて居る、この戰爭といふ奴が又大變に石炭を遣ふもので山嶽のやうな大軍艦を動かすのも石炭の力幾萬の軍隊や幾千噸の糧食を輸送するのも又石炭の力若し一朝石炭が欠乏したならば遼東出征幾萬の軍隊は忽ちに食物を失つて戰爭をする事が出來なくなります幸に日本は莫大に石炭を產出する國であるから日露戰爭が三年續かうと、五年續かうとそれに屈托する事はありませんが、露西亞ではこれが欠乏ですから、今更遠く本國から澤山の艦隊を送り出して日本と海戰する事が出來兼るのであります、今日若しも露西亞に無盡藏の石炭が產出したならば此の際必らず多くの艦隊を本國から送り出して旅順、浦塩の方面へ顯はれ日本海軍を制する事が出來たのでせう。これをおもへば石炭は實に國家富强の原動力なるのみでなく實に又護國の干城といつてもよいのであります。されば今皆さんの爲めに石炭に就て一と通りの御話を致そうと思ひます。

▲石炭は何物

石炭と云ふものは何物でせう、石にしては燃えるし、又通例の木炭よりか硬くて光澤がある、誠に奇態なものではありませんか、之は大昔の木や草が土中に埋まつて、地熱て長い間燒かれました爲めに炭になつたものです、斯樣に申しました處で誰も大昔から今日迄生きて居た人もないし、又石炭の元であると云ふ植物の繁茂して居る時分には、人間と云ふ動物は地球上には居なかつた地質時代の昔ですから、證據人はないのです。併かし其植物から出來たと云ふ事は、學問上の

斷定から、立派に知られるのです、日本産の石炭には例が少ない樣ですか、外國のには木の理が見えるのや幹の形、葉、果實が其儘の形で炭になつて居るのがあります。皆樣は奥州の[illegible]の名物になつて居る、埋木の盆を御存知でせう、あれは長い間河の底に埋まつて居た木を取り出して細工したものですが、近來は人が木を河底に沈めて置いて二年經て取り出して細工して居るそうですが、更に角木は長い間水の底に沈めて置くと、目かつんで重くなるのは事實です。併し細工してある盆の表の色や光澤は塗料のせいですから考への中には入れられません。

深い水の底にでも、土の下にでも、長い間木を入れて置くと何故目が細かくなるのでせう、夫は上から押えられる壓力の爲めと、化學作用や地熱の爲めに自然に炭に化するからとの二つの原因によるのでせう。

地の下數尺の所に埋まつて居る電信柱の脚や、始終乾濕常のない溝板等を見ますと地下の深所にある木も腐る樣に思はれます、木は乾くならば始終乾いて居るか始終濕つて許居ると早く腐ります、また乾いたり濕つたり又空氣に觸れて居ると早く腐ります。

そんなに地の下は熱いものかと聞はれませうが、此地球の内部といふものは實に火の玉のやうなものですそして上皮は空氣の温度に從つて暖かくなつたり冷えたりしますが、三十尺も深い處では始終一定の温度のものであります、そして深くなる程地球の心に近くなりますから温度が昇ります、地中から温泉が湧出すのでも分かりませう。

そこで又御尋の方がありませう、それなら石炭は人の手で造る事が出來ますかと、夫は出來ません、何故と申すと木が地熱の爲めに炭になるのは、長い間かゝりますので、又地壓の爲めに押付けられまして出來るのですから、非常に年數長くの間に出來るものです。

▲石炭の元祖

神代よりもノツの洪水よりも以前の以前の大昔に、世界の各地方は時候が今日の熱帶地方よりも熱く、空氣中に炭酸瓦斯が澤山あつて、今の樣に地表に高い山も深い谷もなく、澤や濱が多くあつた時代がありましたと御考へ下さい。其時分には今の地表には見られない巨大な下等植物、學術名で隱花植物と云ふのが澤山あつたのです。

進化論に從ひますと、高等な植物、――顯花植物即ち

櫻や、梅の樣なものは、皆初めは蘭や苔の樣な植物から、漸々進化して長い年數の後に變化して出來たものでありまして、其順は苔の樣な者は先づ羊齒や裏白の樣なものになり、夫から蘇鐵や公孫樹の樣なものに變はり、杉や松の樣なものとなり、終に今の顯花植物が出來たのです。

それですから、其時代には顯花植物は至つて少ないので、木賊の大木や蘇鐵の森が鬱蒼として、數百里の森をなして居たのです、其木の大さは今の喬木の二倍も三倍もあつて、夫が今の植物よりも遙かに短かい間に生長して、互に押合ひ遂に共倒れになる、又其上へ生



石炭の元祖

えると云ふ風にして、植物の上に植物が生えたと考へられるのです、終りに地變があつて森全體が泥で覆はれてしまい、其上に又植物か生長すると云ふ工合にして、石炭の大元になる森林が至る處に繁茂したのです。

箇樣に森林が出來ては倒れ其上へ土が被さり、其上に森林が出來て又倒れて地中に埋まりました時代を、地質學者は石炭紀時代と申します。前述の森林は土に埋まつた儘で其後色々な地質變化を受け、數十万年の歳月が經過しまして、其間に上の土砂から壓され地熱の爲めに炭化されまして、數十尺の高さの森林は僅か數

尺の厚さの石炭層となりますし、以前の澤の土や上に被さつた土は粘板岩や砂岩となります、今日石炭を堀り出しますと、炭層の上盤や下盤は皆此粘板岩であります、只に上下のみでなく石炭層の間に粘土層が夾まつて居ます、一寸見ますと黒い色をして居ますから、石炭と間違ひますが能く見ますと分かります、石炭の中に時々混ざつて居る燃えないのものは是で御座います。

地質學者は此石炭の本になる森林のありました時代を石炭紀と申しますし、此地層を石炭紀層と申します、併かし石炭紀層と申しましても、其時代に樹木の生長しなかつた處や、海の底であつた地層からは、石炭は出ません、我國の如きは其時代には海の底でしたから此地層からは石炭は出ずに海中に棲んで居た貝類の化石が出ます。歐羅巴地方の石炭は、主として此地層から現はれます。

石炭紀でなくても此後の地質時代でも、樹木の盛に生えた事がありました、日本の石炭は皆第三紀と申します、石炭紀よりもズツと新らしい時代に繁茂した植物の炭化したものであります。即ち第三紀層と申します地層から出現します。そして其植物は主に顯花植物で御座います。序ですから申しますが、琥珀と申しますものは、やはり大昔の植物の樹脂が地中に埋まつて出來ましたもので、蜂入琥珀といつて琥珀の中に蜂が這入つた儘化石して居りますのを見ましても、此樹が生長して居た時代に蜂が生活して居た事が分かります。

▲石炭の種類

第三紀の時代が過ぎまして、第四紀となります、此時代の前半期を洪積統、後半期を沖積統と申しまして現今は實に此第四期の沖積統に屬するので御座います。

洪積統にも植物は生えて居ましたし、沖積統即ち現今も御覽の通り植物は茂つて居りますが、今或地方の大森林が洪水か地震かの爲めに土砂に埋もれたにしましても數十万年の後に石炭となりましても、僅かに寸に足らぬ厚さの石炭層を爲すので、其時代の地質學者は第四紀沖積統の植物繁茂が、石炭紀や第四紀のに比して遙かに劣つて居ると認めるで御座いませう。

○泥炭

第四紀になつて出來ました石炭は、まだ新らしい爲めに大抵は炭化作用も充分でなく、植物纖維が見えて居

る位で、石炭としては用ゐられぬ位です、尾張の名古屋近傍から產出します、地下數尺の處から出ます亞炭と云ふのは、此一例で御座います。

現今でも石炭は出來つゝあります、沼や澤の樣な處で水草が年々生長しては枯れ、水底に沈みまして自然に厚い層をなします、之が水の壓力や地熱の爲めに段々石炭らしい塊となります、泥炭と申すのが是で御座いまして、東京上野不忍の池等にも之が出來つゝあります。

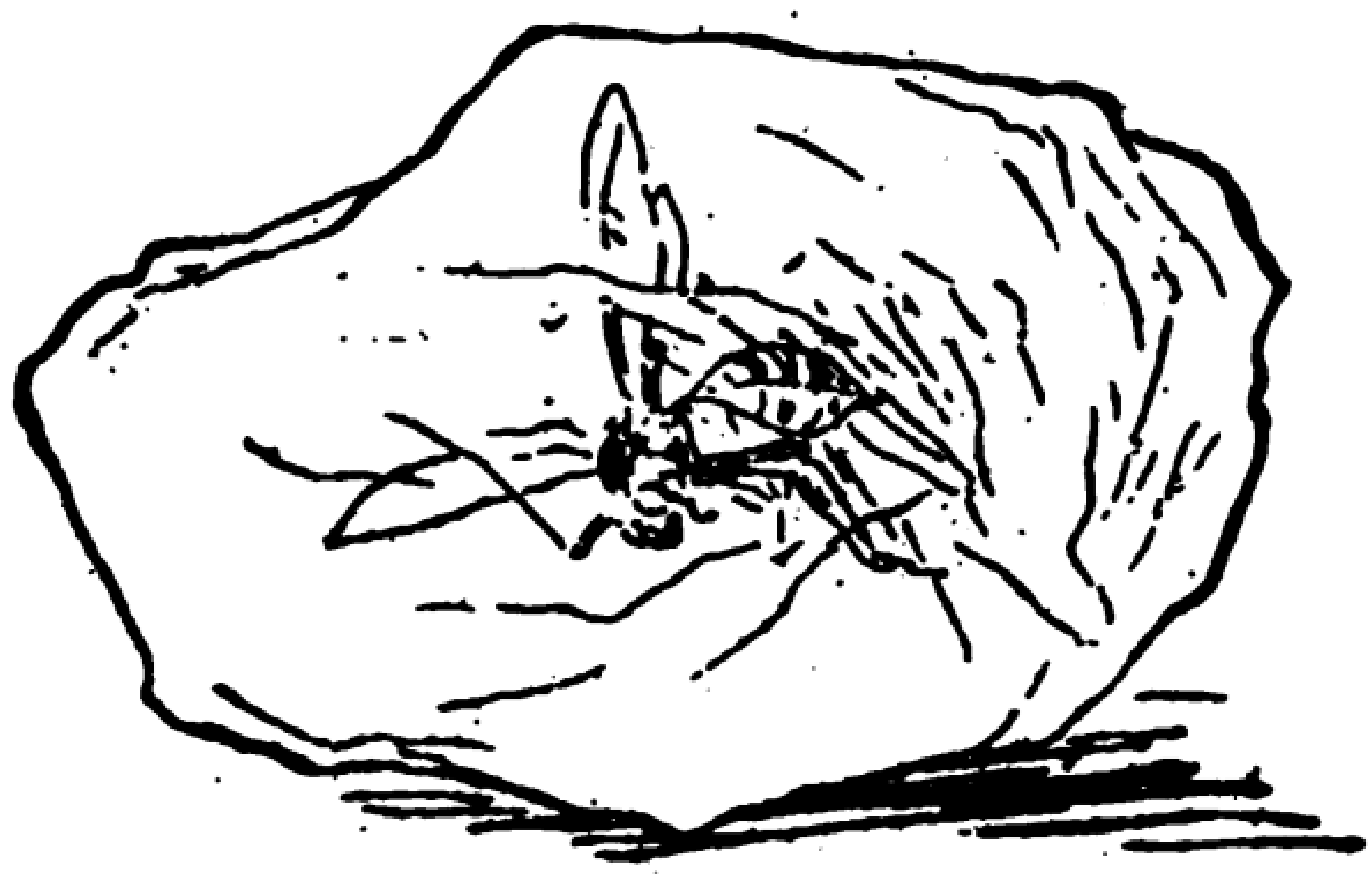
○炭田

石炭の層が地下に擴がつて居る地方を、炭田と申します、日本の炭田は、九州では筑豊地方、三池地方、肥前の唐津、天草嶋の一部で夫から中國で長門の一部、紀伊の一部、東では岩城、北海道で空知夕張地方であります。

石炭にも色々の種類があります、無煙炭、瀝青炭、褐炭、亞炭、泥炭で、此分け方は人によりまして多少違ひます。

無煙炭と云ふのは、灰黑色で至つて堅く、金屬の樣な、光澤があつて、焚くと火が附きにくゝ、餘り烟りを發せずに炭えるので、都合よく焚やすと強い熱を發します。此物は天草の志岐炭山からも出ますし、又筑豊地方の蝋石（オコツ）と申しますのも一種の無煙炭であります。

植物炭化の一例



○無煙炭

無煙炭と云ふのは石炭の中で一番炭化の度が進んだもので、時代が古いか、或は火山破裂の爲めに熔岩が流れて炭層の上を掩ふて、其熱で石炭中の揮發性分を追ひ出したものであります。木を焚きますと烟が澤山出て炎が長く揚りませう、之は木の中には揮發性の物が多いので、熱せられますと夫が瓦斯となつて放散し、夫に火が附くので炎が長く、そして充分に燃えきらないものは煙となつてしまいます。

○木炭

木炭はどうかと申しますと、之は木を炭燒窯の内に入れて熱し、其中に含まれて居る揮發性の物を悉く逐ひ出して、出來ましたものですから、焚いても木程の炎

も煙も出ません。

○瀝青炭

瀝青炭と云ふのは通例吾々の目に觸れて居る石炭で、色は黒く、一種の光澤があつて、硬く水の中に入れると沈みます。併かし無煙炭よりは輕いのです。火の附きは木や木炭よりは惡いのですが無煙炭よりはよく、燃えると、一般に炎を擧げ煙を出して、同時に一種の惡臭を發します。瀝青炭と云ひましても揮發分の多いのも寡ないのもありますが、揮發分の多い程長い炎を擧げ煙を出して燃えます。

○褐炭

褐炭は時として褐色をして居る事もありますが黒い事もあります、揮發分多く火の附きもよく、瀝青炭と太同小異のものでありますが、唯炭化の度が劣つて居ます、三池の石炭は之に屬します。

○亞炭

亞炭と云は極若かい褐炭で、木の性質が殘つて居ますので、揮發分多く焚くと長炎を擧げ惡臭を放つて燃えます。劣等の燃料で湯屋の焚物位にしかなりません。

○泥炭

是も亞炭と同じ様な物で、現今池や沼の底に出來つゝある石炭で御座います、主に草から出來ますので、其形がよく見えて居ます、焚くと煙が多く惡臭を放ち、灰が澤山に殘りますから尤も劣等な燃料として用ひられます。

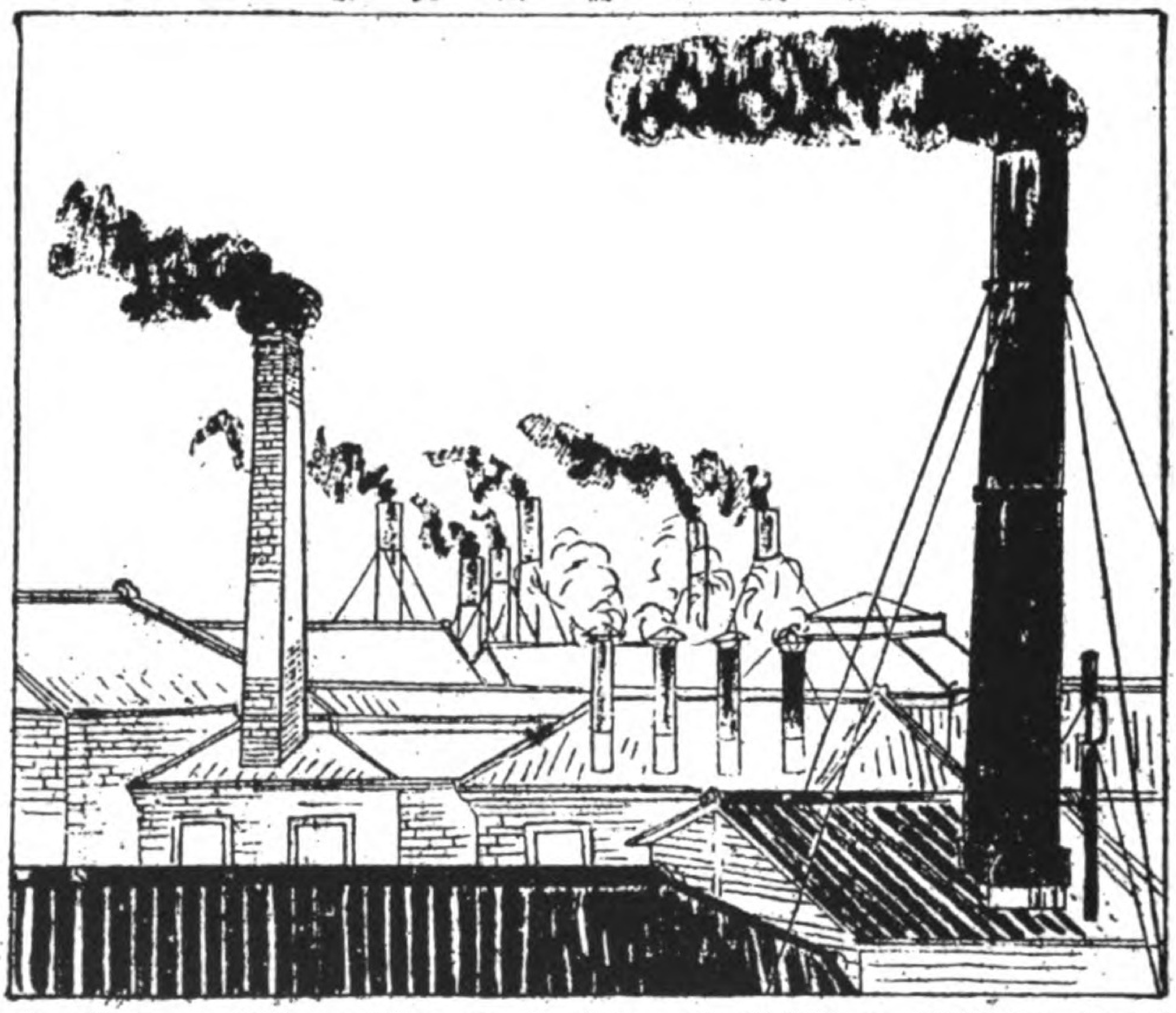
個様に並べて記載しましたが、泥炭と瀝青炭、褐炭と無烟炭の様に懸放れて炭化の度の違つて居る物は、一目して區別が出來ますが、瀝青炭と褐炭の如く、炭化の度が似寄つたものは、其區別が甚だ困難であります。石炭の多い種類の中で、工業上主に用ひられて居るのは、瀝青炭、褐炭で御座いますから、是等に就て今少し申しませう。一体石炭の主な成分は何であらうかと申しますと、勿論炭素で御座います、夫から水、水素、酸素（水として含まれぬもの）窒素、硫黄、石灰、燐、鐵、硅酸等であります。

▲石炭の成分

主要成分の割合を御覽に入れますと、無煙炭百貫目中炭素九十三貫乃至九十五貫、水素二貫乃至四貫、酸素と窒素三貫之に次では瀝青炭か褐炭ですが、炭化の度の進んだの程炭素の量が多いのです、酸、水、窒の三素が多い程揮發物は多いのです。

石炭の一塊を持つて來て、碎いて粉末にして夫を廢物になつた土瓶の內へ入れ、蓋をして粘土で目塗りをして、夫を火にかけて見ますと、土瓶の口から始めには水蒸氣が出ます、段々暖まつて來ますと一種の臭のある瓦斯が出ます、燐寸で此瓦斯へ點火して見ますと、輝く炎を擧げて燃えます、之は初めには石炭の中の濕氣が出て來るので、次に熱の爲めに石炭中の揮發分、炭素の一部分、水、酸、窒の三元素、硫黃の一部分が、複雜な化合物の形で瓦斯となつて出て

石炭の需用區域



來るのです、燈用瓦斯は此事を大仕掛に行ふて居るのです。

時間が過ぎるに從つて、炎は段々小さくなり終には消えてしまいます、尙暫く強く熱して、火から取去り冷却して土瓶の蓋を去つて內を見ますと、一面の煤だらけで底に灰色をした粉末か或は銀色をした硬い吹寄せ（菓子の名）の樣なものが殘つて居ませう、瓶內の煤は瓦斯中の炭素が遊離されて附いたものですし、又器底に殘つたものは骸炭であります、又土瓶の嘴の內や蓋の裏に、黑い粘ばつた臭い液が附いて居ませう、之はコールター

と云ふもので、瓦斯の内に混つて出て、重いものですから跡に殘こされたのです。

前に書きました石炭の成分の中で、硫黃の一部分、鐵燐、石灰等は、石炭を焚くと跡に灰になつて殘るものであります。其額は石炭の種類、産地により異なりますから、一樣には云はれませんが、外國産のには灰の少ないのも隨分ありますが、我國の産は何れも灰が多いのです、岩城炭等には其百貫目中に十貫目以上もありませう、石炭の中に灰分の多いのは劣等品なので、灰分の寡ない丈け良品です。灰が多いと焚くのに不便です、汽車や汽船で灰分の寡ない石炭を使へば、少量の石炭を積み入れて濟む、從つて場所を取らない、又灰を捨てるに困らない、上野の停車場へ行つて見ると米國製汽罐車と稱えて大形の炭函の附いて居るのがあります、あれは灰分の多い岩城炭を使用する目的で、多量の石炭を積み込める樣になつて居ます。

▲石炭の價値

石炭の一塊を取つて細かに見ますと、中に黃金色をした粒や膜が見えませう、あれは黃鐵鑛と申しまして、鐵と硫黃の化合物であります、大抵の石炭には黃鐵鑛が含まれて居ますので、石炭を焚しますと、其中にある硫黃が燃えて亞硫酸瓦斯となり、汽罐や金屬製の煙突を傷めますから、其黃鐵鑛を含んで居ないものを良品と致します。

現今工業上燃料として用ひられて居ますものは石炭、骸炭、石炭瓦斯(以上二者共に石炭より造らる)石油類木材、木炭が主なものであります。

石炭が盛に用ひられなかつた時代には、木材と木炭とが唯一の燃料でしたが、石炭が使はれる事になりましてから、余程運搬の便の惡い土地の外は、木材や木炭は用途を狹められました。何故箇樣な事になつたかと申しますと、工業の發達の結果燃料の需要が非常に增加したので、燃料を木材に求めたならば、只さへ拂底になつて居る地球上の植物は、數年ならずして形を止めなくなるでせう。夫に木材や木炭は價が年々騰貴する傾があります—、石炭の低廉なのには及びません。

それから又仕事によりまして石炭でなければ出來ない事があります、瓦斯工業の如き又冶金業でも骸炭を用ひねばならぬ事があります、是等は木炭や木材の代りに石炭が使はれる所以であります。

▲石炭の燃力

石炭は木炭や木材の様に容易に燃えませぬから、構造特別な竈の中で焚くのです、石炭は鐵製の格子の上で焚かれる様になつて居まして、空氣は風口からはいり格子の間を拔けて煙突へ出る様にしてあります、燃えて出來ます灰は鐵格子の間から風口の處へ落ちるのです。

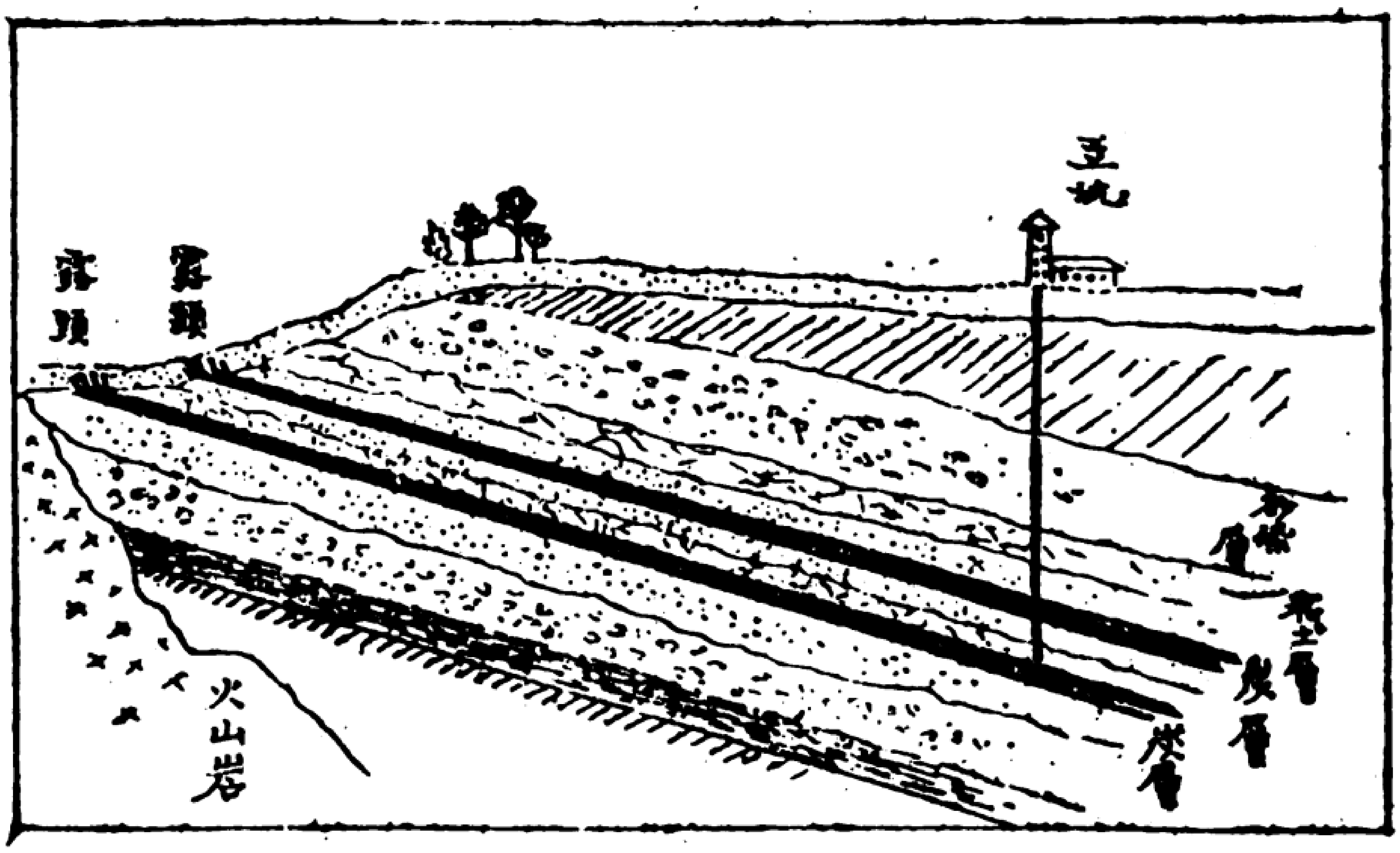
煙突と云ふものは、煙を導き去る役目計りでなく、風口から空氣を引き入れて石炭の燃えるに必要な酸素を與える爲めで、其風口から頂上迄の高さの高い程火を焚くに都合がよいのです、

ランプのホヤも同一の目的で、空氣を充分に供給する役目をして居ます。

格子の上の石炭は、時々混ぜ返してやらねばなりません是は燃えるに從つて石炭の塊が附着し合つて、空氣の流通を妨げ火の勢を殺ぎますのを防ぐ爲に灰を下に搔き落すのです。

是から石炭掘り出しの方法炭坑内部の状況などに就ていろ〳〵御話したい事もありますがあまり長くなりますから是等は次號に詳しく述べる事と致しませう。

炭層の斷面



通俗科學 花と實

白然見

▲この頃庭園に栽培する果木で、最も面白いものは無花果の花でせう、無花果は昔しから埋れ木などと申して、花のない例はよく引合に出されますが、何ぼ無花果だとて、花も咲かずに實が出來る譯

は御座いません。

無花果は人に知られず、立派な花を開き、そして餘程面白い具合に、その花粉を受胎致します、一体この植物は、隱頭花序と申しまして、頭を隱して内證で花を開くものですから、何處に花冠が有ることやら、又どこに雄蕊が御座いますやら、一向に要領を得ない樣てすが、其實之には之で、無花果專賣の蜂が居まして、茄子の花には無駄花なしと云ふ樣に、大抵はみんな立派に實を結ぶことが出來るのであります。

さてこの無花果專賣の蜂と申すのは、まだ無花果の花が、小さな蕾の頃に、例の隱頭に來て、そこに卵を產み捨てゝ置きますると、間もなく其卵は小さな蛆になつて、無花果の花の中で大きくなり、その花の滿開の頃には、早くも立派な蜂になりまして、そして無花果の花の古巣を出で、他へ飛んで行かうとしますと、勢ひこの際には蜂の体に、無花果の花粉が澤山附着致します。

けれども蜂は格別夫れを荷厄介とも思はず、平氣で先づ悠然体を乾かし、やがて威勢よく飛び出して、他の無花果の花に行き、自分は更に新規にこゝで卵を產み落しますが、今迄蜂の体に附いて居た無花果の花粉は巧みにこの花の子房に收まつて、都合よく受胎さるゝのです。

斯くの如く無花果は、自分の花の中で養ひ育てた蜂に異花生殖をさせて、實を結ぶには何の不自由も知らないのであります、合衆國の東海岸にある無花果林では果を澤山收穫する爲めに、毎年多くの金を費して、この蜂を保護して有るさうですが、その金は無花果の收穫上から見れば僅かなもので、萬一この蜂が居なかつたならば、無花果は遂に果も又無いと云ふ、哀れな境遇に至るのです。

▲今一つ花の媒人として、殊に面白いものは、蝸牛であります、蝸牛と云ふ虫は、始終ノロ〱として、眞に痴鈍らしいものですが、あれで萬年靑の花粉の輸送を致します。

蝸牛は其棲所が、常に濕氣を帶びた處で、萬年靑も又庭園の片隅の小暗い處で花を咲くものですから、蝸牛でなくては、この邊に來ません、いつの頃約束の成立つたものですか、蝸牛の居ない庭の萬年靑は、とても思ふ樣に實が結ばれないとは、天の配劑の妙、眞に驚くの外ありません。

▲この頃は庭園に百合の花の咲く頃ですが、今白地の

浴衣を着て、百合の花でも手折らうものなら、百合の花粉は見苦しい程浴衣を染めて、容易に落ちません、殊にこの花の花粉は、その量が夥しいのと、その色が濃い茶褐色をして居ますから、肝腎の浴衣は散々汚されてしまひます。

百合は雌雄顕る立派な機關を有つて居りましても、實を結んだ例はありません、その癖百合の開花の時には、烏羽鳳蝶が方々から集つて來まして、頻りに花蜜を漁りますが、どうした事でせう、美人眞に薄命で、花素枯るれば地に委して、後には何物も殘りません。

百合の實を結び能はぬのは、もしや子宮に故障があつて、甘く卵球が受胎しないのかと思ひますと、決してそうではなくて、卵球は慥に一度遺憾なく受胎するのでありますけれども、悲しい事には、一旦花が散つて仕舞ふと、其養分は最早や上部には參りませんで、却つて根の傍にある鱗莖の中に、みんな吸ひ取られて、實の方は空虚になりますので、折角受胎は致しましても、日を經るまゝに段々夫れが萎縮して、とう／＼素枯れ果てゝ仕舞ひます。

▲されば今無理にでも、この花に實を結ばせて、やらうとすれば、丁度花盛りの濟んだ頃を見計らつて、鱗莖の處から切り離しさへすれば、その養分は花の處に集つて來て、百合は立派に實を結ぶことが出來るのです。けれどもこの植物は、其花は歐米に實用せられ、その鱗莖は多くの養分を貯へて、人の食用となりますから、憖實を結ばせるよりも、その花や鱗莖を改良するのが至當であらうと思ひます、總じて植物でも、動物でも、或る程度までは人間の思ふまゝに、どんなにでも改良することが出來るので、之を人爲陶汰と申します。

日本では古來あまり動植物にこの法を應用しませんでしたが、歐米では夙に盛に人爲陶汰と云ふことが行はれまして、家畜を鑑定して立派に生活して居る者も多くあると云ふことです。

一體この人爲陶汰と云ふのは、自分の理想に叶つた動植物を作ることで、夫れに就ては先づ多くの中から、なるべく自分の理想に近いと思はるゝ雌雄を探つて、夫れに子を生ませ、其又多くの子の中から、勝れてよい物を探り、だん／＼子孫曾孫と世代を經る中に、遺傳で以て遂に理想通りの物が出來るので、日本でも金魚屋や植木屋は、常にこの法を以て立派なのを作るのに、苦心して居るのです。

▲日本の皇室の御紋章として、世界に知られて居る菊なども、元は眼辨の野菊から、次第に進化して來たのです。この草は本來支那の原産で、むかしは支那にも、隨分美しい菊が御座いましたのを、兎角何事も退歩で、婦人の足までが縮小主義の彼の國では、とくの昔しに其全盛時代は過ぎて、今では日本の一名花となつたのです、けれども只徒に菊人形の細工物の様な、小さな處に意匠を凝らすより、花の良いのを作る目的で、盛に陶汰しなければ、或は歐米諸國に却つて良種を出す様になるかも知れないです、殊に佛蘭西人などは、菊を好む處から、今や隨分立派に自國で栽培すると申すことです。

▲虞美人草と云ふ草も、矢張り支那の花で、之は寧ろ支那風の花でせう、葉も花も眞に弱いもので、直に凋れさうな草ですが、花は大層美しいので、庭園に春の季の眺めとなります、この様に美しいものにも似て、其の莖の處には細かな針の様な毛が、隙間なく生へて居ります、虞美人草とも言はれる花が、そんなに針の如き毛を生やして居ては、折角の花の品位を落とすかとも思はれますが、併し花から見ればこの毛が有ればこそ、弱くとも傷を受けずに、無事に咲くことが出來もすれ、この毛が無かつたなら、さなきだに美しく柔かな草とて、引手澤山で、毛蟲などに取付かれるやうなら、どんなみじめをさするとやら、甚だ心細い次第ですから、幸にも毛と云ふものが蟲共には大の禁物ですから、よし花はどんなに美しく咲けばとて、葉はどの様に柔かなればとて、這ふ蟲共は只高嶺の花と諦めて、傍へは少しも寄りつかないので、獨り翅もつ蝶ばかりが、思ふまゝに蜜を吸ひに來るのであります。

▲前にお話し申した百合の花は、大抵みな下向になつて花を開きますが、彼の躑躅は横向になつて居ます、なせ躑躅は横向になつて開きますか、人が見れば別段意味あり氣にも見へませんけれども、この横向になつて居る花瓣の中、上の方の三片には、黒い斑點がいくつも付いて居ますが、下の二片には何も付いて居りません。上の三片にある斑點は、躑躅のお化粧で御座います、このお化粧は遠くからでもよく、目に付きますから、虫が便つて來るに大層都合がいゝのです。ことに最も奇妙なのは、躑躅の花粉が、葯と云ふ嚢から出る時の有様です、今一輪のこの花を採り、葯の處を自分の衣服の袖か何かに一寸接して、しづかに離し

て見ますると、白い小さな玉の形をした花粉は、寸も二十も引けば引く程、衣服と花との間に一寸も三寸も長く列なりまして、丁度珠數の様になつて出て來ます、之は全くこの花の特長で御座いますが、如何に小さな葯の中に、多くの花粉が含まれて居るか、之を見て只驚くの外はありません。

さても斯る種々の花は、如何にして出來、また如何に發達して來たのでせう、所謂前世界の時代には、今日の様な美しい花は一つも御座いませんでした、化石となつて堀り出される植物には、花のある様なものはなくて、羊歯ばかりです、即ち前世界は羊歯の世界で、今日は僅かに五六寸にも足らない問荊が、雲に聳ゆる五層樓の觀を呈し、蕨裏白などの類は、皆大木の如くに茂つて居たので、此時代には、未だ地熱が大層高く御座いましたから、地球上到る處としてこの偉觀に接したのでありました。

▲神話に依ると、最初出來た花は、大抵皆白かつたので、或時天で酒宴が開かれまして、其酒の滴が、不圖下界へ降つて來まして、折ふし咲いて居た多くの花にかゝりますると、忽ち佳い薫と、色とが出來たと申しますが、之も半面の理なきに非ずで、花の進化の最も適いのは、白い色をして居るので、一體この白と云ふ色は、別段に一種の色素が有る譯ではなくて、丁度コップの中の水を攪き廻しますと、水が泡立つて眞白に見ゆるのと同じことで、畢竟細胞の隙間に在る空氣が、光線の反射である様に見ゆるのに外ならぬのです、白色に次いで進化の著しいのは、黄、紅、紫と云ふ順序で、菫の花などは、色から見ても又其形からしても、餘程進化したものです、本來花と云ふものは、全く枝が形を變じて現はるゝもので、其證據には、花の機關を調べて見れば直に解るし、八重櫻などは蕋の處が全く葉に成つて、花中更に新芽を萌した様に見へます。

されば元花の形状は、離辨花冠と申しまして、離れ〳〵になつた扁平の葉の様な形をして居るのが、抑も花冠の基ですが、夫れが種々の必要に迫られて、牽牛花の漏斗状ともなり、菫の様に矩を作るもあり、桐の様に壺の形をしたのも出來、殆んど皆花形に多少の相異があることで御座います。

之と云ふも皆自衛の上から來た話で、花形の相異は、花の思ふ蟲を呼ぶに大層都合がよいので、例へば菫とか桐とかの花は、吻が長くて、そして割合に小さな蟲がやつて來ますが、體の平たくて大きな花には、大き

な虫で吻の短かいのがやつて來ます樣に、花の形は全く蟲を呼ぶ必要から起るので御座います。

この頃は丁度朝顔の花盛ですが、之に就いて去年紫色に咲いた種を蒔きまして、今年花の咲くのを見ますと、却つて他の赤味を帶びた花が咲き、去年淡黄に咲いたものが、今度は白くなつたりして、どうも去年と同じ色に咲かすのは、餘程むかしいことを御承知ですか。朝早く起きて、まづ朝顔の垣に行き、しばらく立つて見て居りますと、未だ薄暗い間から、小さな蜂がどこからか飛んで來まして、朝顔の咲くのを待つて突然その花の中に飛び込み、蜜を吸つて甲花から乙花、更に丙丁花と順々に吸つて歩きますが、この間に例の異花生殖が行はれて、白い色の花粉は紫の花の雌蕋に入り、赤い花の花粉は、白い方へ運ばれると云ふ風で、爲に翌年は花の色と形とに、大分違つたものが出來る譯です。

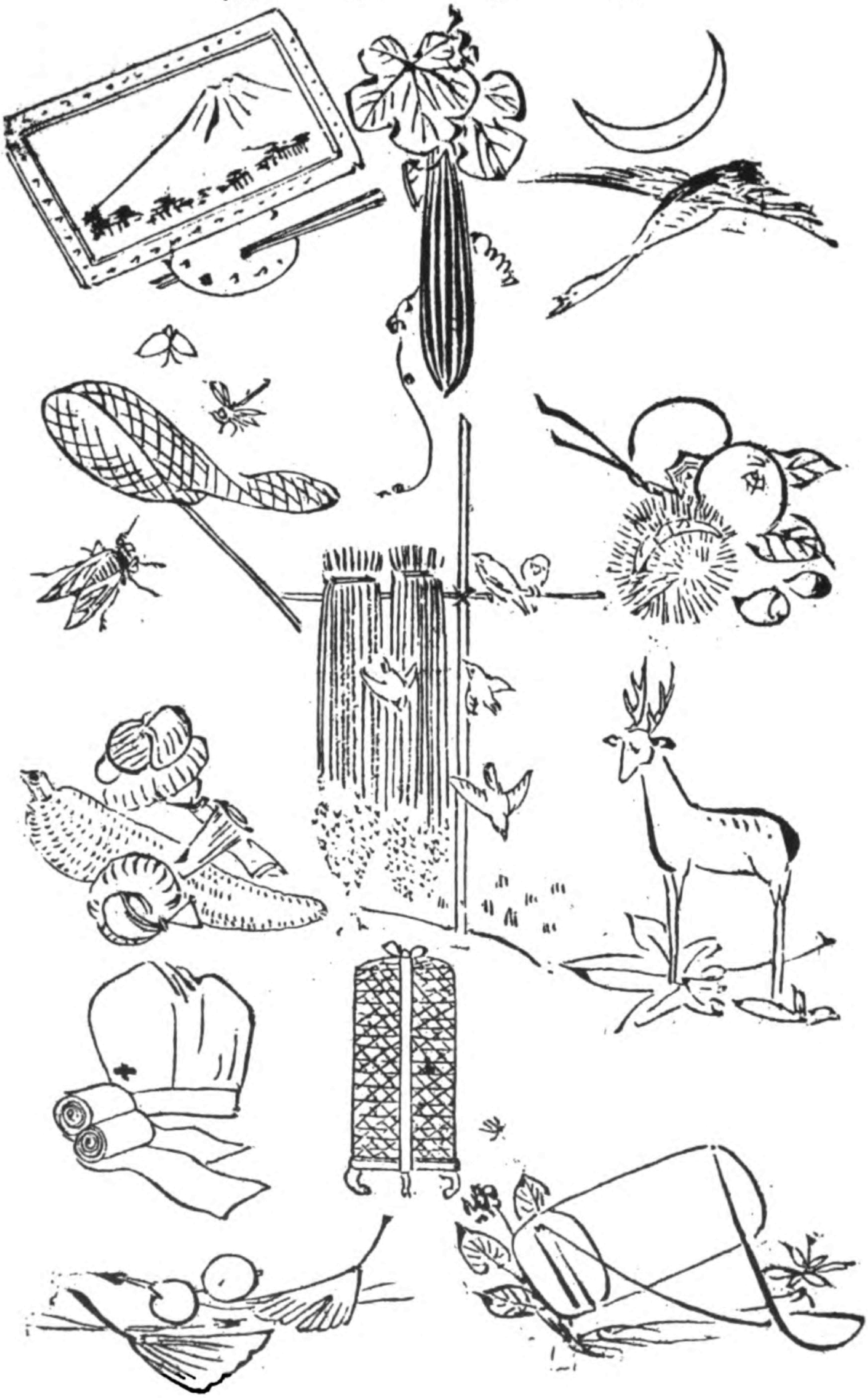
今これを蜂の力に依らず、自分で試して見るのもなかなか面白いので、この人工受精の法は頗る簡單で、誰にでも出來ます、卽ち其法は朝なるべく早く起きて、まだ蜂の來ない間に、充分開かない花の花粉をとり、夫れを色の異つた他の花の雌蕋に移し、そのまゝ紙か何かで丁寧に包んで置くのです。もし包まない時には、例の蜂がやつて來て、忽ち邪魔を致しますから、充分蜂を防ぐと共に、花の僞つかない樣にし、特に目印をつけて置いて、その種子の結ぶのを待ち、之を保存して翌年蒔きますれば、その花は去年の二種の花の合の子が出來て、頗る奇妙なものが咲くのです。

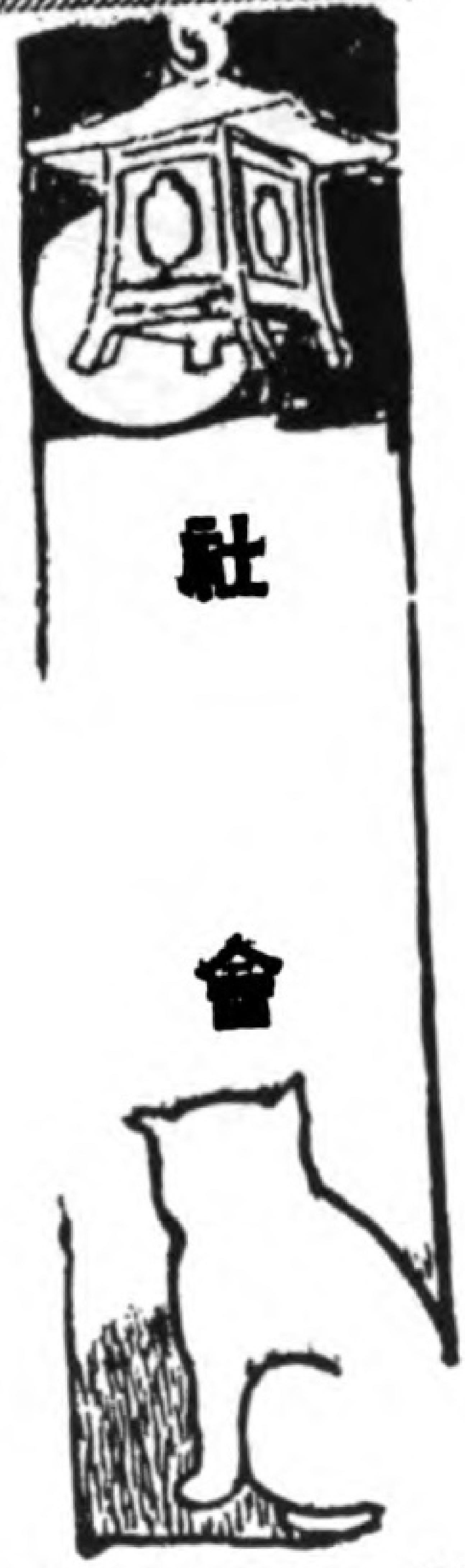
この人工受精の法は、朝顔ばかりでなく、何の植物に應用しましても、好結果を奏します、殊に舶來の植物で直接之を移植しましては、どうも思ふ樣に成効しないものでも、この法を以て我國在來の種に配合し、以て淘汰して行けば、遂には舶來品に一歩を讓らぬ良種を得られることは明かです。

人工受精卽ち植物の人爲淘汰と云ふことは、頗る趣味あることですから、盛に栽培上この法を應用して我國在來の種は、ます〳〵逸品を出す樣にし、舶來品は在來の種と淘汰して、更に傑出した新種を作り出すのは、農藝の嗜好ある我國の人々の、一日も怠つてはならぬことであらうと思ひます。

（完）

秋　十　二　種





露國奇聞（下）

左川子

五　浴場

露國の浴場は湯を浴びるといふよりは寧ろ湯氣を浴びると云ふ方が適當で、浴室なるものには唯湯氣が充滿して居るばかりで、浴すべき湯槽は無く、其代り腰掛が幾つも備へてあつて、之に腰を掛けたり臥かゝつたりして湯氣を浴びるのである。尤も湯を一切用ゐぬではないが、初めと終りに三助が體へかけてくれるだけである。腰掛には高低があつて、高いのへ上る程熱い湯氣が來るやうになつて居る。粗末な浴場になると只爐内に石を積み重ねて其上に火を焚し、側に腰掛が置いてあつて、三助が其燒石へ水をかけると湯氣が雲のやうに立ち昇る中を、浴客はだん／＼と高い腰掛へ上るのである。此熱い湯氣を浴びると汗が夥しく出る。此種の入浴法は衛生上には効が多いとのことで、僂麻窒斯、痛風、神經痛、其他種々の病症に宜しく、車上で搖られた後とか、其他汎べて旅行後には疲勞を醫することが殊に著しい。露國人は大概一週間に一度は入浴するを務めとして居るが、實際は此規則に背く場合が多い。

田舍でも大概一村に一軒の共同浴場があつて、汎べての費用は一同が分擔するやうになつて居るが、又相應の家は大概各個浴室を控へて居る。其浴室は多くは庭の隅などへ別に建てた小舍で、住宅へくつ着いて居るのは稀である。我家に浴室なく、又村の浴場もないやうな處では、爐の中へ這込んで灰の中で温まり、充分汗が出た時分に出て來て、全身へ水をかけて濟ませるのである。都會には勿論澤山浴場があつて、中には汎べての設備が華奢を極めた贅澤なのもあれば、また

極めて安直なのもある。歐米人は概して浴場でも各個別の浴室へ這入るやうになつて居て、大勢が混浴せぬ習慣であるが、露國人ばかりは、日本人と同じく大勢の混浴することを何とも思はない。

入浴の順序を云つて見れば、客が浴室へ這入ると、先づ三助がバケツで全身へ湯をふりかける。其湯は最初のは微温いのであるが、二回三回とだん〳〵と熱くなる。それがしまふと、前に記した通り湯氣を浴びる其時汗を盛んに出す爲めに三助が樺の木の梢切れ又は箒のやうな物で輕く體を叩く、それから石鹼で洗ひ垢を擦り流す。それが濟むと、今度はバケツで先づ温湯をふりかけ、跡は次第に微温くして、行つて果ては冷たい水をかけ、これで湯をあがることになるのである入浴の始めには微温いのから漸次に熱い湯をかけ、終りには温湯から漸次に冷たいのにして體に劇變を覺えさせないやうにしてある。農家では、湯から出て直ぐに川へ跳び込んで游泳をするものもある。入浴の終りに冷水をかけるのはこれで皮膚の氣孔を塞いで、浴後外部の寒氣にふれても風邪を引かないやうにとの用意である。殊に露國の寒中は屋内（屋内は大概華氏の七十度位に暖めてある）と屋外と寒暖の差が劇しいから取りわけ此用意が肝要である。

六 接吻式

露國の耶蘇復活祭に於ける接吻式は世に名高いもので、實に露國奇觀中の一である。此日は殆んど誰れでも彼れでも互ひに接吻を行なふと云つても可い位で、內外人の區別さへせぬ、或外國人が此日に聖彼得堡の市を通つて、四方八面から接吻をしかけられ、大に閉口したことがある。男女老若の別なく、又人品風体の高下を論せず、途で出逢ふ人間に悉く接吻をしかけられるから實に耐へられたものでないとのこと。「接吻は愛國より生ず」と云ふ諺があるが、此露國の耶蘇復活祭に於ける接吻は全く此諺に外づれて居るのである。

此接吻式なるものは、耶蘇復活祭日の前の夜半から始まる。時計が方に十二時を打つて、これから耶蘇復

活祭日の零分に入るといふ間際から始まるのである。

其夜半の少し前に、露西亞全國の人民は、皆それぞれ其附近の都會へ行く、第一皇帝を始め皇族一同は皇室附屬の教會へ臨まれ、全國の各教會は皆人を以て滿さるゝのである。時計が十二時を打ち始めると、會衆は靜まりかへつて、教會の内部は寂然としてしまひ、軈て十二時が鳴つてしまふや否、禮拜所の戸は開かれ、中に待ち構へて居た長老が現はれる。

『基督は起ち給へり』と先づ長老が唱へ始めると、會衆一同それを合唱して、跡で又『基督は死より起ち給へり』を唱へる。それから僧は右の詞を繰返しつゝ香爐を振り動かしながら群衆の中を歩く。此唱歌が即ち接吻の始まる合圖で、平素親しい同志は大概豫め互ひに寄集つて起つて居て、右の合圖があると同時に皆互ひに接吻し、又親しくはない者でも、苟くも見知つて居る人には誰でも接吻する。其接吻の度毎前に擧げた唱歌の二句が必らず唱へられる。始め禮拜所の戸が開かれて此合圖が與へらるゝと同時に、各教會の内外は飾光を施し、鐘は悉く打ち鳴らされ、又大砲を發ち狼火を揚げなどするところを見ても、此式の如何に國民的のものであるかゞ想はるゝのである。

それから接吻は其夜中より翌日は終日繼續せられ、其後猶三四日の間も、親戚、朋友、知人間は例の『基督は起ち給へり』を唱へて互ひに接吻する。大概一面識のある者と接吻するとしたものではあるが、實は少しも知らない者までも接吻するのである、諸官衙、會社等の書記が互ひに接吻し、陸軍の將校士卒も同じく接吻の禮を行ふ、軍人社會では、將官は其次位の佐官連に悉く接吻し、佐官は又其下の尉官連や、兵卒の總代に接吻し、尉官などは又各其部下の兵卒に悉く接吻する。海軍でも亦同じ規則に從つて此式が行はるゝのである。

皇帝皇后と雖も、此式は他の人民と同じやうに是非とも行はねばならぬことになつて居る。元來此式は露國の宗教と密接の關係あるものであるのに、露帝は教會の主長であるから、獨り此習慣例から外れる譯には

行かない。皇帝も皇后も其日は皇族一同は申すに及ばず、朝廷の役人等に皆此接吻の禮を行はれ、それがしまふと、皇后は宮廷に出入することの許されてある佐官以上の軍人等に一々手を捧げて、手へ接吻を受けられる。又皇帝は此日催さるゝ觀兵式に於て、各將校と軍隊の代表者として撰出せられたる兵卒の總代人とに接吻せられる。此陛下御接吻の觀兵式は凡そ一週間ぐらゐは續く、聖彼得堡府中の各聯隊殘らずへ此式を行うてしまはるゝのであるから、なか／＼一日や二日で濟む筈がない。

此耶蘇復活祭日の前七週間といふものは、齋戒をする定めであつて、誠實な信者連は皆極めて嚴肅に之を守る。下級社會の者も此齋戒期中の最初の一週間と最後の一週間とは魚類を食することをさへ避ける。其他の五週間の中でも水曜日と金曜日とだけは右の二週と同じく殊に愼しむのである。

此齋戒期の前一週間を牛酪日と云つて、士民は思ふ存分飽食する。尤も其食物は主に油燒煎餅であつて、小麥粉と牛酪とで拵らへてある。牛酪日といふ名目の如く、此週間は右の油燒煎餅に限らず、食物が牛酪其他脂肪質である、衞生上から考へると、一週間斯くも脂肪的食物を飽食して置いて、其跡七週間は齋戒で、況べて淡泊な物ばかり食ふと云ふのは、身體に非常な害を及ぼすは理の當然で、統計の示すところに據るに毎年此時分には死亡の割合が非常に增との話である。實に此一週間は貧富の別なく士民皆牛酪類を飽食するのであつて、唯貧富によつて其食する品質に高下があるといふだけである。齋戒日が濟んで、いよ／＼耶蘇復活祭の接吻式が始まると共に、又今度は思ふ儘に飲食することが殆まる。此日の夕方には夥しく醉漢が見受けられるのである。

七　馬車と橇

露國の市にはドロスキーといふ車がある。これは日本の人力車のやうに、街の辻々に待つて居て、一盃二人以下の客を載せるのであるが、人間が曳くのではな

く、小さいながらも矢張馬車であつて、一頭の馬に曳かせ、馭者は車臺の前の高い處に腰を掛けて居る、車は堅固な低い四輪車で、馭者は巧みに駄馬を操縦してなか／＼迅く驅けさせるのである。

露國の市街には此車のない處はなく、市内ならいつ何時たりとも何處にでも居る。夜でも晝でも街を往来して居て、假令此車が見えて居なくつても、「ドロスキーー」といふ呼聲さへかければ、魔術を使つたやうに、直ぐに眼前に右の車が現はれて來る。それが一臺でなく、きつと五六臺は出て來て、各個自分が載せようと爭ふ樣は喧噪じみるがそれでも客が其中の一臺を撰定すると、跡は溫順に引下がるのである。約束が極る前と後とは、馭者が客に對する言動がさつぱり違ふ、賃金の事などまだ極らぬ中は横柄であるが、一旦極つてしまへば、忽ち客の奴隷となつてしまふ。賃金は距離又は時間で定め、其直段の相談さへ整へば、定めの時間内は何んな事でも客の命を奉ずるのである。

此ドロスキーの馭者は概して客に親切で、多くは讀み書きの出來ないものであるけれども、客が若し外國人で露西亞語を十分に知らぬと見ると、彼の獨逸、佛蘭西、英國などの馭者のやうに早口に喋舌るやうなことはせず、詞數を極めて少くして話す、例へば市内見物の爲に乗り廻つて居る場合でも、寺院其他大きな建物の前へ來ると、唯其の寺院や建物の名を云ふばかり外には何にも云はないから能く判る。若し外の詞を覺へられたらさつぱり判らぬものになつてしまふのであらう。

此ドロスキーは主に夏季の乗用であつて、冬になると市内にドロスキーが見えなくなつて、その代りに橇が現はれる。これはドロスキーよりも一段小く、一人乗りであるけれども、二人詰め込むことがやつと出來る。二人であれ一人であれ、兎に角これへ乗つた以上は、自分の顔と馭者の腰との間が一尺位しかなく、馭者の腰に隠れて向うは少しも見えない。冬の橇は夏のドロスキーよりは數が遙かに多い、これは暖かい時には歩行する連中も寒中は大概乗るからで、實際露國

の市に住む者は冬季に橇に乘らぬものはないと云つても好い位で、また賃金は頗ぶる安直なもので、車も橇も大概一哩が十錢二哩が十五錢位時間ならば一時間四五十錢である、二圓も出せば終日雇ひ切りにすることとが出來る。なか／＼早く駈けるのであるから、外國人が僅かの時間で澤山見物でもしようと思ふ場合には、夏はドロスキー、冬は橇を雇ふのが最も經濟である。

八　賂賄の流行

露國は昔しから名高い賄賂國で、上下の別なく一般に賄賂が盛んに行はれ、殊に官吏社會には最も盛んである。それと云ふのも一つは露國官吏の俸給は甚だ僅かで、到底其身分に應じての生活費に足らない位であるから、自然と賄賂を取りたがることになるのである。或露國人が、露國では官吏は盗まねば當然の生活は出來ぬと云つたとのことであるが、實際收賄せねば十分に妻子を養ふことが出來ぬのである。

それに就て斯ういふ話がある。獨逸の學者で露國のニコラス一世皇帝の親交を忝うして居るものがあつた。或時皇帝は其學者に向つて、露國政府の組織上に何か缺點があるならば、忌憚なく云つて見よと云はれたので、其學者は早速此賄賂の一般に行はれて居る事を指摘して、是非此惡弊を改良せねばならぬことを申しあげた。ところが皇帝は頭を振られて、昔しからこれ程廣く行はれて居る事だから。今更これを止めるといふことは到底出來ないと答へられたので。件の學者は『それは陛下から賄賂禁止の御勅令をお下しになつたら早速止る筈ですが』と不審さうに申上げると、皇帝は『いや其勅令を發するために先づ總理大臣に朕から賄賂を贈らねばならぬし、次きには又收賄する事を罷めさす爲めに官吏へ悉く賄賂を贈らねばならぬ』と云はれたさうだ。

皇帝でさへ個樣云はるゝ位であるから、官吏社會の收賄は殆んど當然のことになつて居る。されば政府を相手の商賈などは、其事に關係する役人連に皆それぞれ賄賂を贈らなければ、到底成功は覺束ない。併し斯

く盛んに賄賂が行はれて居るに拘らず、さすがに收賄の不徳たるは誰も感じ、幾らか良心に恥る處があると見えて、露國官吏と雖も、まさかに手から手へは賄賂を受け取らない。若し正面から差出さうものなら、それこそ大變怒ち酷い目に叱りつけられる、ところが口と心は全く反對であるから、贈り方によりては早速受け取るどころか實は始めからそれを待ち受けて居るのである。其賄賂の贈り方は先づ我が用務に關係する官吏を自宅若くは戯場所に招き、葉卷烟草の箱の中へ豫め賄賂の金をそつと入れて置いて、先づ外の談話から打ち出し、煙草を一つお喫りなさいと、件の箱を差出して置いて、自分は窓口へ出かけるなり、俯伏くなりして居ると、其間に官吏は彼の金をそつとポツケツトへ收める。すると其翌日から賄賂の効驗は歴々と現はれて來るとのことである。

我國でも一昨年來やかましかつた彼の教科書事件の被告人等の中には、此手で賄賂の贈受をしたものがあつたやうな噂があつた。收賄者が良心が咎めるといふ人情は何處も同じことゝ見える。

佛國婚姻事情

觀　風　生

樣式も國々により其風を異にすれば一々之を記載するを得ねどまづ佛蘭西巴里は歐州の中心に位し萬事社交上の模範となる處ろなれば、各國爭ふて巴里風を學ぶの有樣なれば、今日行はるゝ佛蘭西風を取つて諸孃の參考となさん。

▲婚禮に至る順序

自由婚と干渉婚との如何は爰に贅言するを要せず、すべて求婚する者は必らず、郎より是れを爲す、往時英國に於ては婦より之を爲したれども、種々の弊害を伴ふを以て今日にては文明國と名づけらるゝ邦國に於ては一般に郎より求婚するを例とす、我國の如きは太古より旣に已に之れに依れり而して縁談を爲するものは必らず郎の兩親なり、若し兩親なき人は親友より婦の父に（父なき時は其母）懇識し、更に角談合の決定する

までは秘密を主として、いよ〳〵縁談契り成るに及びては、親戚、知己、朋友に始めて、婚儀の披露を成す、披露を受けたる人は其父母又は親族に對し、新郎、新婦の身上に就て、萬事沈默するを以て禮儀となし、答禮に行くにも其主人に面會せず、唯名刺のみを留めて歸へるなり。

▲結納の式

披露の翌日新婦の家に於て結納の式を擧ぐ此式には他人は一切混へず、新郎及び其兩親（若しくは親友）と新婦の家族のみ參列す其翌日は新郎の家に於て、新婦の家同樣、新婦及其兩親を招待し、郎の家族を紹介す、我國の緣女の歸寧を轉倒したるものなり。

▲贈り物

婚配の事決定すると同時に新郎はうるはしき白色の生花一把を送る、（花は四季の差別なく白色）其後も新婦を訪問（但し嫁と面會を許さず其母と面談す。）する毎に美麗なる生花を撰みて贈る結納の前には白色、婚禮の前には紫色なり、結納の指環は、結納前に婦に渡す、贈りし花は彼女が幸福なる姿を以て初めて新郎の家に來るの時花束の中より一點の花を摘み、婦の髮はしき胸のほとりに留めて郎の新らしき歡喜を買ふの習慣なりとぞ。猶結納に就て記すべき事あり、それは婚禮鑑なり、婚禮式の前に郎の家より婦の家に贈る結納物にして此鑑內には美麗なる時器類若しくは布帛類を納めて之を贈るを以て慣例となす其代價を積れば婦の持參金の五分の一なり。

▲婚禮擧行の期日

兩家に於ては、婚禮までは他人の接待を謝絶すと雖も新郎は新婦の家に訪問、食事は勝手なり、新婦は室內に閉居し靜かに刺繍の業を營みて窮屈ならぬ樣室內服をつけ、頭巾を冠ぶる、而して婚禮式は大抵三週間以上二ヶ月の間に執行するを常とす。

▲嫁入道具

これは婦が持參する財產の百分の五の割合を以て新たに購求し郎の家に携ふ其の品々は芽出度き物と日用品と臺所用に供するもの別言すれば妻君たるに必要なる

物品を殘なく購ひ整ふ、其數々の品を記述するはこゝに略す。

▲婚禮式の通知

婚禮の日より八日以前に兩親の名を以て發するが通例なり、併し知人にして斯の如き式場に列席を乞ひ難き人又は來臨を乞を欲せざる人には婚禮後に同じ日附を以て案内狀を發する習慣あり。

▲婚禮式

大抵寺院に於て之を擧行す、其儀式の模樣に至りては頗る繁雜なるのみならず且つ宗派によりて異同あれば、わざと記さず、要するに神聖と嚴格とを表するに外ならず、此時寺院に上下する新郎新婦如何に幸福に、如何に愉快に、新婦は處女たるの姿を脫して爰に一家の女王たるの裝ひを凝らし、新郎と共に馬車に乘り、徐ろに寺院の敷石の上を出て行くは如何に美麗なる巴里市中の觀ならん。

▲婚禮の入費

婚禮の諸雜費は身分によりて相違あり、そが中等以上の地位に於ては隨分莫大なり、故に若き男女は輕々しく行はず、是れは日本にても同じ事なれど西洋にては一層甚だしきを見るなり。通例婚禮に依つて財產の大半を傾盡すなり、男子は三十歲頃までは孜々營々として婚禮に充つる財產を貯蓄せざれば一生孤獨者とならざるを得ず、而して婚禮の入費は大概男子に於て便する習慣となり居れば財產を要するも禮式の一なり、卽ち郎より贈る種々の贈り物結納物、新婦の婢僕に與ふる手當金、祝宴費、婚禮當時の馬車代、式場の諸入費新婦の介添に贈り物其他諸雜費すべて新郞の懷中より出づれば多くの財產も婚禮によりて蕩盡する者多し。

▲蜜乳月の事

婚禮を擧げた當座一ヶ月の間をハチームーンと言ふ、蜜乳月は夫婦連にて近縣に旅行す、此習慣は元と英國より始まれり、佛國にては新夫婦は婚禮後一ヶ月間は親族の家に招待せらるゝの外は一切外出せず、閉戶して新夫婦の位置に馴るゝ爲に要用なる時間なりとす

▲米國主義と獨逸主義

米國にては何事も自由主義を重んじ、又婦人の敎育も行屆ける故に男女自から夫たり妻たるを撰擇し、自から夫妻たるの契約を結び而して後兩親に告ぐるなり、他國にはあまり其類を見ず、是に反して獨逸にては契約を兩親の面前に於てし、指環の交換も又斯くするなり、英若しくは米の如く許婚の男女二人の對話又は散歩するの自由を與へず。因にいふ婚禮の服裝は各國異同あれどもまづ新郎の服は黑羅紗のフロックコートにして、襟飾、カフスの飾、手袋、シヤツ、ヅボン下靴足袋の類は悉く白色の皎々たるを用ゆるの例なり、新婦の方は腕と胸を露はせる大禮服、これは男子の黑色に反對して悉く白色又は淡紅色又は空色を用ゆ帽子の色より帽子の飾花其他一切の附屬品は大抵白色を主とするは、白の柔と潔の質他色より秀逸なるに由るものなり、我國にても新婦の婚禮用に白無垢を重ぬるは此理由に外ならざるべし。

▲心得艸

▲神經衰弱 には茶や珈琲を避け辛いもの刺激性の食物も避けねばいけぬ、そして菓物を澤山お上りなさい、林檎は最も腦に効があります、悲しむ事と激する事は出來るだけ捨て丶お仕舞なさい、夜分は出來るだけ長くお眠りなさい、熟眠が神經に最良の藥劑です。

▲血液不良 にはなるだけ野菜ものを食し菓物をお上りなさい、野菜は新鮮な消化の善いものを擇ぶので、胡瓜などは著しく血液を淸涼にするの効があります、苺、菠薐草、茄、蒜、韮の如きみな有効です。

▲腫瘡の痕が焮衝 せし時は硼砂の粉末と澱粉質の粉を塗つてお置なさい、決してひツ掻いてはいけません、パツプを當てたり洗つたりしてもいけません、よく乾かして置き、その上を綿花で保護してお置きなさればよろしいです。

▲眼に塵埃が入つた 時はすぐに上からこすつてはいけません、そんな時には早速兩方の眼を閉ぢて頭を上に向けて鼻で强くフーと吹くのです。

雜俎

理想の家庭

黒澤逸子

一、家庭は品性修養の最上園となす事。
一、家庭は安慰を得るの處となす事。
一、家庭は能く和合を旨とし主義を一轍にする事。
一、兩親と夫婦とは別居する事。
一、家庭内に秘密なき事。
一、育兒法に注意する事。
一、起居室、讀書室、應接室、遊戯室、運動庭を設くる事。
一、日に一回音樂を奏する事。
一、日々新刊書を披讀する事。
一、貯金をなす事。
一、日誌、金錢の支收を正確に記入する事。
一、下女書生は可成雇はざる事。

一、昔よりの無益の習慣を打破する事。
一、命日、誕生日には相當の談話を催す事。
一、應接には家族一同會する事。
一、裝飾品は身分相當にして審美的なる事。
一、散歩には家族一同供ふて兒童に世の文明事物を知らしむる事。
一、家庭のランプには愛の光を發揮せしむる事。
一、公會及宴席には出來る限り家族を供ふ事。
一、慈善會に加入贊成する事。
一、子女教育には終生最大の力を盡す事。
一、廉價なりとて不用品を買はざる事。
一、必要品は高くとも堅固良品を求むる事。
一、外形を飾らず寧ろ内部の燦然たる事。
例へば羽織よりは着物の方が上等。着物よりは下着。下着よりは肌着。肌着よりは身体に垢なき様。垢なきよりは心の潔白といふ風

○理想の夫

一、血統よき健康なる夫。
一、深く教育に趣味を有する夫。

一、氣高き夫。
一、品性よく、品格高き夫。
一、規律正しき夫。
一、忠實にして實直なる夫。
一、音樂を好む夫。
一、書畫をよくする夫。
一、言行一致なる夫。
一、宗教心ある夫。
一、愛情深き夫。
一、家庭に趣味深き夫。
一、五十圓以上の收入ある人。

未亡人再嫁説の先驅

(寡婦の斷髮に就て)

明治の始め寡婦再嫁の説を立て、一世の人心を傾動したる福澤先生あり、近日又同先生の流を汲める時事新報記者は戰死者の妻女と題して寡婦斷髮の習慣を否定したり、其説の可否は容易に判定すべからずと雖も、當時紛々たる俗流に對して一頭地を抽き世上の注目を價するものあるを以て此に拔萃す。

戰死者の遺族に對しては政府より扶助料を與ふる の恩典もあり又民間にも夫れ〳〵 救助の仕組ありて差當り生活に苦しむことはなかる可し此點は我輩の先づ安心する所なれども 生活の問題を別にして遺族の悲嘆慘状は人をして酸鼻に堪へざらしむるもの 多き中にも新婚匆々の新婦人にして良人の戰死を 聞き直に綠の黑髮を斷ちたりとの沙汰は往々新聞紙にも見え世間にては目す るに貞女烈婦を以てして之を 稱賛するもののなきに非ず當人の心事を察するときは唯涙の外なしと雖も俗より斯る擧動を稱賛するに至りては 實に無殘の極にして我輩に於ては決して當人の爲めに親切なるものと認むるを得ざ るなり今度の戰爭には戰死者の多きと共に必ず幾多の若未亡人を生 することならん實に人生の不幸にして忍びざる所なれども 國家の大變に際しては止むを得ざる次第なりとして 其人々の爲めに謀れば今後行先きの長き身を處するに成る可く其不幸を輕くして將來の幸 福を得せしめんとすること人情の當 に然る可き所なるに一時の感情より其擧動を稱賛し て當人一生涯の幸不幸を考へざるが如き我輩の取らざる所なり我國の習慣に於て婦人が夫を喪ひたる後、自ら斷髮するは再び二夫に見ゑざるの決心を示すものに外なら ず或は其婦人に子供もあり年齡も相應に老し て自ら子女を養育するの責任あるものならんには 生涯を未亡人として送るの覺悟も尤も至極なれども結婚來幾年も經ずして未だ子女をも存せざる若婦人が夫の戰死に 遭うて哀慟の情に堪へず 自ら髮を斷つが如き其心事は實に察す可しと雖も俗より

考ふるときは年若き婦人の貞に前後の思慮もなく斯る暴擧に出づるものにして其行爲甚だ無念す可きものなきに非ず今日の社會に婦人が孤立して一生涯を送るが如き實際に容易ならざるのみならず實事の婦人をして其身未亡人たらしむるは本來人間の天性に反するの沙汰にして其不幸悽状をなしてますく甚だしからしむるものと云ふ可し古來我國には彼の女大學流なる貞婦二夫に見はすなど云ふ一種の女訓世に行はれて今の婦人も自ら其感化を蒙るもの多きが故に今回の如く男子が戰場に壯烈なる戰死を遂げたる場合に其妻たる婦人が自ら髮を斷つの決心は敢て怪しむに足らず即ち古流の女訓に於ては天晴れ貞女の鑑とも賞むる所のものなれども從來とても實際の事實は往々これに反して却て女徳を汚したるの例なきに非ず況や斯る女訓は取りも直さず東洋儒教主義の流弊として識者に於ては極力これを排斥して弊風の一新を期しつゝある今日に尚ほ古主義の流弊を脱せずして斯る擧動を稱賛し爲めに婦人の一生涯を誤らしむるが如き愚の甚だしきものならずや高尚なる婦人の身としては悲哀失望の極一時前後の分別を失ふも無理ならぬ次第なれども其父兄親戚もしくは友人たるものは斯る婦人に對しては其不幸を慰むると共に篤と將來の利害を考へて其身の爲めに謀ること肝要なれ戰爭は一時の變にして人生の一生涯は甚だ長し一時の感情の爲めに永久の幸不幸を忘れて可憐その身を誤らしむるが如き我輩の忍びざる所にして呉れぐくも世人の注意を望まざるを得ざるなり

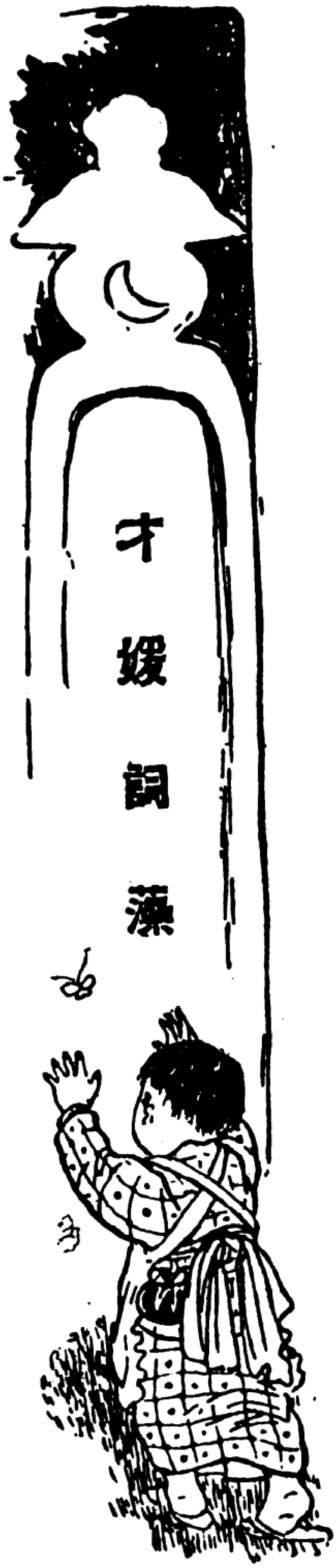
時事新報のこの說に對して多年國粹道徳の擁護に務めつゝある日本新聞は默する能はず、時事の否斷髪說は日本女性の眞情を解せざる愚說にして、貞烈なる婦人に向つて侮辱を加へたるものなりとせり。兎に角この寡婦再嫁說に就ては、世論極めて喧し。

海軍下士卒家族共勵會

本會は皇后陛下の嘉賞に達し眷顧を辱ふすると共に又　皇太子妃殿下有栖川宮妃殿下　東伏見宮妃殿下　伏見若宮妃殿下　山階宮　妃殿下の殊榮を蒙り尚は幾多貴顯紳士淑女の芳志に浴し海軍部内の　信用は勿論一般の同情も亦多大なるに至れり今其狀況を記さんに先頃東京海軍士官の有志夫人により　計畫せられたる在横須賀の海軍下士卒の家族共勵會は　下士卒の家族を保護するの目的を以て士官の有志夫人を幹部に下士卒の有志家族を會員に定め　組織せられたる者にして幹部會員が相互の補助と勤勉により　慈善事を行ひ兼に盡り恒職によりて家族に内職の道を與すと共に下士卒に後顧の憂を除き　自然に家族の美風を養成して品位を高め下士卒の忠勤を鼓舞して職務を勵むる事兎も角も下士卒と家族の間に存する不便は之を去りて有益の効果を與へ其他何も愛護の範圍に入る事業は都く網羅して漏すなきを期し滿天此主義を擴張して一般士人の同情に訴へ大に賛成を計らんとする者に巧妙にして有益なる方便のものなりと謂ふ在れは歐米の海軍根據國に於ても此種の事業樂に行はれ殊に英國等の如きに施したるものは其直接も國家並に個人を利するの大なる誠に量る可らざるものありて將校婦人として先例を爲すもの尠からず思ふに共勵會の期する所も歐米のものに譲るなきものなるべしと雖も現時は先づ愛護の目的若干を遂ぐるが爲に古來本邦に於て婦人の手藝に專屬する所の衣服の製作を掛んで實なる事業とし世評を得て海軍所要の軍服を實際に製造せしめ之

に對する勞銀を以て會員自營の資に充て家族なし て閑居徒食の弊なからしめんとするもの ゝ如し蓋し海軍には軍服の外信號旗の製作もあれは火藥嚢の修繕もあり被服の洗濯もあれは器具の手入もあり て婦人の職業として適當なるも の幾多之あり又種類により大小難易もあれは何人にも夫々適するものを得易く且つ其數も多けれ は家族の大部をして之に當らしむるも優に不足を見さ るへしと從前は是等の事業も建築土木等の業と同しく一般の請負に委せられ世人の注意を惹か さりしか爲に直接裁縫等に從事せ る婦女子は其勞に酬ゆる相當の賃金を得る能はすして所得の大部は仲請負下請負等に横奪せら れ酷からさる無理不法も默々の裡に看過せら れたるは不當の極と言はさる可らさるなり士官の有志夫人等爰に感する所あり奮然として共勵會を創成し 是等の弊を匡濟し下士卒の有志家族よ り漸次一般に及ほし愛護の績を擧けんとせらるゝは誠に美事にして婦人の纖手に如斯重要な る事業を創始せられたる勇氣と功績は廣く之を吹聽し て大に世の篤志若は高義の士女の猛省を促し同情を請ふに値する者なり故に同會は頗る下 士卒並其家族の希望に投し家族にし て會員たらんと欲する申込者の多大なるは驚くへき程なるも創始後未た多くの時日を經す從て器具機械の整備せ さる今日は到底十分の一をも收容する能はさるの 狀態なれども漸次一般の同情を得て遂に遺憾なき點に達せしめんと勉めつゝあるは有志婦人の勞を多とし感謝に辭へざる所なり回顧すれは本年一月十五日始め て同會の創成せられた る當時の狀態は實に熱誠の外一の資産を有するなく誠に寂寞たるものにして其荒涼の觀將來の發展を疑はし めたるものありし然るに幹部諸氏に會員の卓拔な る共勵は時に或は官廳に出入して事業を求め爾餘の日と雖も暑も厭ふこと なく右手に傘を翳して左手に包を抱き日に幾度か官廳と同會工場の間を往復し又或る時は 夙夜教習に勉め嚴正なる監督と親切な る指導を以て能く柔順なる服從と眞心の感動を得互に心底を披瀝して評議するの美風を起し 其風益高勵し倚は眼前に見ゆる如く其能く主旨を領得し て廣く手を擴ます跟隨せる者正に今日の旺盛を致し高貴の賞賛を辱くしたる所以にし て向後百年の基礎又此尋常ならさる幹部諸氏に會員の赤誠に服膺するや明なり然から世間か一般に婦人の閑居を以て危險と目す るに關せす同會の會員は頻を集めて清談するの時を得友と伍して健遊するの機を有する か故に更に此憂なく假令獨棲する者と雖も 一朝病床に臥せ は之に藥餌を供する者を得産褥に臨まは之に看護を供す るものありて下士卒か不在なるときも其家族の無聊を慰し不測なる虞るの途立ちたるものなり尙ほ之に止ら す下士卒か外國等に出航し て永隔を憤ふ名の下に已むを得さる多用を假するか爲に送金をなす能はさる場合を生するも家族は一家を按排し て毫も支障を見さるを得へく其他一定の職業に就て無要の事をな さの道なきか故に間食をなし美服を羨み贅澤を好む の念は勤勉貯蓄の嗜となり身體の健康は實際強健なる子女を養ふの處となりて顯は れ其他同會の發展に伴ひ尙ほ幾多の利益を享有し得へ く相互補助の恩澤は誠に洪大無邊なりと之を共勵會の狀況の一班なりとすされ は世の篤志若くは高義の士女は奮て之を奨發し益々盛大を致さしむへきなり。

▲戰爭繪はがき、日露開戰以來頗に流行して來た繪はがきの種類は誠に澤山あるが、其中で東京本郷春木町坂上便利堂から出たのは春夏秋冬の四季に分ち、春夏の二た組は已に發行し一ト組六枚づゝでだ。それは皆洋畫大家の揮毫に係り和洋兩か樣の說明してあつて非常に高尚優美に出來て居て、特に婦人用向にも適當である定價は郵稅共上製廿錢並製拾五錢同店では注文通りの者を作り特に軍人へは實費で求に應ずるさうだ。



塚越停春君選

(天) 滿洲十勝(南山)

門司市清瀧町五丁目杉本方 東島異子

地雷火の跡に飛び立つ鳥も見えて
　南山高き日の御旗かな

評曰。啻に戰後の南山を歌ひたるのみならず、又善く日本國民の意想を歌ひたるものと謂ふべし。表面の意義は言ふまでもなく、激戰後の南山が、平和に安全に日章旗の下に横はりつゝあるを歌ひたるまでなれども、反面に於て、「地雷火」は激戰を聯想せしめ、「飛立つ鳥」は平和無事を聯想せしめ、「高き日の御旗」は我が勃興の國勢を聯想せしむ。一括して之を言へば、戰に勇にして而も平和の愛好者たる日本が、方に國勢勃興の途に在ることを言外に表すに於て、自ら十分の氣象あるを見る。

「地雷火の跡」、「飛び立つ鳥」、「高き日の御旗」、好個の取

(地) 古戰場虫

合せなる題。

名古屋市東片端町二ノ十四番地 鈴木谷ゆり子

なんとなう只何となう偲ばれぬ
　虫の音しげき長久手の原

評曰。なんとなう只何となう偲ばれるが眞に人の情也。所謂現實に落ちずして面白し。

「長久手の原」の一句ありて、十分に亘古戰場の意を盡くす。

(人) 薄

大市西區東千島町八十八番屋敷 園田さん子

行く秋を穗に出し薄筆にして
　書きても見んか國讃ふる歌

評曰。一種異采ある歌也。薄を正寫せずして、之を筆になむことに顯出し、而して國讃ふる歌を書かむことに聯想す。匹夫匹婦も能く外務大臣の心掛けある國民に非ずむば、決して斯くの如き歌ある能はざるべし。

ぜん筆にせんと欲する已に奇想也。以て國難ふるの歌を書かむと欲する頁に奇想也。

秀　逸

〇〇滿洲十勝（ハルピン城）

遠江國中泉町　神谷すみれ子

男の子ならば試めしても見ん我敵に
　梓の弓をハルピンの城

〇〇滿洲十勝（ハルピン城）

山城國伏見稲荷大島方　葉山みさを

國遠くいでし哥宗が妻や今
　いかに見るらん哈爾賓の月

〇〇蒔

備前國和氣郡　三木まち

みだれにし姿は見せじ花すゝき
　よし秋風は吹きしきるとも

評。以上三首、合せて之を日本婦人の歌となすに足る。第一は積極の場合に於ける日本婦人の決心を歌ひたるもの也。第二は此の決心の反面に於ける想ひ遣り深き獻身的愛情を歌ひたるもの也。第三は消極の場合に於ける日本婦人の覺悟を歌ひたるものにして單りハルピンを歌ひ、蒔を歌ひたるもののみに非ざる也。而して日本の武士は皆實に此くの如き婦人の見として生る。今日我軍か連戰連勝するも、偶然に非ざるを見るへし。

第一の實行者は神功后以下皆然り。第二の實行者は「おきつ白波立田山」と詠したる婦人皆然り。第三の實行者は否運の場合に自ら懐劍を引て死に伏したる烈婦貞女皆然り。

〇〇滿洲十勝（鴨綠江）

信濃上水内郡小川村　楠つめ

天つ星石となるともかはらざれ
　國のかためのありなれの河

評。鴨綠江を國の北境となさむと詠す、神后當年の意氣ありと謂ふべし。

〇〇滿洲十勝（ハルピン城）

長野縣松本町東町　吉田次子

銃とりて眺むる時や近からん
　ハルピン城の秋の夜の月

〇〇同

越後三島郡日吉村　坪井わか子

梓弓はるびんかけて大君の
　御稜威の風になびく御代かな

〇〇同

山城國紀伊郡伏見砂川　今村しやう子

せの君と小さき花園つくりつゝ
　住まむも近しハルピンの市

評。以上三首共にハルピンを詠し、何れも壯なる歌のみにして、我婦人に此の勇氣あらば、滿州の野の日本國民が第二の故郷を作ること、遠き異日に非ざるへしと思ふ。

〇〇滿州十勝（遼陽）

寂として敵影もなし遼陽の
　柳にやどる十六夜の月
　　東京市麹町區土手三番町一　袈裟代子

評。此くの如き歌を見るの日、固より遠きに非さらむ歟。

、〇滿州十勝（黑龍江）

滔々と哭おし流すアムールの
　河にみづかふ大和益良夫
　　東京本郷區駒込神明町四四ノ四岡方　西岡こと子

評。「哭おし流す」の詞、形容し得て、深宕甚し。

、〇滿州十勝（奉天城）

天を摩す嶺に我が背が駒立てゝ
　嘯くいきや滿州の縣
　　東京市牛込中町十番地　田上小金

評。豪壯言ふへからず。
　山上憶良大野山の詠に如くか。

、〇滿州十勝（鴨綠江）

　　宮城縣遠田郡不件田村　小山田みどり

黑龍の流に添ひて十萬の
　敵騎ひしめく夏の夜の月
　　新潟縣中蒲原郡金津村古津　小川安理子

評。是れ黑龍江昨今の景なるべし。

、〇滿州十勝（黑龍江）

雲に入る月物凄きアムールの
　蘆の隙間に胡笳かすかなり
　　尾道市　野田つや子

〇〇同

黑龍の長汀千里日は落ちて
　夕風寒く胡馬嘶く
　　長崎市稲津町七二　相河しげ

、〇同

長程の馬に水飼ふ皐軍や
　黑龍江上月淡き宵
　　東京市神田仲猿樂町九　佐藤千代能子

評。以上三首異曲同巧。慕思遠征の詩情躍如たり。

〇〇海

虫の音も遠く聞えて岡の邊の
　すゝきの上に月落んとす
　　伊勢國郡白子村　東松千壽子

評。秋氣滿。秋意足。

〇〇海

露やおもき姿や樹き袖たれて

月にはおらふ蟲すゝきかな

○○同　東京京橋木挽町一ノ十一宮澤方　宮澤末子

秋篠か御舞の素襖そと翻れて
　すゝき野十里秋の風吹く

評。以上二首、着想不レ凡、形容極レ妙。
　清新純粋。

ゝ○薄　安藝國竹原町一七四　松阪梅子

花すゝき撓むを見れば置き添ふる
　露には露の力ありけり

評。言ふ所眞理あり。婦人の性行能く夫婿の性行を變ずること想ふに當に此くの如きものあるへし。極めて面白き歌なれど、寓意に切ならずして、之を薄の歌と謂はむよりは露の歌と謂ふに近きこと、惜むべし。

○○薄　石見國邇摩郡靜間村　宮内登美子

愛づるてふこともなけれど何となく
　只なつかしき庭のを薄

○○同　和歌山市駿河町　湯川倭文子

さらでだに秋はかなしき物なるを
　亂れて啼く蟲すゝきかな

評。二首、情趣深き歌也。

○古戰場虫　群馬縣[illegible]　佐川すゞ

たゞ秋のあはれのみかは武士の
　うらみを添へて啼く虫の聲

評。眞に情恨の深きものあり。

○○古戰場虫　東京日本橋區本材木町一ノ十五　佐久間しづ子

武士のいさほうもれし荒原に
　名のりもあへぬ兜虫かな

評。此くの如きもの、眞に千古の恨事と謂ふべし。關東遊には現に古蹟旧墓等を存して、竟に其何人の跡なるやを知るべからさるもの少からず。「名乗りもあへぬ兜虫」を以て「うもれしいさを」に喩ふ、妙甚し。「兜虫」の二字、能く古戰場の意を暗示す。

○○同　神戸市海岸通五丁目　岸崎いし子

虫の音は昔をかたる心地して
　三日月淋し戸田の城趾

評。感慨多。

○○同　陸前中新田町　芳賀ふみ

古りぬれば敵も味方も跡絶へて
　同じ哀れを鳴く秋の虫

評。作者の言。

○滿洲十勝(ハルビン城)

東京芝區南佐久間町二ノ十八芳家方　星乃郷子

弓張の月影さえてハルビンの
　城の夕に胡歌を聞くかな

評。紫髯綠眼の胡人歌ふ歟。

、○滿洲十勝（鴨綠江）　大阪市西區三軒家下町六ノ五　桐田良子

下り立ちて駒に水飼ふ人若し
　鴨綠江のあけがたの月

、○滿洲十勝（松花江）　安藝國竹原町一七四　松阪梅子

見えかくれ斥候數騎急ぐ也
　松花江畔雨寒き夕

、○滿洲十勝（鴨綠江）　筑前若松　木村ひで

月落ちて斥候三人渡り行く
　影朧ろなり鴨綠の河

、○同　山梨縣東山梨郡松里村　小林まつ子

斥候の騎馬の一群見えずなりて
　鴨綠江頭新月高し

評。以上四首、殆ど同様の趣味を歌ひたるもの。

、○滿洲十勝（鴨綠江）　美濃國武儀郡武儀村谷口　山田愛子

すぎ去りし十年は夢か舟橋に
　ふたゝび渡るありなれの水

、○滿洲十勝（摩天嶺）　熊本縣飽託郡黑髪村下立田　柏子ふさ子

天そゝる高嶺もいかで大君の
　大御軍を妨げめやも

評。眼中アルプス山なきもの獨り那翁のみに非ず。

、○同　姫路北條口　三俣千代子

道たへし摩天嶺頭月さえて
　こだまに響く狼の聲

評。「猛虎一聲山月高」。

、○滿洲十勝（南山）　下野　玖羅子

夢やいづこ鐵砲の霧に月冴えて
　鬼哭啾々南山の夜半

、○同　越後國長岡千手町　武敬子

狼の聲物凄く南山の
　荒廢の跡月青く照る

評。二首好一對。

、○滿洲十勝　横濱市山下町　杉本芳子

堤千里大和の櫻移し植えて
　ボート浮べむありなれの河

、○同　岡山市西中山下　橋本芳子

いさぎよく散りし櫻のかげのせて
　とはに流れよ鴨緑の河

評。此の二首亦好一對。

○古戰場虫　信濃　菊子

虫の音に千古の跡ぞしのばる丶
　川中島の秋の夕暮

評。好句也。

、○海　和歌山　木本歌子

法の聲細うきこゆる尼寺の
　庭にも招く花す丶きかな

評。「招く」の字ありて、全篇活く。

、○古戰場虫　東京駒込　登美子

月影は菊の尾花わけ出で丶
　首洗井のわたり虫一しきり鳴く

評。眞に悽愴なる古戰場の景。

、○同　河内北河内郡山田村　竹内敬子

筆やぶれ亡びし都草生ひて
　帝陵のあたり虫の聲する

評。清國内地に此の景あり。

、○滿洲十勝（旅順口）　越後三島郡日吉村　坪井わか

西の海沈む夕日のくれなゐや
　旅順のとりで今落つらむか

、○同　武藏西多摩郡五日市町　内山薫子

銃を杖に重傷に病む兵の
　旅順を睨む眼に涙あり

評。以上二首共に雄勁の語。

停春曰。予は初より詩人にあらず、又歌人にもあらず。固より所謂宗匠なるものには非ず。唯友人松原氏の囑に應じ、時に戯に非詩人眼を以て非詩人詩の批判を試み、以て自ら快とするもの。其當らざるものあるべきは、則ち讀者及作者に謝せざるを得ざる所也。然れども批判一に自家の所信に基き、世の所謂宗匠等が時としてなす如き、門派若くは門弟子に私するの類なきは、堅く自ら信ずる所たり。

予が最近本誌の爲に所謂非詩人批を試みたるものの數回、而して通例に於て、投稿數特に多く、佳句亦多く、就中悲壯の句の取分け多きは、歌界に於て注目すべき一現象なるべし。以上撰する所を見るも滿洲を詠じたるもの最も多く、古戰場を詠じたるもの之に次ぎ、薄を詠じたるもの最も少し。是れ予が滿洲を詠じたるものを最も多く採り、薄を詠じたるものを最も少なく取りたるが爲めに非ず、實に前者に佳句最も多く、後者に佳句最も少なかりしが爲也。亦以て時局の影響を見るべからずや、唯惜むらくは、眞に叙情を賦して個々人を動かすもの、未だ甚だ多からざること、是也。蓋し是れ題詠の弊なるべし。

佳調

(すゝき、古戰場虫、滿洲十勝)

● 安藝　松殿梅子

樹かげなき遼陽道の暑き日を千軍萬馬城を指いて行く

● 遠州　靜子

天かける神の集にやあるならむ摩天嶺上日の御旗靡つ

● 伊勢　吉村靜枝

日は落ちて昔しのぶの中野邊こゝらなくなり鈴虫の音

● 大阪　ふゆ子

朽果てし屍などの松虫は昔がたりに夜を明かすらし

● 尾道市　野田なほ子

ものゝふのいさを記せし石文の苔むすあたり鈴虫なく

● 津市　三谷ため子

將軍のいしぶみ仰げばかたぶきて關のふる道只虫の聲

● 岐阜　君子

恨ふかき魂かみそらに影飛びて枯野が三里たゞ虫の聲

● 新潟　堅子

城おちて茲に二百の秋深く耳萬石なたゞ虫の聲

● 埼玉　江村俊子

[illegible]て愛でにし人はゆきにしを荒れし築地に花ぞ咲く

● 大阪　今中珠子

うつしゑを月に眺めてほゝゑみつ胸に水飼ふ鴨綠の岸

● 和歌山　桑原國子

風あれて霧ひくき夜をますらをが家の文見る遼陽の陣

● 河内　大矢たれ子

馬子唄は遠くに消ゑてすゝき原穗波なり〳〵笠一つ見ゆ

● 靜岡　富安子

昔を秋の風の芝の草がくれ今もいさみてくつはむしなく

● 伊勢　中村綠子

旅人のすげがさ見ゐて赤みゐて薄招きふす秋の夕風

● 京都　西澤まつ子

山守の庵の行衛も見ゆるなり廣野のすゝき風に靡きて

● 京都　塚本政子

霧の海晴るゝあとより月さして野路のをすゝき露浪立つなり
● 大阪 桑田信子

旗幟今はたなびく城跡にたれをまつ虫こゝらなくらむ
● 神戸 山下とめ子

ありなれの川の秋風さよふけて神代のまゝの月出にけり
● 大阪 立花しな子

見渡せば果し知られぬすゝき原に伏兵一隊物の音もなし
● 名古屋 服部とめ子

月よとはに千古のうらみ語れとて殿母飢うこほろぎの鳴く
● 鳥取 みな子

いくたりかまた渡るらん十萬の王師こゆ行く鴨緑の河
● 三重 亀井寫登子

遼陽の客舎去りはてゝいたづらにまねく尾花に月澄み渡る
● 熊本 浅田加能子

ロスキーが白旗あげて行く見ゆる摩天嶺遠く月は斜めなり
● 長野 萩子

もののふのかばねにむすや草の原川中島のゆみはりの月
● 伊豫 永井石子

紀念碑にいと青々と苔むして原ヶ岡べに虫のなくなり
● 弘前 智なか子

神皇紀つゞりし人のしのばれて虫の音寒し関の城あと
● 北海道 原 栄子

打なびく嵯峨野の入江の尾花原道の行手にたれを待らむ
● 信濃 竹泉わかば

鳴き〳〵嘯しるのほる摩天嶺嶺よりいでゝ霧にいるなり
● 群馬 吉田喜美子

砲の音はいつしか消えて小夜更けて鴨緑江畔月さしのぼる
● 大阪 宇多子

秋たちて問ふ人もなき山里に何まねくらん庭のをすゝき
● 備中 林 榮子

名にしおふハルピン城の頂きに旭の御旗たてよ益荒夫
● 肥前 二本松つゆ子

死を期する鐵騎十萬こゝをせとたち争ひし鴨緑の江
● 下總 松波

草も木も血潮に染みてしかばねも乱れみだるゝ南山の役
● 神戸 島谷たき子

糸すゝきみだれ〳〵て秋風にこめ人まねく袖かとぞ見る
● 尾張 服部とめ

七度も生きて御國に盡さんと誓ひし男の子今はいづこに
● 岩代 太宰百合子

武士の露と消にし跡問へばむかしの月に機織のなく
● 伊豫 高橋かめよ

名にし負ふ鴨越は草ふかく通ふ人なくたゞ虫の聲
● 京都 たず子

風そよぐあはずの原の夕まぐれなくは松虫くつは虫かな
● 因幡 小林貞子

千萬の干戈交はしあとも見えで関ヶ原三里は只虫の聲
● 北海道 星山露子

はて知れぬ野邊の八千草枯尾花更け行く秋を身にしむねつ
● 但馬 羅 光

義に逝きし武士の靈魂の鏡かも今宵限なき古戰場の月
● 伊豫　勝田秀子

月ふかみ砲撃たえし鴨緑江たちまち見ゆる二騎また一騎
● 名古屋　松原ちか

むさし野の瀬が上にさゝ渡る月もしづかにむしのこゑ〳〵
● 備後　石岡磯子

海に陸に天にどよめく大砲の音ものすごき旅順口の秋
● 靜岡　梅子

君が爲荒野の露と消ゑはてし忠魂いづらたゞ虫の聲
● 長崎　古賀秀子

すゝき原に白銀の波立つ見ゑてまどかなる月は今いでそめぬ
● 赤阪　山村くら子

されこうべ見ゑもしぬべく家はあれて虫の音さみし小手指の原
● 埼玉　松本しげ

幾十秋風たゞ寒き璦琿に虫の音凄く鬼火燃ゑんとす
● 山城　大久保よし子

たむろするものゝふのこゑも今はたへ鴨緑江に月おちんとす
● 河内　岡島龍

草かくれ絶間もあらでうらむ聲たがのりし駒のくつわむし哉
● 伏見　葉山みさを

すゝき原日傘にわけてとび來ればあらは戀深秋の風ふく
● 越後　土田ちい

塲行く人絶ゑて隅川の夕淋しく虫鳴きしきる
● 北海　須藤うの

淋しみの秋の色おふすゝき原すゝきそよきて小雨そぼふる
● 大阪　寺西春枝

其昔戰ひしてふ跡とへば草ながらうして虫の音かなし
● 越後　松永しげ子

虫の音にさそはれいでゝ見渡せばすゝきの波に月あらはるゝ
● 青山　山中武子

古しへはくれなゐそめし荒野原につきかげおちて虫の音高し
● 三重　太田榮子

獅子も吼ゑ虎も嘯く心地してすゝき野三里月白う更く
● 房州　なみ子

失せし友の魂か旅順の沖の邊のマストかすめて星ながるなり
● 長野　武井つる

いくさ人の馬洗ふ影うすう見ゑてアリナレの月いよゝ更け行く
● 神田　高鍋ふさ子

ものゝふのうらみ殘してたふれたる粟津が原にあはれなく虫
● 大阪　吉野はる子

さらぬだに露けきものを粟津野の月にさゑゆく虫のこゑ〳〵
● 筑前　木村こま

ますらをの萬骨枯れて草生ひて粟津のはらに只むしのこゑ
● 岡山　かつ子

英雄のあとをたづれて來て見れば昔を語る虫の音あはれ
● 栃木　木村蘭

ものゝふがさおひしあとや今いづこ荒野十里を虫なきしきる
● 堺　瑞花子

新月にゆらぐすゝきのほも見ゑて獅峠の夕風静なり
芝　松子

「一本の菊花すゝき露ながら今宵の月にたむけてしかな　東京 芝 やよ子
ゆききかよふ人はとだえし夕まぐれのべの尾花はたれまねくらん　伊豫 寒川明子
敵を追ひし功輝く驛の閑寂ふる跡に虫すだくなり　大分 大島きく子
要塞の古りにし跡に草深く青き火もえてたゞ虫の聲　山梨 小林まつ子
ほたすゝき入りみだれたる粟津野に虫の聲たかし秋の夕ぐれ　長門 木村いく
城跡の松の古木に月さえて古しへ偲ぶすゞ虫の宿　備後 脇屋とみ子
草原の一本松に月落ちて高松城下たゞ虫の聲　大阪 大道白百合
あす落ちんとぶはまほしげに夜半の月凉しう照せりハルピンの城　東京 永井文子
忍べとや苔むす城の石垣に虫の聲々高く低きは　牛込 武久二枝
ますらをの屍と消にしあら野邊に虫の音されて月かたぶきぬ　山梨 小林つれじ
月影は鴨緑江に小夜更けて舟橋渡るわしおとたかし　盛岡 佐藤なか子
草むらにうづもれはてし英雄の昔を忍ぶ虫の音細し　神田 豐津はる
秋の野に隠れな呼びてか花薄ほにに出て招く袖の見ゆなり

大阪 竹田篠子
やがて今凱旋たつべきハルピンの城にながめむ満州の月　埼玉 澤田仲子
小夜ふけて月影寂し田原坂昔の哀れをうたふ琵琶　岩代 菅野和子
戦ひのありしむかしの跡とめてなびくすゝきに虫の聲きく。　磐城 永田とし
夕暮の風も音せぬ秋の野に露立ちこむるすゝき一むら　東京 森戸凱子
花すゝき招くあたりにたゝずみて昔はすゞきつさなしかの聲　群馬 根岸せい子
虫の音もあはれを添へて聞ゆなり小手指河原の秋の夕ぐれ　新潟 土田ちい
旅順口仇の砦はくち果てゝ夕の風に螢乱れ飛ぶ　山梨 小林恒子
蜻蛉飛ぶ入千草の原の赤すゝき二すぢ三すぢ穂に出でにけり　芝 白川花
鴨緑の江を斜めに鐵騎一人いなゝき高し有明の月　牛込 中村敬
ハルピン城高く聳えて月は冴え鴻雁飛ぶなり木枯の夜な　大阪 ふゆ子
いたづらに月なまれきそ袖すゝき露は汝が袖に宿れるものを　四谷 杉原とみ
唯あたりあな田に蝗とびかいてしのふすべもなし矢叫のあと　しま子

くつわ虫の聲をしるべにとめくれば唯秋風のあはづ野の原　●　越後　しづ子

廣野原しげる薄に風見ねてゆらぐすがたのあはれ涼しも　●　明石　白菊

兵士の胸のくつわのそれならで音を偲ぶ野邊の虫の音　●　美濃　高部鈴子

武士のうらみを呑みて死せし野に哀にすだく虫のこゑ〴〵　●　和歌山　増田逸子

狐ひとつ出でかくれして川沿の芒原一叢樹にくれゆく　●　東京　中村よし子

霧散ふありなれがはに滋賀鳴り行み初めて見ゆる遠山　●　和歌山　森　紫尾

秋の野に道ぞゆかれの花すゝき右に左に人まねきして　●　大阪　青霞

すさまじき砲聲やみて日の御旗摩天の嶺に高くひらめく　●　麹町　熱田逸枝

旅順港如何に固めは堅くとも正しき道は防ぎ兼ねけり　●　宇都宮　千代子

しらざりし昔をこゝにとゝへば苔むす松に虫の音さびし　●　和歌山　ゆり子

こほろぎの月に聲をばはり上げて昔をかたる那須の篠原　●　神戸　清水霞

有りし世を偲ひてなくか關ヶ原の夕日かくれに蟲の聲する　●　東京　ゆかり子

戰をもしたりけむ鐵山に昔をしのふ虫の音あはれ

三重　佐々木らく子

母は去り父ゆきまして古郷はすゝきのみこそあるじ顔なり　●　麹町　本多貞子

胸なへて戰なせし城あとの石垣さむく轡虫なく　●　新潟　内藤ゆき子

花すゝきうつむき咲けるさゝ川に靈の月淡くうきてゆらぐよ　●　新潟　内藤花子

砲の音も煙もたえてハルビンの城頭高く御旗ひらめく　●　保子

上野山おつる木の葉に埋れてなく音あはれのむしかこゑ〴〵　●　加賀　瀬山靜子

柳か瀬と農夫の聲に虫の音も心からにやいとゞ身にしむ　●　前橋　宮内りき子

虫の音もいとゞ哀れにきこゆなりかまくら山の秋の夜の月　●　麹町　あき

うらみをばのみて倒れしますらをが朽ちし屍に虫なきしきる　●　大阪　田中常子

弓張の月はいこまの嶺におちてみことを弔ふ虫の聲々　●　山形　木岡撫子

ほに出でゝ隣まれぐらん我宿のすゝきにしるく秋そ來にけり　●　愛媛　高橋貞子

くつわ虫なく聲すごく今もなほふるき昔をしのふ城あと　●　大阪　絹子

鐵嶺山君のみゆきのあとゝへは奪へかほなる虫のこゑ〴〵　●　大阪　田中常子

しのびけむおもひも今はほに出でゝ招く尾花の袖のつゆけし

和歌山　水本歌子

●心ある人に見せはや外國のハルビン城の秋の夜の月

秋田　佐藤一子

●たつね來て誰かあはれときかさらん湯川原のこほろぎの聲

神田　佐藤千代能子

●城あとのすゝきに秋の風みねてさすや夕日のかけなゝめなり

秋田　佐藤一子

●あれはてし野寺か庭のませかきに雖まれくらんすゝき一村

尾張　服部とめ子

●手に撫でゝ昔のありし跡問へど石物言はず只虫の鳴く

京都　中井照子

●鵙なく野中の松に日は落ちて一村すゝき月招くなり

停春樓先生へ

天の神おまドります道ならむ空より落つるナイヤガラの瀧」を女學世界四卷第十號にて天位に　お撰み被遊候へとも詠みたる人も撰まれたる先生も失體ながらナイヤガラの實景を御存しなき事と　奉存候こゝの瀧のみはアメリカンサイドよりもカナデイヤンサイドよりも　見下ろすものに候故脚下に霧湧き虹現はるゝ奇觀有之　決してあま下るとか空より落つるとか形示すべきものに無之寧ろ地の神が奈落へ　下る道とでも致し候方よろしかるべくと存候尤も好奇心に驅られて危險を冒し　小蒸汽船などにて「見上げる爲めに」見物するものも有之候へとも　之れは極めて稀に御座候心付き候儘一言妄評いたし候

横濱　嘯血子

和歌兼題

秋夜

名所月

旅順口

（〆切九月十五日）

（披露十月五日）

◎賞品天、地、人、の外秀逸二十種に呈す

▲五行文

（人事を描寫したるもの字數二十字詰五行以内に限る）

▲寫生文

（〆切九月十五日）

懸賞文規程

投稿用紙は半紙又は罫紙二つ折（和歌は端書に限る）の事▲題目の下には必ず住所姓名を明記すべし▲文字は必ず楷書又は行書にして叮嚀鮮明なるを要す一種にして數葉に亘るものは必ず右方の上部一ヶ所を紙撚にて綴るべし▲原稿は博文館編輯局女學世界とせらるべし▲投寄原稿は一切返却せず

夏のいろ〳〵

姬路 田中しう子

荷車引

老樹陰々として、森暗き山の麓より、前高き峠のあるを、米あまた積みし、荷車を引きのぼる一人の男、頭には、向ふはちまき勇ましく、流れくるあせをも拭はで、あへぎ〳〵やうやく頂につきぬ、車を片方になきつ、若松の根にこし打ちかけて、「嗚呼！」と一聲さけびて、頭まく手拭して流るゝあせを拭ひつ、又もや其中程を右手に持ちかへ、くる〳〵とまわして淺黑き身をあをぎつゝ、ちよろ〳〵と流れ行く谷川を見をろして、微笑む樣いとあわれなり。折から若木にとまれる蟬の二つ三つ、いと悲しげに、なくも亦なくあわれなり。

花賣女

ふゑとしもなく、いと細やかにふる雨にしつとりと打ちぬれたる花賣女の、露をおびる、赤、黃、むらさき、などの花あまた頭にのせつ、いと濕りたる聲にて、花よとばかりに、あるくすがたのあはれさよ。

田舍の夕立

にわかに大空の墨をながせるが如くかき曇り、雷の音おどろ〳〵しう鳴りはためき、さつと吹く風につれてよ、大つぶの雨の、ほつり〳〵とばかりに、ふりそゝぎて、盆をくつがへすかの如く、折から旅人の、雨をさけむとて、走り來り、とある家の、のき下によりつ、ふる雨を眺めつゝ、衣にかゝれる雨を拂ふ樣をもしろし、程なく、雨をさまりて、東の空には早や虹のあらわれ、庭の樹々露を、おびたるふうぜい、いと床し。

寄宿舍の朝貌

越後 久我睦子

五月雨の、いといぶせきものから、寄宿舍の垣根に、朝顏を移して、朝な〳〵の心やりにす、さるを、ふと舍監の君の、訪ひ給ひて、板垣の朽つべければとて取り除かせたる、いと〳〵口惜しくかつ〳〵咲き出でし朝顏の、こよなく、戀しうてなむ。

歸省の夕

岐阜 木村雪子

今朝歸省しぬ。母は自ら手を下して食事を調へぬ。浴をおへ、三年ぶりにて一家團欒の樂みを味ひたり。父は酒を過して横り、弟妹も眠れぬ。母と只二人、故鄕を語り都を話して、夕顏棚に月更くるをも知らざりけりな。

何者ぞ

山口 白石しつ子

海暮れ野くれ山くれて書を机上に繙かんとすれば、あまたゝび妾の頂を刺す動物あり、憤怒のあまり「喃何者ぞ妾の生血を吸ひ取るものは」と腕力に訴へたんだ一打パッチ死骸眼前に落ち來ぬ嗚夏の蟲五月蠅かな

御國の爲

京都 三の宮つゆ

大路に兵の呼聲高く、弟しば〳〵銃をと強請む、蚊遣りの煙むし暑くして、母は弟の願にむせび玉へり、朝夕の心づかひは兄が遠征の身に馳ぶべきにあられど、これも御國の御爲と思へば、さすがに慰むる節無きにしもあらず。

秀夫坊！

讃岐 松本霞子

「ナゝ父さん、戰場に居なさる」と、突然、母君の膝を辷りて、壁上の

父君の亡き御肖像に御辭儀したのは今歳三ツの秀夫坊！「父さん強いない坊も大きうなりて、そんなに、勳章つけるの」と、云つて、更に「おみや海山頂戴！」と滿面喜色、暫くして、「姉さん寫眞でない父さん何日歸るの」噫父君は戰死なすつたに………。

神秘

神戸　川上久

詩集を手にし新綠の下を縫て行くと小廣い所に出た、滿地皆綠陸フト見ると未だ幼い子が名もない花にキッスしながら安々と新墓の傍に眠てゐる絕好の詩境の現實に提供された此感興の瞬間！　恍として神機相通ずるを覺えた。

柳かげ

神戸　山下とめ

我庭の一本柳の影に水清き山の井あり。東雲の空、ほのぐ明初る頃、天も清らかに水も清らかに、山も風も、いと清らかに神聖なる時、こゝに來て氷の如き水に顏洗ひ口嗽ぎて、ふと仰ぎ見る時、ふわりと顏にかゝるは、露諸共の靑柳の糸二筋三筋。

秋の夕暮

伊勢　稻光敏子

來ん秋は共にながめばやとて前栽にうつしうゑし萩の初花、早ほころびそめぬれど中々になげきの種子にぞ有ける。今は思ひにゐだゐで袖の露諸共君がおくつきに手向けんとて　宿をたち出ながむればいづこも同じ秋の夕暮

離別の曲

廣島　永島淑子

明日よりぞ歸省の途につき給ふなる一人の友に　最後の訣別告げんとて我は今夕風清き學庭の芝生を共に逍ひつ。今し擁る紫雲の行へ打守りて君語らず我又云はず折柄校舍よりもれくるピヤノの音、響強く余韻長く離別の曲を

淸ちやん

備後　立神政子

淸ちやん、わが最愛の妹、お歳が六つで色の白い福くりとした愛らしい圓顏、鈴のやうな涼しい眼元、ねもいはれぬ美しいあどけない聲で今もお庭のすゞしい木影に唱歌を歌つて居る、あゝこのエンゼルの如き子をして永く世の穢れた空氣から避けさせたいものである

姫百合

横濱　はる子

厨やの業終へたればと團扇片手に端居す　日清く雨はれし庭の草葉は一つ〳〵に玉を飾りぬ綠深き　中に紅一點何ぞと見れば去年の夏我寫生にとて妹の植ゑし姫百合なりけり　折柄吹き來る涼風にかゞやくはそれよ妹が愛の光なりき

茄子畑

下野　石井てい

今し夕立後の活々とした枝葉の陰濃紫の露を含だ茄子の色の美しう唱ひながら筒袖の腕に籠の手を通して立た　時草を山の様に積だ馬が參宵口にした村童に追はれつゝいつた靜に暮るゝ孤村の鐘

彙報

▲軍人の幼兒救護

軍人遺族救護義會にては應召軍人の幼兒養育方を各地棄兒院へ依託せんと企畫し夫々照會したるに孰も快諾せるを以て愈左記の各項に據り救護することとしたれば出征家族より速に申出であるやう府縣知事及市長へ依賴せりと云ふ

軍人幼兒救護內規

第一　本會に於て軍人の幼兒を救護するには左の條項に該當するものなるを要す

但棄兒院に於て身體其他の關係に就き拒絕せざるものに限る

一、養育者召集を受け其家赤貧にして救養の實力及養育すべき家族なく若くは之れに代りて救養をなすべき親族なきもの

二、前項親族あるも赤貧救養の實力なきもの

三、年齡滿十三才以下なるもの

第二　本會に於て救護する軍人の幼兒は其救養を棄兒院に委託するものとす

第三　應召軍人歸宅若くは他の親族より代りて養育をなすことを申出たるときは本會は同時に救護の任務を解くものとす

但應召軍人歸宅すと雖傷痍を受け若くは疾病に罹り子女の養育を爲すこと能はざるものは此限りにあらず

第四　本會負擔の養育費は幼兒滿十三年に達りたるときは之れを停止し爾後の養育は一切棄兒院に委託するものとす

第五　此內規に於て救護する幼兒は市町村費に於て救助を受くるものに非るを要す

第六　幼兒、後、孤兒となり國庫及町村の救助を受くるに至りたるときは本會は同時に其救護を解くものとす

▲看護婦倶樂部の設立

日本赤十字社にては同社及陸軍病院看護婦組長上陸の際に於ける勞苦を慰せんが爲め宇品に救護員倶樂部の設備中なりしが去月十五日より看護婦倶樂部の開場をなしたりと

▲露國の戰爭畫

開戰以來彩色戰爭畫は莫斯科府并に中央露の地方に於ける露國檢閲所の閲覽を經て續々出版され盛んに賣出され居れるが其戰畫はいづれを見るも露軍が日軍に對して勝たざるなく仁川港海戰に於ても特に沈沒せんとしつゝあるやう畫かれしは露艦にあらずして日本艦なり又函館港の市街は露國艦隊の砲擊の爲に破壞に打毀たれ又日本步兵は大連灣に於て殲滅せられたる如く畫き鴨綠江の戰爭の繪畫には露軍が河を越ゆて日軍を驅逐せる如く畫き且つ僧侶が露軍の先鋒に立ち北上部に武運の天惠を祈りつゝある耶蘇の肖像を描きあり一として露軍の敗けたる所は畫かれずといふ

▲マクレーン孃の病氣

今年我海軍下士の爲めに盡力せし英人マクレーン孃は近頃病氣危篤に陷り目下英國有志者の慈善的看護を受けポーツマウスに於て治療中なる趣昨英國我公使館鏑木海軍大佐より電報ありたるに付各鎮守府の下士卒集會所は太く同情を表し八月七日醵集せる金五十磅をば見舞金として發送し又本支社に於ては社長山本男爵の名を以て同樣五十磅を贈りたりと

▲米國人と日本下駄

近來外人の本邦下駄に趣味を有するもの多く殊に大に貴婦人間に持て囃されつゝあるよしなるが開戰以來米人の之に對する趣味又增進し都下の下駄商にして直接注文を受くるもの少なからずと云ふこは彼等の穿つが爲めに非らずして室

内設飾用として用ふるが爲めなりと

▲汽車乗客の注意

鐵道線路に沿ひたる村落の兒童等が旅客の列車中より投棄する辨當箱其他を拾ひ取らんとして線路内に立入り反對列車の同時に通過する場合の如き危險少からざるのみならず往々可憐の兒童をして無慚の轢死を遂げしめたる實例もあり保線係員に於ても常に之が警戒を怠らずと雖も到底制止し得べからざるを以て鐵道作業局に於ては右等の事故最も多き大船及び國府津停車場前後の線路に沿ひたる町村役場及び小學校に就き其父兄並に兒童に訓諭せんことを依賴せしも其効果未だ十分に現はれず保安上大に憂慮せりとのことなれば旅客は殊に注意して是等危險を醸すべき危險物投棄の弊を改めんことを希望すと云ふ

▲秋の草色

殘暑尚未だ去らざれども朝夕の凉味日を逐ふて加はるに從ひ郊外の花また漸く綻び人を迎ふるが如き色あり○秋草を以て聞ゆるは百花園なり露の乾ぬ間に杖を曳けば朝顔、萩、女郎花、秋海棠など一入可憐なる風情あり天竺牡丹、雁來紅など人の丈にも餘りて高く最華、日廻草の類また頗る大なれば野分の前に見んこそ然るべけれ○之より黒鉄、四つ木吉野園には四季咲の牡若を始めカンナ百合など花盛にして生業れる蹊欄の下に憩ふ時は暑熱に悩まさるゝことあらざる由○若し夫れ汽車の便を借りて王子に到り日中の炎熱を瀑布に洗ふて之より五六町なる瀧野川紅葉園に到れば百種に近き天竺牡丹は先づ客を眺聴せしむべく金迎花、コスモス、カンナなど在來のものなれども見渡す限り花の遊を敷詰めたれば僅に目を慰むるに足るべし

▲野津大將の家庭

本誌口繪寫眞版に掲載せる同大將の家族は

女婿林　民雄　四女野津　宮子
三男野津鎭之助　三女野津　輝子
女婿上原　勇作　繼母野津　國子孫上原七之助
伯爵野津　道貫　夫人野津登女子孫上原勇次郎
四男野津　鎭彦　長女上野夫人槙子孫上原勇三郎
孫　上原　愛子
二男野津　鎭雄　二女林夫人榮子孫　林　清子

伯は陸軍大將にして某軍の司令官たり女婿上原氏陸軍少將として其幕僚に參畫す、鎭雄氏は騎兵中尉たり、鎭之助は砲兵少尉たり、亦た皆軍に從ふ、野津家の一門、其軍國に盡すや厚しと謂ふべし、林民雄氏は日本郵船會社上海支店長たり、亦た軍國の航運に貢獻すると鮮からず

▲仁川赤十字社篤志看護婦

本誌口繪第六頁の中央に竹根の(ステッキ)を持ちたる洋人は碇泊中の英國軍艦(フロアレウス號)軍醫長セー、ヴアードン氏其の隣席に赤十字の服章あるは近藤兵站病院長同氏の隣席に在る婦人は本會會長加藤仁川領事夫人、其の隣席は漢城病院長和田軍醫少監、其隣席は公立仁川病院長醫學士松村三省氏、更に近藤兵站病院長の左方三人目の婦人前記松村醫學士夫人にして本會の副會頭なり

紹介

▲少年日露戰史　九連城の巻　定價十二錢
▲世界御伽噺　二人半助　定價八錢
▲明治御伽話　お伽立志編　定價十二錢
以上博文館發行巖谷小波著
▲英和對譯　戰爭文學　定價三十錢
以上彼得書店池田錦水編



乙女寫眞帖

露英女史

何れも國に生ひたれど、取り集むれば美しきばかりはあらず。と端にしるして、友が手製の寫眞帖に收められたる幾輪の撫子、實にや、濃き紅、薄紅、白きも交りてとり〲に面白し。

小枝子　六歳

禿切り房々と額を埋めて、友禪の被布の丈長う、厚衽見ゆるを少さき足の重げにて、片手は卓子の上に、片手は袖の後方に、癖と見えて首をいさゝか傾げたれど、面細く、鼻筋通りて、涼しく賢しき眼色、愛らしきよりは美しき面立にふさはしからず、愛度無きを作るとも見えて、幼き人の取り分け興醒めて覺ゆ。

同じ年頃の人は厭ひながら、遊びに見ゆれば嬉しげにて、人形よ、菓子よ、と主じ振りてのおもてなし、年長けたる人にはよく馴染みて、さして好まぬ人にも逢へば取り縋りて甘ゆるに、さすが初めは可愛しくもあれど、野に出でゝ探り求めし花菫、近よるまゝに花片の破れ居しやうにも思はれて、漸次に口惜しき心地のさるゝ、まして、贈られたる挿花、玩弄物など、其の

人に由りては心に叶はずとも久しく保ち置きて、再び其の人見えられし時、取り出して得意氣なる風情の、誰が斯くまでに敎へて、と疎しさ限りもなし。

母様はいかなる人にや、賤しく生ひたれど、容姿麗はしく、交際多き主人を助けて天晴れの奥様とは聞きにしが、

「母様は恐いのよ、母様がお怒りだとちつともお返事をして下さらないの、然うしてちつとも構つて下さらないの、父様だつて恐がつていらつしやるんですもの、その時はね、父様が母様の御機嫌をお取りだつて衆人が云ふのよ、だから妾も取るのよ、然うしなきや何時までも默つていらつしやるんだもの、お前も氣をお注け、父様なんか何うでも好いの」

口輕う、新參の婢女に諭せしこの言葉を、聞かば何とや思はん、たゞ其の發明を誇りにのみするや。と友は微笑む、さぞや交際家になりぬべし、この後の人、然なくては、と我れも微笑みて。

幸枝　八歳

前髪下げて、太き稚兒輪に何の飾りもなく、頬豐かに、濃き眉長う、一重瞼の眼元冴々として、小指の先きにも隱るゝやうなる唇結ぶともなく輕う、總模様の袷、長き袖の、わざとらしからず襦袢の振り前に顯れで、何の色か穿きたる袴の裾短かく、靴の先きに芝生を踏みて、稍々上を仰ぎつゝ、袖垣の傍に薔薇の花を持ちて立つ。

姿の通り素振りも可愛ゆけれど、少し羞しがりにて、畫も字も兄様のを見習ひて能く書くを、賞め囃されながら見らるゝを厭ひて、手文庫の奥深く、一人して秘め置くが常なる程なれば中々人にも馴れず、誰が躾にや、優しげなる會釋ばかりして、稀ならでは物も云はず、幼き人にしては餘りに内氣過ぎて、やゝ飽かぬ思ひすれど、床しさは母様までも忍ばせて、氣品の高さ、思はず拙き人をして、言葉改めさする事もあり。

友も欲しがらざりしが、學校に通ひ初めて、唯一人、

これも温和しう病身らしき友と睦じうなりてよりは、日曜毎に呼び迎えて、一と日を遊び暮すまで、その友にのみ親しみつ、何時なりしか夏の初め、半途に病氣起りてその友の歸りし事ありし時、後に殘りて課業も身に染まで泣きつづけつゝ、近き儘に歸り途、其の友の家へ一人にて迂路りゆきしが、門を閉る術もなく、訪ふ術もなく、空しく外に立ち盡して打泣き居しより、人に迷兒と誤たれて大騷ぎせし事ありし由、生ひゆく先きの、匂ひぞ籠れる。と友は懷變しげなり。實にも美しう咲きこそ出でたれ、情けの露を仇になとばしぞ。



みつ枝

九歲

廻りを下て、唐人髷に大きなる西洋花の簪花、頸は何やら小さき女時計生意氣らしう、指環まで輝かして、矢筈絣に袴長う、兩の手に修業證書を大切氣に捧げつゝ、植木鉢置かれたる卓子に添ふて、

少し消したる櫻の見ゆ。此寫眞は日本髮なれど、大方は下げ髮、日毎に更ゆるリボンを友人へ自慢の種にして、誰が家にありて云ひ馴るゝにや。

「嫁が絹でなくつちや、着にくいわね」

と老せたる云ひ振り憎らし、身形の賤しき友は譏り散らして近付けず、日曜毎の遊山の衣服を一々に吹聽して、三井が、玉寶堂が、と自慢なりしが、學校にありてお習字の折、墨含みたる友の筆をつい袂に拂ひて、繡入友の羽織に黑々と汚點つけたるを、顏色かへて驚きつゝ、友を怨みて、怒りて、打返し／＼眺めながら果ては泣き入りて、教への師をも持て餘させし由、あり餘りたる着物のうち、何のこれ一枚が、と年上の友が思はず、獨言らせしに、さすが耳に入りしか、

「お家でどんなにか叱られる」

とは憐れならずや、まだ世に染まぬ心に、貧しうは育たねば、物を惜むとにはあらねど、惜む親より咎めらるゝ事の辛さに悲しきなるべし、衣裳の虫干の時、多くの友を集はせし我子に、小言も云はれざりし親なればこそ。と冷かに友の口調の輕し、實に白糸なれや、何時としもなくはや染めぞかゝれる。

や枝　八才

くるりと眼圓らに、眉近く長う下りて、一文字に緊めたる口許、靨深き頰の愛らしくや〻仰に被りたる麥藁帽子の下より、下げ髮いさゝか見えて、紺縮緬に秋草模様の袖長き單衣、扱きばかり悠然と後に結び下げて、穿きたるは二枚裏の雪駄、心付かぬ氣に小さき兩手を兩傍に下げつゝ、木の根の傍に立ちしが、風采寬濶にて女子めかず。

眞の母様は三才の時亡くなられて、今の母様は藝妓上り、繼しき中とは見えぬまで今の母様の可愛がりて、人形を手遊ぶやうに、あの姿、この裝ひと、おのが好みを化粧せ見ては可愛らしきを誇りにして、何處へ行くにも連れ立つ由、父様は官位高く、勤めも繁ければ大方は不在勝ちを、母様は敎無き人なり、朝夕の禮も

知らず、仕たき儘に打ち遣り置くより、小さき手を支へて父様を迎ふる事もなく、お食事最中歌も唱へど、物に拘泥なきは男の兒のやうにて、例の錢は母様が、其處等に出だし置きて紙入れを見付し時、取り出したる十圓紙幣一枚、下女に渡して、此れだけビスケツトを買ふて來よ。と命令しとて大笑ひなりき、こゝに寫りたる姿の、何か氣に入らぬ事ありて、父様、母様を叱れる時のやうなり、と友は笑ふ。可愛き人なり、まことの母に代りたる陰にして、よくぞ直ぐにも生ひにたる、猶幾年―雨に逢ひて屈みもせずば。風に逢ひて撓みもせず。

高枝　十才

受け口に愛敬ありて、小さきながら張りある眼許の、地藏眉も愛らしく、リボンに前髪のみを結びたる下げ髪、改良服の、靴下膝より見えて、片手に帽子を抱へたり、快活げなる振りに、聲も爽かと心地よく覺えて。

この樣なる面立して、意地惡しきことゝ轟くばかり、學校にありても、心弱き友と見れば、墨をすれよ、鉛筆を削れよ、と命じて若し聞かねば諂ふ友を味方にして、泣き詫るまでは苛責めぬくとか云ふ噂なれど、家にありても母樣を見習ひて、幼き身にありながら、御膳の立て方の惡きにまで腹立てゝ、婢女を罵り散すなり。母樣の昔は御殿女中、口に出して叱言は云はず、眼鏡越しにぢろりと睨まるゝが常にて、さらでも女らしきを好まるゝに、いかにしてかこの人の荒々しう、袖の綻び、袴の鍵裂き、と大方は日毎なるを、一度損じたる後は中々に繕ひてやらず、其儘に納め置きて日を隔てゝは幾度となく、取り出して無言に示すより、折角の後悔の念も薄れて、底意地惡く仕向けらるゝそれに堪へられる限りの、意地惡るさを我れも身に何時となく養ひつゝ、果てはさして意にもとめねば、稀には隨分手酷き折檻をさるゝ事もあり、さすがに叱らるゝは恐しきか母樣の前にありては手も足も出さず、三つ指流に辭儀をしながら、學校の成績に操行は乙。何時な

りしが、走り競べすとて、轉びて、膝を石に打ち付けし時、泣きもせず一人して始末して、譯を云はゞ叱らるゝは定、と其の日漱ぐお風呂にも入浴たれど屆さへ認めず、あくまで秘して、秘し果せし振舞の、女子にかゝる剛情は要もあるまじ。と友は面を顰めつ。花の粧ひは美しくとも、枝振りくねりては甲斐もあるまじ。

しづ枝　七才

ぱつちりと鈴を張りたる眼許、人懐かしげにて、笑みかけたる顔の、ふくよかに唯可愛らし、お河童の、髪は薄きやうなれど、頭付の恰好よく、裾模様に緋の無垢を重ねて、手絆をさげたる、眞向きなれば取り分け人形を据へたるやうなり。

兄様一人、姉様一人、弟一人、妹一人、の丁度間にて、一番の容貌好しなれど、父様は男の子、母様は上の姉様と末の赤兒をばかり可愛しがりて、この人には構はず、それを痛々しきまで柔順にて、兄様、姉様の命令に背きしこともなく、弟には常に責められ通し、刀に脊中叩かれて泣き出しても、お前が惡いの一と言に打消さるゝより、何れ程の目に逢ひても告げ口もせねば、我れからは惡戯一つせしことなく、夜分もこの人は小さき床にたゞ一人寢むなれども、姉様の、乳母の添寢を羨みもせで、一度與へられし手遊物は大切に、何時でもそれにて遊び居るさまの可哀想のやうなり。

兄姉の中の何時も除け者なれど、此方より思ふ心は深く、弟が泣けば袂に涙を拭やりて小さき身にさまぐと打ち宥め、姉様が病氣すれば、唯何としもなく臥床の傍に附き切りて、取り分け兄様は大好き、他人にても一度脊負はれしことありし人は懐しがりて、母様に甘ゆるやうなる振りの、手を取りて抱かすにはあられまじきやうなり、と友は可愛しげに打ち笑む。風情こそあれ、そと我袖に包みもせば、身も任すやとしはらしくて。

まさ枝　九才

周圍を下げて、前髮大きく取りたる後の、髷は何か

分らず、模様華美なる友禪縮緬の袷に、立矢の字の帯、いさゝか細き肩の上より見せて、腰上げながら、凛然としたる裾の遶り、身を斜に石橋の上に立ちつゝ、伏目なれば眼尻上りて睫毛ばかり長う、口許締りたる細き面の、手にせる花を眺めたる風情も高慢氣なり。

まだ乳吸ひたる歯の、其儘殘れる程の年輩にありながら、我が着るものは一人して見立てゝ、若しリボンなど知らぬ間に、氣に入らぬ色を母様の求めて歸られなどする時は、揉み苦茶にして投げつくるか、鋏にて切り刻みてしまふを、よき惡戯の種なりしとて、笑ふて済まさるゝは、甘えて泣くをも病氣かと、はら〱して育てしなるべし、髪の結ひやうが心に染まねば其日は學校も休課、好きな踊りの稽古にも行かで、一日癇癪の起しづめ、御寵愛の狆が打たれ、寐る間も離さゞりし人形が、ふと破壊されて了ふはこのやうな時なり、大方の人を嫌ひて、誰に向ひても召使の者を見るやうなるを、彼方には氣の毒らしき顔もせず、却りて我子を庇ふ親なる人をば、譏りて笑はぬ人もなし。おのが乘れる電車の、混雜合ひし時、隣りの人、前に立つ人を睨めつけて、地團太踏む人の幼き程はかくもあるや。と友は聲高う笑ふ。形見好げに咲くとも、おのれ一人の世ぞと面擡げては、やさしう立ち添ふ人もあらぬなるべし。

もと枝　九才

下げ髮にして、袖口括りたるリボン長う、袴に靴穿き、淡けれど磨きたるやうなる眉の、少し俯向きて彼方を見たる眼許に威ありて、何か含めるやうなる下豐れの口付愛らしう、蝙蝠傘片手に支きて、片手に包みを抱へたる風姿の重々しげなる處あり。

成績優等にて、尋常三年の級長、他の生徒がたゞ恐れて敬への師よりは級長の爲に、お行儀も好くするとはおそろしきやうなり、規律正しきこと、父様の性を受けしと見えて、我が部屋の机の周圍など取り散らし置きたる事なく、人手も多く、誰れ敎へぬに、靴を磨く

も、袴の出し入れも自分の手にして、少し曇れば婢女が迎ひの勞を思ひやり、雨傘を携へて學校に出でゆくと云ふ風。

植木や草花が何より好きにて、何時ぞや西洋菫の美しき鉢を母樣より與へられし時、朝夕に水をやりて大喜びなりしに、ふと風邪引きて熱はげしく、其儘打臥して三日目に、心地よくなりしまゝ樂しみながら起き出で、見れば、母樣も忘れ、下女も忙しさに取り紛れしか、二日縁側に打ちやり置きしより、可惜美しかりし幾輪の菫、皆萎み果てゝ葉の大きう殘れるばかり、思はぬ花の姿にさすが悲しく、心なき人を怨みもせしが、驚き惑ひて頻に詫び入る下女を見て、可哀想になりし。とてたゞ泣きつゝ、又花のありし時病氣などしたらば、忘れずに水をやるやう幾度も頼みおきて寐まん。と云ひし切り、菫の事は思ひ絶えしやうに病氣の間再びその事は云はざりし、とてこれは母樣も御自慢なり。天晴れの寛やかなる心ばえこそ持ちたれ、生ひゆきていかなる榮ある人とやなるべき。と友は寫眞の面を見直して云ふ。これこそは花の王、我が前には蝶も狂はせ、默して蜂も舞はますべし、風を厭ひて立寄らば、身に掩ひもして庇ひもして。

知らぬ國のは異なしとて、探り出し他はたゞ裝ひを眺めやりしのみ。

（完）

軍事小說

一美人

大塚楠緒子

『それは君、我々軍人社會にも隨分切ない情話がないでも無い、』

と、斯う快活に語り出したは、卓を圍んだ一群の中の若い海軍士官で、其美しい容貌に絶えず微笑を浮べながら鬚を捻つて相手の顏を見廻はしたが、軈て巧みなる辯舌に、調子面白く物語を始めるのであつた、聽手の一人は素早くも盃を捧げて、なみ〳〵と芳香の佳いウイスキーを注いですゝめた、

彼れは、ぐツと一口、舌皷打つて、

「まあ聞き給へ、ちようど我艦隊が戰鬪準備を整へて既に第一戰に於て少なからず敵を威嚇した其時から一週間めに當る或夕方である、突然嚴そかなる命令は最も嚴そかに艦長から傳へられたのであつた、言ふまでもない、それは敵の意表に出づる作戰計畫で重大なる任務を果たさうとするのであつて、若し其計畫にして思ふが儘に仕遂げ得たならば、敵の海軍力は全滅といつても善いのであるといふ、命令の解せらるゝや我企圖の如何に大膽なるかに思ひ及んで、流石に艦員は唾を呑んだ、さて功名に胸を躍らしたので艦内は俄にどよめき渡つて何となく穩かでない、將校室の談話も常ならず意氣が昂つて居るやう、水兵等は、むやみに力む者、嫌に沈默を守るもの、腕を振りまはす者、叫ぶ者、中には慌て丶故鄕への書信を認むる者もあつた、命令は一の重大なる任務を果たさんが爲めに決死隊を編成するといふのであつて、人數はもとより多きを要さぬ、男士中の男士、死を期した者の中の尤も決死の覺悟の固い者を撰拔するといふので、希望者は各自所屬の上官へ秘密に決心を明かしに來よといふのであつた、

勿論日本の軍籍に身を措く者の待ち設けて居た事だ、爭うて死地に入らむと爲る者ばかりだ、忠君、愛國、勇武、功名などの念が壁に燃え立つて、我れは身体が粉するを覺え、矢も楯も溜らぬ樣に一刻も早く思ふさま勇ましく戰ひたいと思つた、それは君、僕だつて平和太平の春、花見の宴でも張つて居る時に、不意と死神の姿でも思ひ出したとして見たら、それは大かた色を靑くして慄へたらう、戰時はその限に非ずさ、我等が、幾千萬圓をも値する甲鐵艦をも敵の彈丸の的に供し犧牲にして恐れず臆せず敵地へ乘り込むと同じく、國家は我等軍人を彈丸の的にして國の勢力を擴らうと爲て居るのだらうじやないか、武裝した軍艦に据ゑ付けられて居る砲、備へ付けられて在る彈藥は皆敵の血に渴して居るのだ、死に執着して居るのだ、軍醫が用意して居る繃帶や擔架は、大かた又味方の負傷者や死骸に戀々として寸時も早く御役に立ちたいと待ち兼ねて居るのだらうじやないか、それで君、軍人が死を怖れたら、全然で矛盾じや、頰に微醺の紅を潮した士官は、卓上の盃を取つて又ひと呑み、息を繼いで愈面白く語り續けた、

「我れは一も二もなく決心の臍を固むると共に心地爽かに氣力は日頃に十倍して非常に愉快を覺え、晩餐後

靜かに上甲板に出たのであつた、

物に動ぜぬ將校等は、今は互に重き任務の何たるをも胸深く秘めて、來るべき運命の如何なるかをも更に追究せず、將校室に集まつて元氣よく煙草の吹かし合ひでもやつて居るのであらう、例の彼の某大尉が巴理の失敗談でも出て大勢に冷笑かされて居る時分だ、けれども話好きの我れは何故其時好んで獨離れて居たかといふ事は自分にも解し兼ねる、

靜かな夕暮であつた、

舷に饑へる浪も高くない、恰も頓て戰かはん我艦の行動の秘密を守つてゞも居るかのやう、實に靜かな夕であつた、さはれ此の靜けさ、此の沈默は來るべき大活劇の暗示であるので、遠洋航海に出た夕甲板から眺むる時の比では無い、われは思はす腕を撫つて明日にも敵彈に中つて寸斷に我身か千切れ飛ばん海上の光景を思ひ浮べた、艦の四方は浪の波動が何處までも何處迄も續いて、其先は霧がこめて何をも認め得ぬ、大空には薄墨色の雲がちぎれちぎれに……あ、鳥が飛んだ、もう飛んで往つてしまつた、

と、暫時其方を何氣なく見詰めて居たのであつたが、怪しく胸が轟ろき始めて、嗚呼故鄕！

その期に及んでと笑つて呉れ給ふな、軍人だとて人間だ、情も有れば戀もある、いはずに煩悶するよりも寧ろ我れは男らしく白狀に及ぶ、況して海軍士官は國の粹だ、外交の華だ、航海の途上各國の港に上陸する時は黄色人種の存外に歡待されること、恐らく君等の想像以外だらう、碧眼の美人を擁して肩章に忘られぬ優しい香をとめて夜を徹して踊り明かした事さへある、笑ふて呉れるな我れには新婚の妻がある、それは美人だ、愛妻艶子、不圖垣間見た彼れが艶麗の容姿には、彼女が身分の高下敎育の有無、其母親はどの樣な人間であるといふ事など研究する隙さへもどかしく我れは百方苦心の結果、圖らず我が莫逆の親友と競爭の形勢となつたまでも猶倦まで怯まずして終に我手に入れた戀女房であるもの、同時に失望せるわが友の鬱悶を慰むる暇もなきまでに、我れは彼女に打ち込んだので、三月が程の同棲を倦かず樂しみ興じたのであつたが、勇士一朝志を決しては又何に躊躇せんやで潔よく出征の途に上つてからは今が今まで一度も彼女の事は思ひ出さずに居た、否、強ひて自分を僞はつて居たのかも知れないが、

爾來友とは事の勢已むを得ず疎々しくなつて居たの

で、友は嫉妬に悶えて居るのであらう〳〵、我れは利己の戀を貫かん一心から親友を輕んじたのは惡いに違ひないが、是れも因緣と奇麗に斷念めて吳れてもよさそうなものと却て友を怨んで居たのであつた、けれども同じ艦に乘り組んでからは、同じ職務に服し同じ運命に身を委ねて居る二人は、今は國家の外には他事に怨恨を挿ふる場合ではないと、一身の些事は捨てるべく、何うぞして再び舊交を溫ため度と心秘かにあせつて居つたのだが、妙に我と友とは行き違つて未だその事を語り合ふ機を得なかつた、

友と隔てを作つて迄も一圖に戀した愛妻、嗚呼、艶子！何うして居るだらう、

再び言はう、彼女は實に美人だ、一目見た者は彼女を美しいといはぬ者は無からう、のみならず性質も善い或る人は誘惑され易い、といふかも知れぬが、我れは此點が却て可愛いと思ふので、飽く迄も優しい飽く迄も氣の弱い可憐な女であるのだ、然も我が命令を能く守つて、別れの際にもたゞ切りにいそ〳〵と我爲めの準備を整へて吳れたのであつた、

門まで我れを送り出て、我が心殘さず二足三足行き過ぎた後から、

所天、そんなら御機嫌よう、と優しい聲が慄しく響いたのであつたが、われは無理にも振り返らずに來てしまつたが、あとで泣き倒れたのではなかつたらうか、軍人の妻でも夫婦の情愛は情愛であるものを、餘り思ひ切りのよすぎる事をしてしまつた、最少し別れを惜しんで遣ればよかつた、

其後とても手紙は只一度、死ぬものと斷念めよ、名譽の戰死を遂げたら喜んで吳れとばかり、

嗚呼、今頃はどんなにか心細がつて居るだらう、此の世の中に賴むは所天ばつかりと、始終口癖の樣に言つて居つたのだもの、已れが戰死したと聽いたならば……

……情緖亂れて麻の如く、我れを忘れて空想に耽つて居ると、突然、後から我肩を敲く者がある、驚いた！

女々しくも考へて居つた一私事を看破されたのではあるまいかと、俄かに甲冑を裝ふた樣に姿勢を正して振り返へると、又驚いたのは、それは戀の競爭者即ち其友であつたのだ、何をいふので有らうと氣味惡く思つて居ると、彼は突如わが腕を取つて、ぐつと我が顏を凝視て居つたが、熱心を籠めて唇を發はした、

「君は決死隊へ加はる積だらう、」

『うむ、否、

と、われは曖昧な返事をすると、
『隠すな、既に決心して居るのだらう、
といふ、
『いや、君に言ふ必要は無い、
と飽く迄も我れは言はない、友は熱心の度を加へて、
『怒るな、君とは昔からの親友ではないか、僕はもう女々しい私情は取り去つて居る、此際めざすは敵じやあ無いか、
もとより我れも左樣思つて居るのではあるが、俄かに打解けるも變なので、たゞ默つて居ると、彼れは猶言つた、
『君、決死隊には人數に制限がある、そう多數には及ばぬのだ、君の如き有爲の士は猶功を爭ふに機はいくらも有る、今度は思ひ止まり給へ、是非僕を遣つて呉れたまへ、


戀に負けた友は、軍功を以て勝たうと爲するかと、我れは思はず眉を動かして、
『そんな事は君の注意を受けるに及ばぬ僕には僕の勝手が有る、
『いや君、怒つては不可ぬ、
と制して、友は躊躇つたが強く我腕を引いた、にも係はらず聲を極めて低くして
『君は、艶さんの事を思はんか、
艶子、と友の口から呼ばれた妻の名は、我胸に異樣な打擊を

與へた、再び默つて居ると、「君は艶さんの事を思はんか、僕と競爭して物のみごとに勝ち誇り得た妻君ではないか、君は全然忘れて終つてゐるのか、怒つて呉れるな、女女しい樣だが僕は未だ君の寶に成つて仕舞つた艶子の事が忘られんのじや、君に對しての嫉妬は消えたが更に純潔に艶さんを僕は愛して居る君が今若し戦死して見給へ、艶さんは何うなる、僕が萬一生還して凱旋したとしたならば僕は一心に艶さんを愛して居るとしたならば……君、どうぞ、僕を死なして呉れ、



われは眼を閉ぢて、甲板に立ちすくんだので、「君は最愛の艶さんを僕に渡すのは惜しからうし、渡されるのも潔よくは無い、友は溜息を吐いた、『君、戀愛は何故に理性に打勝つて、斯うも力強く人を苦しめるのであらう、僕は生涯を煩悶に埋めてしまふ樣な氣がする、此樣な腐つた思を取り除ける事の出來ない男が生存して居るのは日本海軍の恥辱じや、僕は今度の戦爭には是非戦死してしまはふと思つて居る僕の樣な者が犠牲になつて死ぬのは國家の爲めにちつとも惜しくはない、そうかと云つて、君と僕と二人一時に死んで見給へ、

薄命に生れて居る艶さんは、暫時の幸福も夢と消えて君の手から離れたなら、無情な世の中に何樣な境遇に陷るかも知れやしない、斯う迄言つたら君も聽いて吳れてよささうなもの、今度の處は緊累のない僕に戰死を讓り給へ、君、死ぬばかりが功では無い、隨分生き延びて、一には國家に忠を盡くし、一には妻君を愛して遣りたまへ、

友は、言外に千萬無量の思を籠めていふのであつたが最後の一句は猶われに對する羨望の意味を含めて言ふものと外は取れない、が兎に角我れは言ひ知らぬ感に打たれて、我れ知らず友を抱いて泣いた、

「許して吳れ給へ、

寒暖計は俄かに低下るのであらう、夜色は尋常ならぬ寒氣を伴うて海上を包んだ、天候は漸く穩やかならぬ兆を呈して來た、

此處まで語り來つて、恰も上官は其當時を追懷するものゝ如く長い息を吐いた、聽手は急きたてゝ後を聽きたがる、

さていよ〳〵決死隊は、多數の希望者の中より勝れて勇氣ある者のみ撰り拔かれて、悲壯なる訣別の式が行はるゝや、勇ましく目的地をさして出發したので、

友と我が最期の握手の如何樣なもので有つたかといふ事は最早やいはぬが好い、

われは終に友に功名を讓つた、軍人の名譽を讓つた、腕のむづ痒ゆいを無理に忍んで惜しい技倆の見せ場を讓つた、さだめて友は奮闘するであらう、立派に戰死を遂げるであらう、と思ふと又妙に苦痛を感じ出した其實我れは罪惡を犯したのではあるまいか、態〻と友を死地に追ひ遣つたのではあるまいか、あゝ、何故自分が往かなかつたらう、良心に責めらるゝ位なら敵彈に中るがずつと好い、萬が一にも決死隊中の友が安全に歸着すればよいと思つたが、それは到底願はれぬ話、死ねば未だしも重傷を帶びて猶息ある友の態でも見たら何と爲ようと、其夜の暴風の荒かつたよりも、我れは我身を一層悶えに悶えしめて一晝夜を過した、

ところが愉快じやないか、實に戰神の加護があつたと言つても好いだらう、その翌日の、時刻は何時であつたらう、萬歲と云ふ聲が、艦內何處ともなく湧き起つたと思ふと、決死隊が無事に歸つて來るといふ、姿が見えるといふ、狂せる樣に我れは望遠鏡を翳すと、成る程！

ホッと息をついた、欣喜雀躍！
友は幾艘かの内の一ッの端艇に有つて、まさしく怒濤に逆つて游いで來るのだ、
我軍の計畫は十二分の成効とは行かなかつたが半以上は確に成効して大に敵を恐怖せしめた、然も味方の損害は殆ど無いといつても宜い位に少なかつた、
友は、死損なつたと依然こぼしたが、我れは、もう再びとは此樣な苦しい思はすまいと堅く心に誓つて、友が何と爭はふとも今後は必ず二人は運命を一つにしやうと、そして新らしい刎頸の契を結び直したのである、
と、話はそれぎりであらう、士官は口を噤んだ、聽手は不審んで、
「そうして、それ程君と友とを惱した美しい奥樣は、御留守中何の樣な心配をして居られたでせう、
士官は其問ひを待ち設けてゐたかの如く、
「ところが譯は無いさね、妻は僕の出征後、間もなく家を疊んで、今度は富有な實業家の許へ嫁に往つたそうです、勿論籍は未だ來てゐなかつたのだから隨分それもいゝです、初戀に手を燒いた我輩の大失敗、それと聽いた時、友と僕とは始めて奇麗さつぱりと胸がせい／＼した樣に思つたです、くら暗から太陽の前へ出たやう、盛に祝盃を擧げて、二人して我れと我が愚鈍さ加減を笑ひまくつたのです、しかし彼女は實に美人であつたですよ、其點だけは友と未だに噂するです
と、思ふ事なげに、呵々と笑つた、
上手な話し振りに思はず釣られて居た聽手も、こゝに至つて眉を顰せながら猶均しく笑つたのである。（完）

遺族の感泣

伏見宮殿下の御仁慈については夙に國民の感佩措く能はざる所なるが嘗て南山の激戰に於て戰死したる島根縣出身故松田歩兵大尉の未亡人よし子は遺孤長子道夫を引連れ遺骨を携へて下總佐倉より郷里石見へ歸る途中當時恰も御凱旋遊ばされたる第一師團長伏見宮殿下の御乘列車と未亡人の乘れる列車とは東海道興津驛に於て相對し停車中フト侍從武官の目に留まり未亡人に尋ねられしより遺骨携帶の旨を答へしに侍從武官より殿下の御聞に達し奉りしかば殿下には御半身を列車の窓より出させ給ひ大尉勝五郎の遺妻なるか大尉は南山に於て終日奮鬪し遂に敵彈に斃れたりとて御慰めあり又遺骨の到着の遲かりしを侍臣に問はせ給ひし後長子道夫に向ひ亡父に能く似て居る早く大きくなりて父よりもえらくなれよと最とも有難き仰せあり御手づから御菓子を賜はるなど御仁慈の深きに未亡人は勿論未亡人と同乘せる人々も殿下の御仁心を感じ奉ると共に未亡人に弔意を表し幼兒に品物を贈るなど競ふて慰め合へりといふ地下の勇士之を聞かば感泣して如何。

女學世界第拾參號 記事豫告

十月五日發行

▲戰後の女子教育（棚橋絢子、跡見花蹊、成瀨仁藏諸名家意見）
▲兒玉大將家庭　中村鈴子
▲淸岡子爵家庭　同上
▲秋元子爵家庭　菊地黍子
▲北極新婚旅行　山本遼北
▲賢母の手かゝみ　松村仙巖
▲源氏物語俗解（若紫の卷）　水原翠香
▲新聞記者としての婦人　原田法學士
▲妻たるの資格　紫玉女史
▲戰爭と日本婦人　大町桂月
▲婦人の理想世界　高瀨文淵
▲石炭の話（科學）　松翠女史
▲顏の話（科學）　糸左近
▲戰場物語　記者
▲秋草日記（小說）　佐藤露英

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）	金二十錢
四册（三ヶ月分）	前金七十五錢
八册（半ヶ年分）	前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）	前金二圓八十錢
内（定期數……十二册 增刊四回……三、六、九、十一月價格同一）	
郵税	一册 二錢

廣告料

二十四字詰	行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引 三十三圓
一等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引 二十七圓
二等	三十六錢	十一圓五十二錢	割引 二十二圓
三等	二十九錢	九圓二十八錢	割引 十八圓

▲等級の位置ノ切目等御照會次第御報可致候

注文規

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●郵據込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

不許複製

明治卅七年九月五日發行　第四卷第拾壹號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷鋹長
印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社 博進社工場

發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三十三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

女學教科

文學士武島羽衣先生著

霓裳歌話

（全一冊洋裝）

▲正價二十錢——郵稅六錢

武島文學士の文學に深く措辭に妙なるは既に江湖の知悉する所、本書は著者が過去數年間に於ける歌に關して發したる意見を收輯して一卷となしたる者、議論あり、敍事あり、隨筆あり、史傳あり、皆此れ山の峨々たるが如く、水の洋々たるが如く、現々誦すべきものならざるなし、世の歌學者は勿論、苟も文學に志す者の讀せざるべからざるの珍書なり。

宮澤春文先生著

作歌自在

（全一冊和裝）

▲正價二十五錢——郵稅六錢

本書は初めて歌をよみ習はんとする人の爲めに著はしたるものにして、和歌の起原、沿革、變遷より始めて、和歌の種類、和歌の心得、文法大意、假字遣、枕辭、和歌書方、屛風貼方、歌會、作例等に至る迄各部門を分ちて詳細に演述したり、されば眞に歌詠んとする者の爲には、こよなき良書といふべし。

中邨秋香先生著

新體詩歌自在

（全一冊洋裝）

▲正價壹圓——郵稅十二錢

著者の歌文に深きは既に江湖の熟知する所、而して新體詩に於て、特得の文藻と腹稿の意見とを有せらるゝは、その新學を以て御歌所に奉仕せらるゝを以ても知るべし。本書は我邦歌詞の起原沿革より、以て新體詩の發達に論及し、廣く類題を設けて、作例を示し、特に多くの新事物を題としたる如きは、他に其比を見ざる所、眞に書名に負かざる寶典といふべし。

大和田建樹先生著

新體詩學

（全一冊洋裝）

▲正價十五錢——郵稅四錢

本書は新体詩を學ぶもの丶必要かくべからざるの軌範なり、先づ開題より歷史種類句格段格詞の撰方意匠の工夫裝詞の種類文法の變格題の附方書式讀法等を懇切に說述して詳細餘蘊なし

東京 發兌元

參考書類

佐々木信綱先生著

增補 詠歌自在

（全一册洋裝）

▲正價壹圓——郵税拾二錢

此書は故佐々木弘綱翁の著にして息信綱先生に增補を請へるもの初學を導くと最も懇篤なり本書の特色といふべきは歌題を改良して當世に適せさるを省き新題を載せ且作例の歌を精選せるに在り而して本書の體裁は先づ題の作法を示し次きに句々順序に隨ひて歌詞を載せ次に作例を擧けたり

落合直文先生著

新撰歌典

（全壹册洋裝）

▲正價四十錢——郵税八錢

本書は落合先生が經營苦心の結果著はされたるものにして和歌沿革の如き、作法の如きは最も面白く類語は充分に精選せられ證歌は萬葉集をはじめ代々の撰集、家々の歌集、最近の歌人の歌に至るまで其英華なるは漏すところなし、歌を學ばむとするものこの書を措きてまた他に何かあらむ、

下田歌子女史著

詠歌の栞

（全一册和裝）

▲正價三十五錢——郵税八錢

本書は類題歌詞材料作例書式等に至る迄、其現今に行はるゝものゝ中最も必要なるへきを取り出て初學輩のたづきとなさんとす詠歌の栞として本書の右に出づるものなけん

有賀長伯先生著

和歌八重垣

（全一册和裝）

▲正價五十五錢——郵税八錢

（一）和歌稽古の事（二）歌讀むへき心持の事（三）歌案しよふの事（四）歌の去り嫌いの事（五）歌の詞の事（六）題の歌の事（七）詞書の歌の事（八）五句の事（九）歌のとまりの事（十）歌の文字の事（十一）てにをはの事（十二）切字并切どころ聞へぬ歌の事（十三）會席用意并法度行跡（十四）兼題當坐并に當坐の歌心つかひの事其他あらゆる作法作例を掲けたり

本町 博文館

（後付の三）

岡崎淵中先生著

各傳比較 點茶活法

（全四冊和裝帙入）

▲正價貳圓五十錢——小包二拾錢

此書は點茶各法手前置合器物床飾露地茶室等に分附するに各傳々統の系譜を掲げ首めは斯道の總論を擧げ茶道は遊戯に非ずして修身齊家の法たる事を辨じ各節毎に亦其事を細論して事理合一の旨を示し且つ諸流の傳を列記して其の異同と理義の在る所を知らしむ初學の人は此書によりて容易に獨習自得せられ師範の人は此書によりて教導の際講義の參考となること尠からざれば何流何派に論なく必一本を座右に備へ置かざるべからざるなり

江刺家協一先生著

茶の湯大全

（全一冊洋裝）

▲正價六十錢——郵稅八錢

斯書は茶道諸流に適するものなるも其點前は表千家流を以て編述せり斯書は茶道點前の手續並に器物の取扱等を述べ專ら後進者の爲め獨習の便に供せり編述の體裁も文飾を省き專ら平易を旨とし童蒙婦女子にも解得し易からしめ茶器に屬する者は（いろは）別とし索引の便に供せり

博文館編輯局編

茶の湯と生花

（全一冊洋裝）

▲正價二十五錢——郵稅六錢

此茶の湯と生花は斯道の大家筆を執り普く古今の書籍を參酌して考證自在事理明瞭一たび本書を讀むときは何人と雖も師を求めずして自ら奥義を解むることを得べしされば茶道の名家松浦伯の序に「茶の道は心のわざにして手の技にあらずこゝろ法を得れば自ら道にかなふ」と云ひし如くこれには手の技より心の技に入る迄の徑路を順序よく敍述し數百の繪画を挿みたれば手ほどき奥許し迄を獨習することを得べし生花の道また茶道と共に精密にして紳士淑女の好師範たるに愧ぢざる珍書なり

山田興松君著

實用造花術指南

（全一冊洋裝）

▲正價二十五錢——郵稅四錢

天然の工を奪ふの巧を以て、冬爛熳の櫻を見、夏馥郁の梅を詠むが、之を造花の技に待たざるべからず、珍を發し奇を悦ぶ今の世は此種の美術の年々に發達して交際場裡に一段の裝飾資料を増す、本書斯の技を精叙して盡せり篤志の婦女諸君一讀あれ

（後付の七）

本町 博文館

女學教科參考書

女學生訓

文學士大町桂月先生著（全一冊洋装）

▲正價二十五錢――郵税四錢

本書は大町桂月君が例の鋭利なる筆鋒を以て、當代女學生の失點と注意すべき事と及び有形無形に襲ひ來る誘惑等に就て懇切丁寧に教訓せられし絶好の金玉文字なり、女子諸君一讀再讀暫くも座右を放すべからず

女學生の栞

松原岩五郎先生著（全一冊和装）

▲正價三十五錢――郵税六錢

此書は女學世界の責任者松原氏が女子教育に對する多年の抱負を筆にしたるものにて立旨の根據は專ら婦人をして獨立自營の氣象を養はしむるに基き、文章は平易流暢を旨とし、丁寧親切よく利害のある處を辨識して聰明なる婦人の智識に訴ふ、書中々、諷諭諧謔の筆を弄して時弊を刺し、或は辛辣を以て單刀直入婦人の弱點をゑぐる處あり。世間未婚の婦女子は勿論、花嫁、主婦、母親いづれも新日本の淑女たらん人は一讀して著者か萬斛の涙の如何なる點に向つて灑げるかを知りたまふべし。

おもひ草

佐々木信綱先生著（全一冊和装）

▲正價五十錢――郵税六錢

●思ひ草は佐々木先生が數年苦心の作を集めし書なり

●思ひ草は温雅なる調もて斬新の想をうたひたる歌集なり

●思ひ草は新派舊派を問はず、歌人の必ず一讀すべき書なり

●思ひ草はかつて出でし短歌々集中最も勝れし書なり

庭の摘草

黒田子爵税所刀自共撰（全一冊和装）

▲正價三十五錢――郵税六錢

現代の歌壇を誰とかする、其は子爵黒田清綱君ならん、玆に同子爵の別邸に年來つどひて詠じられたる人々の歌將た同子爵の玉詠中より税所刀自かよしと思ふを摘みとりて庭の摘み草と名づけ置かれたり滿天下の歌人よ一度之を繙かば自ら眞正なる和歌の價値を知るに足らん

發兌元　東京日本橋區本町三丁目　博文館

中學世界定期增刊

九月二十日發行　**第拾貳號**　正價廿錢郵税二錢

東西武勇談

日本の部‖●大伴傳家の歌●沈勇の保昌●鰐を捕る力士●虎を殺す壹岐守の郎等●侍賢門の義平●盗を射る貞盛●窕罪の重光●眇となる忠光●堀河邸の靜御前●女装の皇子●南荒の爲朝●怪力の大學生●安倍野の重盛●弓を拾ふ義經●主に殉する家安●吉野の忠信●重圍中の形名の妻●邸跡の義屍●調伊企儺●楠公父子●村上義輝●新田義貞●鬼吉川●小早川隆景●山中鹿之助●加藤清正●木村長門守●賤ヶ岳七本鎗●伏見落城●青木方齋●仁科信盛●杉田壹岐●平田某●平塚因幡守●本多平八郎●平塚越中●甕破柴田●鳥居強右衛門●立花道雪●尼子經久

支那の部●鴻門の樊噲●張良の鐵槌●劍に伏す王陵の母●身代りの紀信●厳紹の頭●指を切る霽雲●纓を結ぶ子路●豫讓の孤忠●股を割く介子推●易水の荊軻●文天祥の正氣の歌●檻を折る朱雲●馬援の標柱●魚を割く專諸●蘇武の節●田單の火牛●孤を擁する二義士●遠征の張騫●曹沫の匕首●嵇紹の血●面皮を剥ぐ聶政●胡澹菴の封事

西洋の部●ダビド●サムソン●シリチアデス●イパミノンダスとペロピダス●決鬪の元祖●ウヰリアム三世●黑太子●フレデリツキ大王●ネルソン將軍●ウエリントン公●土耳古の十九勇士●ネー將軍●クロムウエル●ソシントン●愛國詩人●グレンビル提督●ケツベル●シツリン元師●スーリ人の剛毅●伊國の鳥居強右衛門●勇敢なる僧正●墺瑞の戰等（外數十項）

附録　**青年戰爭文學**　懸賞當選

東京日本橋區本町三丁目　**發兌　博文館**

女學世界
(明治卅四年拾貳月廿五日 第三種郵便物認可) 第四卷第拾壹號 (明治四十年九月五日發行 每月一回五日發行)